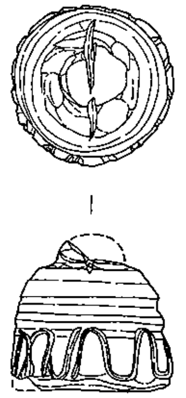
大宰府政庁周辺官衙跡II

—日吉地区—



2011

九州歴史資料館

大宰府政庁周辺官衙跡 II

—日 吉 地 区—

2011

九 州 歴 史 資 料 館

(1)　掘立柱建物ＳＢ2000（第75次　東から）

(2)　掘立柱建物ＳＢ2200（第80次　西から）

(1) 緑釉陶器・陶磁器

(2) 土 製 権

(3) 石　帯

序

当館では，平成14年３月に，大宰府政庁跡の正式報告書を刊行して以来，観世音寺・水城跡と，大宰府史跡の発掘調査の正式報告書を刊行し，昨年度は，『大宰府政庁周辺官衙跡Ｉ』として，政庁前面広場地区の報告書を発刊いたしましたが，今年度はその続編として，日吉地区の報告書を刊行する運びとなりました。

日吉地区は，政庁周辺官衙跡の中でも政庁前面広場の東側に位置し，発掘調査の結果，８～９世紀代を中心とする大型掘立柱建物群が検出されています。政庁前面広場西側の不丁地区等と共に，政庁周辺の主要官衙の一つを構成していたと見られ，大宰府の主要な官司が置かれていたと推測される重要な地点と考えられます。本書の発刊により，当該地区の歴史的重要性が，地域住民や研究者に対して，さらに広く知っていただくこととなれば，望外の喜びでございます。

さて，当館は去る平成22年11月21日，筑後小郡の地にリニューアルオープンいたしました。開館記念特別展「大宰府―その栄華と軌跡―」では，期間中の入館者数が１万人を超える盛況を博し，新たな地での着実な第一歩を記すことができました。長く慣れ親しんだ太宰府の地を離れることになりましたが，特別展のテーマにもありますように，調査研究の軸足は大宰府に置きつつも，九州西海道というさらに広い視野を持って，新たに邁進していく所存でございます。

最後になりましたが，大宰府政庁周辺官衙跡の発掘調査に際しましては，日頃より大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ，文化庁・太宰府市教育委員会や地元の関係者各位から，多大の御指導と御協力をいただいております。ここに記して，深く感謝申し上げます。

さらに今後とも，大宰府史跡の保存・整備・活用に関しましても，関係者の皆さまと連携を密に計りながら万全を期したいと存じております。

平成23年3月31日

九州歴史資料館長　　西谷　正

例　言

1．本書は，昭和47年度（1972）から福岡県が国庫補助を受け，福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が発掘調査を実施した大宰府政庁周辺官衙跡・日吉地区の正式報告書であり，大宰府政庁周辺官衙跡発掘調査報告書の第2集にあたる。

2．本書には，大宰府政庁周辺官衙跡の解明及び整備にかかる資料を得ることを目的として発掘調査を実施した大宰府史跡第25次・32次・75次・79次・80次・114次・143次・145次・153・164・173次・198次・201次・207次調査の成果を掲載した。

3．発掘調査は，大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。遺構検出及び出土遺物については，各指導委員の御指導と御教示を得た。

4．本書掲載の遺構実測図は，各調査の担当者もしくは補助員が実測したものである。

5．本書掲載の写真は，当館元参事石丸洋及び各次調査担当者，福岡県教育庁総務部文化財保護課北岡伸一が撮影したものである。

6．金属製品の保存修復作業は，当館元参事横田義章及び，加藤和歳が行ったものである。

7．出土遺物の整理・復元は，既に各概報報告時の整理作業員が行っているが，本書作成に際しての整理・復元については，第Ⅰ章の調査組織の文中に記載するとおりである。

8．出土遺物の実測は，主として各概報報告時の調査員及び補助員が行っているが，本書作成に際し，新たに土器・陶磁器については岡寺　良が，瓦塼類については岡寺，小嶋　篤が，石製品・土製品・金属製品・鋳造鍛冶関連遺物については小嶋が，その他特殊遺物については小田・岡寺が行った。

9．図面の浄書は，高田いく子が行った。

10．本書の執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章		小田
第Ⅱ章		岡寺
第Ⅲ章	（1）・（2）	小田・岡寺
	（3）	岡寺
	（4）	一瀬　智
	（5）	小嶋
	（6）	岡寺
第Ⅳ章	（1）　1）	岡寺
	2）	小嶋
	3・4）	岡寺
第Ⅳ章	（2）	岡寺
	（3）・（4）	小嶋
	（4）　1～4）	小田
	5）	小嶋
第Ⅴ章		金田明大 （奈良文化財研究所）
第Ⅵ章	（1）　1・3）	小田
	2）	岡寺
	（2）	一瀬
	（3）	小田

11．抄録の英訳は，西谷　彰氏・Richard Hartis氏（Durham University（U.K.），Department of Archaeology,Postgraduate Research Student）にお願いした。

12．本書の編集は，岡寺が行った。

目　次

Fig. 目　次

付　図　目　次

Tab.　目　次

PL. 目　次

凡　　例

1　本書に掲載の遺構実測図は，国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設け作成している。

2　本書掲載の図の内，Fig. ３については，本書第１集（『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ-政庁前面広場地区-』2010年）の掲載図から転載した。第１集の図面作成に当たっては，太宰府市教育委員会発行の報告書（太宰府市教育委員会1989『大宰府条坊跡Ⅴ』）の掲載図から転載し，改変利用した。その際の掲載にあたっては，同市教育委員会の許可を得た。

3　遺構番号の頭に付した記号は，以下の遺構を示す。

ＳＡ：柵，ＳＢ：建物，ＳＤ：溝，ＳＥ：井戸，ＳＫ：土坑，ＳＸ：その他の遺構

4　掲載図面中，土器の断面を黒塗りにしたものは，須恵器であることを示す。

5　土師器・陶磁器・瓦等の報告においては，以下の文献の型式分類・名称等に準じている。

・土師器：九州歴史資料館1981『大宰府史跡　昭和55年度発掘調査概報』

・黒色土器（A類・B類）：田中　琢1967「古代・中世における手工業生産の発達（４）畿内」『日本の考古学』Ⅳ

・陶磁器：森田勉・横田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心にして―」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館
（文中では，当分類を基本とし，補足的に以下の分類を使用する。）
太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV』（文中では太宰府市分類と表記）
上田正敏1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会（文中では上田分類と表記）
小野正敏1982「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会（文中では小野分類と表記）

・古代瓦：九州歴史資料館2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』
高橋章2007「「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」の追加資料について」『観世音寺―遺物編２―』九州歴史資料館

・瓦の桶巻技法（S形・Z形）：佐原　真1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻２号　日本考古学会

・鬼瓦：毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集Ⅳ』奈良国立文化財研究所学報38冊

・中・近世瓦：九州歴史資料館2007『観世音寺―遺物編１―』

・製塩土器：小田和利1996「製塩土器から見た律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集』21　九州歴史資料館

第Ⅰ章　緒　言

（1）特別史跡大宰府跡

大宰府は，古代律令国家において西海道諸国島に対する内政総監の府として君臨し，海辺防備及び中国大陸・朝鮮半島との外交・交易の拠点としても重要な役割を担った。また，「此府人物殷繁，天下之一都会也」（『続日本紀』神護景雲３年（769）十月甲辰条）と自称した如く碁盤目の街割りが施行され，平城京・平安京に次ぐ規模を誇る最大の地方都市であった。しかし，平城京・平安京にはない特質として，大宰府は大野城・基肄城・水城大堤・小水城等の古代山城及び土塁からなる堅固な防衛施設によって護られた城郭都市でもあった。その大宰府の中核となる遺跡が，福岡県太宰府市域の北側に位置し，都府楼跡とも呼ばれる国指定特別史跡の大宰府政庁跡である。政庁正殿跡の基壇上には，三重の円形柱座を有する精美な礎石が整然と並んでおり，かつての栄華を偲ばせている。

内政総監の府

城郭都市

現在，政庁跡のすぐ南側を県道筑紫野太宰府線が東西方向に走るが，県道以南は個人住宅・アパート等の住宅地として開発されている。県道以北は国指定特別史跡大宰府跡として面積約29.9haもの土地が保存され，政庁跡は史跡公園として整備されている。政庁跡の背後には，天智天皇４年（665）に築城された大野城跡を擁する四王寺山が望め，四王寺山より派生した月山及び蔵司二つの丘陵が政庁跡を抱くかの如く南へと延びている。この様に，開発の手を逃れた大宰府政庁跡周辺は，自然豊かな風光明媚の様相を呈するに至っている。

大宰府史跡の発掘調査は，昭和43年10月19日，政庁中門跡の調査を嚆矢として始まった。調査の結果，第Ⅰ期（７世紀後半）・第Ⅱ期（８世紀前半～10世紀半ば）・第Ⅲ期（10世紀後半～12世紀前半頃）に渡る３時期の遺構が確認され，Ⅲ期の遺構は天慶４年（941），藤原純友の乱で焼失した第Ⅱ期の建物を10世紀後半に再建したものであることなど重要な事実が明らかとなった。昭和47年に九州歴史資料館が発足して以降は，当館が大宰府史跡の発掘調査を担当し，資料館での出土品の展示，『九州歴史資料館研究論集』による調査研究成果の公開等により大宰府史跡の情報発信を行ってきた。その後，大宰府史跡の計画調査の対象となる史跡が学校院跡，観世音寺，水城跡，大野城跡へと及び，新知見が次々と得られている。

九歴論集等による情報発信

また，政庁前面域の県道以南から御笠川にかけての地区は，未指定地区であったため昭和54年から太宰府町が推進する土地区画整理事業が始まった。その時点では，発掘調査を担当する専門職員が町にいなかったこと，蔵司前面で行った第17次調査で礎石建物１棟，月山東官衙前面で行った第32次調査で掘立柱建物２棟を確認しており，政庁に関連する重要な地区と予測されることなどから当館が発掘調査を担当することとなり，事前の発掘調査を行った。その結果，官衙と呼ぶにふさわしい大規模な建物群や柵，地域を区切る南北溝等が続々と発見され，鏡山猛が想定した方２町の県道を南限とする府庁域が県道以南にも広がっていたことが判明した。現在では，政庁前面域の建物群は，東から日吉地区官衙，政庁前面広場を挟んで不丁地区官衙，大楠地区官衙，広丸地区官衙と小字をつけて呼称している。なお，政庁前面の区画整理事業地の調査においては，将来の史跡指定に備えて遺構の完掘はせず，地権者に対しては発見された遺構の内容を文書で示すとともに，遺構の保存に協力を頂いている。

府庁域の拡大

（2） 調査の経過

本報告書は，大宰府政庁周辺官衙跡の正式報告書の第２冊目で，政庁周辺官衙跡の南東側にあたる日吉地区で検出された遺構・遺物を悉皆的に報告するものである。今次報告の日吉地区

日吉官衙の範　囲

とした範囲は，南北が県道筑紫野太宰府線から御笠川までの長さ約200ｍ，西縁が大宰府史跡第168-2次調査及び第200次調査で検出された政庁前面広場と日吉地区官衙とを画する南北溝ＳＤ4660までで，東縁が月山東地区官衙の前面までの幅約200ｍの範囲を指す。

前述した如く，府庁域の範囲が県道以南にも及んでいることが明らかとなったが，その発端は不丁地区（第17次調査）において礎石建物１棟を検出したことによる。また，政庁中軸線を挟み，その反対側となる日吉地区においても建物の存在が十分予測された。従って，日吉地区の発掘調査では，建物の存否及び配列確認，日吉地区を画する溝・柵等の施設の有無確認を主眼に進めた。なお，日吉地区として発掘調査を行った次数は，大宰府史跡第25・32・75・79・80・114・143・145・153・164・173・198・201・207次調査である。

第25次調査地は県道筑紫野太宰府線の南縁に接し，政庁中軸線から東へ約216ｍの距離で，２町の条坊区画線上にあたる。区画溝の有無の確認を行ったが，関連する遺構は検出できなかった。第32次調査は住宅建設に伴うもので，調査の結果，掘立柱建物２棟，東西溝，土坑，ピット等を検出した。この事によって，大宰府政庁前面域には建物群が存在することが確定的となり，府庁域の範囲が拡大した次第である。

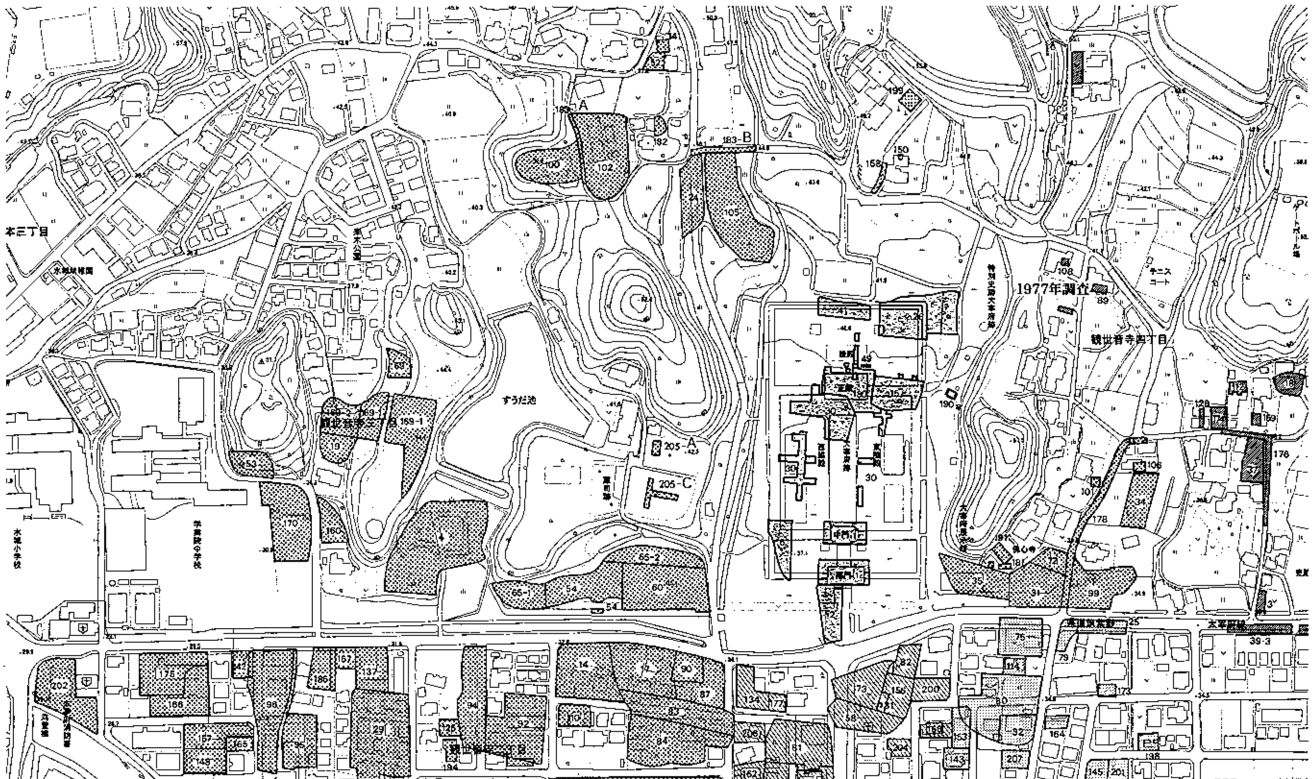


Fig. 1　大宰府政庁周辺官衙跡調査地一覧図（1/6,000）

第75次調査地は月山東地区官衙に南接し，第32次調査地の北側にあたることから日吉地区官衙の解明を目的として調査を行った。調査地は大きく削平されていたが，東西棟の掘立柱建物２棟及び南北棟の掘立柱建物２棟，柵，土坑等を検出した。掘立柱建物ＳＢ2000は梁行３間，桁行９間と大規模なもので，掘立柱建物ＳＢ1990も桁行８間以上の大型建物である。出土遺物から政庁Ⅱ期の開始時期とさほど隔たらない時期の所産であり，建物の規模からしても「官衙」と考えられた。

桁行９間の大規模建物

第80次調査地は，第75次調査地の南側にあたり，第75次調査で推定された建物群のコ字形配列の確認に主眼を置くこととした。調査の結果，南北棟建物７棟，東西棟建物３棟，総柱建物１棟及び２間× ３間の小規模な掘立柱建物５棟，東西方向の柵２列，井戸５基，土坑，溝，礫敷遺構，池状遺構等を検出した。中でも掘立柱建物ＳＢ2220は，第32次調査では掘立柱建物ＳＢ596として検出していたが，今回の調査により梁行３間，桁行７間の身舎の四周に廂を設けた四面廂建物であることが判明した。また，掘立柱建物ＳＢ591も３間× ４間の総柱建物であることが確認された。加えて，第75次調査で検出していた掘立柱建物ＳＢ2001の南梁行柱列と考えられる掘方を検出した。以上により，日吉地区の建物群は四面廂建物ＳＢ2220を中心にコ字形配列をなし，一官司を構成する重要な地区であることが明らかとなった。

四面廂建物ＳＢ2220

第153次調査地は第80次調査の西縁と重複するが，新たに掘立柱建物１棟，南北溝，粘土採掘遺構を検出した。粘土採掘遺構は周辺の状況から中世に下るものであるが，日吉官衙の終焉に関連する遺構である。

なお，第80次調査地の南側にあたる第143・207次調査地，東側にあたる第164・173次調査地，南東側にあたる第145･198･201次調査地においては，顕著な遺構は検出されておらず，現地表下1.8 ～ 3.3mで砂礫層に達することから御笠川の氾濫原であったことが確認されている。従って，日吉地区官衙の南端がどこまで広がっていたかは不明瞭である。また，東縁についても現時点では明らかではなく，今後の調査研究の課題と言える。

Tab.1　日吉官衙調査次数一覧

No.	次数	地区略号	調査面積	年度	調　査　期　間	地　　番	概報(年度)
1	25	6AYI-B	110	S.47	730109 ～ 730124	太宰府市大字観世音寺字日吉252	S.47
2	32	6AYI-C	250	S.48	740126 ～ 740312	太宰府市大字観世音寺字日吉257	30～32次概報
3	75	6AYI-C	960	S.55,56	810224 ～ 810501	太宰府市大字観世音寺字日吉254-1	S.56
4	79	6AYI-B	65	S.56	820210 ～ 820218	太宰府市大字観世音寺字日吉253-1・14	未報告
5	80-1	6AYI-C	606	S.57	820412 ～ 820607	太宰府市大字観世音寺字日吉256-1	S.57
6	80-2	6AYI-C	906	S.57	820612 ～ 820823	太宰府市大字観世音寺字日吉256-1	S.57
7	80-3	6AYI-C	325	S.57	820927 ～ 821013	太宰府市大字観世音寺字日吉257-2	S.57
8	114	6AYI-C	160	S.63	880604 ～ 880614	太宰府市大字観世音寺字日吉255	S.63
9	143	6AYI-C	15	H.4	920618	太宰府市大字観世音寺字日吉272-9	未報告
10	145	6AYI-B	14	H.4	920731	太宰府市大字観世音寺字五反田244-5	未報告
11	153	6AYI-C	220	H.5	931104 ～ 931227	太宰府市大字観世音寺94街区13	H.6
12	164	6AYI-B	10	H.6	941223	太宰府市観世音寺253-12	未報告
13	173	6AYI-C	12	H.7	960117	太宰府市観世音寺字251-4	未報告
14	198	6AYI-B	10	H.19	070828	太宰府市観世音寺1-279-1	史跡Ⅴ
15	201	6AYI-B	8	H.20	080414	太宰府市観世音寺1-310	史跡Ⅵ
16	207	6AYI-C	20	H.21	091104	太宰府市観世音寺1-352	史跡Ⅵ

(S○：大宰府史跡昭和○年度発掘調査概報，史跡○：大宰府史跡発掘調査報告書○)

（3）調査組織

九州歴史資料館は，大宰府史跡の計画調査及び研究，住宅改築等に伴う緊急発掘調査，歴史資料の収集・保管，調査研究，展示及び整備等を所掌する機関として昭和47年４月に設置され，それ以降は当館が主として大宰府史跡の発掘調査を担っている。

大宰府史跡の発掘調査にあたっては，５ヶ年を一つの括りとした年次ごとの調査計画を立案し，調査の実施に際しては諮問機関である10名の委員で構成される「大宰府史跡発掘調査指導委員会」（昭和59年に「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改名し，委員も15名に増員）に諮りながら，その指導・助言のもとに行っている。現在，委員の構成は，国史学５名，考古学４名，建築史学２名，造園学２名，都市工学１名，土木工学１名からなる。

前述した如く，九州歴史資料館が昭和47年に発足してからは調査体制も整備され，大宰府史跡を総合的・学術的に解明することを目標に掲げ，調査計画を立案している。しかしながら，当館における大宰府史跡の調査研究は，大宰府跡のみならず，水城跡・大野城跡・学校院跡・観世音寺・筑前国分寺跡等の大規模かつ歴史的に重要な遺跡を数多く抱え，さらに大宰府政庁前面域の土地区画整理事業に係る緊急発掘調査の対応に終始する有様であった。

大宰府政庁前面域の発掘調査においては，政庁関連の官衙が御笠川付近までの広範囲に及ん

Tab. 2　大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧　（在任年順，◎は委員長経験者を表す）

氏　名	分　野	職（就任時）	在任期間
◎竹内　理三	国　史	早稲田大学教授	S43～S58
鏡山　猛	考　古	九州大学教授	S43～S46
浅野　清	建　築	大阪市立大学教授	S43～S62
井上　辰雄	国　史	熊本大学教授	S43～S58
井上　光貞	国　史	東京大学教授	S43～S56
太田　静六	建　築	九州大学教授	S43～S58
◎岡崎　敬	考　古	九州大学助教授	S43～H2
岸　俊男	国　史	京都大学教授	S43～S61
坂本　太郎	国　史	國學院大学教授	S43～S55
坪井　清足	考　古	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長	S43～H7
小田　富士雄	考　古	九州大学助手	S43～
◎平野　邦雄	国　史	東京女子大学教授	S59～H7
狩野　久	国　史	奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59～
◎笹山　晴生	国　史	東京大学助教授	S59～
澤村　仁	建　築	九州芸術工科大学教授	S59～
杉本　正美	造　園	九州芸術工科大学教授	S59～
中村　一	造　園	京都大学教授	S59～H19
◎横山　浩一	考　古	九州大学教授	S59～H11
渡辺　定男	都市工学	東京大学教授	S59～
八木　充	国　史	山口大学教授	S63～
川添　昭二	国　史	九州大学教授	S63～H17
鈴木　嘉吉	建　築	奈良国立文化財研究所長	S63～
西谷　正	考　古	九州大学教授	H4～H19
佐藤　信	国　史	東京大学教授	H6～
坂上　康俊	国　史	九州大学教授	H8～
田中　琢	考　古	奈良国立文化財研究所長	H8～H10
町田　章	考　古	奈良国立文化財研究所長	H11～H16
山中　章	考　古	三重大学教授	H12～
田辺　征夫	考　古	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	H17～
林　重徳	土木工学	佐賀大学教授	H18～
石松　好雄	考　古	元九州歴史資料館副館長	H20～
尼崎　博正	造　園	京都造形芸術大学教授	H20～

でいるという新たな事実が判明したものの，史跡の計画調査は遅々として進展しない状況にあった。そのため，年次計画を一度と無く練り直し，その都度指導委員会に諮る結果となった。

大宰府史跡の発掘調査は，昭和43年度に始まる第１次調査から平成22年度に実施した第209次調査の43年間に及び，その間多くの職員の出入りがあった。平成11年度までは概要報告書という体裁で発掘調査の成果を公表し，正式報告書の刊行を先送りしてきた経緯がある。しかし，発掘調査に携わった担当者も数人現役を引退しており，全く発掘調査に携わっていない者が報告書の刊行に関わる状況となっている。こうした弊害を将来に残さないために，平成12年度以降は概要報告書ではなく，調査担当者が報告すべき遺構・遺物を網羅した年次ごとの報告書を作成し，従前のやり方を改善した。

平成19年度までは，九州歴史資料館調査課が大宰府史跡の発掘調査を担当してきたが，平成20年度の組織改編により，学芸第一課・学芸第二課・調査課が学芸調査室として統合され，その下に学芸班・調査班の班体制となり，調査班が発掘調査を担当することとなった。また，平成22年７月１日には太宰府の地にあった九州歴史資料館が小郡市に移転し，同年11月21日に開館を迎えた。新施設開館を記念し，特別展「大宰府－その栄華と軌跡」（期間：平成22年11月21日～平成23年1月16日）を開催し，当館が40有余年行ってきた大宰府史跡の調査研究成果の公開を行った。本書は，こうした九州歴史資料館の移転・開館の最中に刊行した。 **特別展の開催**

大宰府政庁周辺官衙跡日吉地区調査関係者一覧

日吉地区の発掘調査関係者は，以下のとおりである。

九州歴史資料館

館　長	鏡山　猛　（S47～55）	副館長	久保園達男（S53・54）
	田村　圓澄（S56～H3）		牟田　重夫（S55・56）
	吉久　勝美（H4～7）		武久　耕作（S57・58）
	高橋　良平（H8・9）		前田　栄一（H1～3）
	光安　常喜（H9～13）（兼務）		石松　好雄（H4～8）
	森山　良一（H14～19）（兼務）		松尾　正俊（H8～10）
	西谷　正　（H20・21）		濱田　信也（H17）
			木下　修　（H18・19）
			平山　浩一（H20・21）
調査課長	石松　好雄（S56～H1）（課長心得S51～55）	学芸調査室長	児玉　真一（H20）
	横田　賢次郎（H9～13）		小田　和利（H21）
	児玉　真一（H17～19）		

調査課

第25次(S47)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	○横田賢次郎	森田勉	○高橋章
第32次(S48)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	森田勉	高橋章
第75次(S56)	石松好雄	倉住靖彦	○高倉洋彰	○横田賢次郎	○森田勉	○高橋章
第79次(S56)	石松好雄	倉住靖彦	○高倉洋彰	横田賢次郎	○森田勉	高橋章

第80次(S57)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	○横田賢次郎	○森田勉	○高橋章
第114次(S63)	石松好雄	○横田賢次郎	赤司善彦	吉村靖徳		
第143次(H4)	◎栗原和彦	橋口達也	横田賢次郎	小田和利	吉村靖徳	
第145次(H4)	◎栗原和彦	橋口達也	横田賢次郎	小田和利	吉村靖徳	
第153次(H5)	栗原和彦	横田賢次郎	◎小田和利	○吉村靖徳	小川泰樹	
第164次(H6)	◎栗原和彦	横田賢次郎	小田和利	吉村靖徳	小川泰樹	
第173次(H7)	◎栗原和彦	横田賢次郎	小田和利	小川泰樹	杉原敏之	
第198次(H19)	児玉真一	杉原敏之	◎岡寺 良	坂本真一		
学芸調査室調査班						
第201次(H20)	児玉真一	杉原敏之	◎岡寺 良	一瀬 智		
第207次(H21)	小田和利	◎岡寺 良	一瀬 智	小嶋 篤		

本報告書作成にあたり，保存処理については横田義章・加藤和歳が，写真撮影は各調査担当の他に石丸洋・北岡伸一が担当した。上記調査に関係した補助員は，山本信夫・齋部麻矢・今井涼子である（◎印：調査主任，○印：調査担当)。

本報告書作成に係る平成22年度の関係者は，以下のとおりである。

九州歴史資料館

総 括	館 長	西谷 正
	副館長	南里 正美
庶 務	総務室長	高田 俊哉
	企画主査	塩塚 孝憲
	事務主査	志水 良行
	主任主事	岸原 孝司
報 告	学芸調査室長	小田 和利
	調査班主任技師	岡寺 良
	主任技師	一瀬 智
	技 師	小嶋 篤
整 理	整理補助員	高田いく子
	整理作業員	市川千香枝 中田千枝子

なお，本報告書作成にあたり，奈良文化財研究所，太宰府市教育委員会文化財課諸氏には有益な御教示を賜わった。末筆ながら，記して感謝したい。

【本報告書掲載文献】

九州歴史資料館 1973 『大宰府史跡 昭和47年度発掘調査概報』

九州歴史資料館 1974 『大宰府史跡 第30・31・32次発掘調査概報』

九州歴史資料館 1982 『大宰府史跡 昭和56年度発掘調査概報』

九州歴史資料館 1983 『大宰府史跡 昭和57年度発掘調査概報』

九州歴史資料館 1993 『大宰府史跡 平成４年度発掘調査概報』

九州歴史資料館　1995　『大宰府史跡　平成６年度発掘調査概報』

九州歴史資料館　1996　『大宰府史跡　平成７年度発掘調査概報』

九州歴史資料館　2008　『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅴ　－平成18・19年度－』

九州歴史資料館　2010　『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅵ　－平成20・21年度』

【参考文献】

九州歴史資料館　2002　『大宰府政庁跡』

鏡山　猛　1968　『大宰府都城の研究』 風間書房

石松好雄　1983　「大宰府庁域考」『大宰府古文化論叢　上巻』 吉川弘文館

石松好雄　2004　「大宰府史跡発掘史」『太宰府市史　通史編』 太宰府市史編纂委員会

Fig. 2 大宰府史跡地域小字図（1/7,500）

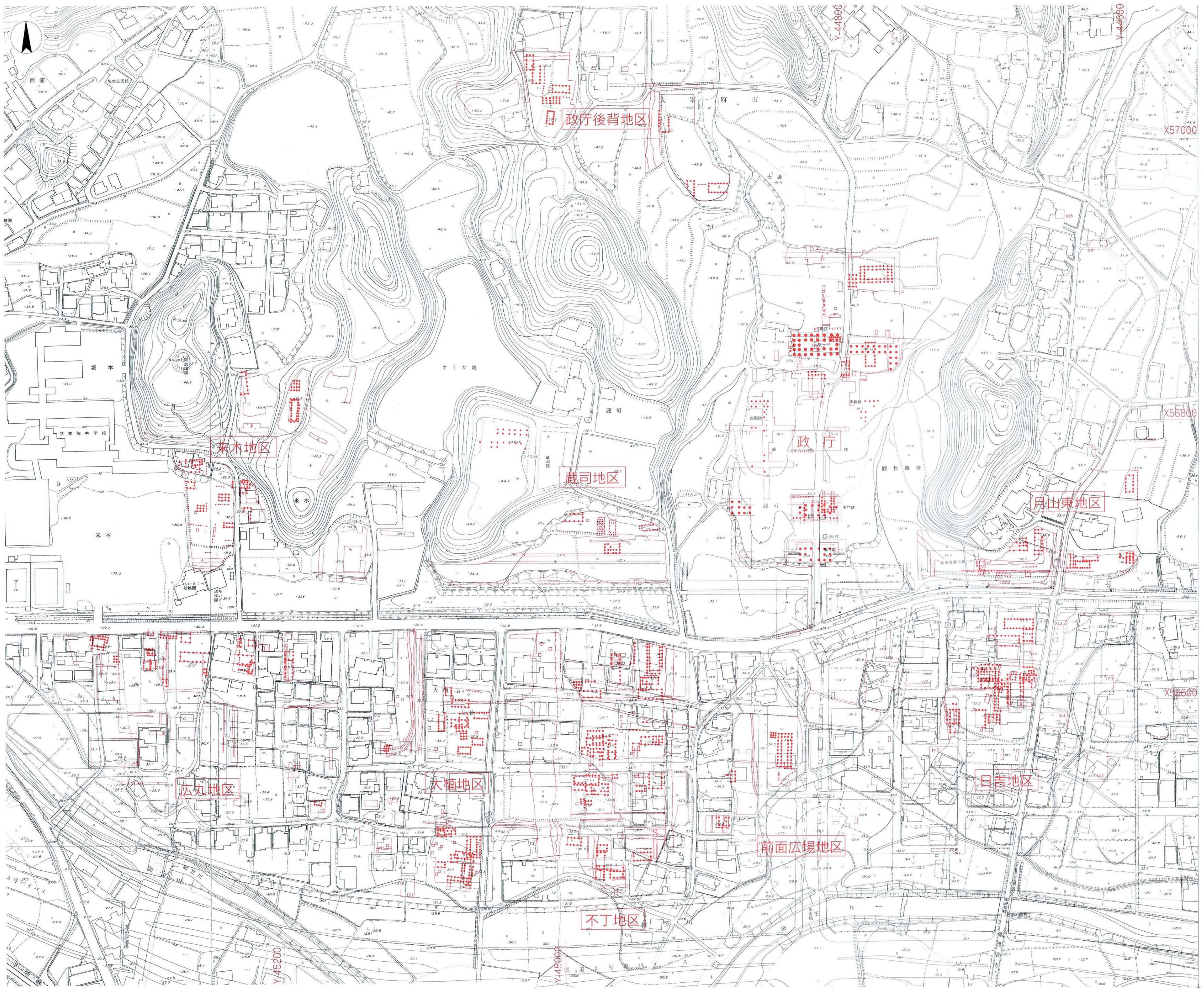


Fig. 3　政庁域および周辺官衙跡検出遺構配置図（1/3,000）

第II章　調査の概要

（1）調査の概要

調査の方法等については，本報告書第１集で述べたとおりであるため，ここでは割愛し，日吉地区に関する各調査の概要を述べることとする。

なお，この日吉地区は，調査略号で言うと，６ＡＹＩ－Ｂ（第25・79・145・164・198・201次調査区）およびＣ地区（上記以外の調査区）にあたる（Fig. 4）。

１）第25次調査（Fig. 6・15，PL. 2）

調査期間：1973年１月９～１月24日　　　**調査面積**：110㎡

概　　要　日吉地区の北東端にあたる個所で，北側の県道を挟んで月山東地区に隣接する。調査当時，この箇所が推定左郭２坊路に当たる箇所と推測されたため，東西方向に幅３ｍのトレンチを設定して調査を行った。区画整理前の当時の地形は東側を南流する河川に向かって西から東へ階段状に低くなっており，氾濫原の可能性が考えられた。調査の結果，表土・床土を除去した段階で，さらに表土下２ｍ程まで掘り下げたが，砂と粘土の層が互層となって堆積しており，表土や床土からは若干の奈良・平安時代の遺物は出土したものの遺構は見られなかった。

２）第32次調査（Fig. 7・15，PL. 3）

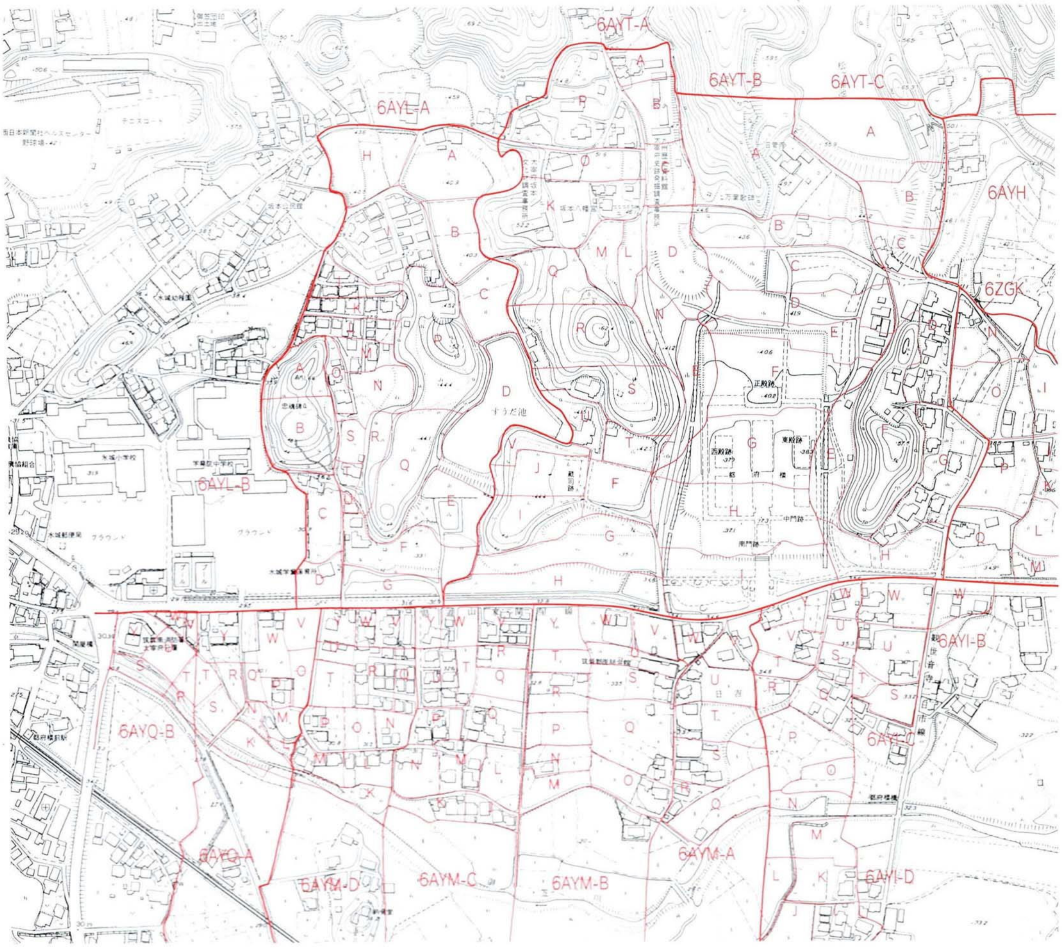


Fig. 4　大宰府政庁および周辺官衙跡地区割図（1/7,500）

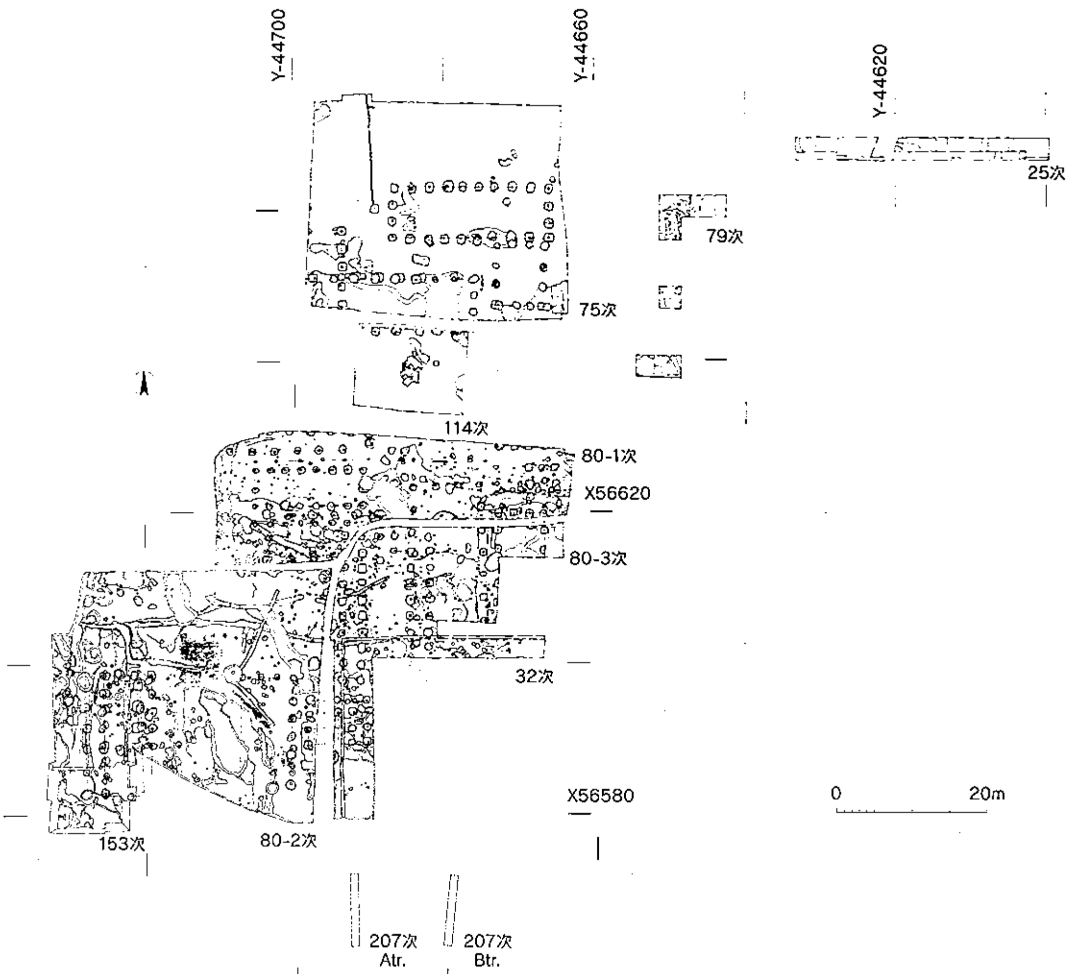


Fig. 5　日吉地区調査地域図（1/1,000）

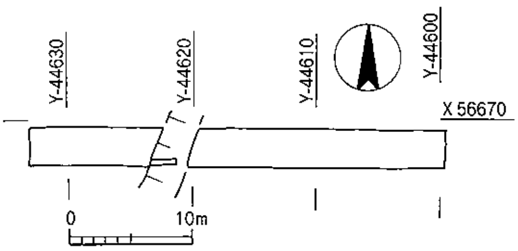


Fig. 6　第25次調査区（1/600）

調査期間：1974年１月26日～３月15日

調査面積：190㎡

概　　要　住宅建設に伴う事前調査で，日吉地区の中央南側にあたる。調査前の段階で，台地状の地形を呈しており，遺構の残存が期待されたため，L字状に幅３m×長さ24mの東西トレンチと，幅３m×長さ24mの南北トレンチを設定し，さらに南北トレンチを東西に各１m，北に５×7.5m拡張して調査を行った。

調査の結果，表土，床土の下層に，奈良・平安時代の遺物を多く含む暗灰色土・茶灰色土を検出し，その下層から灰色砂・茶灰色砂を確認した。この灰色砂・茶灰色砂の上面から遺構は切り込んでいた。

東西トレンチでは，土坑や溝は検出されたものの，掘立柱建物などの明瞭な遺構は検出されなかったが，南北トレンチでは，掘立柱建物ＳＢ591･596の２棟，溝，

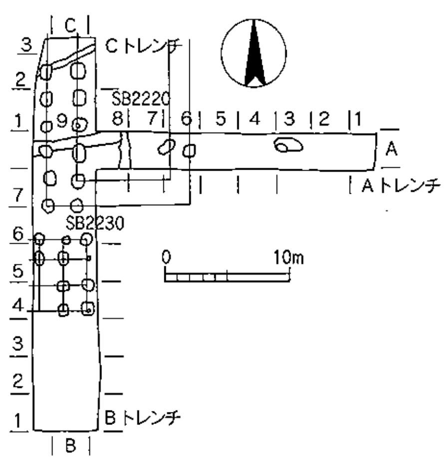


Fig. 7　第32次調査区（1/600）

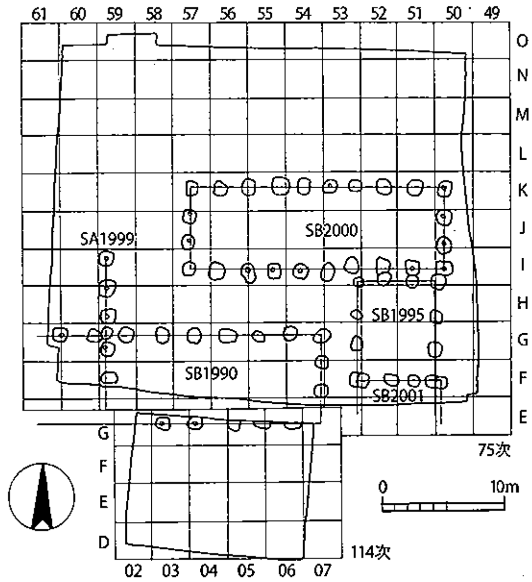


Fig. 8 第 75・114 次調査区（1/600）

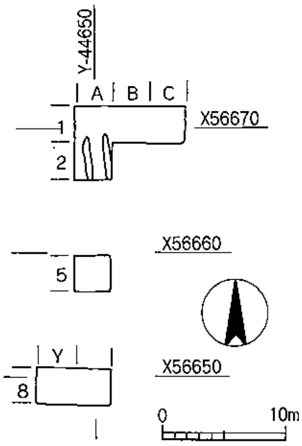


Fig. 9 第 79 次調査区（1/600）

土坑などを検出した。このように32次調査は，日吉地区において初めて官衙と呼べるような大型建物が検出された事例となり，政庁を挟んで西側の「不丁」地区と併せ，政庁前面に古代の官衙が広がることが想定されるようになった。

また，この調査で検出されたＳＢ591・596は，全体的な構造は不明確であったが，その後行われた第80次調査において周辺部分が調査され，明瞭な建物構造が判明し，それぞれＳＢ2230と2220に改称している。

3）第75次調査（Fig. 8・15，PL. 4）

調査期間：1981年２月24日～５月１日　　**調査面積**：960㎡

概　　要　日吉地区中央北端部にあたり，第32次調査で検出された大型掘立柱建物群の広がりを見るために，面的に調査区を広げて調査を行った。層位は，表土･床土･茶褐土（床土の一部）を掘り下げると，花崗岩バイラン土の地山が検出され，その上面で遺構が確認された。既に大きく削平されていたこともあったが，掘立柱建物４棟，柵１条，土坑等を確認した。検出された掘立柱建物は，第32次調査と同様，柱穴，平面規模ともに大型で，日吉地区官衙を構成する主要な建物群と考えられた。

4）第79次調査（Fig. 9・15，PL. 5）

調査期間：1982年２月10日～18日　　**調査面積**：65㎡

概　　要　第75次調査の東隣にあたり，住宅建設に伴う事前調査として行った。第75次調査時の掘立柱建物をある程度意識して南北に３箇所トレンチを設けて調査を行ったが，第75次調査で見られたような明瞭な大型掘立柱建物の柱穴は検出できず，小溝などが幾つか検出されたにとどまった。

5）第80次調査（Fig.10・15，PL. 6）

調査期間：（第80-1次調査）1982年４月12日～６月７日　　**調査面積**：606㎡

（第80-2次調査）1982年６月12日～８月23日　　**調査面積**：906㎡

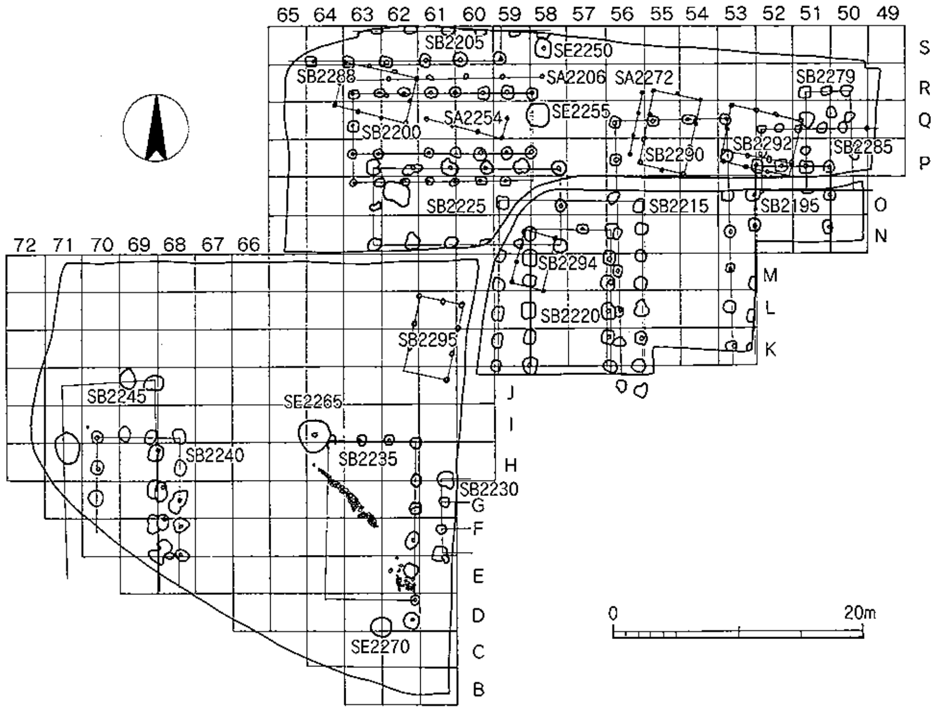


Fig.10　第80次調査区（1/600）

（第80-3次調査）1982年９月27日～10月13日　**調査面積**：325㎡

概　要　観世音寺地区区画整理事業に伴う遺構確認のための計画調査として実施された。日吉地区の中心部分であり，なおかつ調査対象面積が広いために，都合３回に分けて調査を行った。層位は，表土，床土，灰褐色土（その他部分的に茶褐色土，黄褐色土等）が順に堆積し，その下層が遺構面となる。灰褐色土層は，北へ行くほど薄くなっており，後世の削平が北へ行くほどなされていたことが分かった。

検出した遺構は，大型掘立柱建物９棟，柵４条，井戸５基，土坑，溝などが多数検出され，日吉地区官衙の中枢部分を占める位置に当たることが推定された。また，これらの他にも，平安時代末頃と推測されるピット群も多数検出されたが，今回，正報告書を作成するにあたっての再検討の結果，小型の掘立柱建物群であることが分かり，政庁廃絶後の空間利用の在り方についても，よりいっそう明瞭な状況となった。また，大型掘立柱建物についても，再検討により棟数や配置等に若干の変更が出た。いずれにせよ，現段階における日吉地区官衙の中枢を占める位置にあることは疑いない。

6）第114次調査（Fig. 8・15, PL. 7）

調査期間：1988年6月4日～14日　**調査面積**：160㎡

概　要　住宅建設に伴う事前調査として行われた。第75次調査区と第80次調査区に北と南から挟まれた個所にあたり，２つの調査区間の遺構のつながりの確認を目的に調査が行われた。表土・床土を除去すると，遺構面となる地山層が検出され，遺構面上から柱穴５個と土坑等が確認され，柱穴５個については，第75次調査で検出された掘立柱建物ＳＢ1990の延長であることが判明し，その建物の平面構造がより一層明確となった。

7）第143次調査（PL. 7）

調査期間：1992年６月18日　　　　　　　　　　　　**調査面積**：15㎡

概　　要　第80次調査区の南側にあたり，住宅建設に伴う事前調査として行われた。区画整理前の旧地形では，御笠川の氾濫原と推測された場所であったが，区画整理後には大きく地形が改変されていたため，慎重を期して，トレンチ調査を行った。対象地の東西２箇所に重機掘削を行ったところ，西側では，３ｍよりもさらに下層で地山に達し，東側のトレンチでは，1.8ｍで地山に達した。東から西へ傾斜する谷地形と考えられ，想定どおり古代の遺構の残存はないことを確認した。

8）第145次調査

調査期間：1992年７月31日

調査面積：14㎡

概　　要　日吉地区官衙の東限とも考えられる月山から流れてくる流路のさらに東側に当たる箇所で，住宅建設に伴う事前調査として行った。小字では，「五反田」であるが，便宜上日吉地区としている。流路も元は西側を流れていたものが，区画整理により地形が改変され，当該地の東側を流れる状況となっており，地表面観察による遺構有無の確認が困難であったため，重機によりトレンチを掘削して調査を行った。南北方向にトレンチを入れた結果，地表下2.8ｍで砂礫層に到達し，御笠川の洪水堆積層と考えられた。よって，この箇所については，御笠川の氾濫により古代の遺構はすでに無くなっていることが判明した。

9）第153次調査（Fig.11，PL. 8）

調査期間：1993年11月４日～12月27日　　　　　　　**調査面積**：220㎡

概　　要　日吉地区中央西側に当たる箇所で，第80次調査区の南西側に当たる。アパート建設に伴い事前調査として行った。この調査区は第80次調査区の南西部と重複する部分が多く，前回検出された掘立柱建物ＳＢ2240の規模確定を主眼に調査を行った。

層位は，耕作土・床土・灰褐色砂質土・淡黄褐色砂質土・灰白色砂層の順に堆積しており，灰褐色砂質土を除去した段階で，遺構を検出した。掘立柱建物２棟，溝，粘土採掘遺構等などを検出し，第80次調査区との連続性が確認された。

また，調査時には遺構として認識されていなかった調査区西側へ落ち込む地形については，その後に行った第168-2・200次調査と，本報告に掲載した物理探査（地中レーダー探査）により，幅約30ｍにも及ぶ左郭１坊推定線上の南北溝ＳＤ4660の東側の落ち始めの肩の部分であることが判明した。

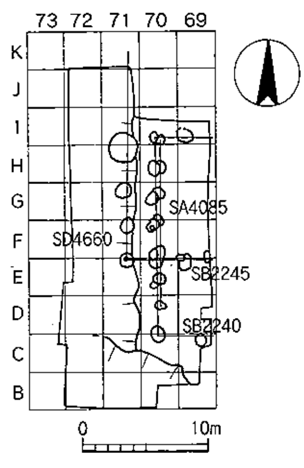


Fig.11　第153次調査区
(1/600)

10）第164次調査（PL. 9）

調査期間：1994年12月23日　　　　　　　　　　　**調査面積**：10㎡

概　　要　日吉地区中央東側，第32次調査区の東側の箇所に当たる。住宅建設に伴う事前調査

で，重機により遺構検出をおこなったが，第145次調査同様，月山から南流してくる河川の影響による土砂が厚く堆積しており，自然流路の谷によって，遺構は残存していないことが判明した。

11）第173次調査（PL. 9）

調査期間：1996年1月17日　　**調査面積**：12㎡

概　要　日吉地区の東端にあたり，第145次調査地同様，区画整理後は南流する流路の西側に当たるが，旧地形では流路の東側で，小字も「五反田」である。住宅建設に伴う事前調査で，重機により現地表下3.3mの深さまで掘り下げたが，河川の堆積層を確認したのみで，周辺の調査区同様，河川氾濫もしくは河川堆積により古代の遺構は残存していないことが分かった。

12）第198次調査（Fig.12・15，PL. 9）

調査期間：2007年８月28日

調査面積：10㎡

概　要　住宅建設に伴う事前調査で，日吉地区東端部分に当たる。小字は「五反田」である。区画整理時の客土の下，現地表下約２ｍで旧表土を確認し，さらにその下層に平安時代の遺物を含む灰色砂層があり，さらにその下層には遺物のない暗灰色粘性土が堆積し，遺構は確認できなかった。自然流路による影響により古代の遺構は存在しないことと考えられる。

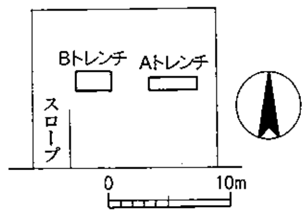


Fig.12　第198次調査区（1/600）

13）第201次調査（Fig.13・15，PL.10）

調査期間：2008年４月14日　　**調査面積**：８㎡

概　要　第145次調査区の東隣で，区画整理後の用水路が東隣に流れる場所で，住宅建設に伴い事前調査を行った。対象地の東西２箇所を重機で掘削したところ，現地表面から約2.3ｍ下で，平安時代の遺物を含む灰白色砂層を検出したが，洪水堆積層と考えられ，近辺には遺構が存在しないことが明らかとなった。

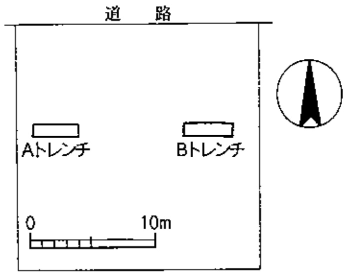


Fig.13　第201次調査区（1/600）

14）第207次調査（Fig.14・15，PL.10）

調査期間：2009年11月４日　　**調査面積**：20㎡

概　要　宅地建設に伴う事前調査であり，第32・80次調査区の南隣にあたる。調査の結果，現地表面から1.0ｍ下で遺物を含む旧表土を確認し，その下層は黒灰色シルト層と青灰色砂層の互層となっていたが，遺物の発見はなく，御笠川の氾濫等により遺構は存在しないものと考えられた。

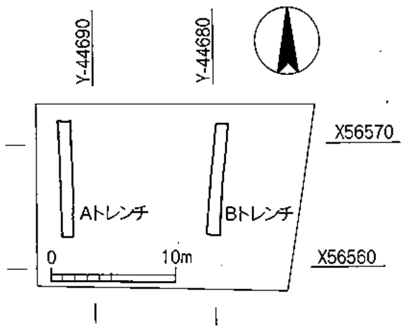


Fig.14　第207次調査区（1/600）

日吉地区の東側と南側の氾濫原による遺構消失状況については，第VI章（2）を参照されたい。

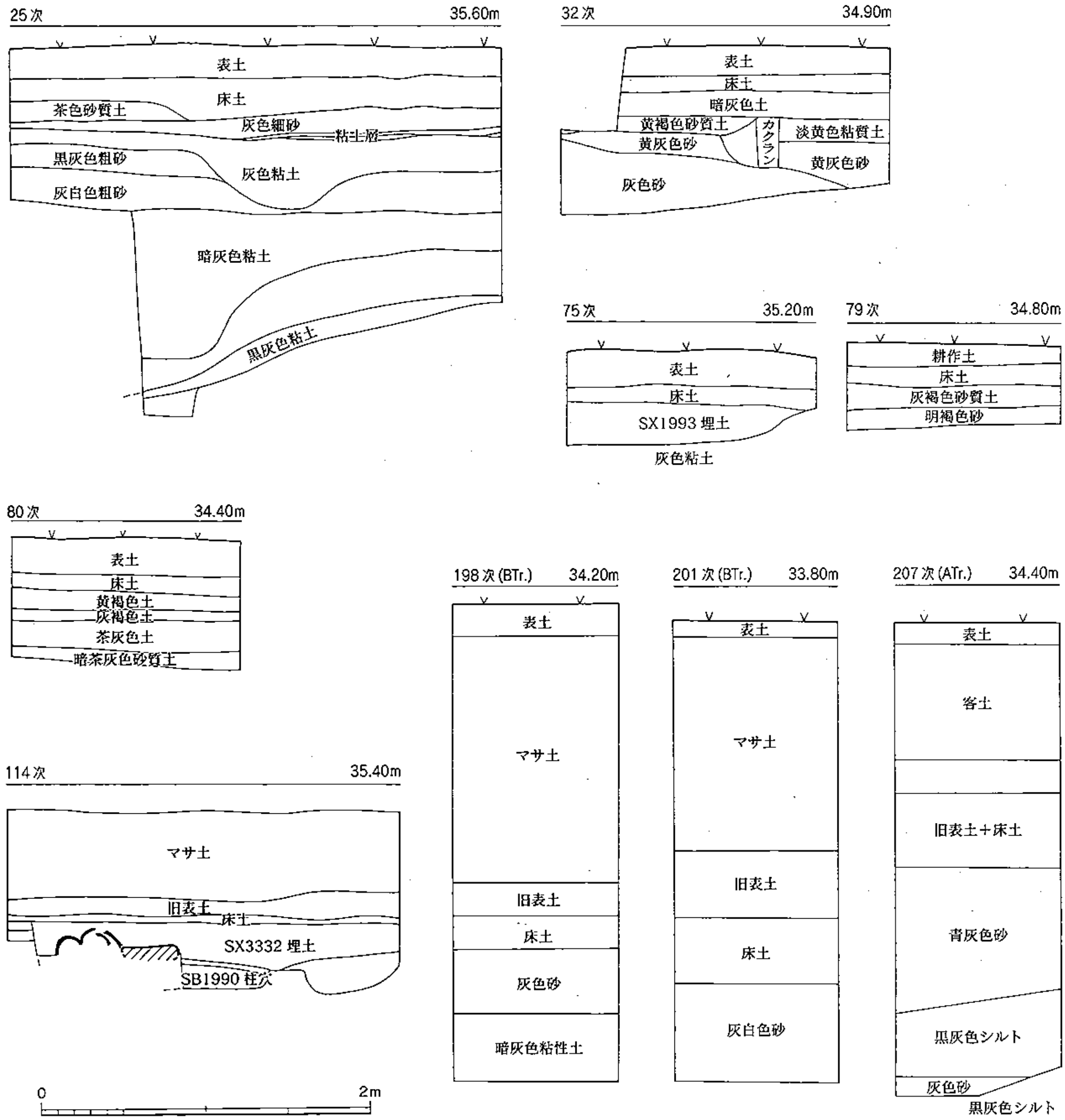


Fig.15　調査区基本土層図（1/40）

第Ⅲ章　検出遺構

（1）掘立柱建物

日吉地区では，32・75・80・114・153次調査において大小20棟の掘立柱建物を検出しているが，基本的には古代の大規模建物が南北及び東西方向に配置され，小型の建物は東に12°程振って配置されている。また，日吉地区の南半部は，御笠川の蛇行によって大きく抉られているため建物がどこまで広がっていたかは不明な状況となっている。

ＳＢ1990 (Fig.16，PL.11・12)

75次調査区と114次調査区に跨がって検出した東西棟の建物で，落込ＳＸ1989・1993・1997・3332に切られ，柵ＳＡ1999を切っている。75次調査において，梁行２間分，桁行８間分を確認していたが，114次調査で南側柱掘方５個を検出したことにより，梁行が３間，桁行は８間以上の建物と判明した。建物規模は梁行6.98ｍで，桁行が９間だとすると23.6ｍ程になろう。柱間間隔は梁行が北から2.36ｍ，1.92ｍ，2.7ｍと中央間が狭くなっている。桁行は2.48～2.98ｍとばらつきがあるものの割に広めである。柱掘方は1.0～1.1ｍの隅丸方形を呈し，その大半が底面に礫を据え，礎盤としていた。北側桁行の北東隅柱から４～７番目の掘方は別の穴（柵か）と重複している。また，北東隅柱掘方の0.3ｍ東側には梁行と平行する形で幅0.3ｍ，長さ2.08ｍの小溝があり，雨落ち溝になるか。

礫の礎盤

ＳＢ1995 (Fig.17，PL.13)

75次調査区の南東側で検出した梁行３間（6.3ｍ)，桁行３間以上（8.5ｍ）の南北棟建物で，落込ＳＸ1992を切り，掘立柱建物ＳＢ2001に切られる。なお，調査段階ではＳＢ2000を切っているとしていたが，図面検討の結果，ＳＢ2000に切られていると訂正したい。柱痕を確認していないので柱間間隔は正確ではないが，梁行が2.1ｍ，桁行は2.7ｍとした。柱掘方は１ｍ前後の隅丸方形を呈し，底面に礫を据え礎盤としている。桁行方位は東に２°振っている。なお，掘方内からは身受けのかえりを有する須恵器蓋（Fig.53-3）が出土している。

ＳＢ2000 (Fig.18，PL.14・15)

75次調査区の中央で検出した梁行３間，桁行９間の大規模な東西棟建物で，掘立柱建物ＳＢ1995を切り，落込ＳＸ1991に切られる。建物の大きさは東側梁行6.5ｍ，西側梁行6.7ｍ，北側桁行20.61ｍ，南側桁行20.66ｍを測る。柱間間隔は東側梁行で北から2.24ｍ，2.24ｍ，2.02ｍで，南側桁行は2.02～2.55ｍとばらつきがある。柱掘方は隅丸の方形ないしは長方形を呈し，1.1～1.2ｍの大きさで，深さは削平されているため深いもので0.4ｍ程であった。柱痕は30㎝程のものである。なお，掘方底面に扁平な石を入れているものが4例，瓦を敷いているものが7例あり，礎盤とみられる。梁行方位は東に30′振っている。

ＳＢ2001 (Fig.17，PL.13・16・25)

75次調査区の南東隅で北側梁行３間のみ確認していたが，80次調査区においても柱掘方４個を検出した。両者は20.3ｍ程離れており，桁行の柱掘方を全く確認していないが，梁行の中央間が狭いという共通点があり，またＳＢ2000東側梁行及びＳＢ2195東側桁行と柱筋をそろえて位置することから同一の建物と判断した。両梁行間が20.3ｍの距離を有するため桁行は９間になると考えられる。北側梁行の柱間間隔は，東から2.16ｍ，1.8ｍ，2.44ｍを測る。柱掘

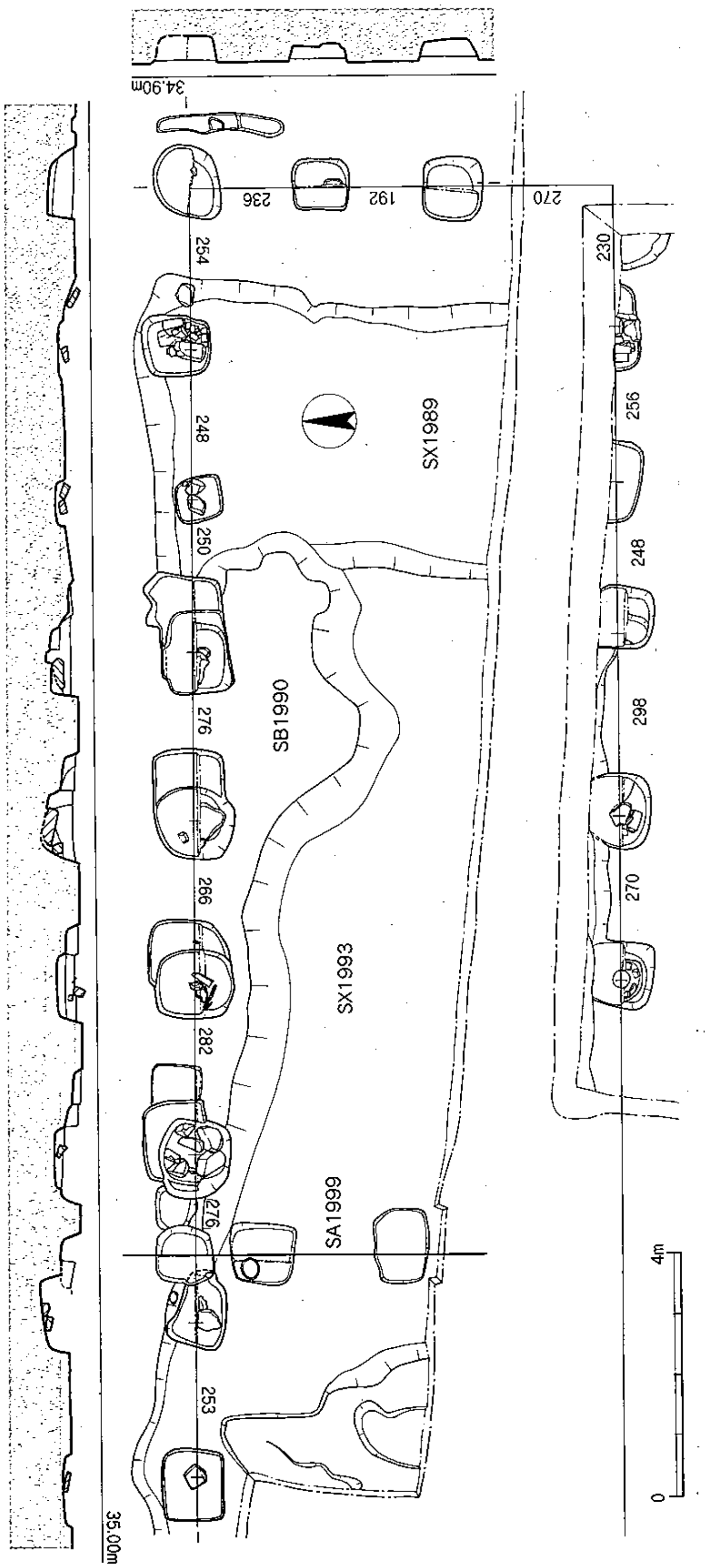


Fig.16　掘立柱建物ＳＢ 1990 実測図（1/120）

方は0.9～1.1mの隅丸方形を呈し，深さは0.2m前後であった。なお，掘方からは身受けのかえりを有する須恵器蓋（Fig. 53-5）が出土している。当建物はＳＢ1995を切っており，またＳＢ1995はＳＢ2000に切られており，三者の中では最も古い。

ＳＢ2195（Fig.19，PL.16・25）

80-1・3次調査区の東端で検出した南北棟の建物で，掘立柱建物ＳＢ2279・2285・2292と重複し，溝ＳＤ2192，土坑ＳＫ2234に切られる。梁行は３間（6.1m）で，桁行は７間分（16.8m）を確認しているが，桁行９番目にあたる掘方が落込で削平されているのとそれより南が調

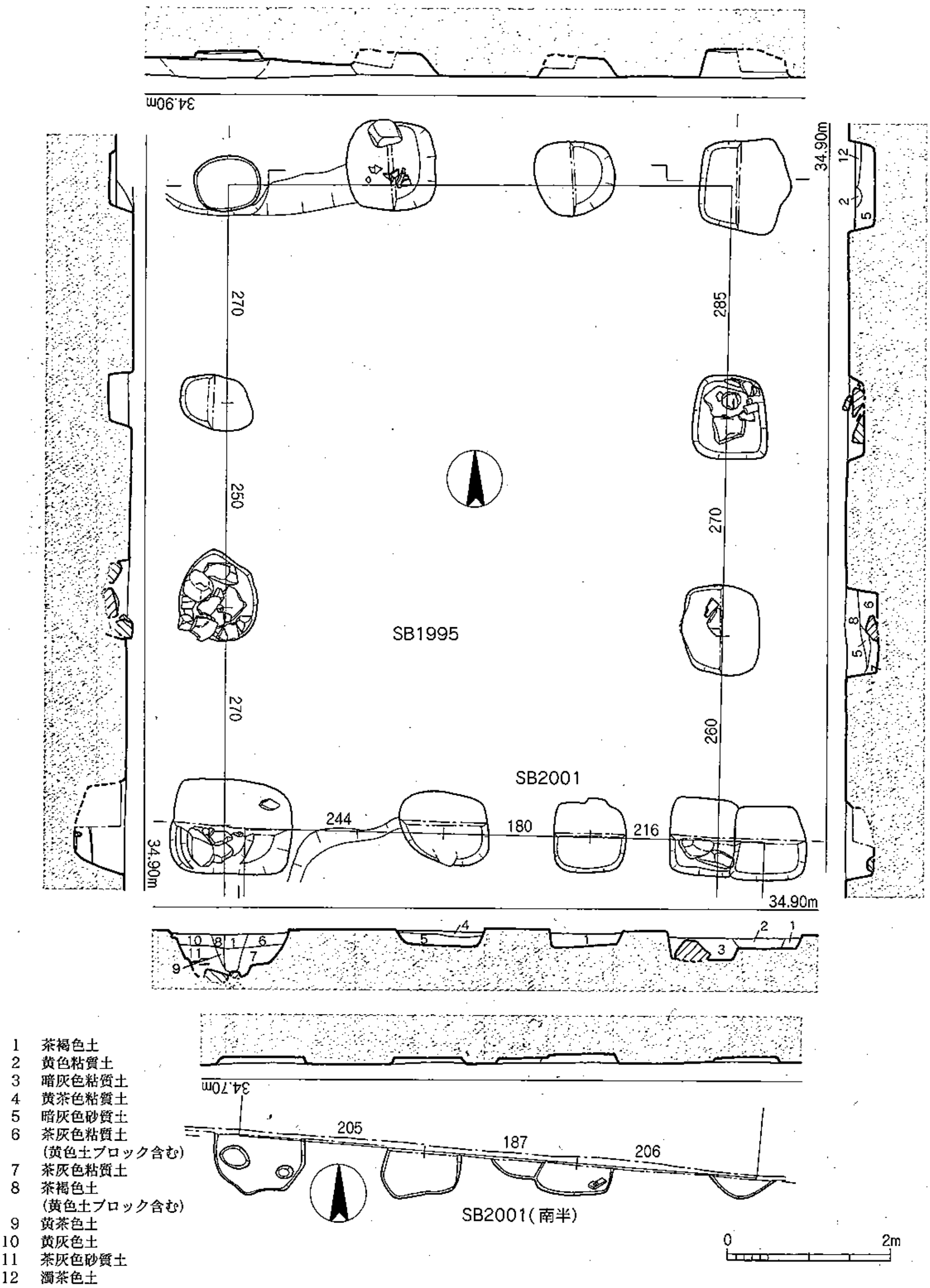


Fig.17　掘立柱建物ＳＢ 1995・2001 実測図（1/80）

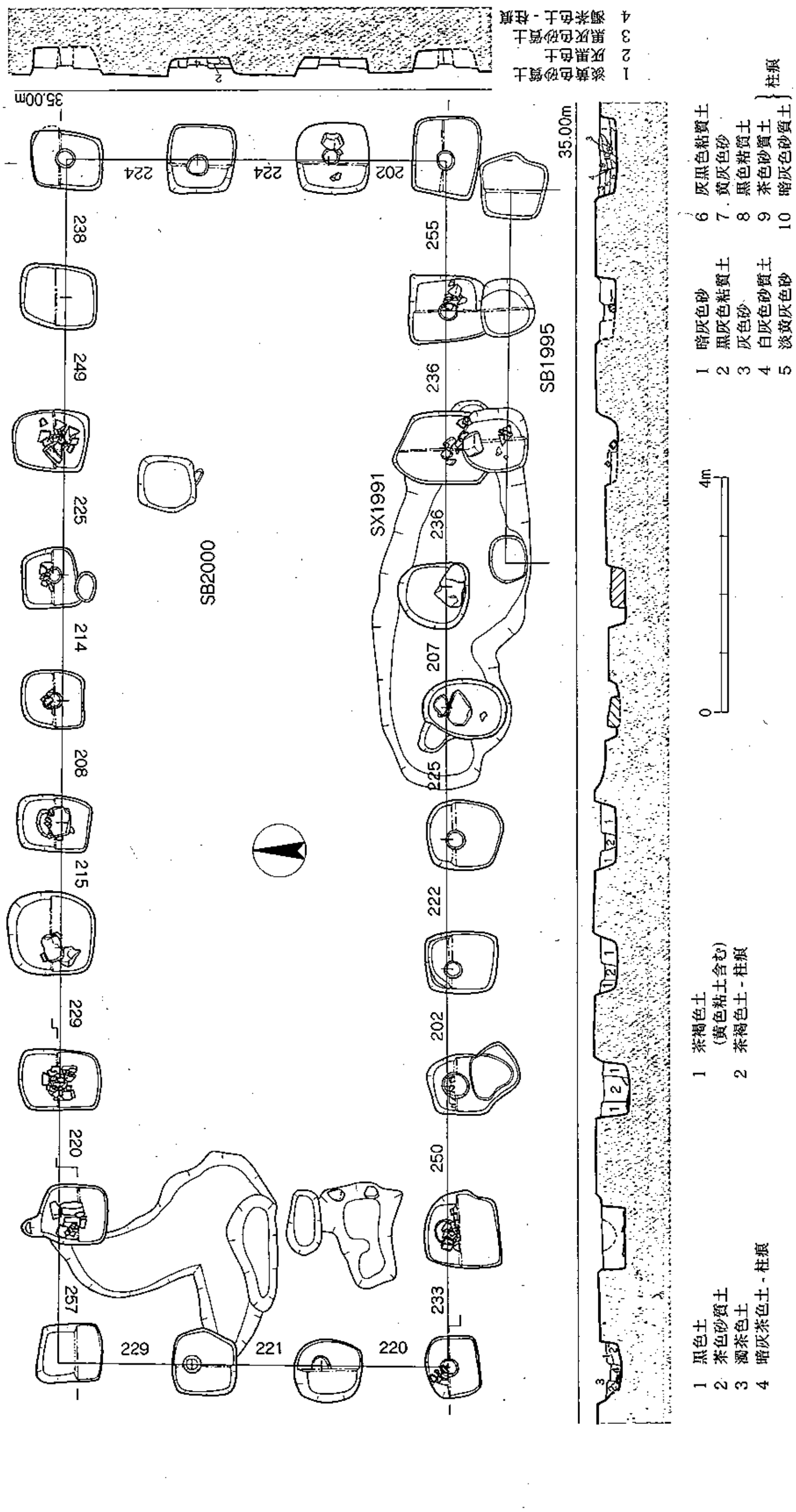


Fig.18 掘立柱建物ＳＢ2000実測図（1/120）

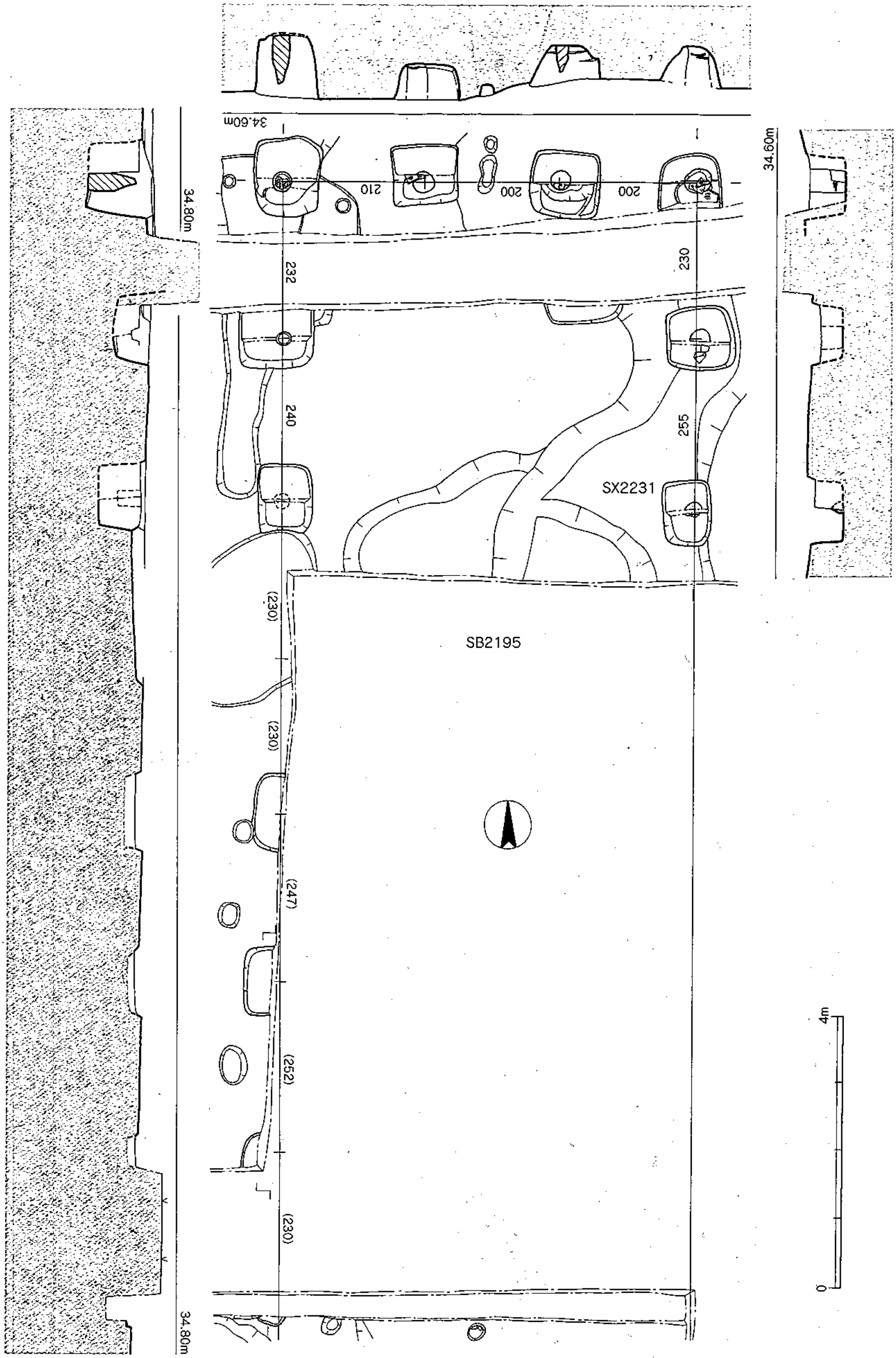


Fig.19　掘立柱建物ＳＢ2195実測図（1/80）

査区外にあるものの梁行３間，桁行９間と考えた掘立柱建物ＳＢ2001と柱筋を揃えて配置されていることから桁行９間の建物と想定したい。梁行の柱間間隔は東から2.0m，2.0m，2.1mで，桁行は2.3～2.5mとばらつきがある。柱掘方は一辺1m程の隅丸方形を呈し，深さ0.5～0.6mと割合深めである。また，径20cm程の柱痕を残す掘方もみられた。建物の方位はほぼ真北を示している。

ＳＢ2200（Fig.20，PL.17・18）

80-1次調査区の西側で検出した東西棟の建物で，掘立柱建物ＳＢ2225と重複し，ＳＢ2288，柵ＳＡ2254，井戸ＳＥ2255・2260に切られる。梁行２間，桁行７間の身舎の南側に廂を付けた片廂建物である。身舎の東側梁行4.7m，西側梁行4.82m，北側桁行14.44m，南側桁行14.3mで，廂の出は2.22mを測る。柱間間隔は梁行が北から2.53m，2.29mで，桁行は1.97～2.13mとばらつきがある。柱掘方は隅丸方形を呈し，身舎部分が0.8～1.15mの大きさであるが，廂部分は0.6～0.8mとやや小振りである。径25cm程の柱痕を確認しているが，廂部分は径15cm前後と小さい。また，南側桁行の東から３・４番目の掘方には柱筋に沿って幅25cm程の小溝があり，地覆に関わる溝と思われる。なお，建物の方位は真北を示している。

片廂建物

地覆に関する溝か

ＳＢ2205（Fig.21，PL.17・19）

80-1次調査区の北西端で検出した。掘立柱建物ＳＢ2200とは2.4mの間隔で平行に配置される。柵ＳＡ2210と重複するが，両者の前後関係は不明。新期の掘立柱建物ＳＢ2288に切られる。大半は調査区外にあるが，南側柱掘方6個を確認した。現状で南北１間以上，東西５間以上（15.64m）の東西棟建物である。柱間間隔は2.83～3.28mとばらつきがみられる。掘方は隅丸方形を呈し，一辺0.8～0.86m，深さ0.5m前後を測る。柱痕は径25cm前後のものである。掘方埋土は上層が黒灰色土，下層が黄灰色土を基調とし，東隅柱掘方から２個目の柱痕下部には扁平な石が入っており，礎盤としている。

ＳＢ2215（Fig.21，PL.19・20）

80-1・3次調査区の中央やや東寄りで検出した南北棟の建物で，掘立柱建物ＳＢ2290・2292，溝2192，落込ＳＸ2238に切られ，掘立柱建物ＳＢ2220を切っている。概報では梁行３間，桁行６間分を検出したとしていたが，32次調査の遺構図を検討した結果，桁行７間目の位置に一辺0.8m程の方形の穴があり，その東側にも同規模の方形の穴があることから今回は桁行７間の建物として報告する。建物の規模は梁行9.04m，桁行20.72mの大きさで，柱間間隔は梁行が2.76～3.27mで，桁行は2.47～3.26mとばらつきがある。柱掘方は0.75～0.9mの隅丸方形を呈し，柱痕は30cm前後のものであった。桁行方位は西側に1°30′振っている。

ＳＢ2220（Fig.22，PL.20・21）

32次調査時点では，掘立柱建物ＳＢ596として南北５間分，東西１間分の柱列を確認したに留まっていたが，80次調査において梁行３間（6.56m），桁行７間（14.64m）の身舎の四面に廂を巡らせた南北棟の四面廂建物と判明した。掘立柱建物ＳＢ2215・2225・2294に切られる。身舎の柱間間隔は北側梁行が2.33m，4.23mと中央間がなく２間となっている。桁行の柱間間隔は1.82～2.3mとばらつきがある。廂の出は2.4mで，廂部分の柱間間隔は東から2.45m，2.28m，1.95m，2.42m，2.25mと一定していない。桁行側は2.0～2.28mの間隔を有する。柱掘方は一辺0.8～1.1mの隅丸方形を呈し，身舎の掘方がやや大きい。柱痕は

四面廂建物

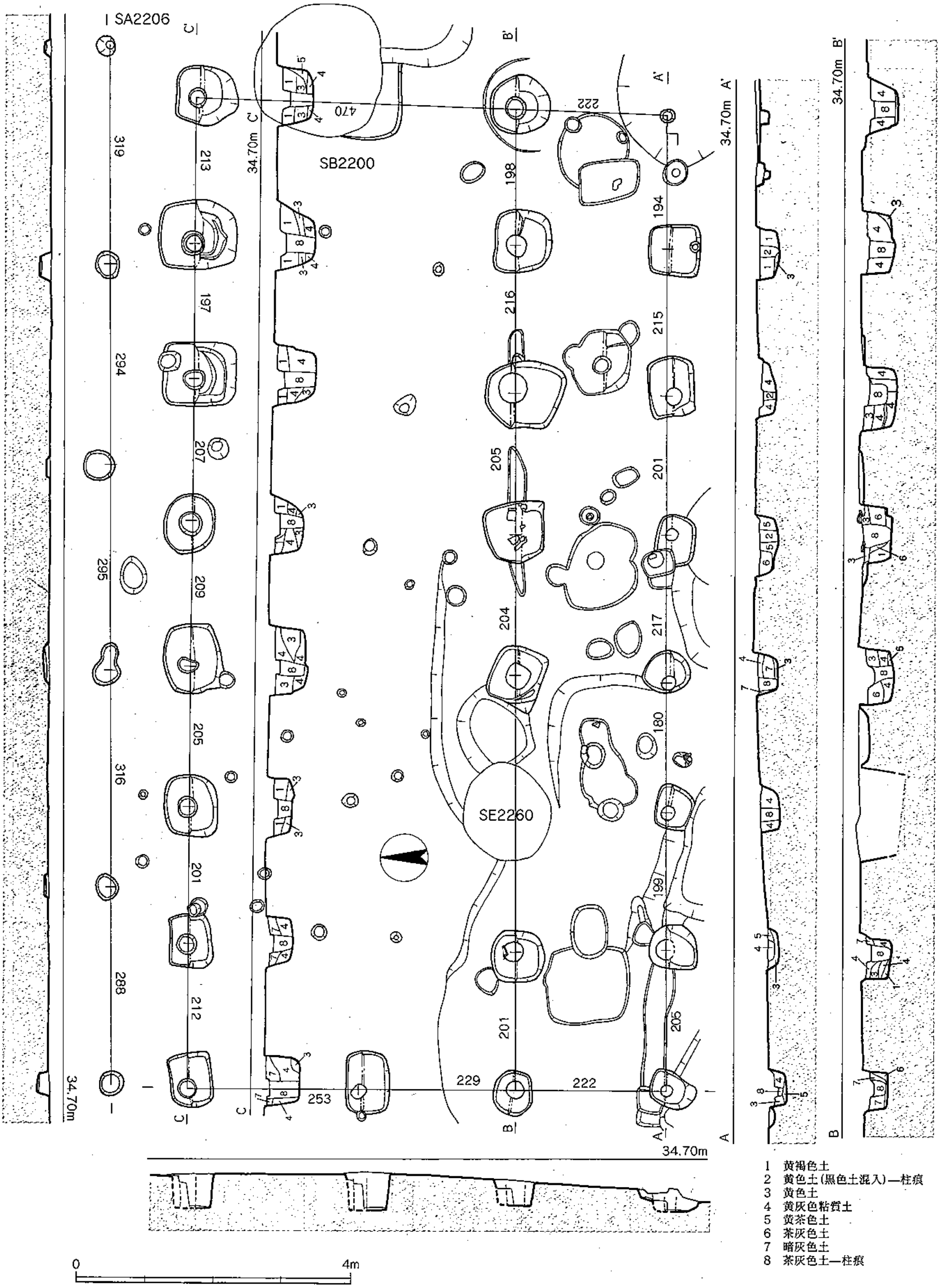


Fig.20　掘立柱建物ＳＢ2200・柵ＳＡ2206実測図（1/80）

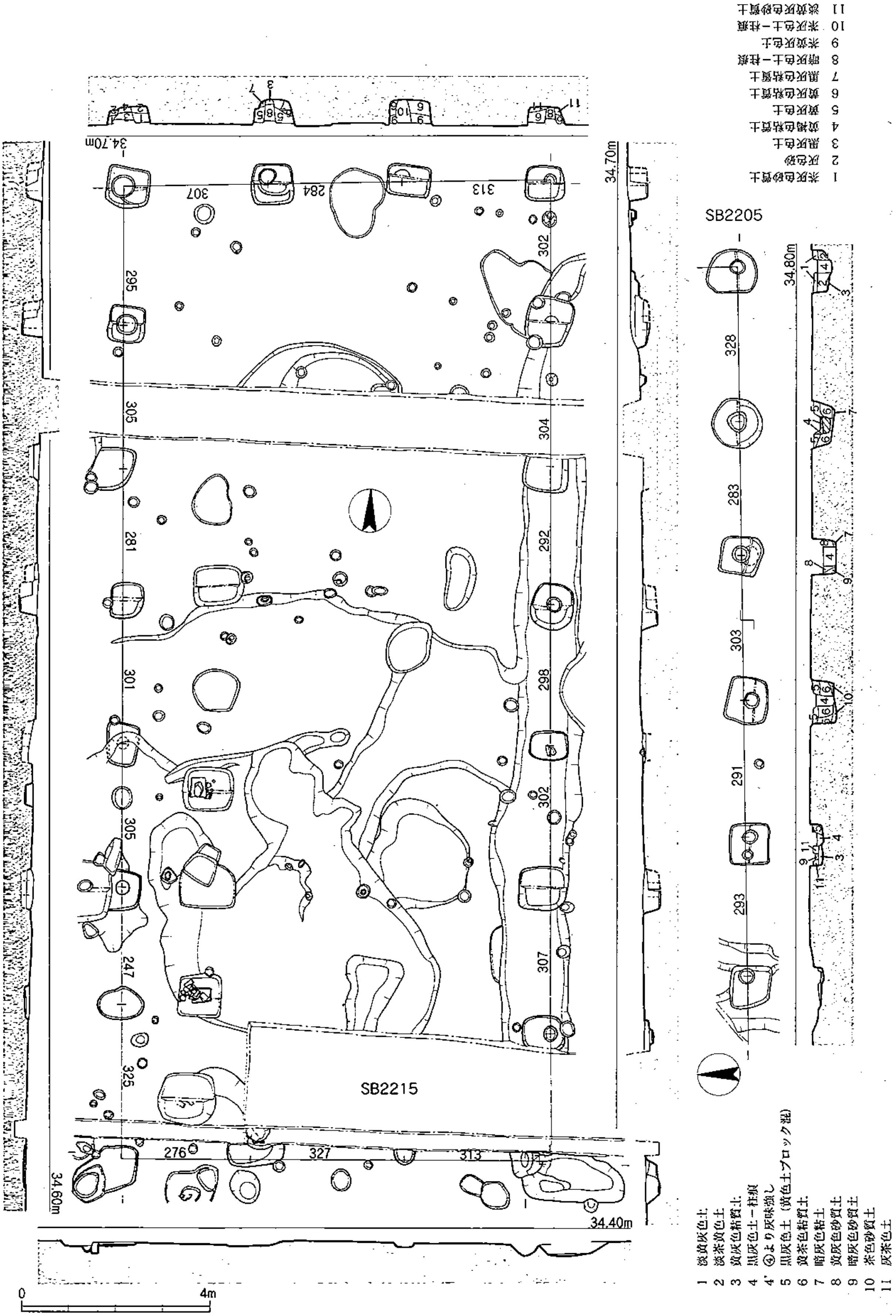


Fig.21 掘立柱建物ＳＢ 2205・2215 実測図（1/120）

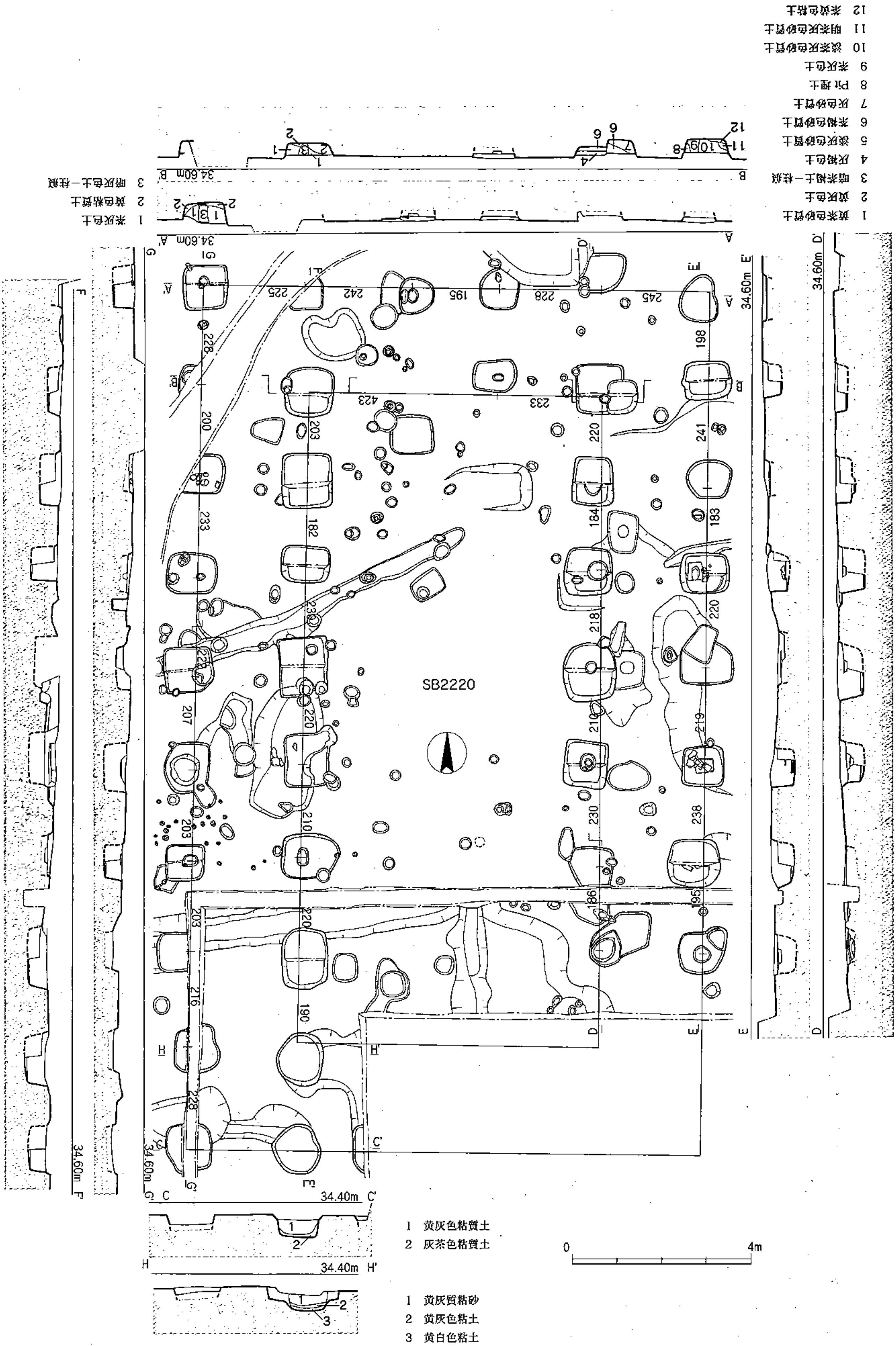


Fig.22　掘立柱建物ＳＢ 2220 実測図（1/120）

30cm前後のもので，底面に縄目タタキの平瓦を敷いているものもあり，礎盤としたのであろう。また，掘方内から８世紀後半代の土師器坏が出土している。建物方位はほぼ真北を示す。

ＳＢ2225（Fig.23，PL.22）

80-1次調査区の西側に位置し，概報段階では５間分の柵として報告していたが，遺構図の検討の結果，今回は梁行２間，桁行５間の東西棟建物として報告した。溝ＳＤ2222に切られ，掘立柱建物ＳＢ2220を切っている。また，ＳＢ2200と重複している。建物規模は梁行6.0ｍ，桁行15.0ｍで，柱間間隔は梁行が3.0ｍ，桁行は2.68～3.34ｍとばらつきがみられる。柱掘方は一辺0.9～1.1ｍの隅丸方形を呈するが，梁行側中央の掘方はやや小振りである。また，南側桁行の南西隅柱から２個目及び３個目の掘方は不整方形を呈し，掘方内にテラスを有し，内部には礫が落ち込んでいる状態であり，柱を抜き去ったものと考えられる。

ＳＢ2230（Fig.24，PL.22）

32次調査区と80-2次調査区に跨がって検出した建物で，32次調査では北面廂の東西棟建物ＳＢ591と報告していたが，80次調査で西側の柱列を検出したことにより梁行３間，桁行４間の総柱建物と判明した。北西隅の柱痕を検出していないが，心々距離は東側梁行5.67ｍ，西側梁行5.8ｍ，南側桁行8.2ｍ，北側桁行7.72ｍを測り，柱痕を結んだ線は台形を呈する。柱間間隔は東側梁行が北から1.68ｍ，2.25ｍ，1.74ｍと中央間が広くなっている。南側桁行は東から2.02ｍ，2.01ｍ，2.09ｍ，2.08ｍとほぼ等間隔である。柱掘方は0.9～1.0ｍの隅丸方形を呈し，遺存状態のよいもので深さ0.6ｍを測る。掘方底面に瓦・礫が入っているものがみられ，礎盤としたものか。なお，北東隅の掘方には径20cmの柱根が遺存していた。梁行方位は西へ2°振っている。

ＳＢ2235（Fig.25）

80-2次調査区の南西側で，掘立柱建物ＳＢ2230の1.5ｍ西側に位置する。井戸ＳＥ2265に切られ，落ち込みＳＸ2262と重複している。概報段階においては，北側梁行部分を柵ＳＡ2236，東側桁行部分を柵ＳＡ2235として報告していたが，遺構図等検討の結果，今回は梁行３間（6.8ｍ），桁行５間（12.6ｍ）の南北棟建物と考えた。柱間間隔は梁行が東側から2.1ｍ，2.3ｍ，2.4ｍで，桁行側は2.34～2.96ｍとばらつきがある。梁行側の柱掘方は0.7～0.8ｍで，隅柱掘方が大きく，中の２個はやや小振りである。また，桁側の掘方は円形を呈し，1.1～1.3ｍと梁行側に対して大きいことから柱を抜き取った可能性がある。桁行方位はほぼ真北を示す。

ＳＢ2240（Fig.26，PL.23・24）

80-2次調査の西端部に位置し，第153次調査で南端部を確認した。掘立柱建物ＳＢ2245，柵ＳＡ4085を切り，溝ＳＤ4081と重複する。梁行３間（6.6ｍ），桁行７間（15.9ｍ）の南北棟建物として考えた。柱間間隔は梁行側が2.1～2.4ｍで，桁行側は1.98～2.5ｍとかなりばらつきがある。掘方は１ｍ前後の円形を呈し，柱痕は径30cm前後のものである。掘方内からは須恵器蓋等が出土している。建物方位は1°30′西に振っている。

ＳＢ2245（Fig.26，PL.23・24）

掘立柱建物ＳＢ2240のやや北西側で，同建物及び溝ＳＤ2284，不整形土坑ＳＸ2276・2278に切られて位置する。桁行の北から２個目の掘方は確認できていないが，一応梁行３間（6.9ｍ），桁行５間（14.0ｍ）の南北棟建物として復原した。柱痕を留める掘方が少ないので，

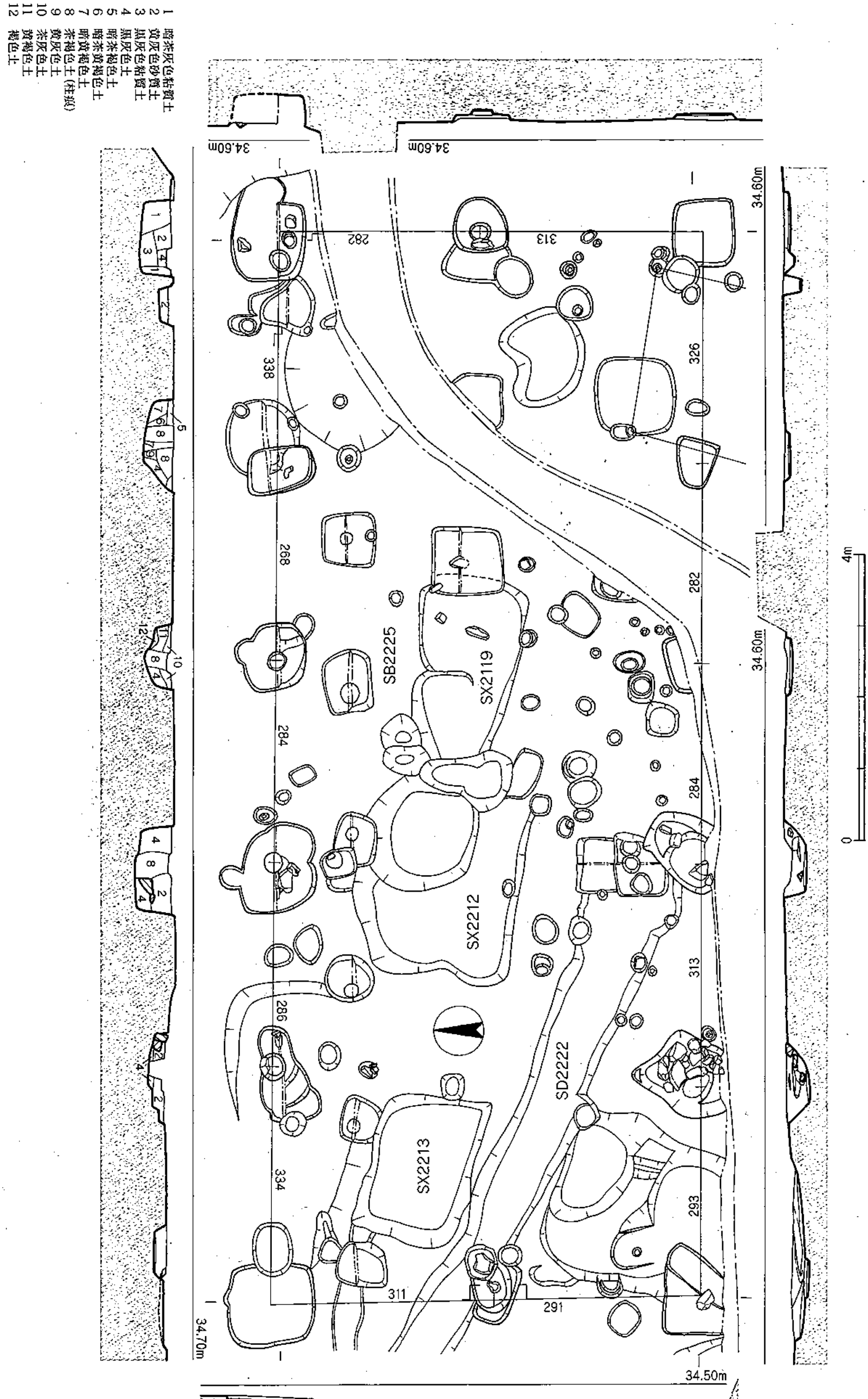


Fig.23　掘立柱建物ＳＢ2225実測図（1/80）

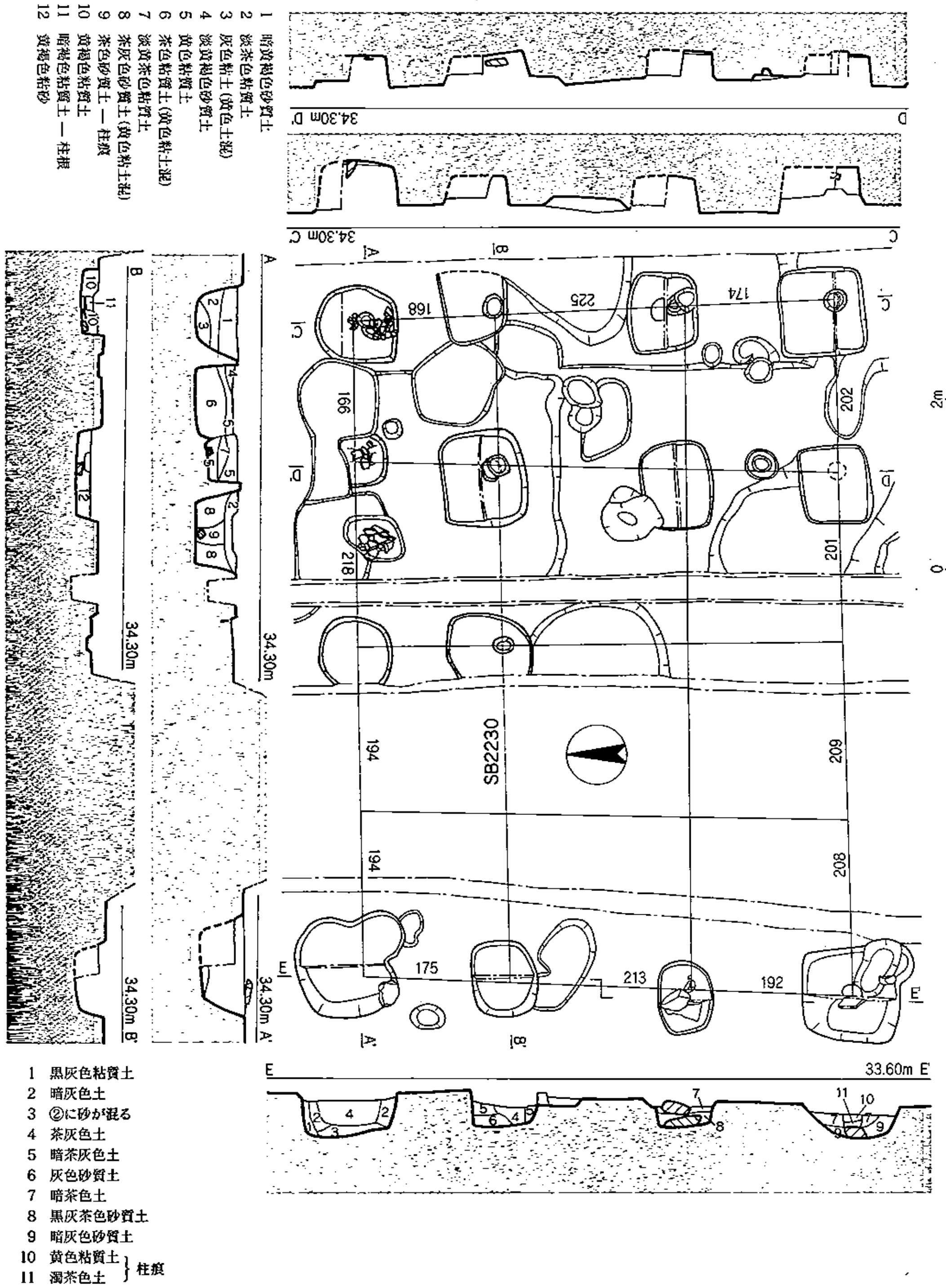


Fig.24 掘立柱建物ＳＢ2230実測図（1/80）

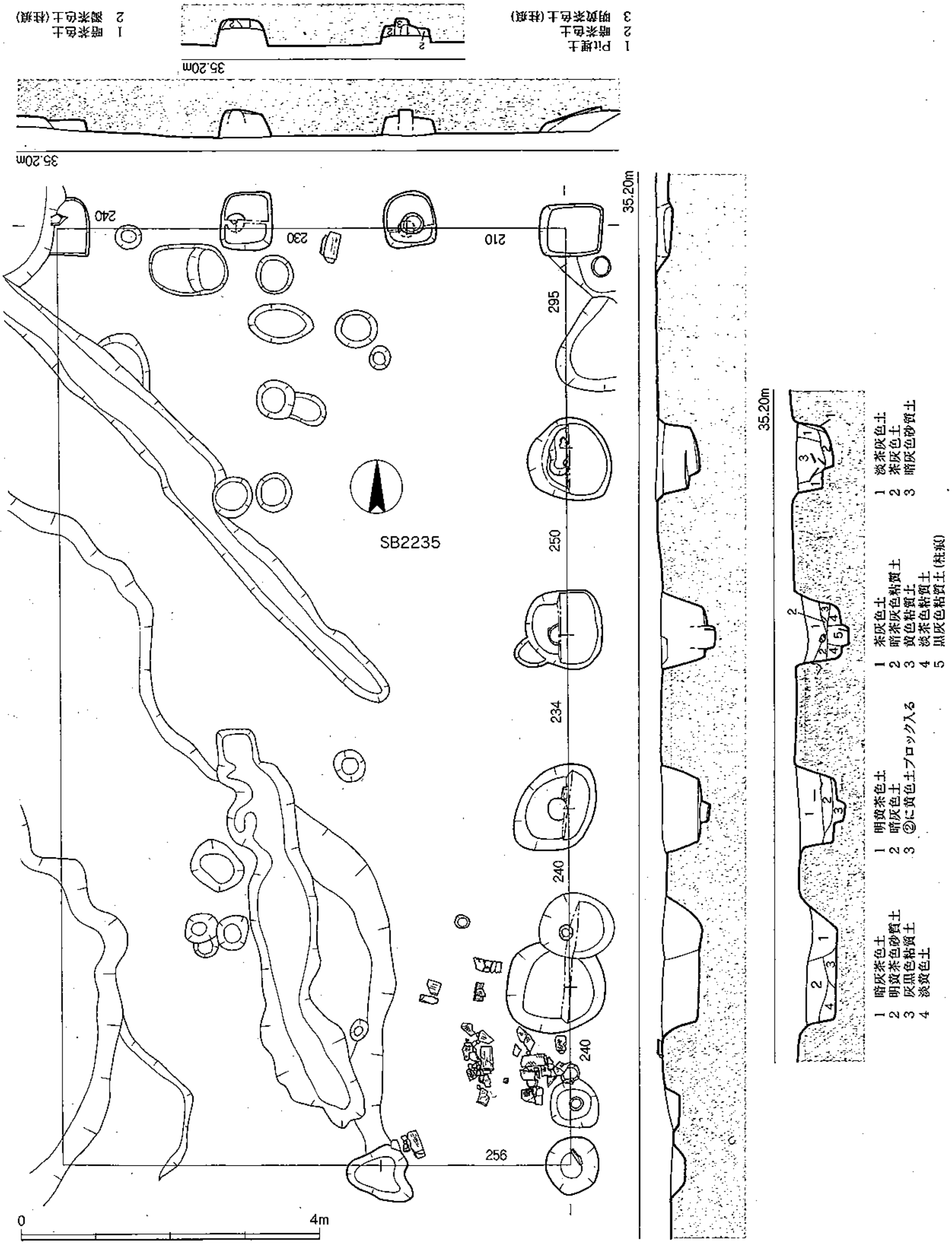


Fig.25　掘立柱建物ＳＢ 2235 実測図（1/80）

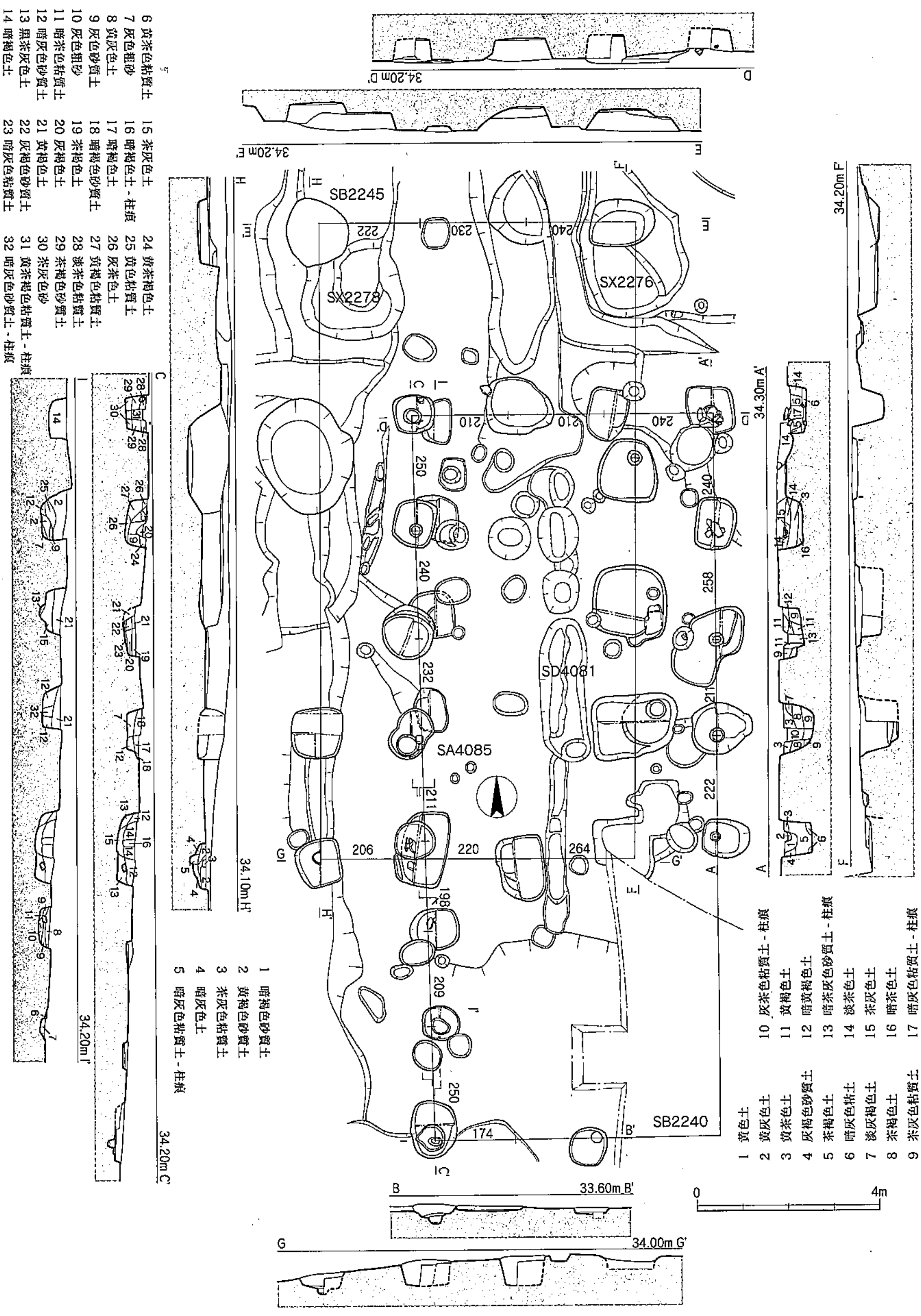


Fig.26 掘立柱建物ＳＢ 2240・2245，柵ＳＡ 4085 実測図（1/120）

正確な柱間間隔は不詳である。掘方は1.2～1.4mの隅丸方形を呈し，東側桁行の掘方は不整形を呈し，建て替えを行ったものとみられる。掘方内からは須恵器蓋，有高台坏，無高台坏が出土している。

ＳＢ2279（Fig.27，PL.25）

掘立柱建物ＳＢ2285，溝ＳＤ2192の北側で，両者に切られて位置する。本遺構も当初建物と認識していなかったものであるが，今回は梁行２間（3.6m），桁行３間（7.8m）の南北棟建物とした。柱が抜き取られたりして柱痕が確認できていないため正確な柱間間隔は不明である。掘方は柱を抜き取っているため不整方形を呈する。

ＳＢ2285（Fig.27，PL.25）

80-1次調査区の東側に位置し，掘立柱建物ＳＢ2195，溝ＳＤ2192に切られ，ＳＢ2279を切っている。前回の概報では建物として報告していなかったが，掘方の大きさが1.0m程あり，深さも0.5mとしっかりしている方形の穴が４個東西方向に並んでいることから梁行２間（4.6m），桁行４間以上（8.6m）の東西棟建物と考えた次第である。柱痕が確認できていないため正確な柱間間隔は不明であるが，桁行側は1.6～2.48mとかなりの差がある。柱掘方は0.7～0.8mの隅丸方形を呈し，深いもので0.6mを測る。なお，桁行側の掘方には北側に柱抜き取りのための掘込みがある。桁行方位はほぼ東西方向を示す。（小田）

ＳＢ2288（Fig.28，PL.17）

小型の掘立柱建物群

80-1次調査区北西側で検出した。梁行は3.68～3.72m，桁行は5.80mの２×３間の東西方向の建物である。建物の桁行方位は，N13°30′Eで，柵ＳＡ2254と並行する。桁行東側から２つ目の柱には梁が通るかのように，ほぼ中間地点に柱坑が位置するため，同一建物の柱と想定した。柱穴の径は0.2～0.3mと小さく，掘立柱建物ＳＢ2200を切っている。また，北側の桁の中央の柱穴２基に対応するように北側に柱穴が位置しており，何らかの関係が想定され，検討次第では，さらに大型の建物としても復元できる可能性もあるが，確実なところとして今回のような復元とした。

ＳＢ2290（Fig.29，PL.19）

80-1次調査区中央東寄りの位置で検出した。梁行は3.86m，桁行は5.97mの２×３間の南北方向の建物である。建物の桁行方位はN11°30′Eで，東側に柵ＳＡ2272と並行する。東側の桁のさらに東側には並行する３基の柱穴があって，例えば目隠し塀のように，この建物と何らかの関係をもつ遺構とも考えられるため，図示している。小さな柱穴により構成される掘立柱建物の中では，最も柱間が整っている印象を受ける。

ＳＢ2292（Fig.29，PL.16）

ＳＢ2290の東側に隣接する位置で検出した。梁行は3.58～3.60mで，南側に0.85mの間隔をもって廂が取り付くと想定される。桁行は5.70mで，梁行方位はN11°Eである。各々の柱穴の位置には，２ないし３基の柱穴が重複しており，１～２回の建て替えがなされたものと見受けられるが，切れ合い関係に乏しく，それぞれが何回目に建てられたものにあたるかまでは不明である。廂については，建て替えの痕跡が無く，いずれか１回の建て替えに伴うものであると考えられる。柱穴は径0.2mを下回るものもあってかなり小さく，ＳＢ2215を切っている。

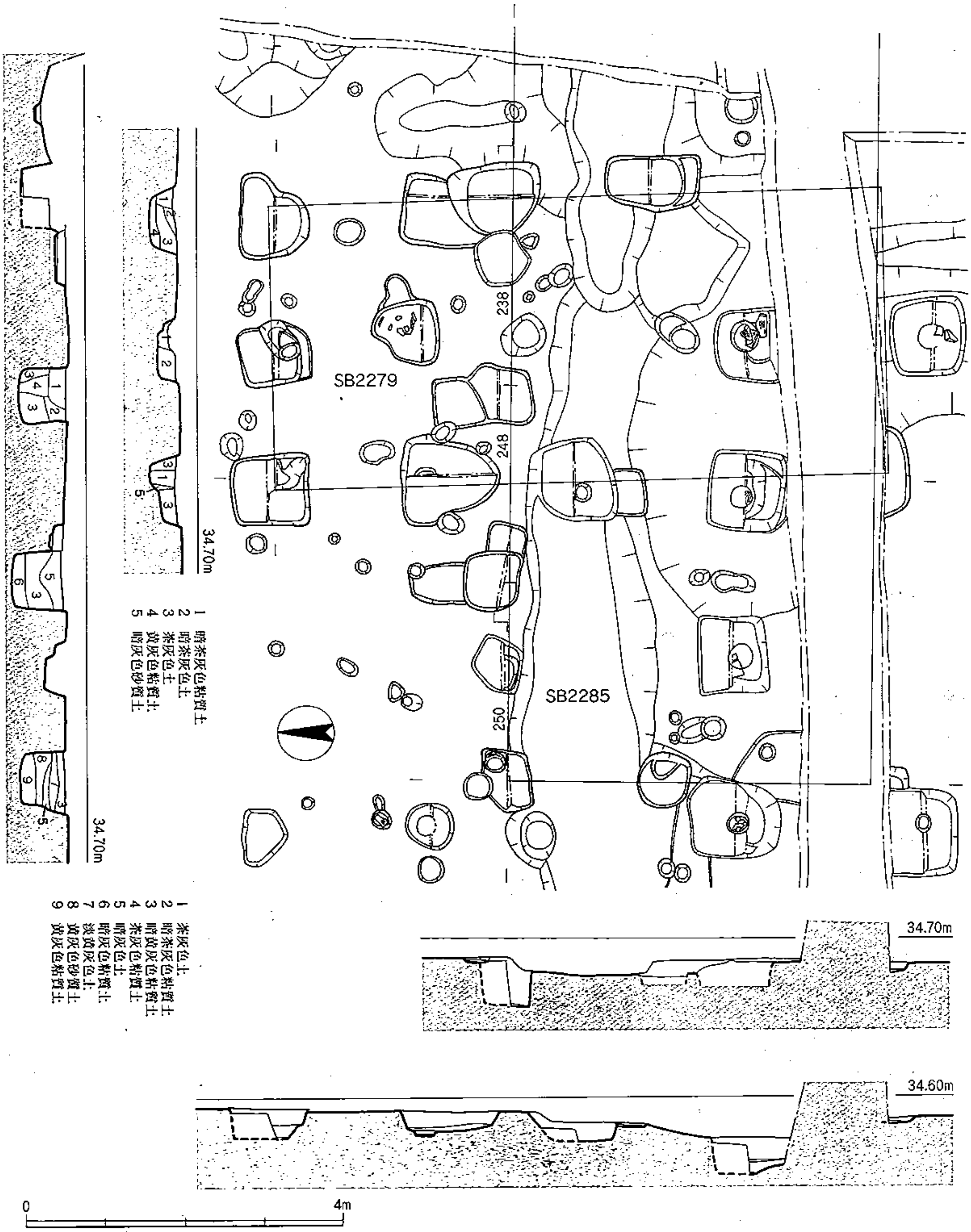


Fig.27　掘立柱建物ＳＢ 2279・2285 実測図（1/80）

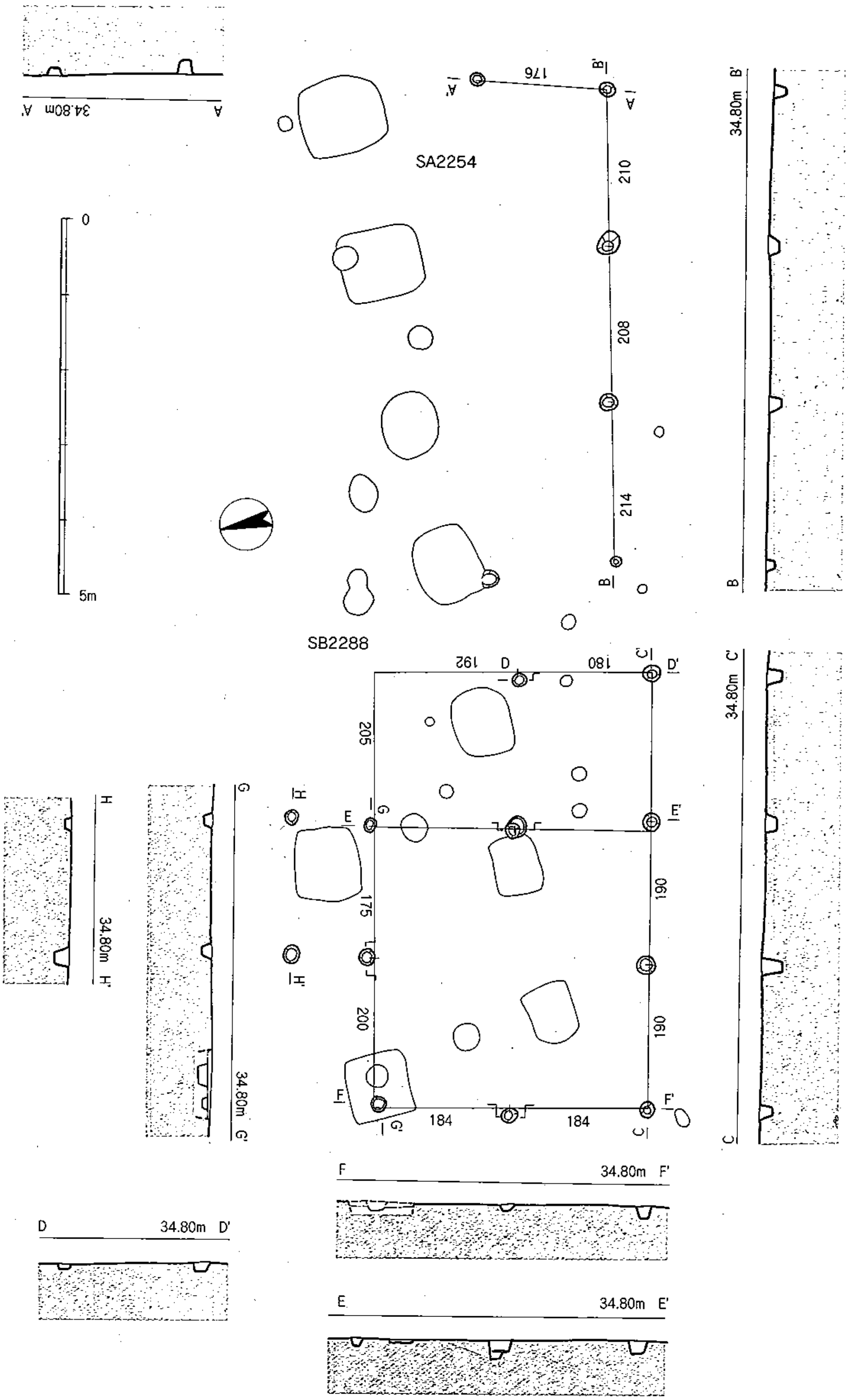


Fig.28　掘立柱建物ＳＢ 2288，柵ＳＡ 2254 実測図（1/80）

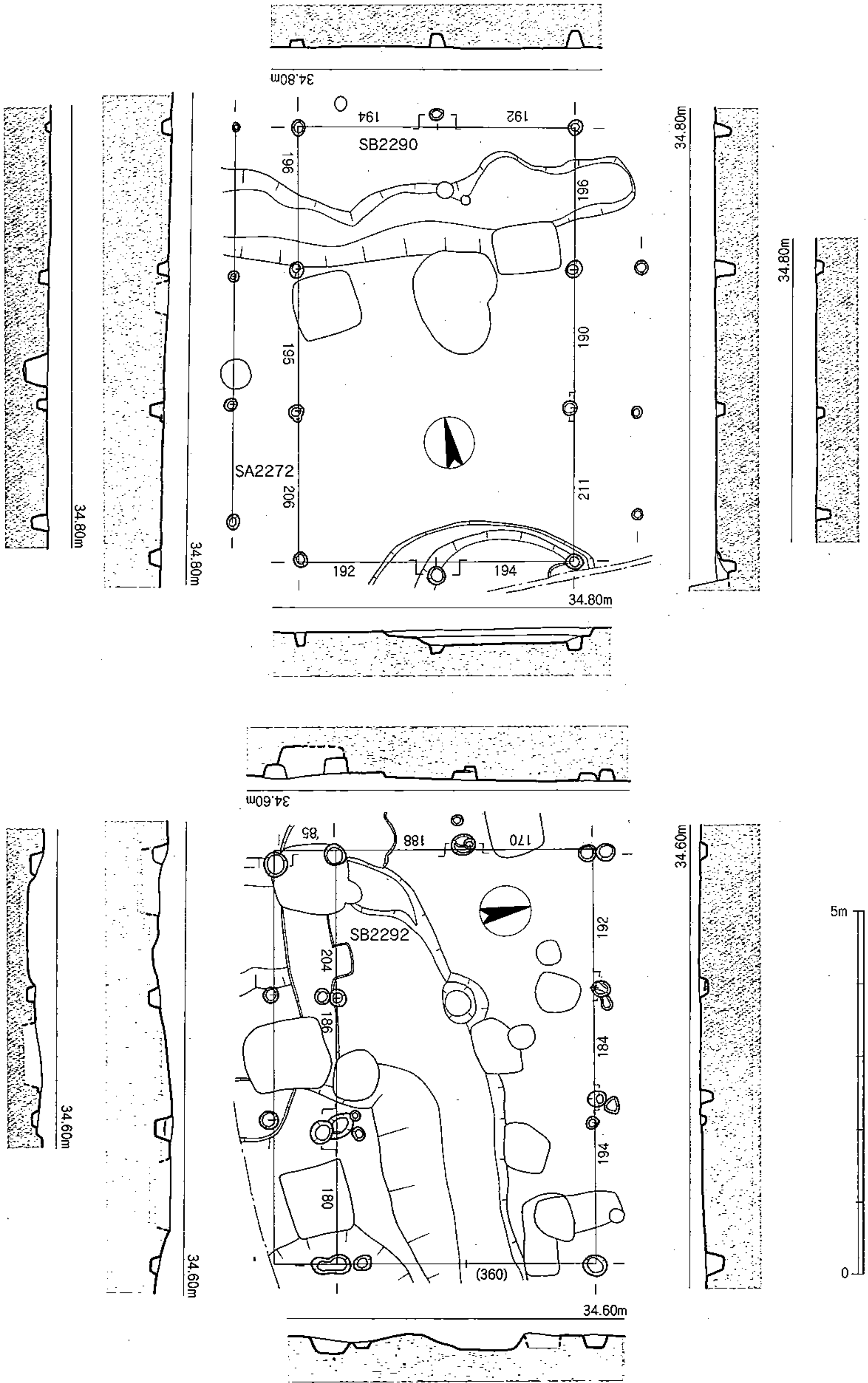


Fig.29　掘立柱建物ＳＢ 2290・2292，柵ＳＡ 2272 実測図（1/80）

ＳＢ2294（Fig.30）

80-3次調査地北西区で検出した。１×２間の小型の南北方向の建物で，梁行2.50～2.56m，桁行4.30mであるが，梁の真ん中の柱穴は間隔が一定しないが，桁行方位がN14°　Eと，他の小型の掘立柱建物と並行するため，あえて建物と想定した。この周囲には他にも規模や層位を同じくする小型柱穴が集まっており，他の建物も想定が出来る可能性も考えられる。

ＳＢ2295（Fig30，PL.25）

80-2次調査地北東隅で検出した。２×３間の南北方向の建物で，梁行3.50m，桁行6.08mで，桁行方位は，N12°　30′　Eである。南西隅部分については，溝ＳＤ2257・2259と重複する部分であり，幾つかの柱穴は削平されているようである。（岡寺）

（2）柵

日吉地区では，75・80次調査において６条の柵を検出している。

ＳＡ1999（Fig. 31，PL. 25）

75次調査区の南西隅部で検出した柵で，掘立柱建物ＳＢ2000の5.5m西側に位置する。掘立柱建物ＳＢ1990，落込ＳＸ1993・1997に切られている。南北方向に走り，４間分の長さ10.1mを確認したが，さらに南側に延びるものと推測される。柱間間隔は北から2.43m，2.31m，2.62m，2.27mとばらつきがある。柱掘方は小振りのもので1.06m，大きいもので1.22mで，柱痕も30cm前後を測り，建物と比較しても遜色のない立派なものである。方位はほぼ南北を示している。

ＳＡ2206（Fig.20，PL. 19）

80-1次調査区の北西側で検出した柵で，掘立柱建物ＳＢ2200とＳＢ2205

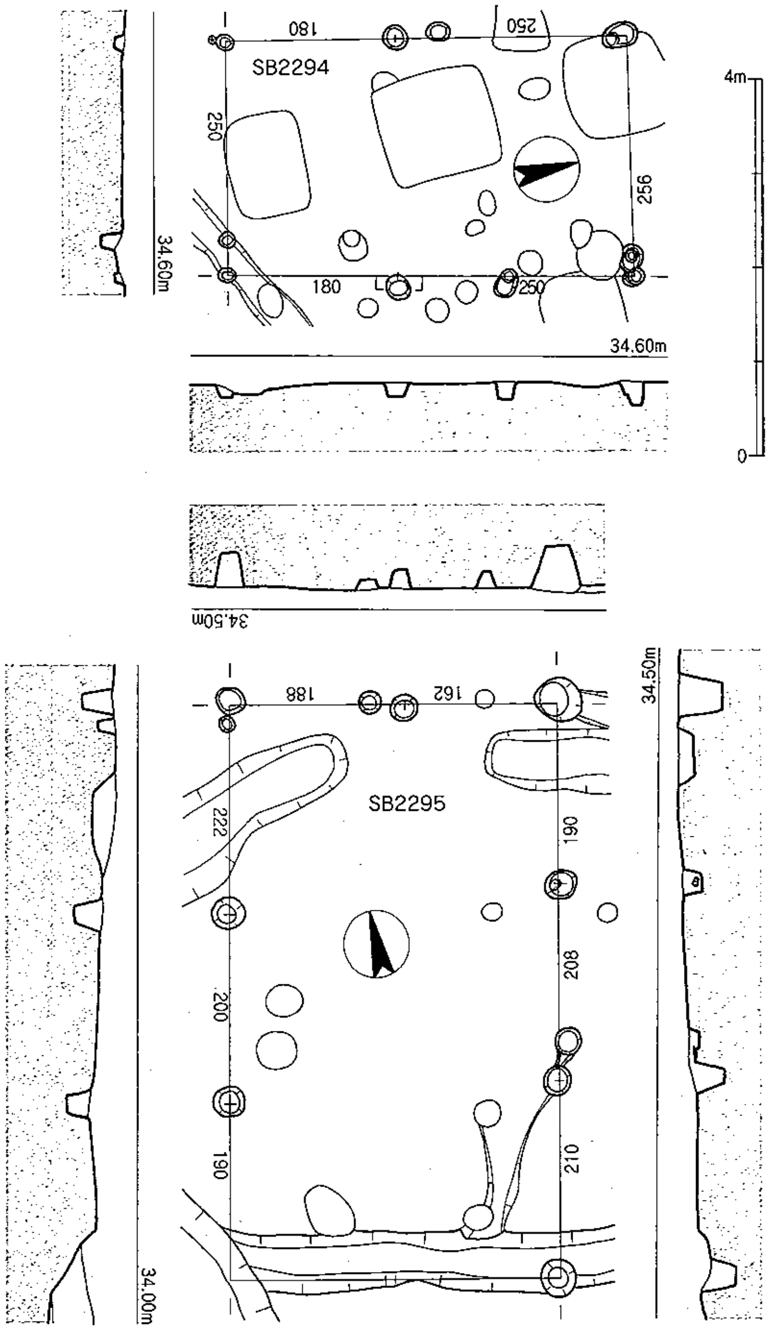


Fig.30　掘立柱建物ＳＢ2294・2295実測図（1/80）

とのほぼ中間に位置する。新期建物ＳＢ2288と重複するが，建物が後出するとみられる。東西方向に走り，５間分の長さ15.12ｍを測る。柱間間隔は東から3.19ｍ，2.94ｍ，2.95ｍ，3.16ｍ，2.88ｍとばらつきがみられる。柱掘方は30㎝前後の円形を呈し，両端の柱穴は他に比して深めである。

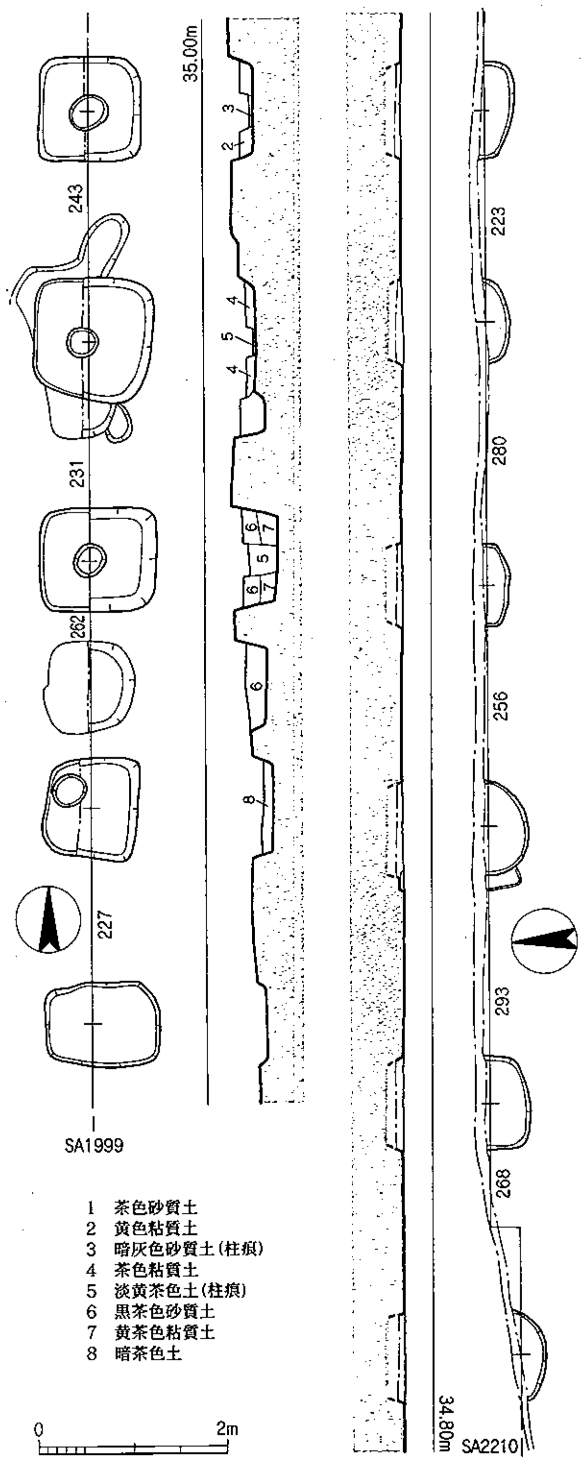


Fig.31　柵ＳＡ 1999・2210 実測図（1/80）

ＳＡ2210（Fig.31，PL.19）

80-1次調査区の北西端で６個の掘方を検出した。概報段階ではＳＢ2210と番号を付し掘立柱建物として報告していたが，114次調査区には延びていないことから東西方向に走る５間以上（長さ14.16ｍ）の柵と考えられる。柱間間隔は2.23～2.93ｍとばらつきがみられる。柱掘方は1ｍ前後と大きいものの，掘方内では柱痕を確認していない。また，半裁していないため深さ等詳細は不明。

（小田）

ＳＡ2254（Fig.28，PL.17）

掘立柱建物ＳＢ2288の東側に，Ｌ字を呈する平面プランの柵で，東西方向に３間（6.32ｍ），南北方向に１間（1.76ｍ）である。東西列の方位は，N78°ＷでＳＢ2288にほぼ平行する。東西方向の柱穴の最も西側の柱穴の北側にも柵の延長となるような柱穴も見られるが，柵が直角に屈折しないために，除外している。遺構検討時にＳＢ2288に平行する東西棟とも考えたが，検出された柱穴が極端に少ないため，現段階では柵として報告する。

ＳＡ2272（Fig.29，PL.19）

掘立柱建物ＳＢ2290の西側に平行するように並んだ４基の柱穴で構成される。総延長は，5.45ｍ。遺構検討時にはＳＢ2290の西側の廂とも考えたが，建物と柱間が合わないため，建物とは独立した目隠し塀のような

役割の柵が想定される。（岡寺）

ＳＡ4085（Fig26，PL.23）

80-2次調査区の西端に位置し，掘立柱建物SB2240に切られる。南北方向の柵で，80-2次調査では３間分を確認していたが，153次調査で南半の３間を検出し，６間（13.2m）の柵と判明した。柱間間隔は2.1ｍを主体とする。（小田）

（3）溝

ＳD2188・2189

79次調査北トレンチで南北方向に平行する２条の溝で，共に約4.5m分検出した。深さは0.1m程で，両方とも北側で途切れている。２条の溝どうしの距離は約２ｍで道路側溝の可能性も否定できないため報告した。出土遺物はない。

ＳD2192（Fig.32，PL.16）

80-1・3次調査地の東側で検出した東西方向から南北方向に折れるＬ字形の溝で，検出した総延長は約30ｍに及ぶ。幅約1.8ｍと広いが，深さは約0.3ｍと浅い。埋土は淡黄褐色土である。平面プランや出土遺物を見ると，掘立柱建物ＳＢ2195の周囲を巡る溝に見えるが，ＳＢ

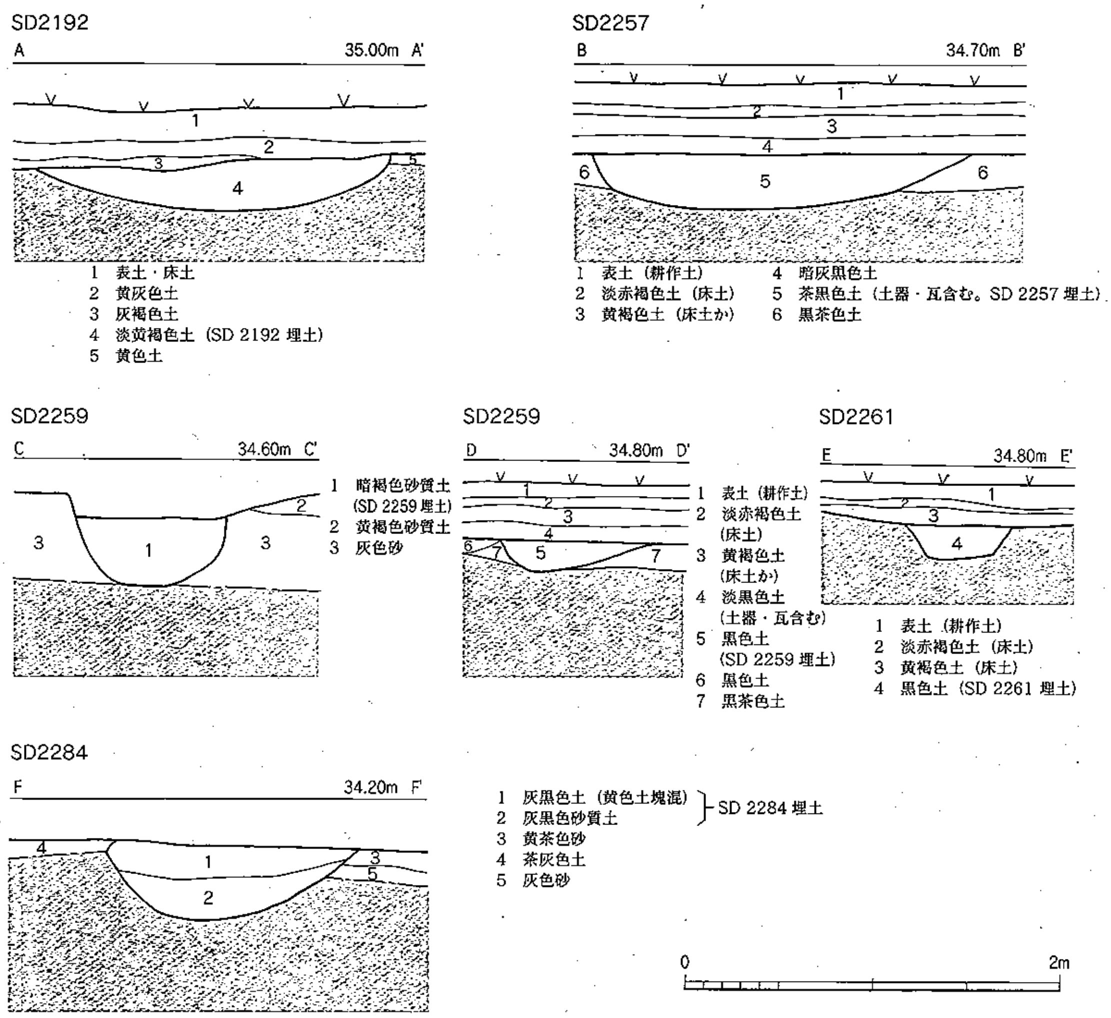


Fig.32　溝土層図（1/40）

2195・2279・2285の柱穴を切っており，10世紀以降にまで下るものと考えられる。溝の南側は32次調査地で収束しているようである。

SD2193

80-3次調査地の北東側で検出した南北溝で，約３m分を検出した。幅約0.6m，深さ0.1m。図上では，掘立柱建物ＳＢ2195の柱穴に切られているようにも見られるが，明確な切り合い関係は不明である。出土遺物はなく明確な時期も不明。

SD2216

80-1次調査地の西隅で検出した南北溝で，約９m分を検出した。幅約1.5mと広い割には深さは0.15～0.25mと浅い。掘立柱建物ＳＢ2205を切っており，周辺の溝と同じく，新しいものと考えられる。埋土は灰褐色土である。

SD2222

80-1次調査地の西側で検出した。西北西―東南東の方向に走る。長さ９m，幅0.8m，深さ0.1mで，掘立柱建物ＳＢ2200・2225を切っている。出土遺物から最終埋没は11世紀後半以降と考えられる。

SD2257（Fig.32，PL.25・26）

80-2次調査地東側で検出した。北西―南東の方向に走る。長さ14m，幅約2.0m，深さ約0.4mで，北西隅でSD2258と接続する一方で，図上ではＳＤ2259を切っているように見えるが，明確な切り合い関係は不明である。最終埋没年代は，10世紀中頃以降であるが，ＳＤ2258と同時と見れば，11世紀後半以降にまで下る可能性もある。

SD2258（PL.25・26）

溝ＳＤ2257に北接する東西溝で，ＳＤ2257・2266を挟んだ総延長は13m，幅0.5m，深さ0.1～0.3m。東側で途切れるが，さらに東側に東西溝ＳＤ2261がある一方で，西側ではＳＤ2263に接続している。また，南側にも平行する東西溝ＳＤ2259もあって，これらの溝との関係が窺える。最終埋没年代は，11世紀後半以降である。

SD2259（Fig.32，PL.25・26）

80-2次調査地から第32次調査地にかけて長さ約35mにわたって東西に横断する長い溝で，途中，ＳＤ2257・2266・2267・2273と交差し，掘立柱建物ＳＢ2220・2295を切っている。幅0.8m，深さ0.2～0.4mで，黒色土もしくは暗褐色砂質土が埋土である。出土遺物から最終埋没年代は，10世紀後半以降と見られる。

SD2261（Fig.32）

溝ＳＤ2258の東側で検出した東西方向の溝で，途中，途切れながらも長さ約10m分を検出した。幅0.5m，深さ0.2mで，埋土は黒色土。出土遺物は９世紀代の須恵器のみだが，ＳＤ2258からのつながりを考えれば，さらに新しくなる可能性が考えられる。

SD2263（PL.26）

溝ＳＤ2258の西側に接続する東西方向の溝で，長さ12m，幅約1.0m，深さ0.25m，途中，ＳＤ2273と交わり，西端でＳＤ2258とくっついて検出された。出土遺物はない。

SD2266（PL.26）

井戸ＳＥ2265の北東隅から北北東へ延び，長さ12m，幅0.5m，深さ0.1～0.3m。途中，

ＳＤ2257・2258・2259と交わる。井戸との切り合い関係は不明だが，遺物から見てほとんど同時期である。

ＳＤ2267

溝ＳＤ2267の西側に並行する南北溝で，長さ３ｍ，幅0.5ｍ，深さ0.1ｍ。北端でＳＤ2259に接するが切り合い関係は不明。出土遺物は８世紀代だが，埋没時期は不明。

ＳＤ2268

80-2次調査地南東隅で検出した南北溝で，長さ３ｍ分を検出した。幅1.2ｍ，深さ0.1ｍ。北側では井戸ＳＥ2270に接する。埋没年代は10世紀以降に下る。

ＳＤ2269

溝ＳＤ2268の西側に並行する南北溝で，長さ2.5ｍ分を検出した。幅0.6ｍ，深さ0.1ｍ。出土遺物から埋没年代は11世紀後半以降と新しい。

ＳＤ2273

80-2次調査地北側で検出した南北溝で，長さ7.5ｍを検出した。幅３ｍ，深さ0.35ｍ。南端でＳＤ2259・2263と交わる。埋没年代は10世紀以降である。

ＳＤ2277 (PL.26)

80-2次調査地西側で検出した。東西方向に延び，途中Ｌ字形に２回屈折し，礫敷遺構ＳＸ

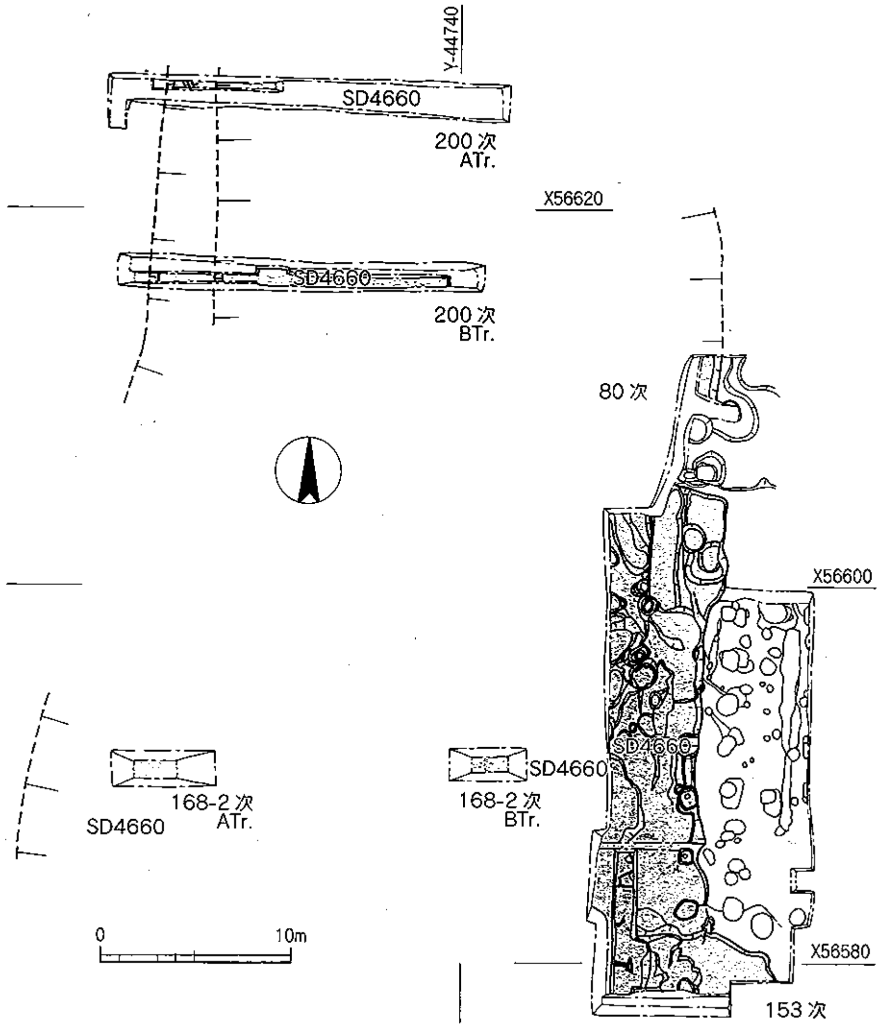


Fig.33　溝ＳＤ4660実測図（1/400）

2275や不整形土坑ＳＸ2282を切る。検出した総延長は約20m，幅0.7m，深さ0.1m。出土遺物から見た埋没年代は11世紀後半以降である。

ＳＤ2284（Fig.32，PL.26・27）

80-2次調査地西隅で検出した南北方向の溝である。153次調査でも検出され，総延長17.5m分を検出した。幅約1.4m，深さ0.4m。掘立柱建物ＳＢ2245を切る一方で，南北溝ＳＤ4660の東端部分にも当たる。出土遺物はいずれも８世紀代と古いが，ＳＤ4660との関係を考えると，掘削年代自体，それよりも下る可能性が考えられる。

ＳＤ4081（PL.27）

80-2次調査地南西部で検出していたが，当初南北方向のピット群と判断していた。153次調査で再調査された結果，１条の溝と判断された。幅約１m，深さ0.4m。出土遺物から埋没年代は11世紀後半以降に下る。

ＳＤ4660（Fig.33，PL.27）

日吉地区と政庁前面広場を区画する南北溝

日吉地区の西側の政庁前面広場地区の168-2次調査および200次調査において検出された日吉地区と前面広場を区画する大型の南北溝で，80-2次調査地および153次調査地の西側に検出された西側への落ち込み状遺構を，この溝の東側の立ち上がりと考えると，溝の幅は約30m，深さ1.4mにも及ぶ大型のものとなる。１箇所の調査区で確実に一本の溝となる確証がなかったため，付近でレーダー探査を実施した結果，不明瞭ながらも，想定通りの溝状の落ち込みが検出されたため，現状では想定のとおりで考えておきたい。探査結果については第Ⅴ章を参照されたい。

（4）井戸

日吉地区では，いずれも80次調査において５基の井戸を検出した。

ＳＥ2250（Fig.34，PL.28）

80-1次調査地の北壁際中央部で検出された。柵ＳＡ2210柱穴南側に隣接した位置にある。平面プランは約1.1×1.3mの隅丸方形で，深さは約1.9mを測る。内部には方形縦板組の木枠が１段残存していた。木枠の残存状況は悪く，下部に残る横桟も一部は原位置を止めていない。原位置を保つと考えられる南側・西側の横桟からすると，木枠は約0.7×0.75mに復元できる。隅木は西南隅の１本が残る。径10cm程の丸木材である。井戸の底部中央には径約40cm，深さ約18cmの曲物を据える。また，掘方西壁の中位に設けられたテラスには径14cm程の曲物が置かれ，テラスの落ち際に沿って径約６cm，長さ約85cmの自然木が配されていた。構築時に祭事を行ったのかもしれない。なお，埋土上層には厚さ８cmの炭層（４層）が認められる。出土遺物より埋没時期は11世紀後半以降と考えられる。

ＳＥ2255（Fig.34，PL.28）

80-1次調査地のほぼ中央，ＳＥ2250の南５mで検出された。掘立柱建物ＳＢ2200身舎東辺の柱穴を切る。平面プランは径約1.9～2.1mの不整円形で，深さは約1.2mを測る。概報では掘方から方形の木枠を推定しているが，内部の施設は確認できない。埋土には花崗岩バイラン土の黄色土ブロックが多く含まれていたほか，ＳＥ2250同様に炭層（3・9層）の堆積が見られた。出土遺物より埋没時期は11世紀後半以降と考えられる。

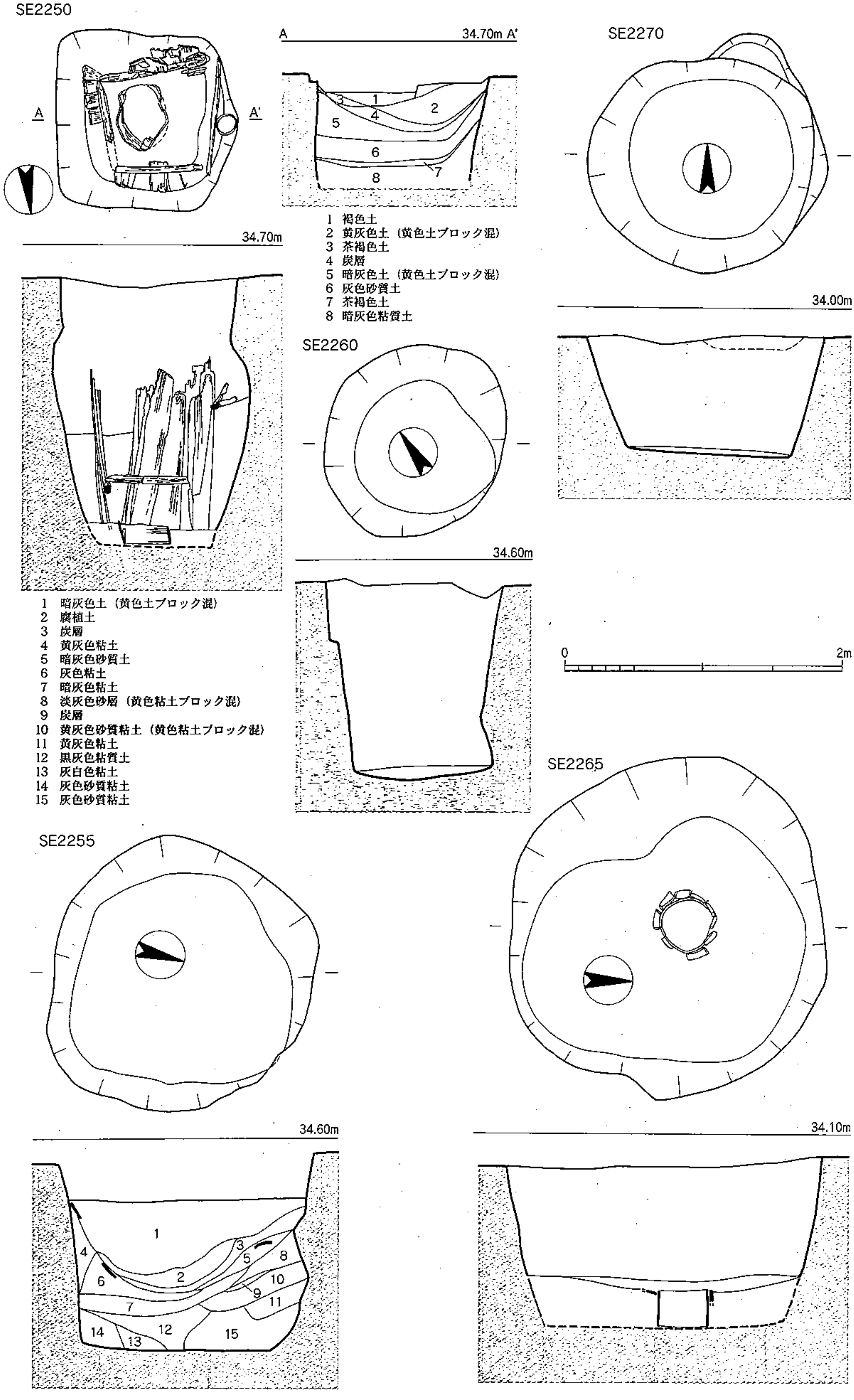


Fig.34　井戸実測図（1/40）

ＳＥ2260（Fig.34，PL.29）

80-1次調査地の東側中央部で検出された。掘立柱建物ＳＢ2200身舎南辺の柱穴を切る。平面プランは径約1.2ｍの円形，深さは約1.4ｍを測る。概報では掘方の形状・規模から曲物の使用を推定しているが，内部の施設は確認できない。

ＳＥ2265（Fig.34，PL.29）

80-2次調査地の中央やや東で検出された。掘立柱建物ＳＢ2235柱穴を切る。平面プランは径約2.2～2.5ｍの不整円形で，深さは約1.2ｍを測る。底部の中央やや北西よりに径18.5㎝，深さ26㎝の曲物が据わり，周囲には瓦が詰められていた。激しい湧水のため，十分な観察はできなかったが，ＳＥ2250のような方形縦板組の木枠が存在した可能性が高い。出土遺物より11世紀代の埋没と考えられる。

ＳＥ2270（Fig.34，PL.29）

80-2次調査地の南端部付近で検出された。平面プランは径約1.5～1.6ｍの円形で，深さは0.8ｍを測る。概報では曲物と井戸側の使用を推定しているが，内部の施設は確認できない。

（5）土坑

ＳＫ1994（Fig.35）

75次調査区南東側で検出された。径約2.5ｍの不整円形を呈し，深さは約0.3ｍ。地山まで掘りこまれた部分のみが残る。龍泉窯系青磁杯の破片が出土し，８世紀以後に埋没する。

ＳＫ2002（Fig.35）

75次調査区中央南側で検出された。長軸約2.3ｍ，短軸約約1.2ｍの隅丸長方形を呈し，深さは約0.2ｍ。地山まで掘りこまれた部分のみが残る。須恵器蓋が出土し，８世紀以後に埋没する。

ＳＫ2211（Fig.35）

80次調査区北西側で検出された。径約1.4ｍの不整円形を呈し，深さは約0.2ｍ。土坑内の北側のみが二段掘りとなる。土師器坏の底部破片が出土し，10世紀以後に埋没する。

ＳＫ2233（Fig.35）

80次調査区北西側で検出された。長軸約1.3ｍ，短軸約0.9ｍの隅丸方形を呈し，深さは約0.2ｍ。ＳＤ2216を切り込んで掘削されている。土師器坏の底部破片が出土し，10世紀以後に埋没する。

ＳＫ2234（Fig.35）

80次調査区北東側で検出された。径約3.0ｍの不整円形を呈し，深さは約0.2ｍ。ＳＤ2192を切り込んで掘削されている。出土遺物には土師器皿が含まれる。

ＳＫ2237（Fig.36）

80次調査区北東側で検出された。土坑の半分ほどが調査区外のため全容は不明だが，径約3.5ｍの円形を呈し，深さは約0.2ｍ。北側半分は二段掘りとなる。出土遺物には平底の須恵器壺破片が含まれる。

ＳＫ2248（Fig.36）

80次調査区西側で検出された。長軸約1.2ｍ，短軸約0.7ｍの隅丸三角形を呈し，深さは約0.2ｍ。出土遺物には黒色土器，土師器皿，青白磁，高麗無釉陶器が含まれる。

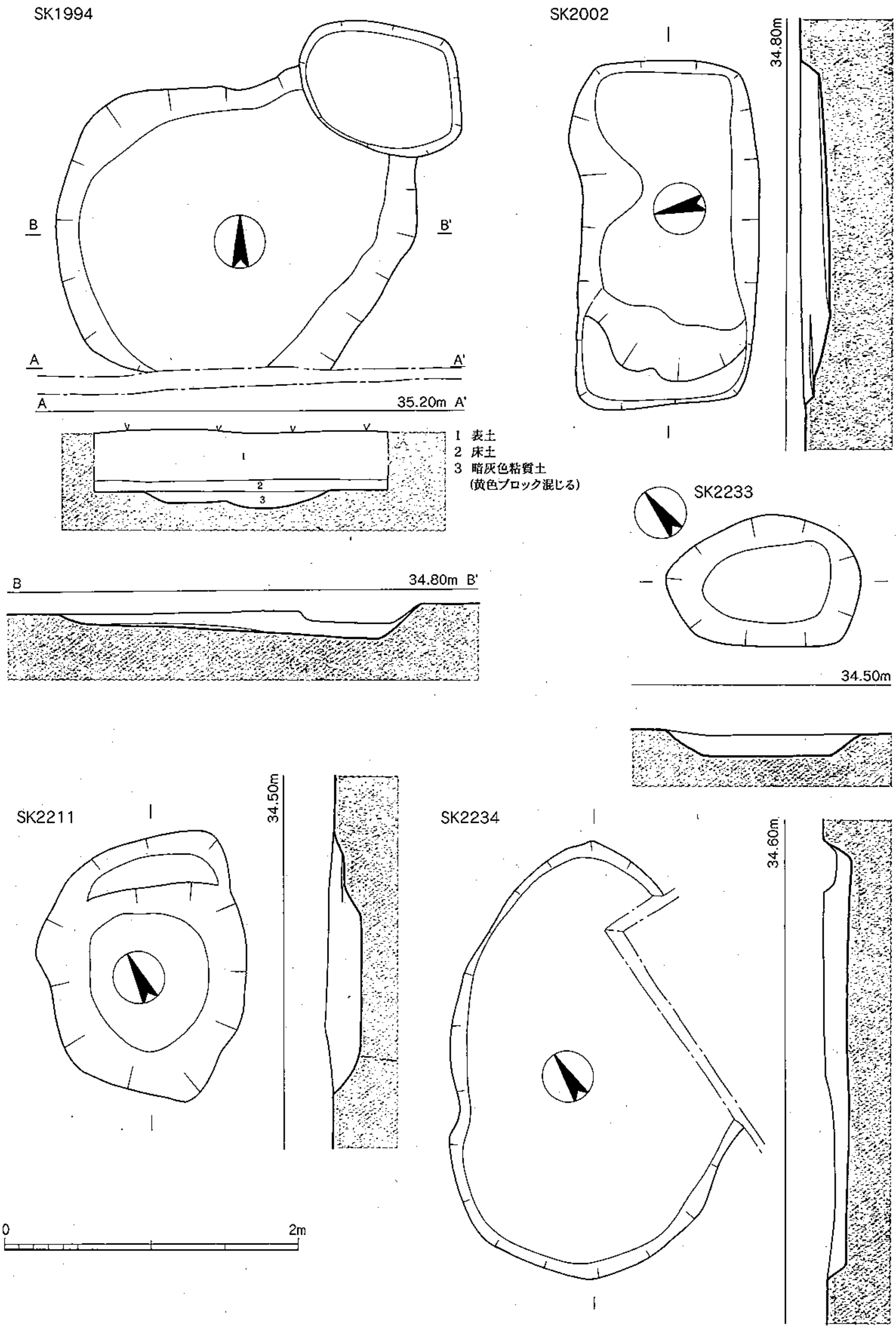


Fig.35　土坑実測図（1）(1/40)

ＳＫ2249（Fig.36）

80次調査区西側で検出された。径約1.0mの不整円形を呈し，深さは約0.1m。出土遺物には土師器坏が含まれる。

ＳＫ2251（Fig.36）

80次調査区北側で検出され，ＳＫ2252の西側に位置する。径約0.9mの不整円形を呈し，深さは約0.1m。出土遺物のうち，土師器坏２点と土師器甕１点を図示している。土師器甕の半

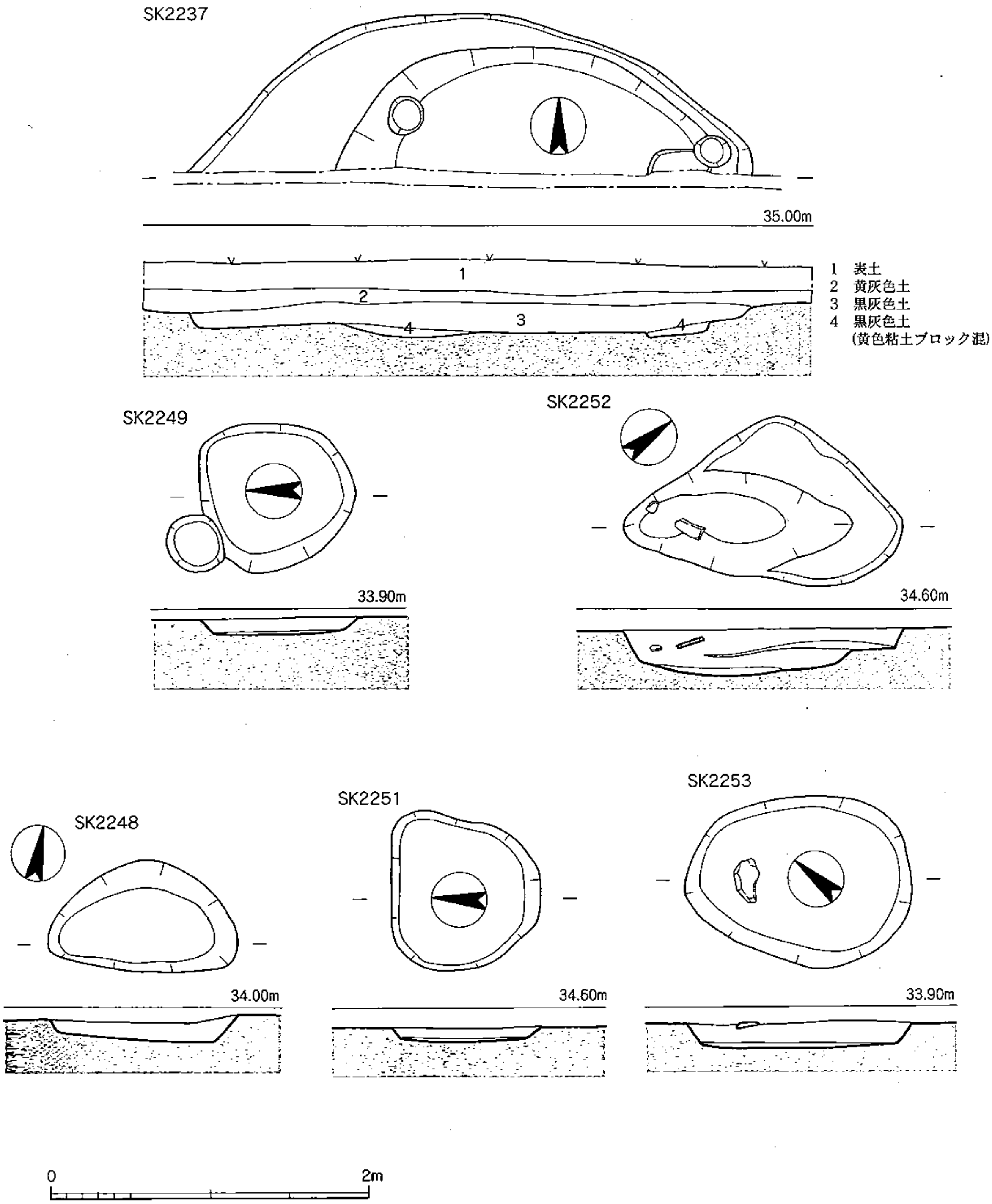


Fig.36　土坑実測図（2）（1/40）

分はＳＫ2252からも出土した。本遺構出土土器とＳＫ2252出土の土器が接合することから，８世紀後半以降にＳＫ2252と同時に埋没したと考えられる。

ＳＫ2252（Fig.36）

80次調査区北側で検出され，ＳＫ2251の東側に位置する。長軸約1.8m，短軸約1.0mの隅丸三角形を呈し，深さは約0.3m。北側のみが二段掘りとなる。ＳＫ2251出土土師器甕と同一個体の破片が出土し，８世紀後半以降にＳＫ2251と同時に埋没したと考えられる。

ＳＫ2253（Fig.36）

80次調査区西側で検出された。長軸約1.4m，短軸約1.1mの楕円形を呈し，深さは約0.2m。出土遺物には底部回転ヘラ切りの土師器皿や白磁碗が含まれ，12世紀以後の埋没である。

ＳＫ2256（Fig.37）

80次調査区中央で検出された。長軸約1.8m，短軸約1.5mの隅丸方形を呈し，深さは約0.4m。ＳＤ2257を一部切り込んで掘削されている。出土遺物には須恵器坏蓋破片が含まれるが，古い遺物が埋土に混入したものと考えられる。

ＳＫ2264（Fig.37）

80次調査区南西側で検出された。長軸約3.2m，短軸約1.4mの楕円形を呈し，深さは約0.2m。

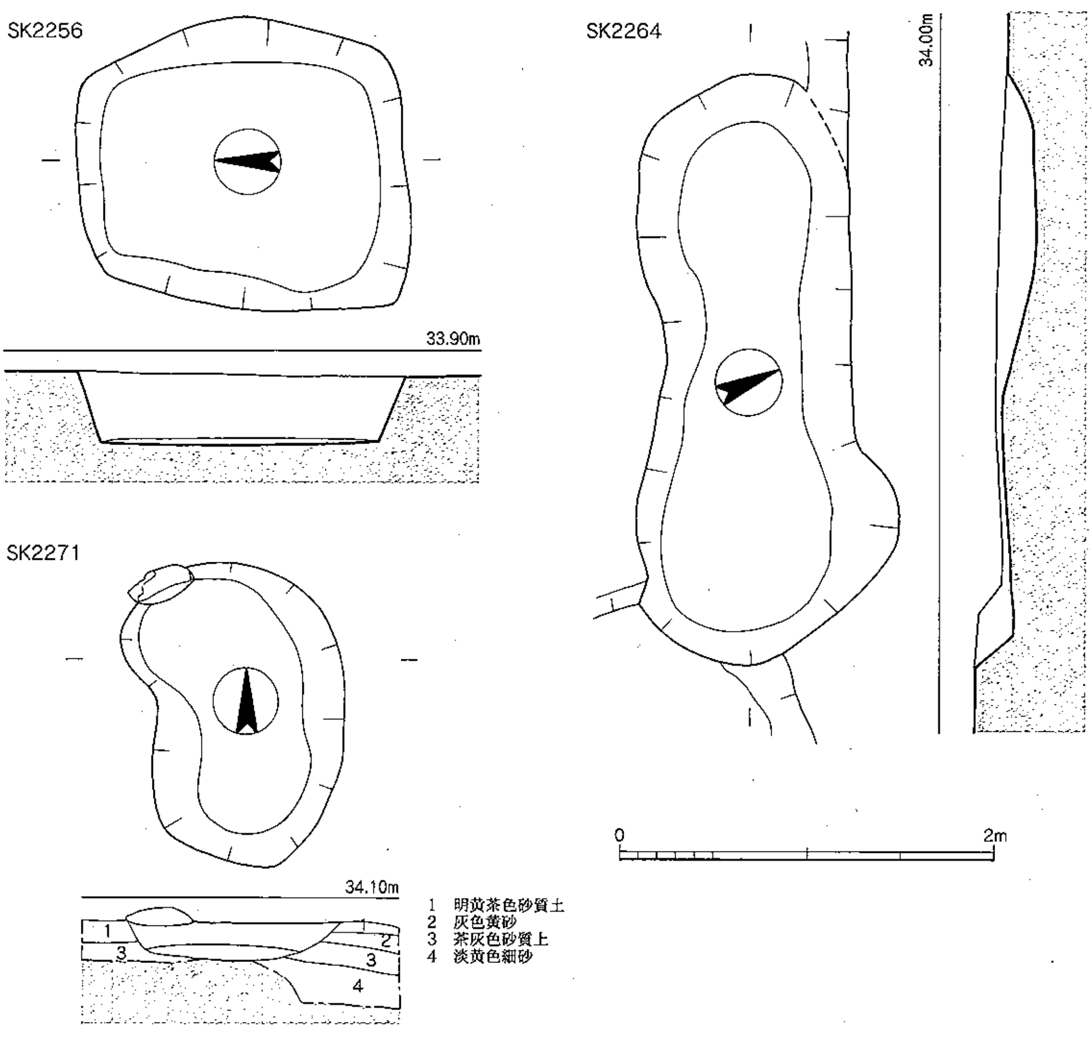


Fig.37　土坑実測図（3）（1/40）

ＳＸ2262・ＳＸ2280を切り込んで掘削されている。

ＳＫ2271 (Fig.37)

80次調査区南西端で検出された。長軸約1.6m，短軸約1.0mの不整円形を呈し，深さは約0.2m。

（6）その他の遺構

1）礫敷遺構

ＳＸ2275 (Fig.38，PL.30)

80-2次調査地中央部で検出した。約６ｍ四方の範囲に小指大から拳大の礫が多数敷き詰められた状況で検出された。特に北西部分は細かい礫が多く濃密に検出されている。礫層の厚さは厚いところでも0.25ｍ程であり，完形および多数の細片となった土師器や瓦も伴っている。特に赤褐色の胎土の土師器が多く，８世紀後半から９世紀初頭頃のものがほとんどである。また南端部には，東西方向に面を揃えて列状となっている箇所や，北東隅には0.5ｍの範囲で円形に配置されたものもあり，明らかに人為的に構成された遺構であることは言えるが，明確な性格までは想定できないため，とりあえず礫敷遺構として報告する。

2）瓦敷遺構

ＳＸ2280 (Fig.38，PL.21・30)

井戸ＳＥ2265から南東方向に延びる１条の溝とその西側に並行して検出された長さ約７ｍに及ぶ瓦敷遺構である。瓦列は丸・平瓦で構成されるが，平瓦が主体となっている。叩打痕も縄目が主体で，格子目が若干混じる程度である。概報段階では，瓦列の西側の落ち込みを池と捉え，瓦列を池の縁を飾る作業痕跡と推定していたが，埋土の状況から落ち込み自体が池であるか否かが不明確であり，それよりもむしろ東側に並行する溝との関係が深いと考えられる。瓦敷の通路とその側溝と捉えて考えておきたい。遺物の年代からでは９世紀代となるが，後世に古い瓦を転用して作られた可能性も考えておきたい。

ＳＸ2281

瓦敷遺構ＳＸ2280の南約５ｍで検出されたもので，約２ｍの範囲に瓦が散布する。平らに面をなしているため，人為的な痕跡と見られ，明確ではないがＳＸ2280の南側の延長部分とも考えられるが，付属する溝はない。掘立柱建物ＳＢ2235の柱穴に切られているようにも見え，そうであれば瓦の年代とも齟齬はないが，確証はなくそれよりも新しい可能性も考えられる。

3）粘土採掘遺構

ＳＸ4082 (Fig.39，PL.31)

153次調査地北西部で検出した。径1.40～1.45ｍの隅丸方形を呈し，深さは1.1ｍ。深さ0.7ｍ程の所に中段があって，そこから鋤を立てて採土したような不整形な平面プランで掘り込まれている。当該箇所は溝ＳＤ4660の埋土中にあたり，溝の埋土や地山に見られる黒色粘土や青灰色シルトを採掘した痕跡と考えられる。ＳＤ4660の最終埋没が13世紀以降と考えられるため，この採掘坑もまたそれ以降と考えられる。

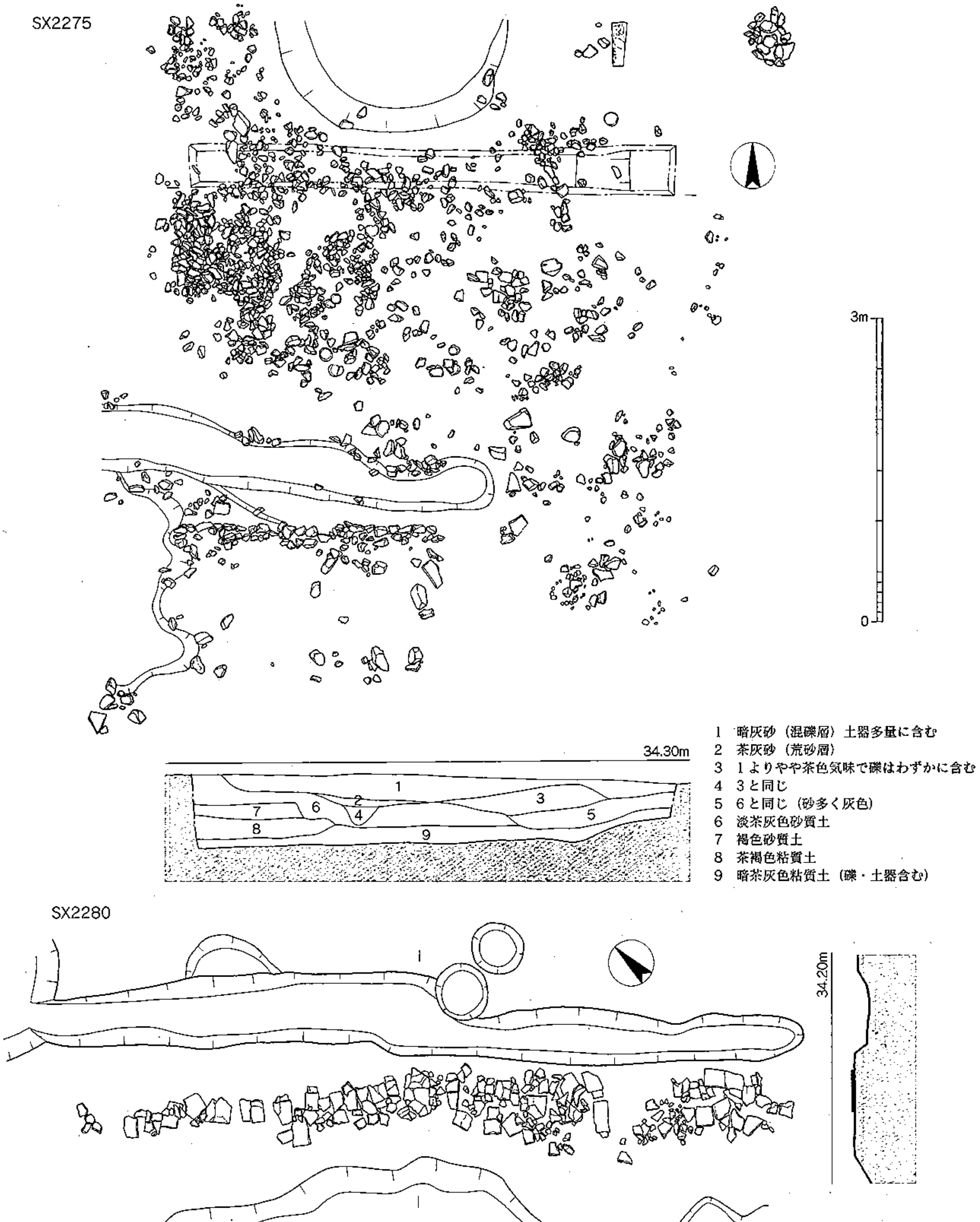


Fig.38　礫敷遺構ＳＸ2275，瓦敷遺構ＳＸ2280実測図（1/60）

SX4083 (Fig.39, PL.31)

粘土採掘遺構SX4082の北3.5mの箇所に位置する。径1.1m程で，SX4082同様，深さ1.0mの箇所に段があって不整形なプランで掘り込まれている。深さ0.6m以下は地山の黒色粘土層に当たり，この黒色粘土を採掘するために掘られたものと考えられる。溝SD2284との前後関係は不明であるが，掘立柱建物SB2245の柱穴を切っている。

SX4087 (Fig.39, PL.31)

153次調査地南西隅部に当たる箇所については，その後の168-2・200次調査の成果から南北溝SD4660の遺構内部に当たると考えられるが，153次調査において南北方向に断ち割りトレンチを入れて地山の状況を確認している。SD4660の埋土（概報では整地層と表現）の暗灰色粘質土を掘り下げたところ，下層に灰色砂と暗灰色粘土ブロックが混じった埋土が確認され，地山と思われる黒色粘土が方柱状に遺存し，さらにその下層に地山の青灰色シルト層が確認された。黒色粘土の残存形状から，粘土採掘遺構と考えられる。採掘を行った平面プラン

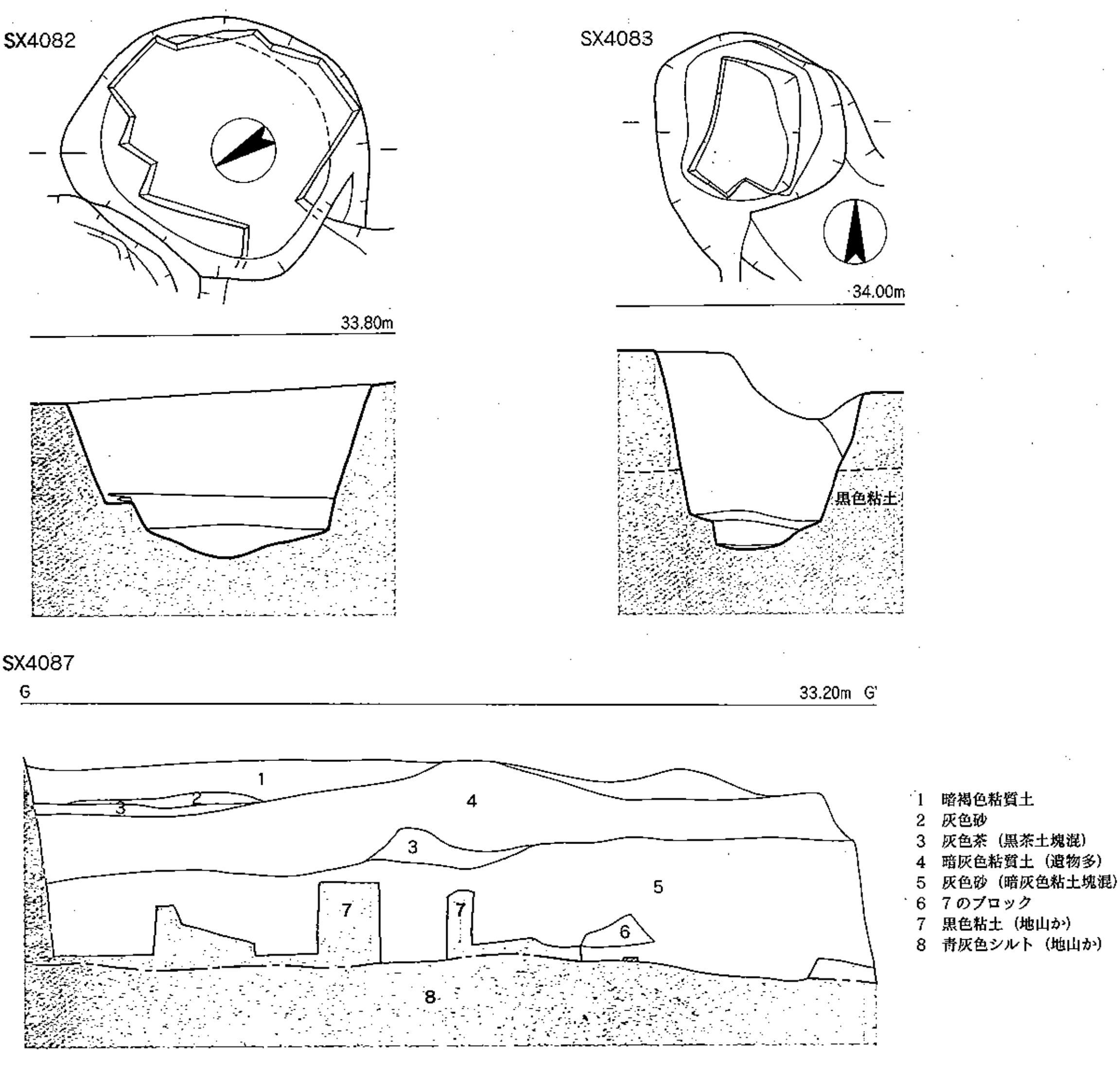


Fig.39 粘土採掘遺構SX 4082・4083・4087 実測図（1/40）

が判別しないために判然とはしないが，土層を見る限りではＳＤ4660が完全に埋没する前に採掘が行われていると判断される。

４）落ち込み・不整形土坑

ＳＸ1989・1993（Fig.40，PL.11）

75次調査地南西隅に広がる落ち込みで，東西約20ｍ，南北３～５ｍ分を検出した。114次調査地北端では落ち込みの南側の立ち上がりを検出したため，南北幅は約６ｍと推定される。落ち込みの東側の東西３ｍ×南北５ｍの範囲は西側よりも一段低くなっており，その部分をＳＸ1989，西側をＳＸ1993とした。深さはＳＸ1989が0.5ｍ，ＳＸ1993は0.3ｍである。埋土はＳＸ1989の深くなっている部分には灰色砂層が検出されたが，遺物は含まれていない。上層については淡黄灰色土で，ＳＸ1989と1993に違いはなく，同時に埋没したと考えられる。掘立柱建物ＳＢ1990と柵ＳＡ1999を切っているが，出土遺物の下限は９世紀前半に収まるようである。

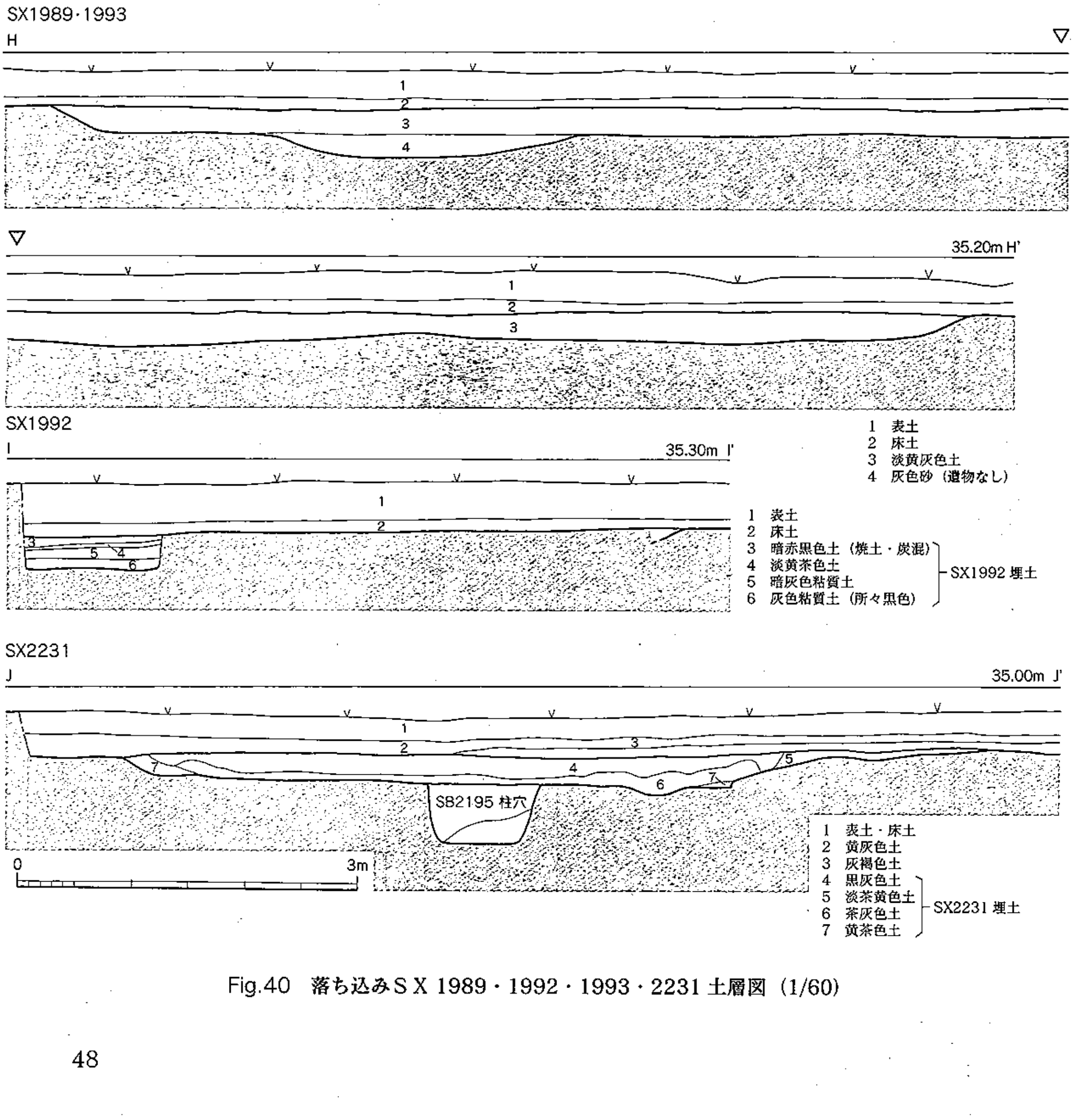


Fig.40　落ち込みＳＸ 1989・1992・1993・2231 土層図（1/60）

ＳＸ1991（Fig.41）

75次調査地中央部で検出された東西6.5m，南北2.6mの不整楕円形を呈する土坑状の遺構である。深さは0.2m程と浅く，掘立柱建物ＳＢ1995・2000を切っている。出土遺物から見ても埋没は11世紀後半以降の新しいものである。

ＳＸ1992（Fig.40）

75次調査地南東隅で検出された落ち込みで，トレンチで見る限りでの深さは0.3mで，暗赤黒色土や暗灰色粘質土等が堆積する。掘立柱建物ＳＢ1995・2001に切られているため，落ち込み状となっていた地形を整地により平坦化した上で，建物を建てたものと考えられる。出土遺物も政庁周辺官衙成立以前の遺物が出土している。

ＳＸ1997

75次調査地南西部で検出された落ち込みで，南北3m以上，東西1.5mの不整楕円形を呈する。南側は浅くなっており明瞭なプランは確認できない。深さ0.05～0.1m。出土遺物はない。

ＳＸ1998

75次調査地北西隅で検出された落ち込みで，深さ0.45m。他の遺構との切り合い関係や出土遺物がないために明確な時期は不明。

ＳＸ2203

80-1次調査地中央部で検出された不整形土坑で，長軸6.3m，短軸4.0m，深さ0.4mである。概報段階では井戸ＳＥ2255を切っているとされるが，出土遺物で見ると，ＳＸ2203が10世紀初頭と古く，井戸よりも古い可能性も考えられる。周辺の小型の建物と建物の間にうまい具合に位置しており，これらの掘立柱建物群と同時併存した可能性も考えられる。

ＳＸ2212・2219（Fig.41）

80-1次調査西側で検出された東西に並列する不整形土坑群で，径１m程の隅丸方形の土坑状遺構が４～５つほど並ぶ。便宜上，西側の一群をＳＸ2212，東側の一群をＳＸ2219としたが，明瞭な切り合い関係はなく，ほぼ一連のものと考えられる。深さは0.1～0.3mと浅い。掘立柱建物ＳＢ2200を切っているようである。出土遺物から埋没年代は11世紀後半以降と考えられ，廃棄土坑のような性格が考えられる。

ＳＸ2213（Fig.41）

不整形土坑ＳＸ2212の西２mに位置し，長軸2.0m，短軸1.4mで隅丸方形を呈する。深さ0.3mで，掘立柱建物ＳＢ2200を切る。埋没年代は11世紀後半以降で，ＳＸ2212・2219と同様の性格・年代が考えられる。

ＳＸ2214

80-1次調査地北東隅で検出した落ち込みで，幾つかの土坑が切り合っているようにも見える。深さ0.15m。出土遺物から埋没年代は10世紀後半以降と考えられる。

ＳＸ2217（Fig.41）

80-1次調査地西側で検出した不整形土坑で，長軸2.4m，短軸1.7m，深さ0.1m。溝ＳＤ2222と土坑ＳＫ2211に切られる。出土遺物はない。

ＳＸ2218

80-1次と80-2次調査地にまたがって検出した。長軸約3.3m，短軸約2.2m，深さ0.1m。

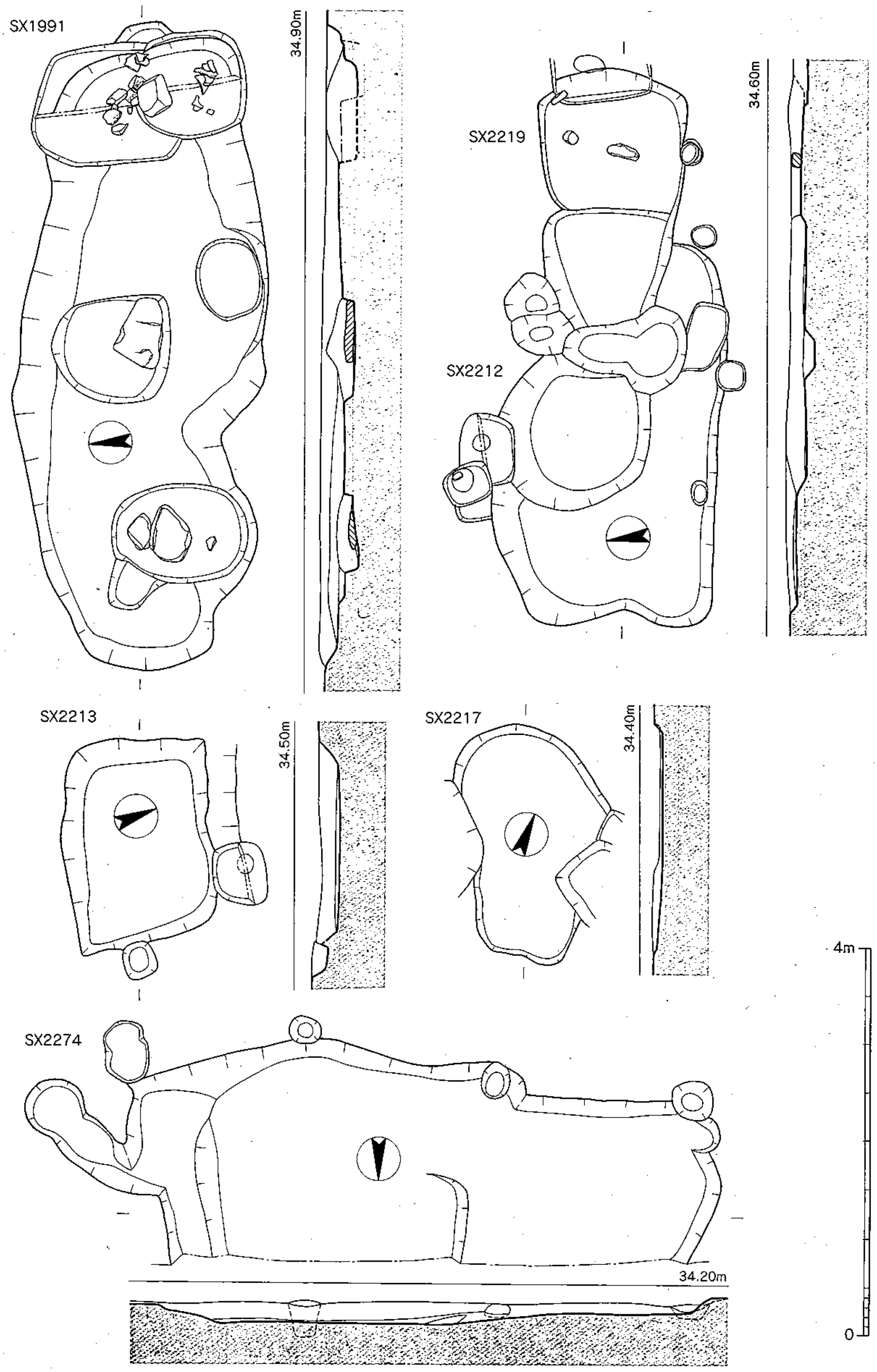


Fig.41　不整形土坑実測図（1）（1/60）

溝ＳＤ2222に切られる。掘立柱建物ＳＢ2225と重複するが，前後関係は不明。９世紀代の遺物が出土した。

ＳＸ2231（Fig.40）

80-1次と80-3次調査地にまたがって検出した。不整形な溝状の落ち込みで，検出した総延長は7.5m，深さ0.3mで，遺構内には黒灰色土や茶灰色土が堆積し，概報では黒色砂質土として報告されている。掘立柱建物ＳＢ2195がこの遺構の下層で検出されたため，後出する遺構であることが分かる。埋土からは11世紀代の大量の土師器が出土した。

ＳＸ2238

80-3次調査地中央部で検出した不整形の大型土坑状遺構で，約6m四方に広がる。深さは0.2m。掘立柱建物ＳＢ2220を切っており，それより後出する。年代を示す出土遺物はない。

ＳＸ2239

80-3次調査地北東隅で検出した落ち込みで，深さ0.45m。調査区外に延びていることから全体的な形状は不明。80-1次調査地へのつながりも不明。

ＳＸ2262

80-2次調査地の瓦敷遺構ＳＸ2280の南西側に広がる落ち込み。深さ0.35m。概報段階では，瓦敷遺構に伴う池状遺構と推測して報告しているが，今回は別の遺構として扱った。層位としては，西側の掘立柱建物ＳＢ2240を建てる際に整地され，出土遺物は整地層出土としている。出土遺物は８世紀中頃にあたり，ＳＢ2240に先行する８世紀中頃以降に埋没もしくは埋め立てられた遺構とするが，掘立柱建物ＳＢ2235よりも後出すると想定されるため，調査時の所見を素直に受け取れば，ＳＢ2235→ＳＸ2262・2280→ＳＢ2240（８世紀中頃以降）という推移が看て取れるが，ＳＢ2235のプラン自体が想定案である以上，要検討と言わざるを得ない。

ＳＸ2274（Fig.41，PL.26）

80-2次調査地北西隅で検出した隅丸長方形の土坑状の掘り込みで，検出部分では幅約6.0m，深さ0.4mである。最も新しい出土遺物で10世紀代が見られる。

ＳＸ2276（Fig.42，PL.26）

80-2次調査地ＳＢ2240の北側で検出した不整形土坑で，検出状況では径約3.0m，深さ0.4mの円形を呈するが，南側と西側で溝ＳＤ2277に切られているために詳細な形状は不明。９世紀前半の土師器が出土した。

ＳＸ2278（Fig.42，PL.26）

ＳＸ2276の西約６ｍ地点で検出した不整形土坑で，径約3.0m，深さ0.3～0.5m。幾つかの土坑が切り合っているようにも見える。９世紀代の土師器が出土した。

ＳＸ2282（Fig.42）

ＳＸ2278の北約５ｍ地点で検出した不整形土坑で，径約1.5mの円形を呈するが，南端の上層に溝ＳＤ2277が位置する関係上，重複部分の形状については不明瞭で，円形に収束するかは判然としない。深さ0.4mで，10世紀頃と思われる土師器椀が出土した。

ＳＸ2283

80-2次調査地北西隅で検出した不整形の溝状遺構で，西側を溝ＳＤ2284に切られる。深さ0.15mで，検出部分で４ｍ分検出したが，全体的な形状は不明。９世紀後半頃の土器が出土した。

ＳＸ3328（Fig.42）

114次調査地東端で検出した土坑状遺構で，径約２m，深さは0.3m。８世紀後半頃～９世紀前半の須恵器・土師器が出土した。

ＳＸ3329（Fig.42）

ＳＸ3328の南側に隣接する土坑状遺構で，径約１m，深さは0.3m。８世紀後半代の土器が出土しており，ＳＸ3328とはさほど変わらない時期と考えられる。

ＳＸ3331

114次調査地中央部で検出した不整形の落ち込みの遺構で，深さ0.1m。採土関係の掘り込みとも考えられるが，粘土が採掘できるような土質でもないため，不明と言わざるを得ない。出土遺物は９世紀頃の土師器が見られる。

ＳＸ3332

114次調査地北東隅で検出した落ち込みで，深さ0.3mと浅く，平面プランは，大半が調査区外にあるため不明。埋土は周辺の遺構面上に堆積するものと同じ灰色砂質土で，出土遺物は８世紀後半を中心とする土器である。

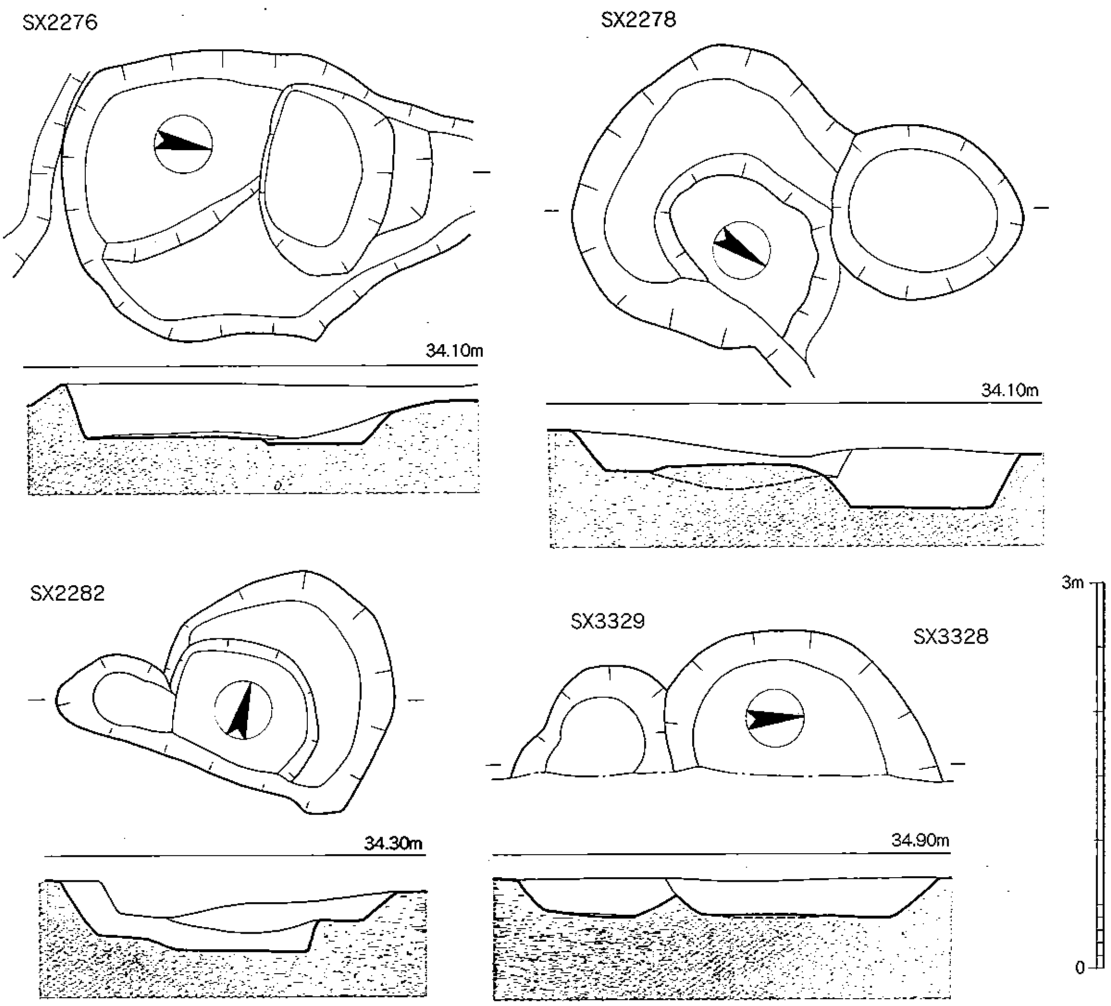


Fig.42　不整形土坑実測図（2）（1/60）

SX4084

153次調査地北西隅で検出した溝状の遺構で，幅1.5m，深さ0.15mで調査区外北側へ延びる。8世紀代の須恵器が出土しているが，溝SD4660の上層遺構にあたるため，埋没年代はさらに下るものと思われる。

SX4086

153次調査地南端で検出した段落ちで，区画整理前の地形を反映していることや，竹や柴を用いた暗渠が見られたため，近代以降に掘削されたものと考えられる。

第Ⅳ章　出土遺物

（1）瓦塼類

1）軒先瓦類

a.軒丸瓦（Fig.43，Tab. 3，PL.32）

大宰府史跡において，軒丸瓦（古瓦）の型式分類は，現在60型式93種類に分類されているが（文献は凡例参照）。日吉地区では，その内15型式19種類57点が出土している。建物がほとんど見られない政庁前面地区ですら196点出土していることを考えれば，点数はきわめて少ないといえるが，種類は多彩である。また，小片であるが，新しい巴紋と考えられる軒丸瓦１点も確認されたため，そちらも併せて報告する。以下，型式ごとに説明する。

０３２型式：75次で１点，80次で４点出土しており，当地区の中では8.77%と高めの出土率である。紋様構成は，中房に１＋４個の蓮子を配し，内区に８弁の単弁を巡らし，外区はやや高めの素紋縁となり，粘土紐を手ずくねで巻いて作られる。大野城主城原で出土している他は，政庁26次で１点，月山東地区で出土しているのみであり，日吉地区の特徴的な一群といえよう。実際に80次で出土している大半は残存状況も良いものが多い（Fig.43- １～３）。

０３３型式：80次で１点出土する。032型式に類似する紋様構成だが，中房の蓮子は１＋８個である（Fig.43- ４）。他の出土地点も，大野城主城原と月山東地区であり，紋様・出土地点共に032型式と類似する。いわゆる百済系の軒丸瓦といえよう。

１０８型式：79次で３点，80次で１点出土する。紋様構成は中房に１＋６個の蓮子を配し，内区には不定型な短い放射状の単弁を21個巡らす。外区内縁には24個の珠紋を巡らす。外区外縁は１段高い素紋となる。瓦当裏面は横方向の強いナデで仕上げている。

１３２型式：80次で小片が１点出土する。８弁の重弁となる単弁を巡らし，外区には32個の珠紋を巡らす。政庁・周辺官衙・学校院・観世音寺の他，鴻臚館でも出土例が見られる。

１３５型式：この型式はAとBの２種類確認されているが，Aが80次で１点出土する。10弁の尖った重弁となる単弁を配し，外区は約26個の珠紋が巡る。瓦当裏面はユビナデとオサエで調整する。政庁と月山東地区で出土例が見られる。

１７０型式：紋様構成によりA～Cの３種類に細分され，Bは紋様の消滅等により，更に４種類に細分される。Bの紋様構成は，中房に１＋５個の蓮子を配し，内区には尖った間弁をもつ単弁14個を配し，外区内縁には24個の珠紋，外縁は素紋を呈する。当地区では，間弁が消滅し，笵の器壁が荒々しくなりつつあるＢｃ型式が，80次から２点出土する。

２０８型式：笵の種類と笵傷の進行具合により，５種類に細分される。当地区ではBの小破片が４点と，内区の花弁が丸弁連弁になり，内区と外区の間の界線が内区の花弁に沿って湾曲するCaが２点出土しているのみである。

２０９型式：中房に４個の蓮子を配し，内区は隣り合う複弁表現で，外区に18個の珠紋を配する。２点出土するが，うち１点は32次と80次から出土したものが接合した（Fig.43- ５）。政庁の他では，政庁後背地区でしか確認されていなかったもので，政庁前面側では初の確認事例となる。

２２３型式：いわゆる鴻臚館Ⅰ式と分類されるものの一つで，軒平瓦635型式と共に大宰府政

Tab. 3　軒丸瓦型式分類表（1）

型式番号		直径	内区					外区広	外区					全長	外縁形態
			中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数		内縁		外縁				
									幅	紋様	幅	高	紋様		
032		154	30	1+4	94	25	T8	30	30	–	–	–	–	–	直立縁
033		170	48	1+8	132	35	T8	25	–	–	–	30	–	–	直立縁
108		162	52	1+6	92	8	T21	35	21	S24	14	18	–	–	傾斜縁
132		162	54	1+4	136	32	T8	13	13	S32	–	–	–	–	–
135A		164	47	1+4	126	24	T10	19	19	S26.2	–	–	–	–	–
170Bc		180	60	1+5	146	26	T14	17	11	S24	6	3	–	–	直立縁
208Ba		165	58	1+4	123	30	F10	21	14	S17	7	5	–	–	–
208Ca		152	64	1+4	112	38	F8	20	16	S13	4	1	–	–	–
209		151	49	4	113	32	F8	19	16	S18	3	4	–	–	–
223a		163	51	1+4+8	111	28	F8	26	13	S24	13	5	–	–	傾斜縁
223b		170	58	1+4+8	116	30	F8	27	15	S24	12	4	–	–	傾斜縁
224b		168	57	1+4+8	112	–	F8	28	15	S32	13	–	–	–	傾斜縁

Tab. 3　軒丸瓦型式分類表（2）

型式番号		直径	内区				弁数	外区広	外区					全長	外縁形態
			中房径	蓮子数	内区径	弁幅			内縁 幅	内縁 紋様	外縁 幅	外縁 高	外縁 紋様		
275A		176	59	1+5+10	123	27	F8	27	14	S31	13	13	RV31	−	傾斜縁
275B		187	65	1+5+9	127	37	F8	30	14	S32	16	11	RV32	−	傾斜縁
276		186	68	1+4+8	130	28	F8	28	13	S34	15	16	RV28	−	傾斜縁
285B		138	53	1+4+8	94	22	F8	22	9	S32	13	−	RV32	−	平坦縁
290Aa		180	67	1+6+12	122	36	F8	29	14	S38	15	21	RV30	−	傾斜縁
290B		191	72	1+6+10	121	32	F8	35	13	S36	22	17	RV32	−	傾斜縁
324A		168	64	1+8	132	27	F11	18	11	S22	7	2	−	−	−

庁Ⅱ期の主要瓦として知られている。当地区では75次から１点，80次から６点，計７点で，出土率8.77%ではあるが，出土点数５点は他の周辺地区の中では極端に低いと見られ，セットとなる軒平瓦635型式に至っては，１点すら確認できず，その少なさが目立つ。

２２４型式：223型式と同系統の型式の一つで，基本的な紋様構成は223と同じであるが，外区内縁の珠紋が32個と多い。出土点数は３点で多いとはいえない。瓦当紋様が不明瞭な224bの内の１点は，32次出土資料と80次出土資料が接合したものである。瓦当裏面はナデにより調整する。

政庁周辺での老司Ⅰ式の初の出土例

２７５型式：いわゆる老司式軒丸瓦の瓦当で，Aは老司Ⅰ式軒丸瓦で，観世音寺の創建瓦とされるもので，これまで政庁及び周辺官衙では全く見つかっていなかったものだが，今回再確認した所，75次で１点確認された（Fig.43- 6）。拓本では中房の蓮子数は不明瞭でBとの差異がよく分からないが，外区の珠紋と凸鋸歯紋との位置関係が互い違いになっており（Bは互い違いではなく並列する。），Aと見てまず間違いない。さらに笵傷が鋸歯紋の所に１箇所見られ，現状で275Aの笵傷の進行段階は３段階確認されているが（杉原2007），その中では最も古い

段階に位置付けられる。出土層位が床土であるため，後世に観世音寺から移動した可能性も十分考えられる。そして，Bはいわゆる老司Ⅱ式軒丸瓦と呼ばれるもので，中房に１＋５＋９個の蓮子を巡らし，内区との間に界線を配する。内区は８弁の複弁を巡らす。外区内縁には32個の珠紋を配し，外区外縁は傾斜縁に32個の凸鋸歯紋を巡らしている。出土点数は８点で，全体の14.04％を占め，当地区において290型式に次いで出土率の高い軒丸瓦である。もっとも残りの良い153次出土のもの（Fig.43- 7）には，275B通有の瓦当側面と裏面にハケメ調整が見られる。

２７６型式：いわゆる老司式軒丸瓦の系譜をひく瓦当で、中房に１＋４＋８個の蓮子を巡らし，内区との間に界線を配する。内区は突出表現を持つ８弁の複弁を巡らす。外区内縁には34個の珠紋を配し，外区外縁は傾斜縁に28個の凸鋸歯紋を巡らしている。32次で１点出土した。

２８５型式：笵の種類によりAとやや小型のBの２種類があり，当地区では小型のBが２点出土している。基本的な紋様構成は275B型式に近いが，外縁外区が平坦縁となる所に特徴がある。瓦当裏面は横方向にナデで調整する。

Tab. ４　軒丸瓦出土点数表

型式種	32次	75次	79次	80次	153次	点数	%	
032		1 9.09%		4 12.90%		5	8.77%	
033				1 3.23%		1	1.75%	
108			3 60.00%	1 3.23%		4	7.02%	
132				1 3.23%		1	1.75%	
135A				1 3.23%		1	1.75%	
170Bc				2 6.45%		2	3.51%	
208Ba		1 9.09%		3 9.68%		4	7.02%	6 10.53%
208Ca	1 16.67%			1 3.23%		2	3.51%	
209	0.5 8.33%	1 9.09%		0.5 1.61%		2	3.51%	
223a		1 9.09%		4 12.90%		5	8.77%	7 12.28%
223b				2 6.45%		2	3.51%	
224		1 9.09%				1	1.75%	3 5.26%
224b	0.5 8.33%		1 20.00%	0.5 1.61%		2	3.51%	
275A		1 9.09%				1	1.75%	9 15.79%
275B	2 33.33%	3 27.27%		1 3.23%	2 50.00%	8	14.04%	
276	1 16.67%					1	1.75%	
285B	1 16.67%		1 20.00%			2	3.51%	
290				1 3.23%		1	1.75%	12 21.05%
290Aa		1 9.09%		2 6.45%	1 25.00%	4	7.02%	
290B		1 9.09%		5 16.13%	1 25.00%	7	12.28%	
324A				1 3.23%		1	1.75%	
合計	6	11	5	31	4	57		
百分比	10.53%	19.30%	8.77%	54.38%	7.02%	100.00%		

２９０型式：笵の種類からAとBの２種類があり，Aは笵の摩滅具合によりAaとAbに分かれており，当地区ではAaとBが出土している。Aの紋様構成は，中房に１＋６＋12個の蓮子を配し，内区には８弁の複弁と連続する間弁，外区内縁には38個の珠紋，外区外縁は角度のきつい傾斜縁で，凸鋸歯紋が30個見られる（Fig.43- 8）。Bも若干の違いはあるが，ほぼ同じような紋様構成を呈し，内区複弁がやや短くなるのが特徴的である。この型式は合計すると12点出土しており（Fig.43-9～11），当地区全体の出土率の21.05％に及び，最も出土していることを示し，主要な型式であったと考えられる。瓦当裏面の調整は基本的に縦方向のナデであり，また，瓦当裏面下半には，半円状の凸帯を設けている。

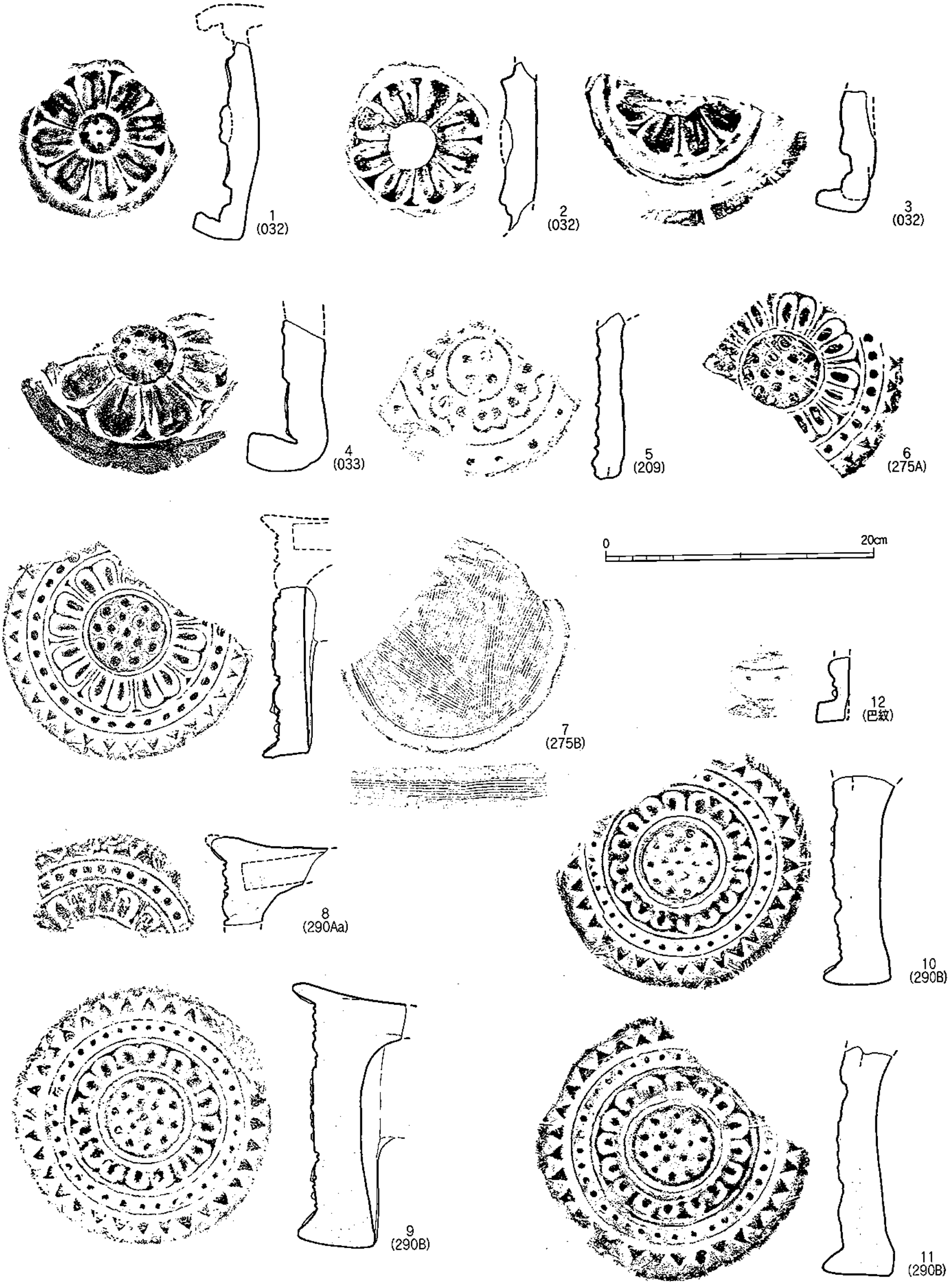


Fig.43　軒丸瓦拓影・実測図（1/4）

324型式：AとBの２種類に分かれるが，当地区ではAが80次から小片が１点出土する。特徴的な凹弁となる複弁を11弁もち，外区は22個の珠紋を巡らす。

巴紋型式の瓦：80次床土で出土したもので，外区とわずかに内区を残す破片である（Fig.43-12）。内区にはおそらく右回りと見られる巴紋を配し，外区内縁には珠紋２個が残存し，外縁に段を持たせて突出させて平縁としている。小片であるため，型式番号化は現状では不可能である。灰白色の胎土の表面を黒色に燻しており中世瓦と考えられる。政庁前面には，観世音寺子院の一つ極楽寺が推定されており，関連する遺物の可能性も考えられるが，確証はない。

中世瓦
極楽寺跡に関連するか

b.軒平瓦（Fig.44，Tab.５，PL.32）

大宰府史跡において，軒平瓦（古瓦）の型式分類は，現在63型式102種類に分類されている（文献は凡例参照）。日吉地区では，その内７型式９種類30点が出土しているに過ぎない。さらにその中でも，老司II式と呼ばれる560Ｂ型式が20点と，全体の２／３以上の出土率を示し，圧倒的な点数にのぼるのが特徴的である。以下，型式ごとに説明する。

560型式：上外区に珠紋，下外区と脇区に凸鋸歯紋，内区に右から左へ流れる偏行唐草紋を配するいわゆる「老司式」軒平瓦である。当型式は６型式９種類に分類されるが，本調査地で出土するのはII式とされるＢ型式でのみである。B型式は笵傷の進行によりa～cの３つに細分されているが，当地区では，Baが３点，BaかBbが４点，BbかBcが２点，Bcが１点，段階不明が10点あった。また，顎の形態は段顎であるが，段顎の断面形状について，大きく２種類に分かれることは政庁前面地区の報告段階等で指摘されている。すなわち長い段顎形状のもの（a類　Fig.44-１）と，短い段顎形状のもの（ｂ類　Fig.44-２）の２種類に分けられる。a類は顎の長さは7.2～9.0cm，ｂ類の顎の長さは3.6～5.5cmで，明らかに分かれていることがわかる。今回出土した20点の内，顎の形態が判明したもの17点の内訳は，a類９点，b類８点でほぼ同数であった。今回の検討では，この形態分類は，小片が多く笵傷の進行との関係は不明であったが，政庁前面地区の報告時の検討では無関係であり，Ba～c型式の全てにa・b類両方の形態が見られるということである。

Tab.６　軒平瓦出土点数表

型式種	32次	75次	80次	153次	点数	%	
560		1 25.00%			1	3.33%	20 66.67%
560B		1 25.00%	6 28.57%	2 100.00%	9	30.00%	
560Ba		1 25.00%	2 9.52%		3	10.00%	
560Ba-Bb	1 33.33%	1 25.00%	2 9.52%		4	13.33%	
560Bb-Bc			2 9.52%		2	6.67%	
560Bc			1 4.76%		1	3.33%	
575A			2 9.52%		2	6.67%	
582			1 4.76%		1	3.33%	
642B			2 9.52%		2	6.67%	
657b			1 4.76%		1	3.33%	
673a			1 4.76%		1	3.33%	
688			1 4.76%		1	3.33%	3 10.00%
688Aa	1 33.33%				1	3.33%	
688C	1 33.33%				1	3.33%	
合計	3	4	21	2	30		
百分比	10.00%	13.33%	70.00%	6.67%	100.00%		

なお，560B型式の本調査地からの出土総数は20点を数え，出土率66.67%と圧倒的に他型式を凌ぎ，政庁前面地区の出土率と類似する傾向にある。

560Ｂは出土率が高い

575型式：左へ流れる偏行唐草紋で，この型式はAとBに細分されるが，当地区で出土しているのは，Aのみで，80次で２点出土するに過ぎない。しかし，うち１点はほぼ完形資料で（Fig.44-３），紋様構成が非常によく

Tab. 5　軒平瓦型式分類表

型式番号		瓦当面														
		上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁の高さ	全長	顎形態
560Ba		－	－	336	59	26	HK	17	S25	16	△RV31	右 17 左 15	RV 左右 4	1	375	段顎
560Bc		－	－	－	52	27	HK	12	S25	13	△RV31	左 11	RV 左右 4	1	－	段顎
575A		252	49	264	55	28	HK	14	S14	13	RV20	－	右 RV2 左 RV3	1	－	曲線顎状
582		－	－	－	42	19	HK	11	S34	12	RV20	－	－	2	－	段顎
601A		－	－	－	64	32	HK	18	○ S40 ?	14	S	右 16	S	6	－	曲線顎状
642B		253	41	243	52	26	KK	11	○ S39	15	S	右 10 左 19	S	3	－	段顎
657b		－	－	－	54	27	KK	14	☆ S17 以上	13	RV21	－	S	1	－	段顎
673a		240	66	269	46	23	KK	14	GS15	9	RV27	-	-	2	－	段顎
688Aa		－	44	261	51	25	KK	20	S21	6	S20	－	－	2	344	段顎
688C		－	－	－	48	30	KK	15	S11 以上	3	S16	左 20	左 S3 右 S2 ?	3	－	段顎

☆：上区と脇区の合計　　△：下外区と脇区の合計　　○：上外区と下外区と脇区の合計

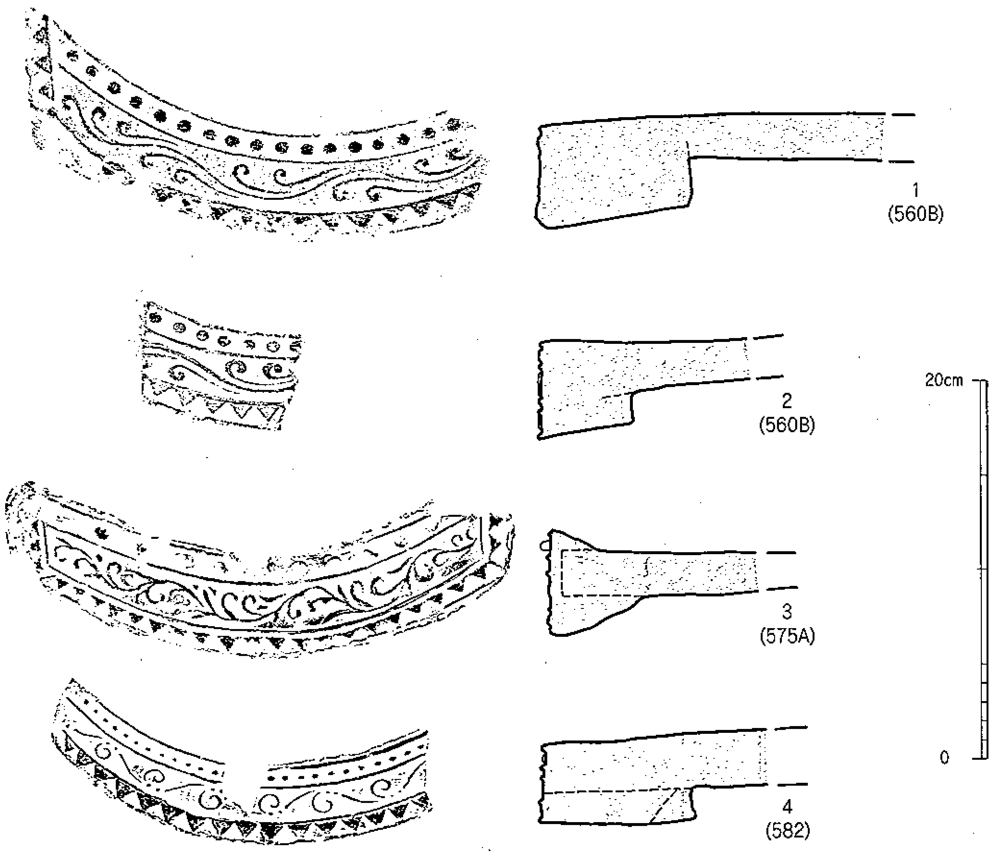


Fig.44　軒平瓦拓影・実測図（1/4）

分かる。唐草紋は7転させ，上外区に14個の珠紋，下外区と左右の脇区に凸鋸歯紋を配する。顎は曲線顎で，凸面には大きめの斜格子紋の叩打痕と，瓦当接合部に布目痕跡が確認できる。

582型式：紋様構成は内区には左向きの偏行唐草紋を配し，上外区には34個の珠紋，下外区には20個の凸鋸歯紋を配する。唐草紋は子葉へ分岐する箇所ごとに２個の珠紋を配している。顎は段顎で，凸面には顎部にも平瓦部分にも縄目の叩打痕を残す，当地区では主要な型式ではないが，80次から出土した１点は完形に近い（Fig.44- 4）。

642型式：ＡとＢの２種類に細分されるが，当地区ではＢが２点出土する。均整唐草紋を基調とする紋様構成であるが，出土した２点とも下外区の珠紋しか見られない小片である。顎の型式は段顎である。

657型式：均整唐草紋を持つものの一つで，笵傷の有無と瓦笵の彫り直しによりaとbの２種類に分類される。80次から１点出土している。顎は段顎で，横方向にきれいにナデで調整する。

673型式：均整唐草紋を基調とする紋様構成で，aとa’に分類されるが，当地区では政庁で類例の見られるaの小片が１点出土している。

688型式：中心飾りのない均整唐草紋で，Ａ～Ｃの３型式に分類されている。当地区ではAaが１点，Cが１点，種類不明が１点出土している。いずれも小片で詳細不明だが，通常，凸面には縄目の叩打痕が残り，顎の形態は段顎である。

2）道具瓦類

今回の報告分の出土瓦の内，道具瓦は鬼瓦が１点，塼が数点，熨斗瓦が２点確認されたに過

ぎず，周辺地区と比べても非常に少ない。

a.鬼瓦（Fig.45，PL.33）

1は大宰府式鬼瓦ⅢＢ式の可能性のある上唇左側の破片である。中央部にある立体的な鼻や大きく張った頬の部分を欠損し，大きく開けた口に４本弱の鋭い歯のみを部分的に覗かせている。棟を跨ぐ両脚の間はヘラ削りで調整されている。

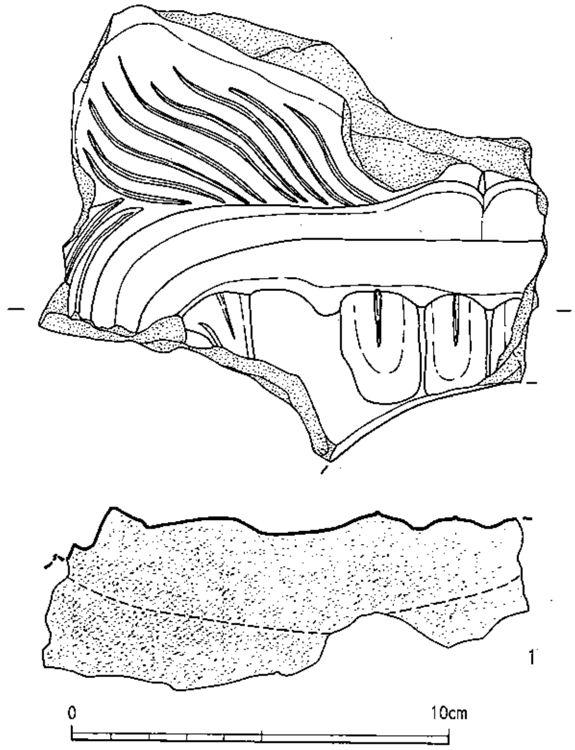


Fig.45　鬼瓦実測図（1/2）

b.塼　(Fig.46，PL.33)

２は表面に隅頂部を基点とした円弧を棒状工具で施文する。比較的整った円弧であり，何らかの工具を用いて描かれた可能性が高い。円弧が途切れる面はいずれもヘラ削りが確認でき，本来は完結した円であったものが，円の中心を基点に四分割された可能性がある。３は一面のみに，軸を揃えた細い沈線が幾重にも施文される。ヘラ削りの痕跡ではなく，いずれも工具を用いて施文されている。また，施文はないが，同様の大きさの無文塼の破片は他に７点出土している。

c.熨斗瓦（Fig.46，PL.33）

４は三分割熨斗瓦の破片で，焼成前に分割されている。分割面はケズリ調整で丁寧に面を整えている。５も三分割熨斗瓦の破片で，同じく焼成前に分割されている。凸面は格子目の叩きで，中に「平井瓦」の陰刻がある（901B型式）。文字部分が意図的に中央にくるように分割している。

３）文字瓦

丸・平瓦の凸面に木製長手叩打具で押捺することで格子目・斜格子目の中に文字が刻印される叩打痕文字瓦は，大宰府史跡では，現在23型式82種類が報告されている（凡例参照）。

4点の新型式

日吉地区の調査では，今回新たに４種類の文字瓦が確認されたため，その内，判読が出来た１点については，型式番号を振り（906G型式），残りについては，判読等が困難で，現段階では型式番号を付与すべきではないと考えたため，新種１～３として報告する。それらも含め，当地区では，14型式44種類226点が出土している（Fig.47・48，Tab. 7）。これは軒先瓦に比べ非常に多い数と考えられる。901・902・903型式の３型式で全体の７割を越え，特に901型式だけで半数を越えている。以下，型式ごとに説明する。

文字瓦の多量出土

９０１型式：「平井」「平井瓦」「平井瓦屋」銘の文字瓦で，19種類が確認されているが，当地区ではＡ～Ｅ・Fa・Ga・Ha～Hc・Ia・Ib・Ｊ・Ｌ・Ｍの15種類が出土しており，122点出土

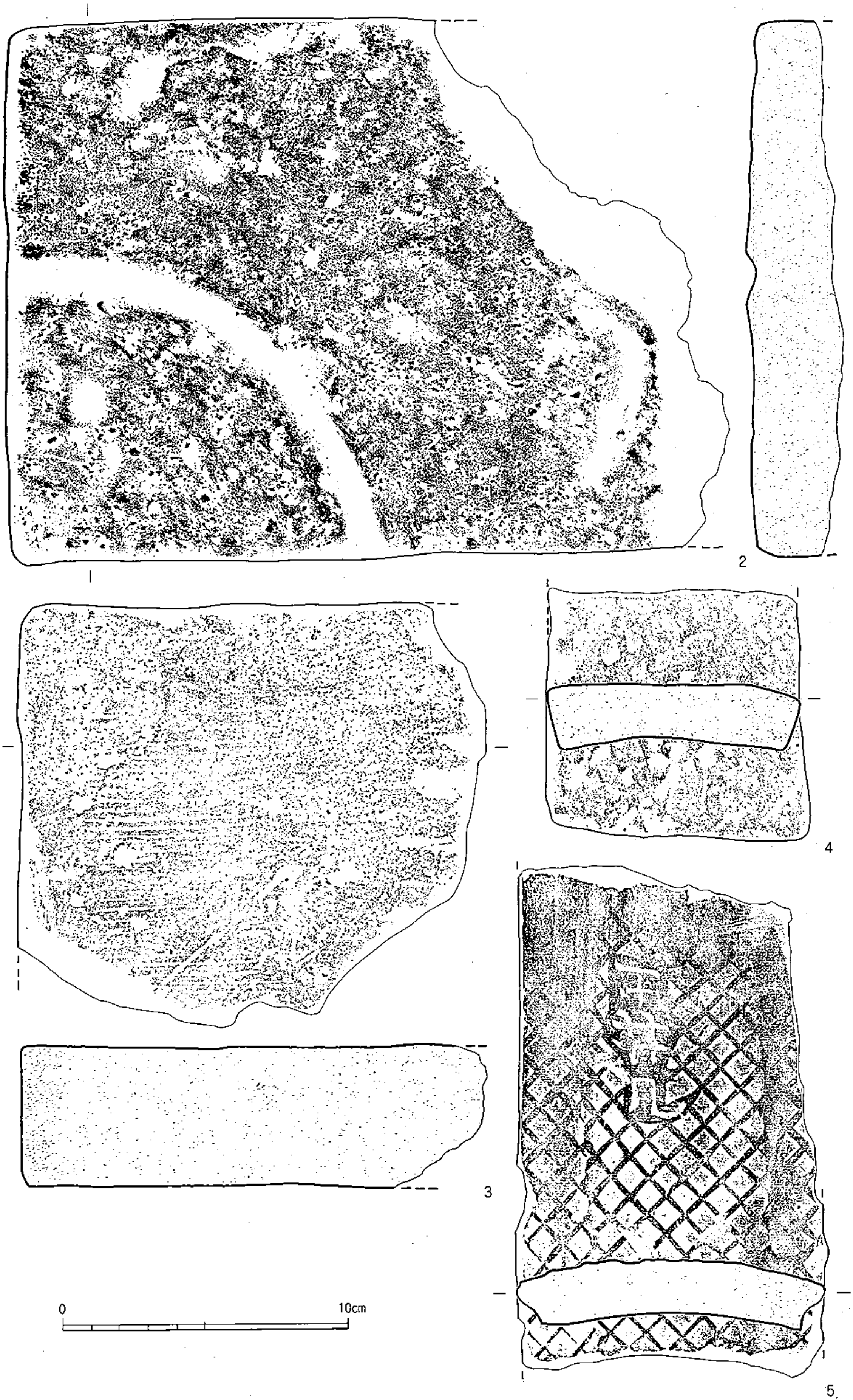


Fig.46　塼・熨斗瓦拓影・実測図（1/2）

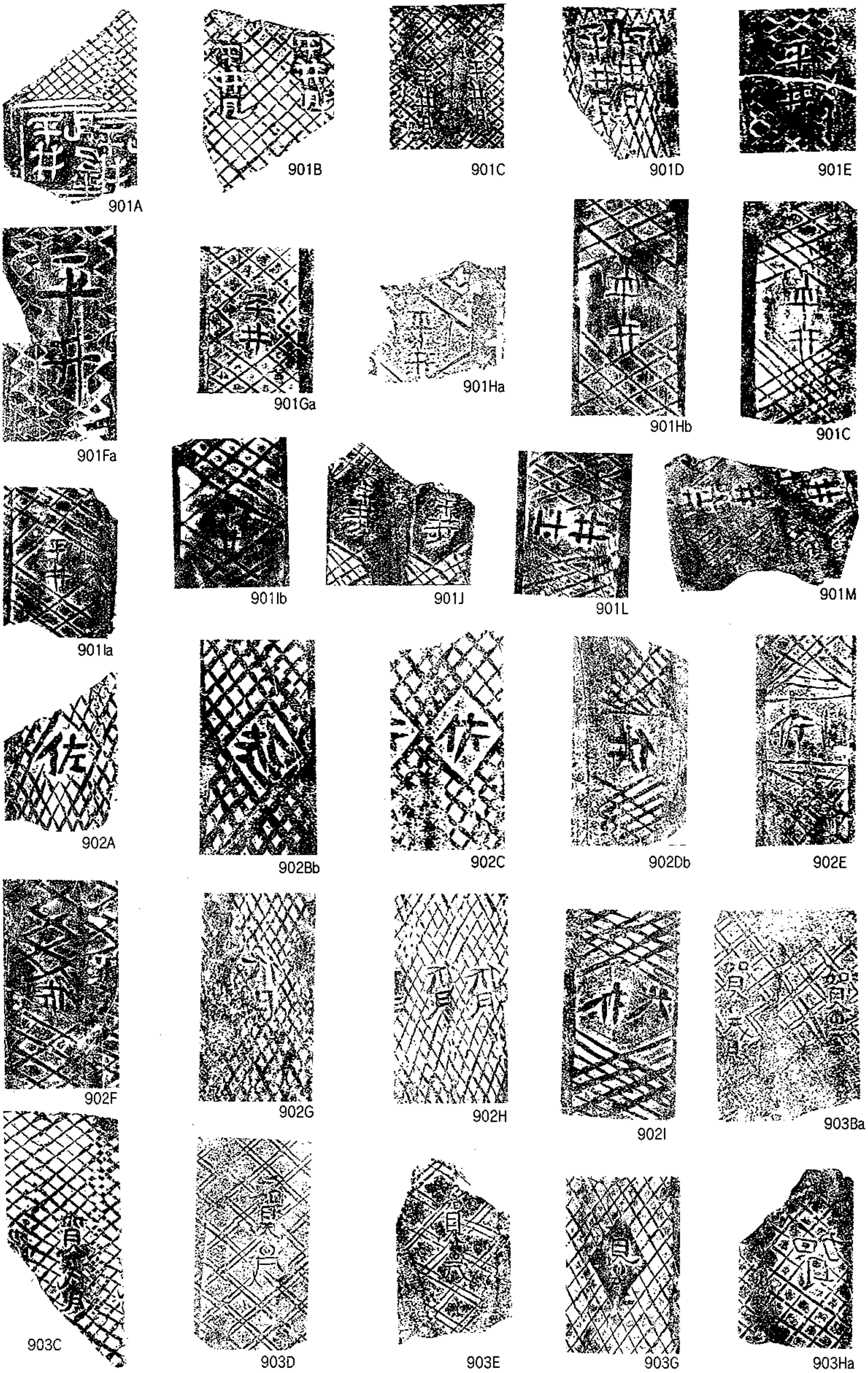


Fig.47　出土文字瓦型式拓影（Ⅰ）（1/4）

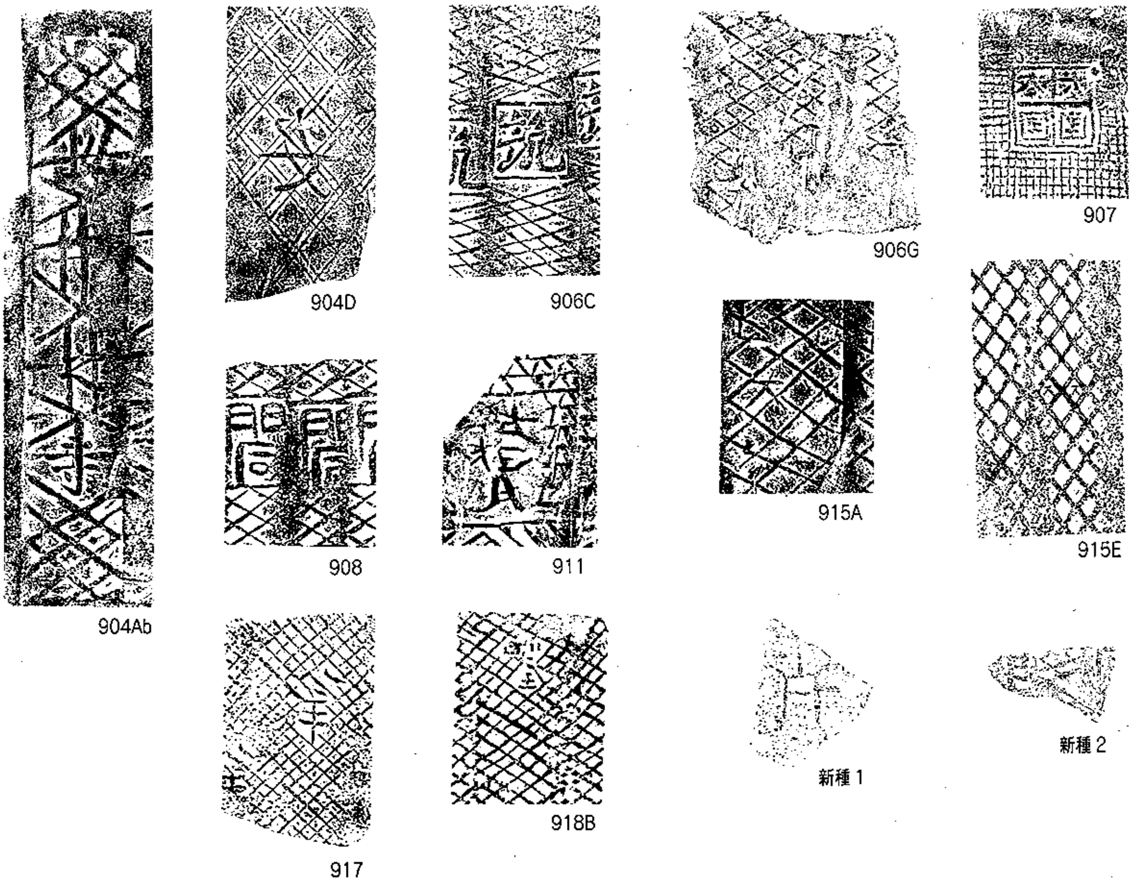


Fig.48　出土文字瓦型式拓影（2）（1/4）

しているだけあって，ほとんどといって良い種類が揃っている。Aは方形の枠内に左字で陰刻の「平井瓦屋」銘，Bは陰刻で「平井瓦」銘，C･Dは左字で陽刻の「平井瓦」銘，E以下は「平井」銘である。ほとんどが32次と80次の出土である。特にAは50点（22.12%）も出土しており，当地区における主要な型式と言える。

９０２型式：「佐」銘の文字瓦で，12種類が確認されており，当地区ではBaとJ以外が出土している。DaもしくはDbが13点で最も多く，次いでCが５点で，残りは３点以下である。合計40点で全体の17.70%を占めており，901型式に次ぐ主要な型式の一つである。

９０３型式：「賀茂」「賀茂瓦」「賀」銘の文字瓦で，11種類が確認されているが，当地区ではBa・C・D・E・G・Haが出土している。Ba・Cが「賀茂瓦」銘で，Haが「賀」銘，それ以外は「賀茂」銘である。902型式に次ぐ出土量だが，合計15点と多くはない。

９０４型式：「安」「安楽寺」「安楽之寺」銘の文字瓦で，安楽寺天満宮（太宰府天満宮）の所用瓦である。当地区では，AbとＤが出土しており，Abは「安楽之寺」銘に二重の縦線の追刻を行い，安楽寺所用瓦でないことを明示するもので，政庁第Ⅲ期下層の焼土層から出土した著名な型式のもの。32次で１点出土する。Ｄは二重斜格子に左字の「安」銘を叩打痕とするもので，80次から４点出土する。

９０６型式：「筑前瓦」「筑」「前」銘の文字瓦で，当地区では，Ｃが２点，今回新型式としたＧ（PL.33）が１点出土している。Ｃは斜格子の中に正方形で区画し，正字の「筑」銘のもの

Tab. 7　文字瓦出土点数表

型式種	25次	32次	75次	79次	80次	153次	点数	%	
901A		2 6.25%	1 20.00%		45 25.71%	2 18.18%	50	22.12%	
901B					10 5.71%	2 18.18%	12	5.31%	
901C		1 3.13%		1 50.00%	7 4.00%		9	3.98%	
901D		1 3.13%			8 4.57%		9	3.98%	
901E					5 2.86%		5	2.21%	
901Fa		2 6.25%	1 20.00%		4 2.29%		7	3.10%	
901Ga		2 6.25%			4 2.29%		6	2.65%	
901H		1 3.13%					1	0.44%	
901Ha				1 50.00%			1	0.44%	50.88%
901Hb		1 3.13%			1 0.57%		2	0.88%	
901Hc		1 3.13%	1 20.00%		4 2.29%		6	2.65%	
901Ia					1 0.57%		1	0.44%	
901Ib		1 3.13%					1	0.44%	
901J					2 1.14%		2	0.88%	
901L		1 3.13%			7 4.00%		8	3.54%	
901M		1 3.13%	1 20.00%				2	0.88%	
902A		1 3.13%			2 1.14%		3	1.33%	
902Bb		2 6.25%			1 0.57%		3	1.33%	
902C		1 3.13%			4 2.29%		5	2.21%	
902D		2 6.25%			6 3.43%		8	3.54%	
902Db		2 6.25%			3 1.71%		5	2.21%	
902E			1 20.00%		2 1.14%		3	1.33%	17.70%
902F		1 3.13%					1	0.44%	
902G		2 6.25%			3 1.71%		5	2.21%	
902H					2 1.14%		2	0.88%	
902I	1 100.00%				4 2.29%		5	2.21%	
903Ba		1 3.13%			3 1.71%		4	1.77%	
903C		1 3.13%			4 2.29%		5	2.21%	
903D		1 3.13%			1 0.57%		2	0.88%	6.64%
903E					1 0.57%		1	0.44%	
903G					2 1.14%		2	0.88%	
903Ha					1 0.57%		1	0.44%	
904Ab		1 3.13%					1	0.44%	2.21%
904D					4 2.29%		4	1.77%	
906C		1 3.13%			1 0.57%		2	0.88%	1.33%
906G					1 0.57%		1	0.44%	
907					9 5.14%	2 18.18%	11	4.87%	
908					2 1.14%		2	0.88%	
911					1 0.57%		1	0.44%	
915A		2 6.25%			8 4.57%	1 9.09%	11	4.87%	5.31%
915E					1 0.57%		1	0.44%	
917					2 1.14%	1 9.09%	3	1.33%	
918B					8 4.57%	1 9.09%	9	3.98%	
新種１					1 0.57%		1	0.44%	
新種２						1 9.09%	1	0.44%	
新種３						1 9.09%	1	0.44%	
合計	1	32	5	2	175	11	226		
百分比	0.44%	14.16%	2.21%	0.88%	77.43%	4.87%	100.00%		

である。Gは斜格子に重なるように左字の「筑前」銘となるもので，今回確認したものは，80次灰褐色土から出土したもので，丸瓦に打捺されたものである。文字部分の右側がナデ消されており，明瞭ではない。また，「前」の下部分は欠損しており，さらに下部に「瓦」が続く可能性も考えられる。

９０７型式：細かい正格子の中に「大国」銘と２列並べて陽刻するもので，この銘は１種類しか確認されていない。当地区では11点出土した。

９０８型式：正方形の区画の中に「門司」銘を陽刻するもので，これも１種類しか確認されていない。当地区では80次から２点出土した。

９１１型式：ランダムに入った斜線紋様の中に正方形の区画を設け，その中に左字で「□□瓦」と陽刻するもので，政庁と筑紫野市剣塚瓦窯でのみ確認されている型式である。80次で１点出土した。

９１５型式：斜格子の中に陽刻で「大」の銘を入れるもので，６種類が確認されている。当地区ではAが11点，Eが１点出土した。901～903型式に次ぐ出土量である。A・Eは共に政庁域での出土が目立つ。

９１７型式：細かい格子に「八年」と左字で銘を入れる。当地区では３点出土した。

９１８型式：「四王」銘の文字瓦で，当地区では，細かい斜格子に「□（四）王」と陽刻するBが９点出土しており，やや多めである。

以下は，新たに文字瓦として認定したものであるが，判読等が現段階では確実ではなく，今回は報告のみとし，型式番号の付与は見送った。以下に概要を記す。

新種1：80次床土出土資料で，平瓦と思われる小片の凸面に大きく異体字の「瓦」が刻される(PL.33)。小片であるため，上部の文字の存在や，周囲の叩打痕紋様すらも不明である。「瓦」の文字は左右対称となっており，他の類例には見られない字体である。

新種2：153次粘土採掘遺構ＳＸ4087出土の丸瓦片で，凸面に斜格子と一文字刻される(PL.33)。判読は不能であり，今後の類例の増加を待ちたい。

新種3：153次出土資料で，これまでの概報や丸瓦の項で詳細に報告している（Fig.50-12)。３～４文字刻されるが判読不能。完形でありながら判読不能なのは残念である。

4）丸・平瓦

a.丸瓦（Fig.49・50，PL.33・34)

今回の報告書では，第１集同様，丸・平瓦については残りのよいものを中心にサンプル的に報告を行うこととしたい。

丸瓦は基本的に玉縁式丸瓦がほとんどで，いわゆる行基式のものは114次で小片が１点（図面不掲載）確認されたのみである。

１～５は凸面の縄目を擦り消しているものである。１～３は粘土紐を巻き上げて成形するもので，広端部幅は14.0～15.5cmと細長い形態で，最大厚も1.6～1.7cmと薄い。１は全体が黒色に燻され，２は灰白色を呈し，３は明黄褐色を呈する。端部は，ケズリによって面取りを丁寧に行っている。４・５は，粘土板巻き上げによる成形技法による。４は，凸面のスリケシがあまり行われていないもので，縄目がかなり明瞭に残る。凹面には，糸切り痕と布目痕に加え,粘土板の接合痕跡（Z形）が見られる。玉縁部分は粘土を継ぎ足して成形している。５は，全長40.4cm，広端部幅17.8cmと大型のもの。共に，分割は広端部側から手を入れて，玉縁側から広端部側に刃を入れているが，玉縁の端部までは刃が届かないために反対側からも若干刃を入れ直し，乾燥後に割って分割している。そのため，端部は凹面側に截面，凸面側に破面を残している。４は灰色の色調で，胎土にはかなり大きな石英粒が混じっているのが目立つ。５は灰褐色で，やや燻されたような状態である。

６～12は格子紋の叩打痕を持つものである。いずれも粘土板を巻いて成形されたもので，分割は４･５と同様で,広端部側から手を入れて,玉縁側から広端部側に刃を入れ,乾燥後に割って分割しているため，端部は凹面側に截面，凸面側に破面を残す。６・７の凸面の叩打痕は，一辺約５mmの菱形の斜格子だが，６の広端部に近い部分は，斜め方向の平行線のみとなって

Tab. 8　丸瓦計測表

図番号	種類	全長	広端部幅	狭端部幅	広端高	狭端高	最大厚	登録番号
1	縄目紋	36.8	-	26.6	-	8.2	2.5	6
2	縄目紋	39.6	30.5	26.7	9.5	8.7	2.6	1
3	縄目紋	39.6	30.8	27.3	8.2	9.3	2.5	2
4	縄目紋	39.7	30.8	27.9	9.5	9.8	2.4	9
5	縄目紋	36.9	-	-	-	7.3	2.2	3
6	縄目紋	36.4	-	-	-	-	2.5	5
7	縄目紋	37.8	-	-	-	-	2.0	11
8	縄目紋	40.8	-	-	-	-	2.0	10
9	斜格子紋	33.5	-	-	8.6	7.9	2.6	4
10	斜格子紋	33.9	-	-	-	-	3.0	7
11	正格子紋	-	-	-	-	-	2.4	12

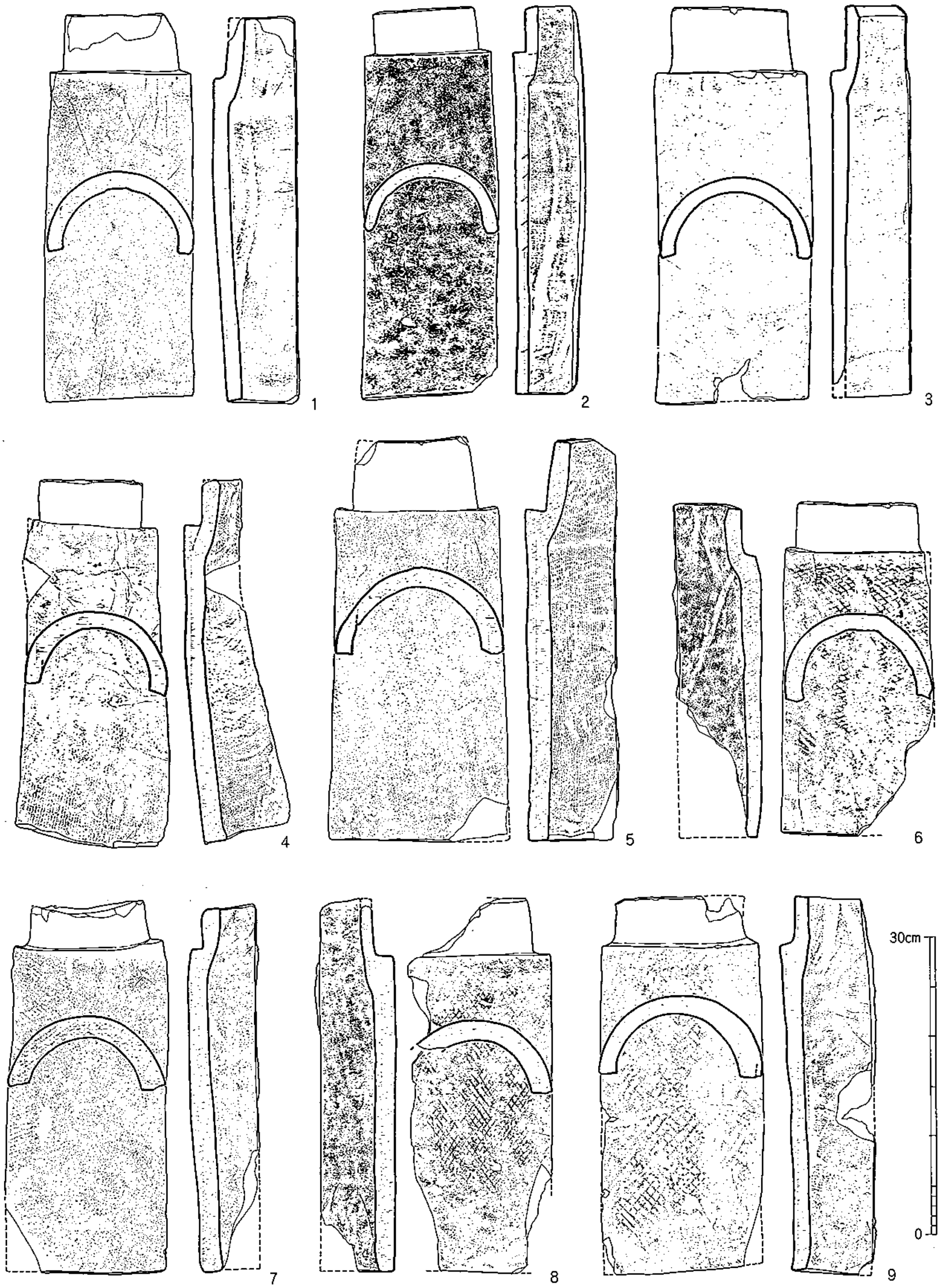


Fig.49　丸瓦拓影・実測図（1）（1/6）

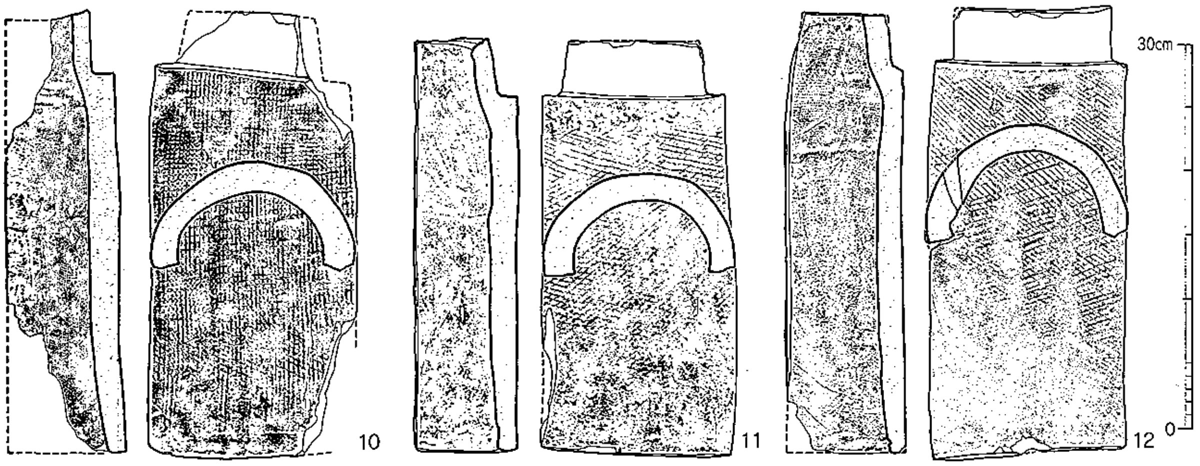


Fig.50　丸瓦拓影・実測図（2）（1/6）

いる。７は摩滅により全体的な状況はよく分からない。８は１辺５mm程の縦長の菱形の斜格子による叩打痕を凸面に持つもので，凸面下半部には約４mm間隔で縦線が付加されている。凹面には布の綴じ合わせ痕跡が横方向に見られ，粘土板を接合する箇所で割れており，接合方法はS形である。９は一辺約６mmの正方形を斜格子状にした叩打痕を凸面に持ち，凸線の太さが３mmとかなり太めで老司系瓦の叩打痕を連想させる紋様である。凹面左側部には粘土板の接合痕跡（S形）が残ると共に，中央上よりに布の綴じ合わせ痕跡が横方向に見られる。灰白色の胎土であるが，表面は黒灰色に燻される。10は一辺２～３mmの正方形の叩打痕だが，広端縁付近では縦方向の平行線，その上部では，斜格子紋となる。叩打具は幅約３cm以上，長さ28cm以上で，全面を９回ほど叩廻して打捺している。凹面には横方向に布の継ぎ目痕跡が見られると共に，所々にナデや肩部や広端部を中心に縦方向のハケメ調整が見られる。広端部分は，特に調整はなされず，繊維状の圧痕が残る。11は６・７に類似する斜格子の叩打痕だが，上端部に径２～３cmの渦巻き紋様が付される。この施紋は福岡県芦屋町浜口廃寺出土瓦に事例がある。渦巻紋様の数から推測すると，７～８回叩き廻したと考えられる。凸面には横方向の布の綴じ合わせ痕跡が残る。12も６・７に類似する斜格子の叩打痕だが，上端部に左字の文字が３～４文字刻まれるが，判読不能である（文字瓦の項で「新種３」として報告）。幅約４cmの叩打具で７回ほど叩廻しているのがわかる。凹面には布目痕跡が見られるが，広端部から１～1.5cmの範囲には布目が見られず，丸瓦を成形する筒が完全に布に包まれていなかったことが分かる。

b.平瓦（Fig.51・52，PL.34・35）

１～８は凸面に縄目紋を叩打痕として持つもので，いずれも凹面に模骨痕を残し，粘土板の接合痕跡を持つものが多く，粘土板桶巻四枚造りにより作られたものであると推察され，確実に一枚造りと見られるものは確認できなかった。凸面の縄目紋は，長い叩打具を用いて縦方向に整然と施紋されるもの（２～６）の他，短めの叩打具を用いて一つの方向から扇形に施紋していくもの（１・８）や，二方向から扇形に施紋していくもの（７）も見られる。模骨痕は，概ね３～５cmの間隔で見られ，３・５・６の凹面には斜め方向の糸切り痕も見られる。粘土板の接合痕跡を残すものはない。端部は分割した跡でケズリを入れて整形している。特に６の端

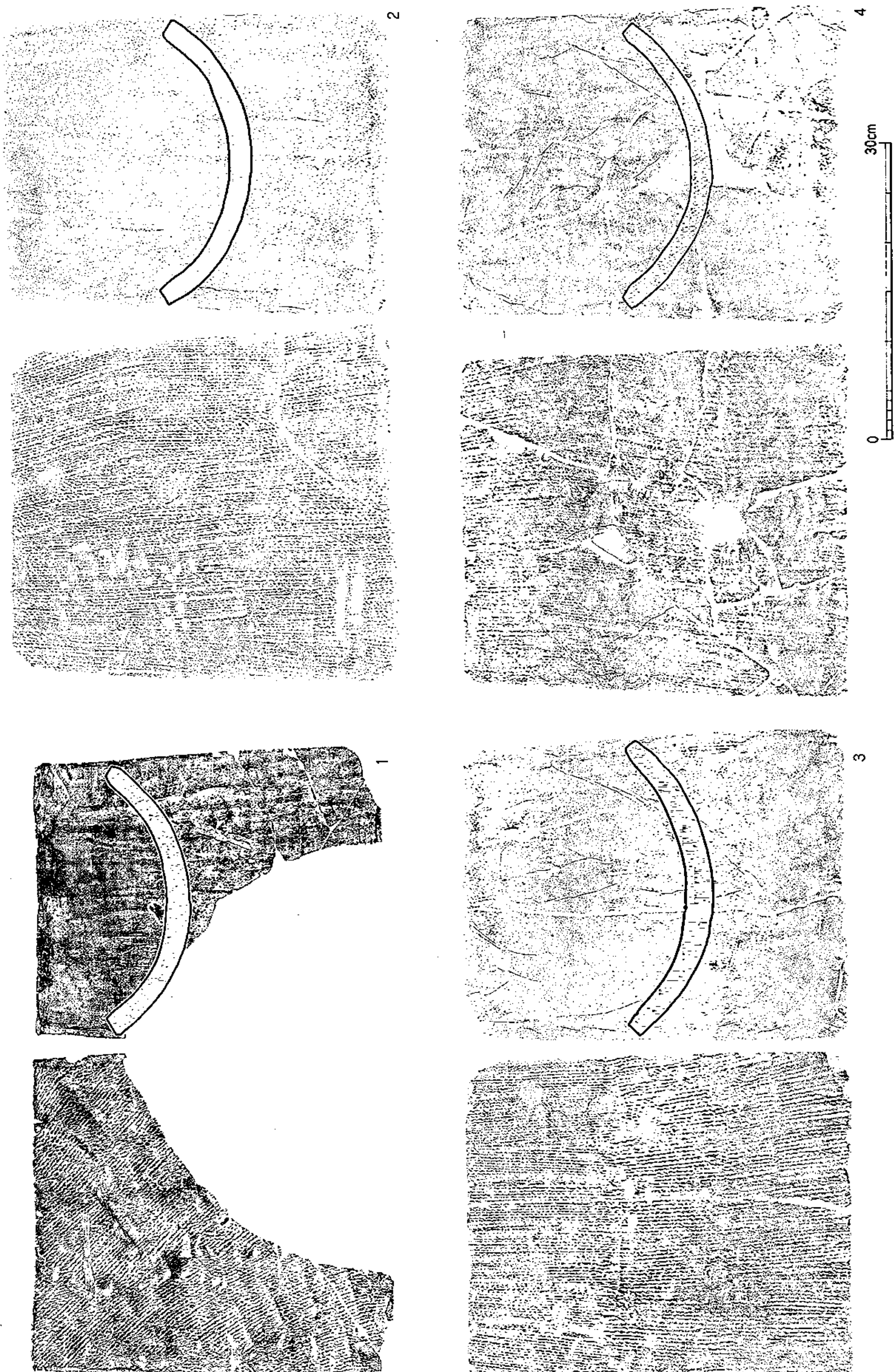


Fig.51　平瓦拓影・実測図（1）（1/6）

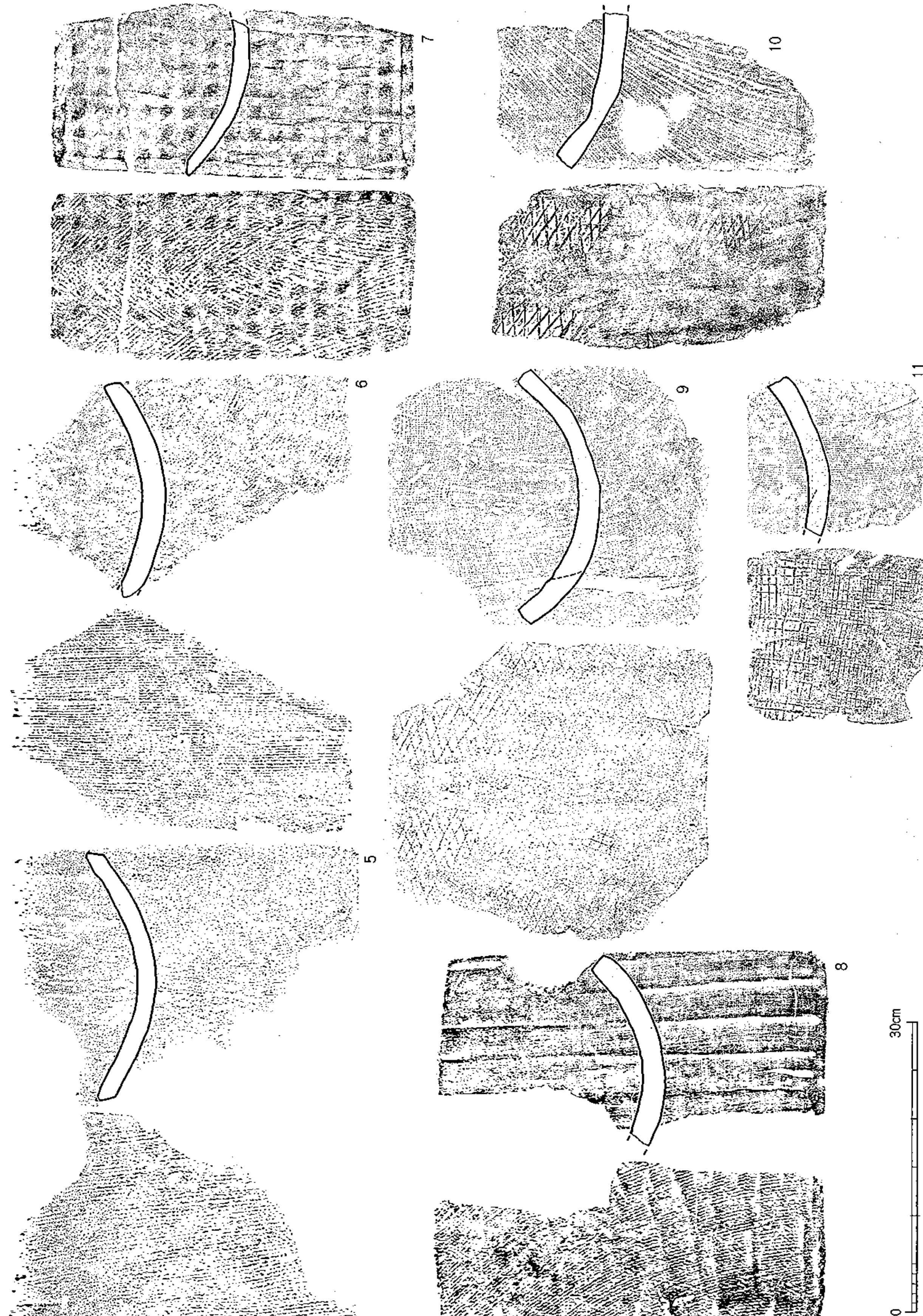


Fig.52　平瓦拓影・実測図（2）（1/6）

Tab. 9　平瓦計測表

図番号	種類	全長	玉縁長	広端部幅	狭端部幅	最大高	最大厚	登録番号	備考
1	縄目紋スリケシ	38.5	6.0	15.0	14.4	8.5	1.7	16	
2	縄目紋スリケシ	38.9	4.7	14.0	13.3	7.5	1.6	14	
3	縄目紋スリケシ	39.6	6.5	15.5	15.4	8.0	1.7	13	
4	縄目紋スリケシ	36.6	4.5	15.3	13.2	9.7	2.7	21	
5	縄目紋スリケシ	40.4	7.6	17.8	16.6	9.5	2.4	15	
6	斜格子紋	33.5	5.1	-	(14.1)	9.0	2.0	19	
7	斜格子紋	38.5	4.5	-	15.3	7.3	2.3	20	
8	斜格子紋	37.7	5.7	-	14.5	(7.5)	2.3	24	
9	斜格子紋	38.0	4.8	-	15.9	8.1	1.9	22	
10	正格子紋	34.9	4.7	-	(12.7)	8.0	2.4	17	
11	斜格子紋	32.4	4.5	14.9	13.3	7.9	2.1	18	
12	斜格子紋	35.4	4.2	15.0	14.9	8.8	2.1	25	文字瓦新種３

部は分割した角度とは異なり，一枚造りの瓦に見られるように，凸面に対して鈍角にケズリ落として整形している。

９～11は格子紋を叩打痕としてもつもので，端部は全て凹面側から刃を入れ，粘土の乾燥後に割って分割している。９は一辺約１cmの菱形の斜格子だが，中央部分付近で紋様が一度断絶し，下半部では正方形に近い菱形に形状が変わっている。幅約７cmの長手の叩打具を用いて施紋している。10は短辺0.9cm，長辺1.7cmと大きめの平行四辺形の斜格子で，幅約7.5cmの叩打具により施紋している。凹面には明瞭に斜め方向の糸切り痕を残す。11は小片だが，稀少な例と見られたため掲載した。一辺３～９mmの不揃いの正方形もしくは長方形の格子紋の叩打痕が見られ，全体が黒色に燻される。９と11にS形の粘土板の接合痕跡が縦方向に見られる。

【参考文献】

杉原敏之2007「老司Ⅰ式軒先瓦」『観世音寺—考察編—』九州歴史資料館

（2）土器・陶磁器類

本報告対象の調査地から出土した土器・陶磁器類はかなりの数があるため，本報告においては調査遺構の報告で遺構番号を付して報告した遺構を「主要遺構」，また，本報告において重要とされる奈良～平安時代の層位を「主要層位」と位置づけ，その遺構から出土した土器・陶磁器類を中心に報告する。また，主要遺構・主要層位以外から出土した土器・陶磁器の中でも，完形に復元が可能である土器類や，当調査地からはあまり出土数が見られない種類の陶磁器類や代表的な型式を中心に「その他の遺構・層位」出土として，一括して報告する。

１）主要遺構出土土器・陶磁器

a.掘立柱建物出土土器・陶磁器

ＳＢ1990出土土器（Fig.53）

須恵器坏（１）　体部の小片。やや外反する形状と思われる。８世紀代か。

ＳＢ1995出土土器（Fig.53）

須恵器蓋（２・３）　２はかえりを有さない古い形態のもの。口径12.6cm。３は明瞭なかえ

りを有するもので，内面には墨痕が残り，器壁も平滑で硯に転用されたものと思われる。

SB2000出土土器 (Fig.53)

須恵器坏（4）やや外側に踏ん張る形態の高台を持つもので，高台径11.7cm。

SB2001出土土器 (Fig.53)

須恵器蓋（5・6） 5は小さいかえりを有する形態で，最大径12.6cmと小型。ツマミは確認できない。6は口縁端部を下方へ折り曲げる形態の小片。共に柱穴の掘方から出土した。

SB2215出土土器 (Fig.53)

土師器椀（7） やや高く外反する高台を持つもので，高台径7.0cm。

SB2220出土土器・陶磁器 (Fig.53)

土師器皿（8） 口径11.0cmに復元できる小片。底部はヘラ切りか。

土師器坏（9） 口径15.2cm，底径10.8cm，器高3.3cm。体部内外面には回転ヘラミガキが見られる。外面体部下位と底部はヘラケズリによる調整を施す。

土師器椀（10） 断面逆三角形の高台をもつもので，高台径7.4cm。黄褐色の色調。9世紀中頃～後半にかけてのものか。

無釉陶器壺（11） 体部の小片。内外面とも細かい格子目のタタキの後にヨコナデ調整を施す。表面の色調は黒褐色，胎土内部は暗赤色で高麗産の可能性も考えられるが詳細は不明。

SB2225出土土器 (Fig.53)

土師器坏（12） 底径7.4cmの底部片。底部ヘラ切り。

SB2230出土土器 (Fig.53)

土師器小皿（13） 口径10.6cm，底径6.8cm，器高1.0cm。底部はヘラ切り。

SB2235出土土器 (Fig.53，PL.36)

土師器坏（14） 底部片で底径7.0cm。底部ヘラ切り。9世紀中頃～後半頃のものと考えられる。

SB2240出土土器・陶磁器 (Fig.53，PL.36)

須恵器蓋（15～19） いずれも口縁端部を折り曲げる形態のもので，15～18は口径11.6～15.9cm。23は口径25.4cmと大型のもの。

無釉陶器壺（20） 底径8.8cmと小型のもので，内外面ヨコナデで仕上げるが内面は非常に強くナデている。底部は圧痕が残り，未調整。灰色の色調だが，胎土内部は暗赤色で，須恵器というよりは高麗産の可能性が考えられる。

黒色土器坏（21） 底部片で底径6.5cm。内面のみを黒色に燻すA類で内面にミガキを施す。20，21は混入の可能性も考えられる。

SB2245出土土器 (Fig.53，PL.36)

須恵器蓋（22～25） いずれも口縁端部を下方へ折り曲げる形態のもので，口径11.1～15.2cm。20のみツマミを残す。

須恵器坏（26・27） 26は高台を持つ形態のもので，口径13.4cm，高台径10.9cm，器高4.2cm。27は高台を持たないもので，口径14.3cm，底径11.0cm，器高3.8cm。

須恵器甕（28） 特徴的な口縁部片で，外面に沈線帯を施し，その間に刺突文と櫛描文を施す。外面は黒灰色，内面は明灰色の色調。

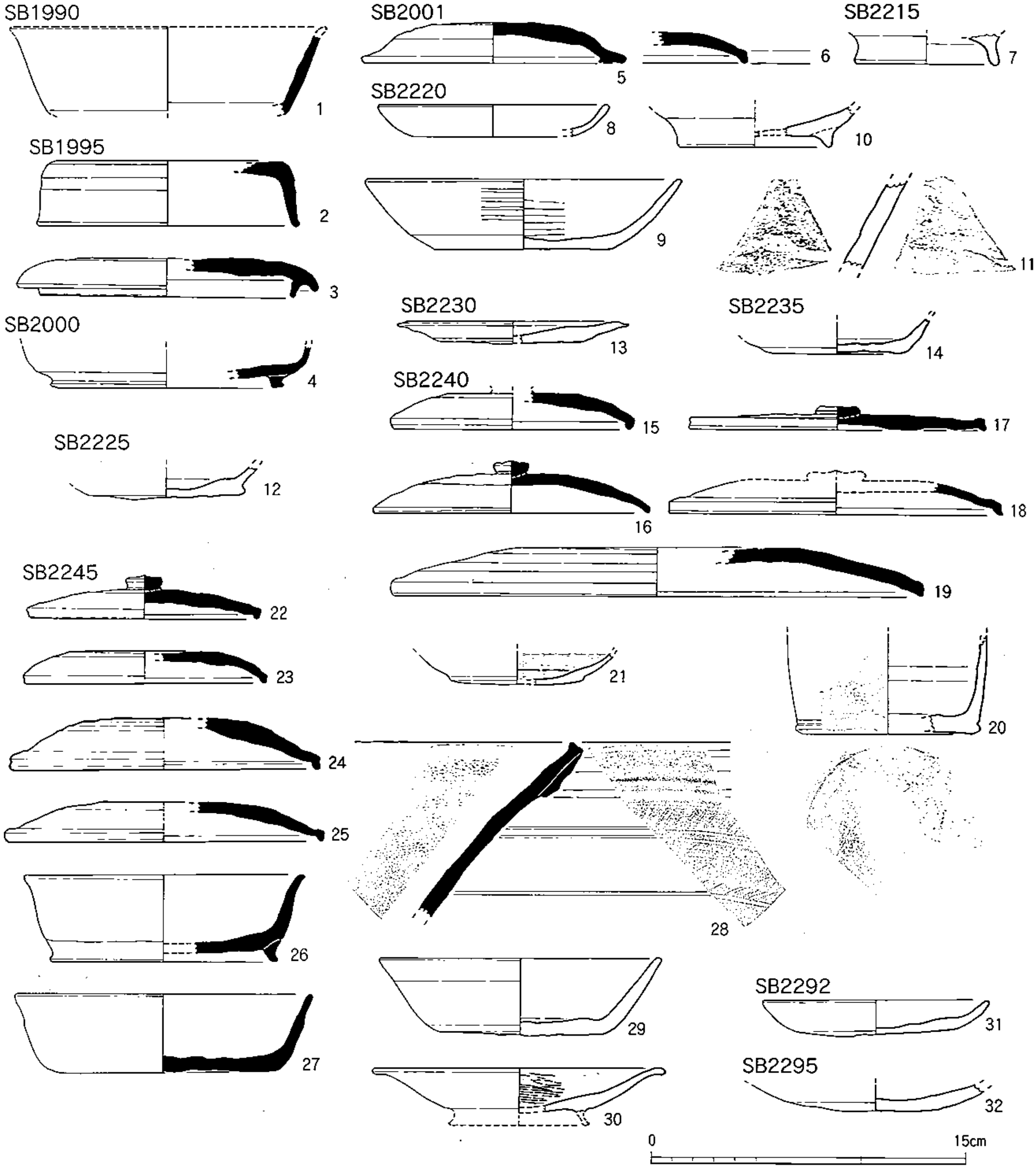


Fig.53　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（1）(1/3)

土師器坏（29）　口径13.4cm，底径7.8cm，器高3.7cm。底部はヘラ切り。

黒色土器椀（30）　口径14.0cmに復元できるもので，内面のみを黒色に燻すA類。高台は欠損する。内面には細かいヘラミガキが見られる。混入の可能性も考えられる。

SB2292出土土器（Fig.53）

土師器小皿（31）　口径10.8cm，底径7.7cm，器高1.7cm。底部はヘラ切り。

ＳＢ2295出土土器（Fig.53）

土師器坏（32）　丸底状で，底部ヘラ切りの底部片。内面に細かいミガキが見られる。

b.溝出土土器・陶磁器

ＳＤ2192出土土器・陶磁器（Fig.54，PL.36）

土師器坏（１・２）　１は高台を持つもので，高台径9.0cm。２は高台を持たないもので，口径13.0cm，底径9.0cm，器高3.2cm。赤褐色の色調で，８世紀後半～９世紀頃のものか。

土師器皿（３）　口径16.8cm，底径13.9cm，器高1.8cm。底部はヘラ切りで，色調は明赤褐色。２と同時期くらいのものか。

緑釉陶器把手（４）　表面に格子目状の文様を入れるもので，水注等の把手と思われる。明褐色の土師器の胎土に，淡緑色の釉がかかる。 **珍しい形態の緑釉陶器**

ＳＤ2222出土土器・陶磁器（Fig.54，PL.36）

土師器小皿（５）　口径9.7cm，底径7.8cm，器高1.4cm。底部はヘラ切り。

土師器坏（６）　口径14.3cm，器高3.6cmで丸底の形態のもの。底部はヘラ切り。

白磁碗（７）　低い高台を削り出すⅣ-１・a類。体部下半以下は露胎。

青磁壺（８）　底径11.4cmで，体部から底部が残る破片。外面上部に褐色の釉がかかり，それ以外は露胎。胎土や釉調などから越州窯系の系譜を引くものと思われる。

無釉陶器壺（９）　肩部の破片で，外面は格子目タタキの後にヨコナデ，内面も平行タタキ状の当て具痕の上からヨコナデを施す。表面は明灰色で風化している印象を受ける一方で，胎土内部は明赤褐色を呈する。高麗産と考えられる。

ＳＤ2257出土土器・陶磁器（Fig.54，PL.36）

土師器椀（10）　高く外反する丸底状の形態で，高台径7.1cm。褐～暗褐色の色調。

灰釉陶器壺（11）　肩部片で，灰白色の胎土の外面に薄く透明釉がかかる。

ＳＤ2258出土土器・陶磁器（Fig.54，PL.36）

土師器小皿（12）　口径10.0cm，底径6.9cm，器高1.0cm。底部はヘラ切り。

土師器椀（13）　高台を欠く破片で，口径15.4cmで丸底状を呈する。

白磁碗（14）　口縁端部が小さい玉縁状となるⅡ類。光沢・貫入のある白色釉がかかる。

青白磁皿（15）　底部片で，青白色の釉がかかる。体部下半以下は露胎。高台径3.8cm。

須恵質土器鉢（16）　底部片で，円板状の底部を貼り付けたような形態。底部は糸切り。鉢としたが，底径5.6cmと極端に小型で，他の器種とも考えられる。

ＳＤ2259出土土器・陶磁器（Fig.54，PL.36）

土師器小皿（17･18）　口径10.0cm，底径7.3～7.8cm，器高1.4cm。共に底部はヘラ切り。

土師器坏（19）　口径14.7cm，底径9.2cm，器高3.4cm。底部はヘラ切りで丸底気味。

土師器椀（20）　高く外反する高台を持つ。口径15.1cm，高台径6.3cm，器高4.9cm。

土師器皿（21）　口径14.5cm，底径11.8cm，器高1.5cm。底部はヘラ切り。

白磁碗(22)　高く削り出した高台で見込みに沈線を巡らすⅤ-１類。現状の外面は全て露胎。

無釉陶器壺（23）　体部片で，内外面とも細かい格子目タタキの後にヨコナデを施す。表面は黒灰色で胎土内部はチョコレート色を呈する。類例に乏しいが高麗産とも考えられる。

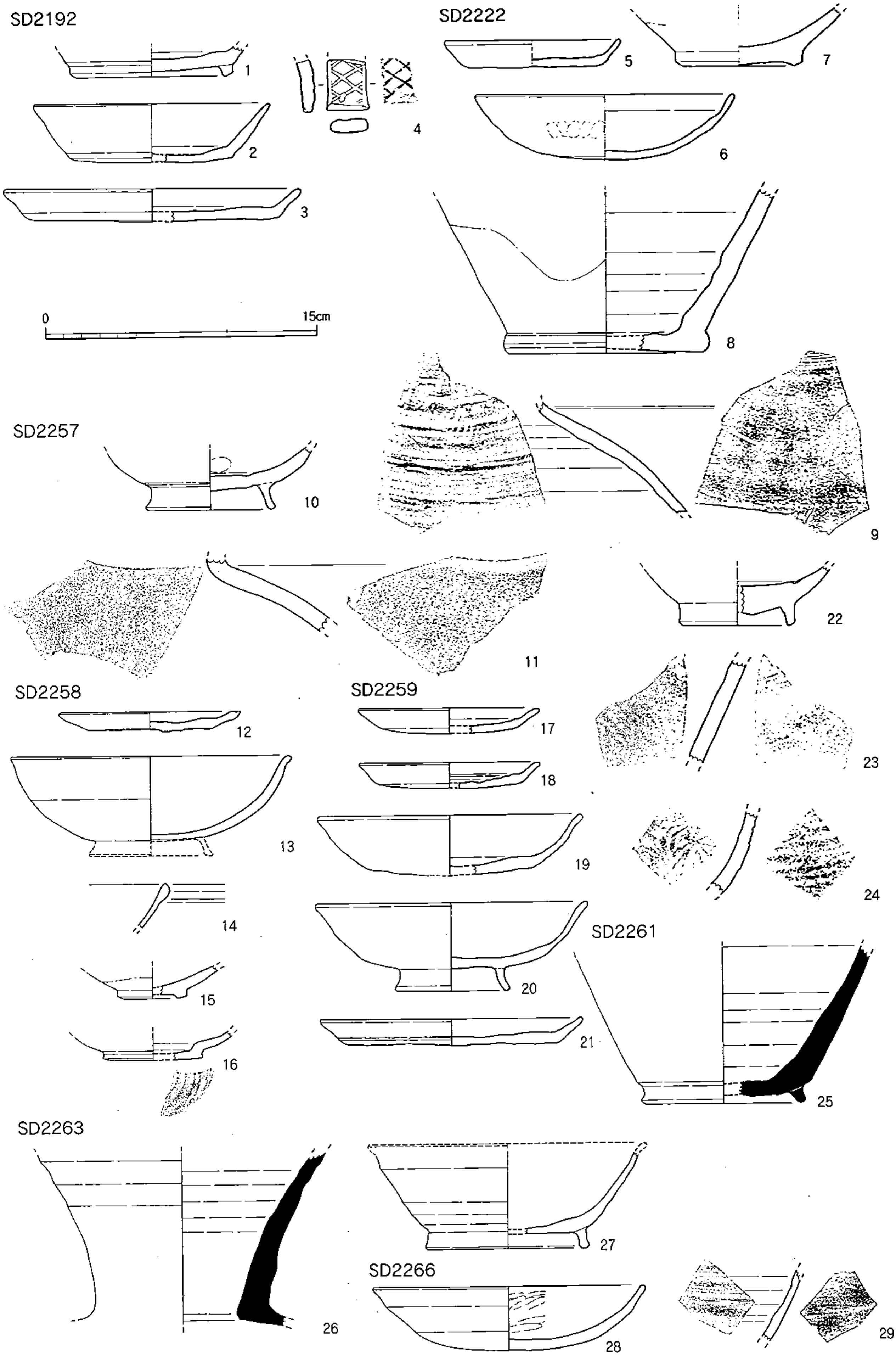


Fig.54　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（2）（1/3）

陶器甕（24）外面に平行タタキ，内面に米印状の当て具痕を残す。濁った黄褐色の釉が外面にかかる。常滑産の可能性も考えられるが不明。

須恵器壺（25）強く外反する高台を持つもので，体部も直線的に外反しながら立ち上がる。内底部に刺突痕がわずかに残るため，すり鉢の用途の可能性も考えられるが，高台が付くなどの不可解な点もあり，とりあえずは壺として報告する。高台径は9.1cm。

ＳＤ2263出土土器（Fig.54，PL.36）

須恵器壺（26）広口壺の頸～肩部の破片。ＳＤ2258出土の破片と接合した。

土師器椀（27）口縁端部を欠く破片で，断面長方形の高台が付く。高台径9.0cm。

ＳＤ2266出土土器・陶磁器（Fig.54，PL.36）

土師器坏（28）口径15.0cm，器高3.5cmで丸底状を呈する。底部ヘラ切り。

無釉陶器壺（29）小片で，内外面ともヨコナデだが，内面は凹凸が激しい。表面は暗灰色，胎土内部はチョコレート色の色調で高麗産の特徴を有する。

ＳＤ2267出土土器（Fig.55）

須恵器蓋（１）擬宝珠形のツマミを持つもので，口縁端部を欠く。色調は灰色。

ＳＤ2268出土土器（Fig.55，PL.36）

土師器皿（２）口径12.4cm，底径9.3cm，器高2.0cm。底部ヘラ切り。やや小型のもの。

ＳＤ2269出土土器・陶磁器（Fig.55，PL.36・37）

土師器小皿（３）口径9.6cm，底径7.9cm，器高1.3cm。底部はヘラ切りで板状圧痕あり。

青磁碗（４）越州窯系で，体部下半が露胎で，底部を平底状に削り出すII－２・c類。見込みに目跡を残す。釉は緑灰色を呈し，光沢・貫入を持つ。

ＳＤ2273出土土器（Fig.55）

土師器椀（５）強く外反する高めの高台を持つ。高台径6.6cm。外面にユビオサエ。

ＳＤ2277出土土器・陶磁器（Fig.55，PL.36・37）

土師器小皿（６）口径10.0cm，底径7.4cm，器高0.6cm。底部はヘラ切りで板状圧痕あり。

土師器坏（７）底部片。底径8.4cmで，底部はヘラ切り。胎土の色調は赤褐色で堅緻。

無釉陶器壺（８）二重口縁状に強く外反する口縁端部片で，頸部外面に格子タタキを残す。その他の部位は丁寧なヨコナデを施す。口径は復元できないが，かなり大型と考えられる。表面は暗褐色だが胎土内部はチョコレート色であり，高麗などの国産以外の可能性が考えられる。

ＳＤ2284出土土器（Fig.55，PL.36・37）

須恵器蓋（９～11）全て口縁端部を折り曲げる形態で，口径14.0～15.4cm。

須恵器坏（12）高台を持つ形態で，口径13.4cm，高台径9.8cm，器高4.2cm。

須恵器壺（13）長頸壺の頸～肩部の破片で，口縁端部を欠く。外面頸部中程に一条の沈線を巡らす。形状から見て，８世紀初頭のものと考えられる。

須恵器鉢（14）口縁部片。外面には格子目タタキ，内面には青海波当て具痕を残す。

須恵器甕（15）口径50.5cmと非常に大型品の口縁部片。口縁端部は玉縁状に厚くして沈線を施し，頸部外面には斜め方向の櫛描きが見られる。

ＳＤ4081出土土器（Fig.55）

土師器小皿（16）口径9.6cm，底径7.8cm，器高1.1cm。底部はヘラ切り。

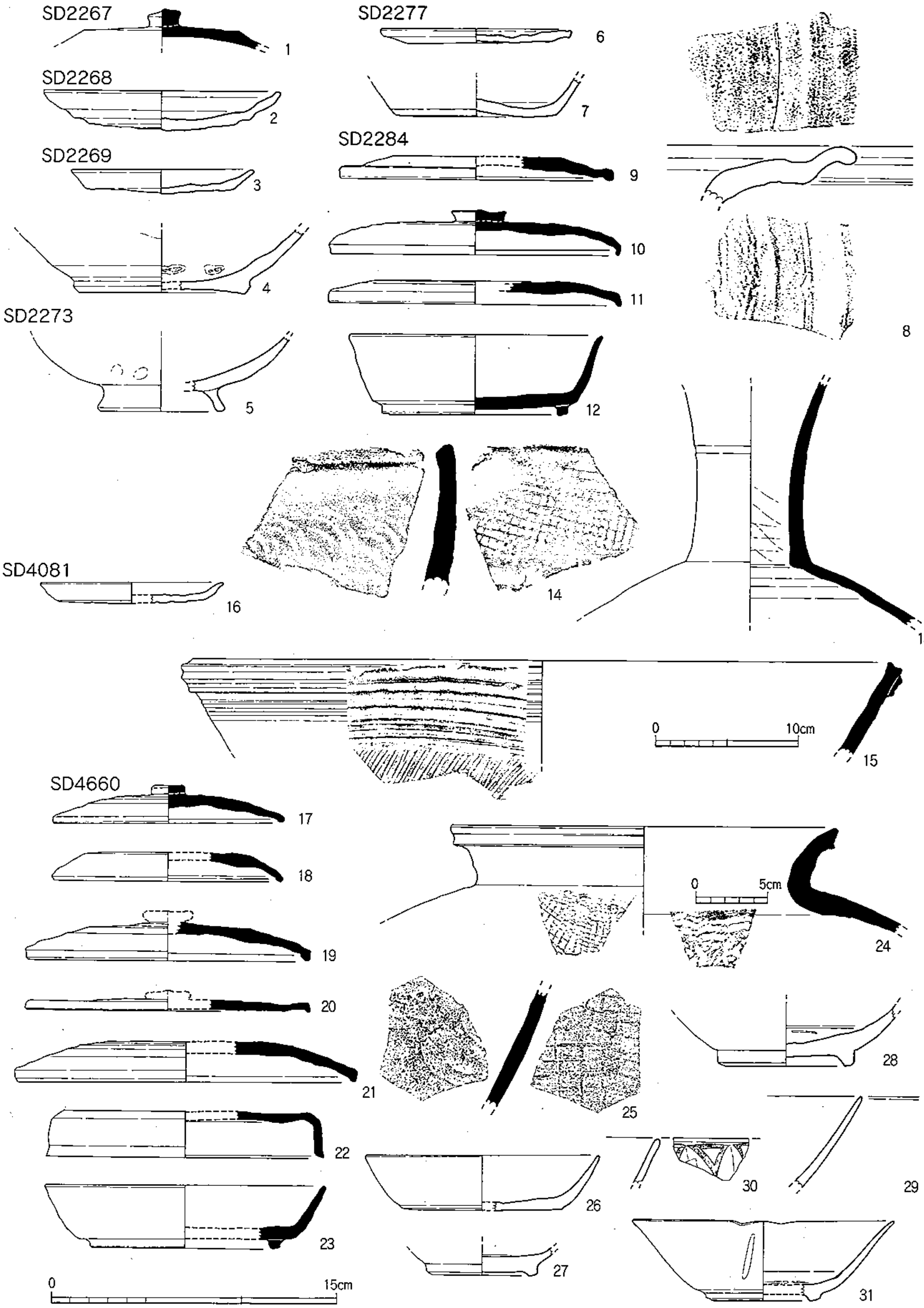


Fig.55　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（3）（1/3・1/4）

ＳD4660出土土器・陶磁器（Fig.55，PL.37）

須恵器蓋（17～22） 17～21はツマミを持ち，口縁端部を折り曲げる形態のもの。口径12.2～18.0cm。22は短頸壺などに用いられる形態のもので，口径14.6cm，器高2.4cm。

須恵器坏（23） 断面逆台形状の高台を持つもので，口径14.7cm，高台径9.9cm，器高3.3cm。

須恵器甕（24・25） 24は口径20.4cmの口縁部片で，肩部外面には格子目タタキ，内面には青海波当て具を残す。25は体部片だが，外面のタタキが，瓦に見るような大きな格子目。

土師器坏（26） 口径12.3cm，底径8.6cm，器高2.9cm。底部は糸切りで，13世紀代のもので，この溝の最終埋没時期の下限を示しているものと思われる。

白磁碗（27） 低い高台を削り出すⅣ-１・a類で，残存する外面は露胎。高台径5.8cm。

青磁碗（28～30） 28・29は越州窯系のもので，28は全面施釉で輪状高台を持つⅠ-２類。29は口縁部片。30は龍泉窯系で，外面に鎬蓮弁を施すⅠ-５・ｂ類の口縁部片。

青磁杯（31） 薄い器壁で全面に施釉する。口縁部に輪花と外面にヘラ押しによる割花を施す。釉調は緑灰色で光沢があり質の良さを感じる。越州窯系のもの。

c.井戸出土土器・陶磁器

ＳE2250出土土器・陶磁器（Fig.56，PL.37）

土師器小皿（１） 口径10.0cm，底径7.0cm，器高1.2cm。底部ヘラ切りで板状圧痕あり。

黒色土器椀（２） 内外面共に黒色に燻すB類。両面とも横方向の細かいミガキが施される。

白磁碗（３） 口縁端部がやや端反状に広がるⅤ類。口径15.5cm。

ＳE2255出土土器・陶磁器（Fig.56，PL.37）

土師器皿（４） 高台を持つ托の形態のもの。口径10.8cm，高台径6.1cm，器高2.2cm。

土師器坏（５） 底部がヘラ切りで丸底状のもの。口径17.0cm，器高3.3cm。

白磁碗（６） 口縁部片で，端部がやや小さい玉縁状となるⅡ類。釉は青白色。

無釉陶器壺（７～９） ７は小さめの壺の口縁端部で肩部に格子目タタキが見られる。８は体部の小片で，平行タタキの後ヨコナデを施す。共に表面は灰色で胎土内部は暗赤色。９は大きめの底部片で，格子目タタキの後に強いヨコナデを施す。底部は未調整で圧痕が残る。色調は暗灰色，胎土内部はチョコレート色で，９は類例に乏しいが，いずれも高麗産と思われる。

ＳE2260出土土器・陶磁器（Fig.56，PL.37）

土師器小皿（10） 口径11.7cm，底径7.7cm，器高0.7cm。底部ヘラ切りで板状圧痕あり。

土師器坏（11） 丸底状の底部片。底部はヘラ切り。

土師器椀（12）やや直立気味の高台を持つもので，高台径6.7cm。

黒色土器椀（13・14） 13は内面のみ黒色に燻すA類。高台径6.6cm。14は内外面共に黒色に燻すB類。体部内外面にはヘラミガキが見られる。高台径6.6cm。

白磁碗（15） 口縁端部をやや小さめの玉縁状にするⅡ類。Fig.56-６・24と同一個体か。

ＳE2265出土土器・陶磁器（Fig.56，PL.37）

土師器皿（16） 口径14.2cm，底径8.6cm，器高2.1cm。底部はヘラ切り。

土師器小皿a（17・18） 口径9.4～10.3cm，底径7.4～7.6cm。底部は共にヘラ切り。

土師器小皿ｃ（19） 高台を持つ形態。口径9.3cm，高台径4.9cm，器高1.9cm。

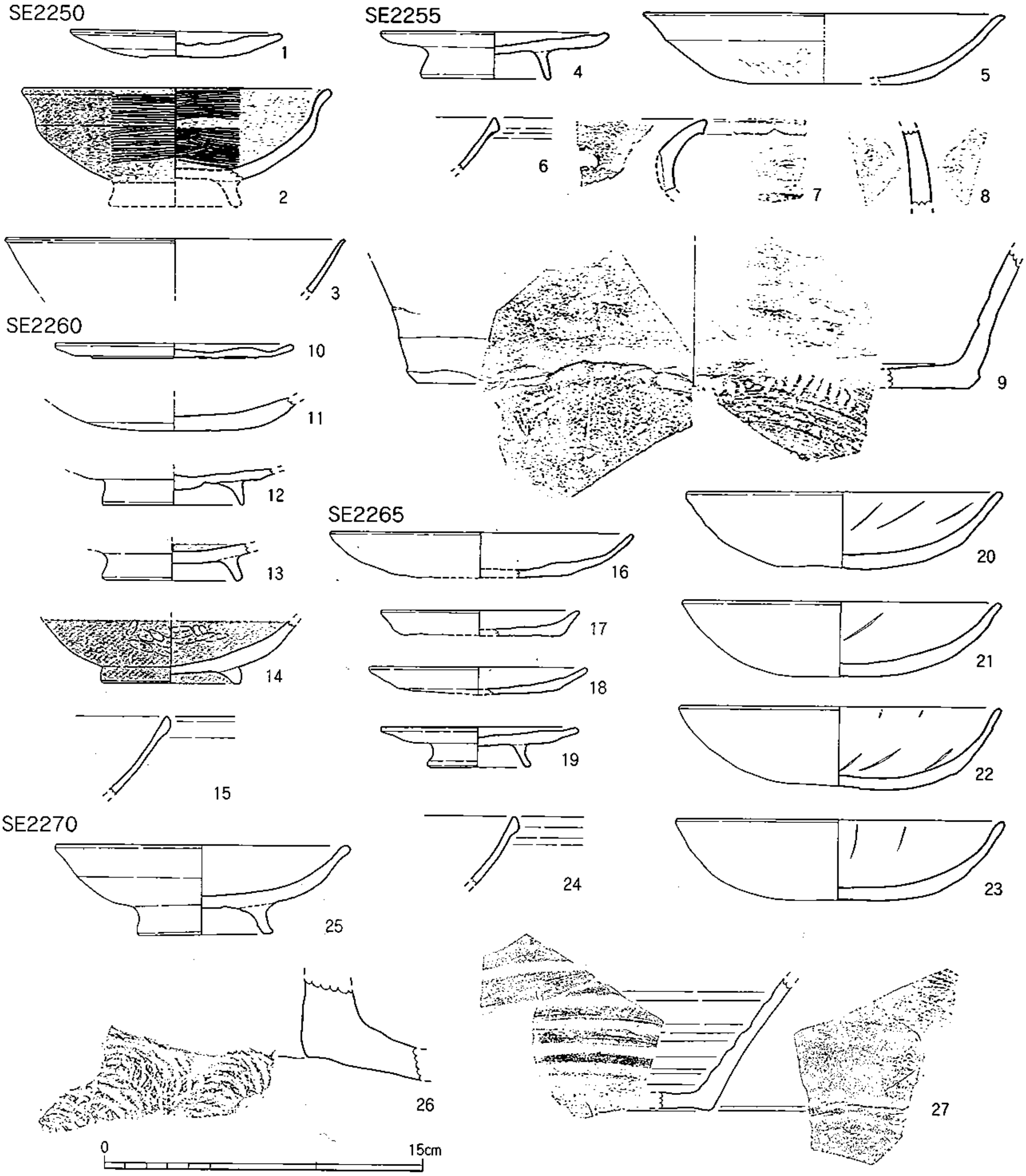


Fig.56　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（4）（1/3）

土師器坏(20～23)　いずれも底部ヘラ切りの丸底。口径14.8～15.4cm, 器高3.6～3.8cm。

白磁碗（24）　小さい玉縁を持ち，青白色の釉がかかる。Fig.56- 6・15と同一個体か。

SＥ2270出土土器・陶磁器 (Fig.56, PL.37)

土師器椀（25）　丸底に高台が付く形態で，口径13.9cm，高台径6.4cm，器高4.2cm。

灰釉陶器甕（26）　大型品の頸部の破片。白い胎土に緑灰～青白色の不透明な釉がかかる。

無釉陶器壺（27）　底部片で，体部外面には細かい格子タタキの後にナデを施し，内面には凹凸の激しいヨコナデを施す。表面は暗灰色，胎土内部はチョコレート色で，高麗産である。

d.土坑出土土器・陶磁器

ＳＫ1994出土陶磁器（Fig.57）

青磁碗（1） 口縁端部を欠く体部片で，外面に鎬蓮弁のような凹凸を持つ。龍泉窯系。

ＳＫ2002出土土器（Fig.57）

須恵器蓋（2・3） いずれも口縁端部を下方に折り曲げる形態のもので，2の口径14.9cm，3は20.2cmで大型のもの。

須恵器坏（4） 体部を外反させ，高台を持つもの。高台は欠損。口径は14.3cm。

ＳＫ2211出土土器（Fig.57）

黒色土器椀（5） 底部片。全面黒色に燻すB類。高台径7.2cm。

ＳＫ2233出土土器（Fig.57）

土師器椀（6） 底部片で，直立気味の高台を持つ。高台径6.0cmで色調は明黄褐色。

ＳＫ2234出土土器（Fig.57）

土師器小皿（7） 口径10.0cm，底径8.2cm，器高1.3cm。底部はヘラ切り。

ＳＫ2237出土土器（Fig.57）

須恵器壺（8） 底部付近の体部片で，外面にはタタキの後にナデを施す。外面は灰～赤褐色，内面は明褐色を呈する。

ＳＫ2248出土土器・陶磁器（Fig.57，PL.37）

土師器坏（9） 丸底の形態で，口径16.0cm，器高2.7cm。底部はヘラ切り。

黒色土器椀（10） 内外面とも黒色に燻すB類。口径16.0cm。両面に細かいヘラミガキ。

青白磁壺（11） 外面に沈線と縦方向のヘラ押し文様が見られ，内面にもヘラ押しの圧痕が確認できる。両面とも施釉。壺にしては器壁が薄く，明確な器種は不明。

無釉陶器壺（12） 頸部の小片で，表面は暗灰色，胎土内部はチョコレート色の高麗産。

ＳＫ2249出土土器（Fig.57）

土師器坏（13） 丸底を呈する底部片で，口径不明のため詳細な時期は不明だが，やや小さめのため，10世紀代のものと思われる。

ＳＫ2251出土土器（Fig.57，PL.38）

土師器坏（14・15） 14は口径10.1cmの小型品。15の口径は13.3cm。共に底部ヘラ切り。

土師器甕（16） 口縁部が強く外側に屈曲する形態のもので，外面は縦方向のハケ，内面は上方向の削りで調整する。口径27.5cm。ＳＫ2252出土資料と接合した。

ＳＫ2252出土土器（Fig.57，PL.38）

土師器坏（17） 口径13.8cm，底径8.6cm，器高3.7cm。底部はヘラ切り。

ＳＫ2253出土土器・陶磁器（Fig.57，PL.38）

土師器小皿（18） 口径9.5cm，底径7.7cm，器高0.8cm。底部ヘラ切りで板状圧痕あり。

白磁碗（19・20） 19はやや小さめの玉縁状口縁のII類。20は小片だが，口縁部が玉縁状にはならないV類。

ＳＫ2256出土土器（Fig.57）

須恵器蓋（21） 口縁端部を欠くために明瞭な形状は不明。外天井部は回転ヘラケズリ。

e.その他の遺構出土土器・陶磁器

ＳＸ1989出土土器（Fig.58，PL.38）

須恵器蓋（1・2）　1は輪状のツマミが付く形態。2は口縁端部を下方へ折り曲げる形態。2の口径は16.4cm。

須恵器坏（3）　3は非常に低い高台を持つ形態で，口径14.0cm，高台径10.0cm，器高4.7cm。

須恵器甕（4）　口径45.5cmの大型品で，口縁部がラッパ状に開くもの。ナデで仕上げる。

土師器蓋（5）　口縁端部を折り曲げる形態のもので，口径16.9cm。

土師器坏（6）　口径14.6cm，底径8.4cm，器高3.2cm。底部はヘラ切り。

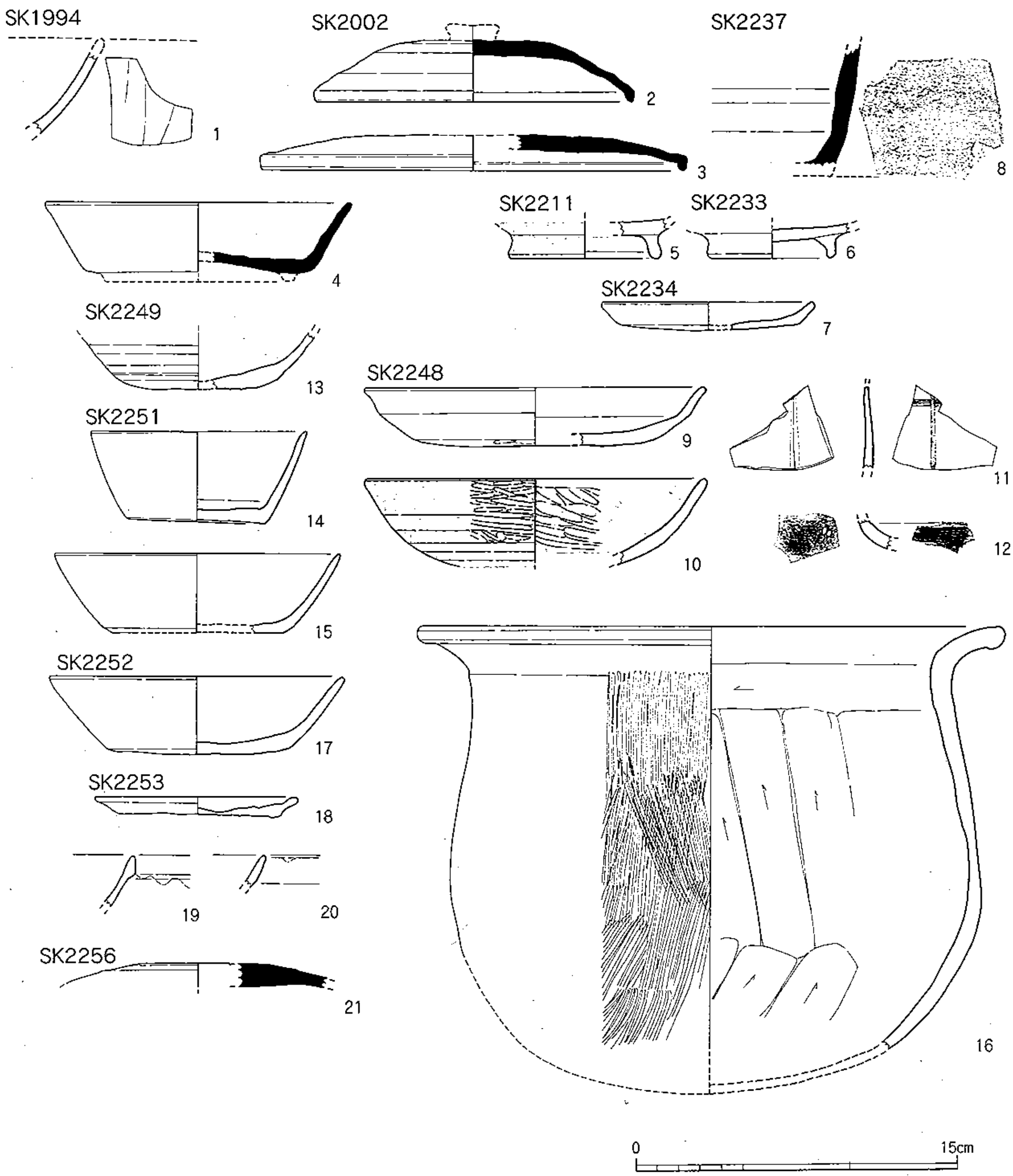


Fig.57　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（5）（1/3）

ＳＸ1991出土土器・陶磁器（Fig.58，PL.38）

須恵器蓋（7）　口径22.4cmの大型品。最大径4.4cmのツマミが付く。

須恵器鉢（8）　把手部分のみが残存する。把手は手づくねで上方へ折り曲げる。

白磁碗（9）　玉縁口縁のⅣ-１・a類。口径15.8cm。体部下半以下は露胎。

ＳＸ1992出土土器（Fig.58）

須恵器蓋（10）　かえりをもたない古い形態のもの。全形不明のため詳細な時期は不明。

ＳＸ1993出土土器・陶磁器（Fig.58，PL.38）

須恵器坏（11）　高台が外側へ寄り，体部がやや外方へ傾斜する新しい形態のもの。口径13.8cm，高台径7.2cm，器高4.7cm。

須恵器甕（12）　口径18.4cmで，肩部外面には平行タタキが見られ，内面は当て具痕をナ

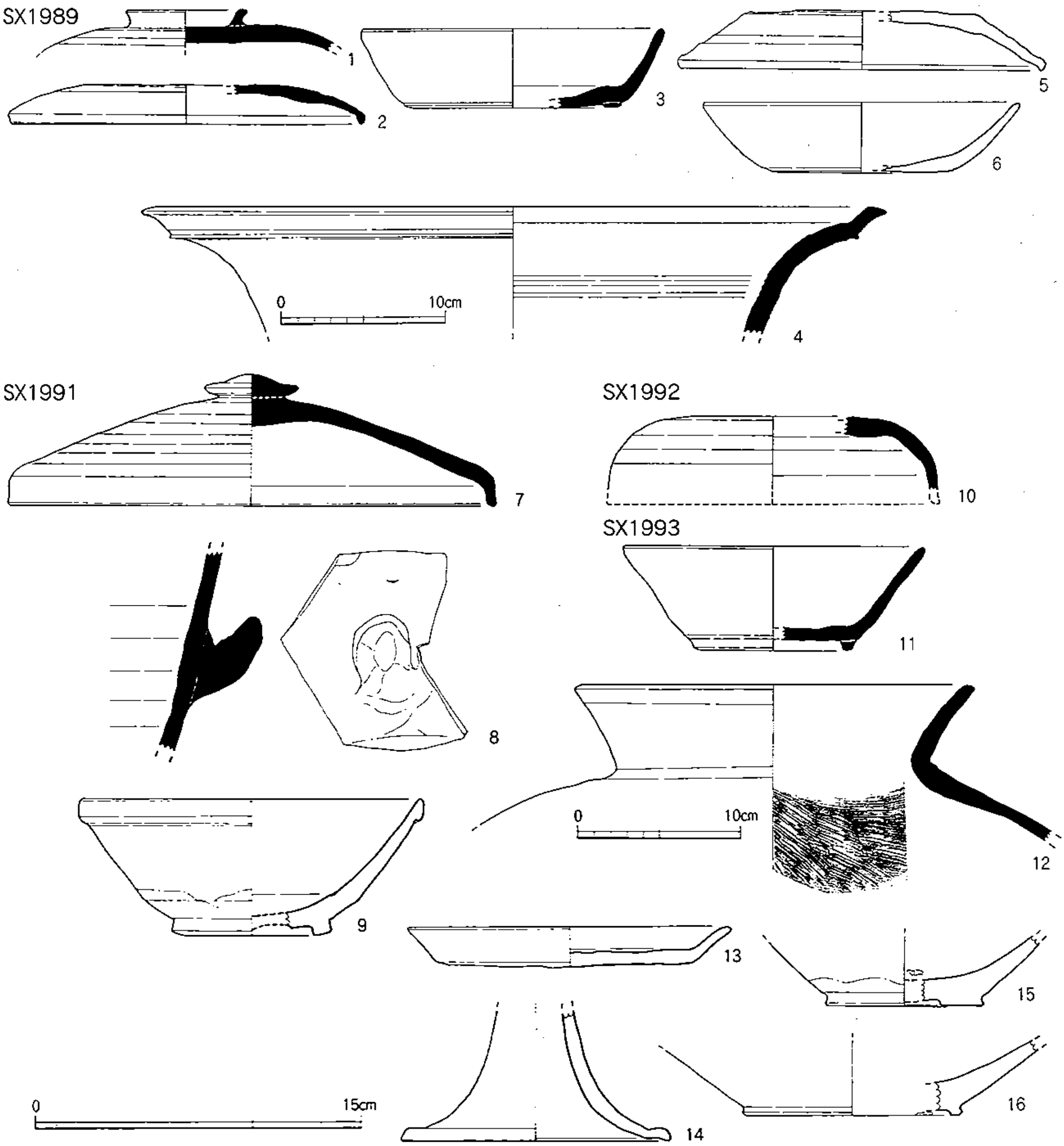


Fig.58　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（6）（1/3・1/4）

デ消している。

土師器皿（13）　口径14.8cm，底径11.8cm，器高1.8cm。底部はヘラ切りで板状圧痕あり。

土師器高坏（14）　脚端部を下方へ折り曲げる。脚部径12.4cm。赤褐色を呈する。

青磁碗（15・16）共に越州窯系で，15は蛇の目高台だが，体部下半は露胎。この組み合わせはあまり例を見ない。16は底部露胎で小さな輪状高台を持つII-１類。

ＳＸ2203出土土器・陶磁器（Fig.59，PL.38）

土師器小皿a（１～4）　口径10.2～11.1cm，器高1.1～1.9cm。底部は全てヘラ切り。

土師器小皿ｃ（５）　口径11.0cm，高台径6.4cm，器高2.4cm。底部はヘラ切り。

土師器坏（６・７）　口径11.3～11.8cm，底径7.4～7.8cm，器高3.3～3.4cm。底部はいずれもヘラ切り。７はやや丸底状となる。

土師器椀（８）　外反する高台を持つもので，口径15.0cm，高台径7.3cm，器高5.1cm。

土師器瓶（９）　徳利形の器形で，粘土紐で巻き上げて成形している。最大径13.4cm。

黒色土器椀（10）　内外面共に黒色に燻すB類。口径15.6cm。ヘラミガキが見られる。

青磁碗（11）　越州窯系で，全面施釉で輪状高台のI-２類。見込みに連続する目跡がある。

ＳＸ2212・2219出土土器・陶磁器（Fig.59，PL.38）

２つの遺構を一括して遺物を取り上げているため，併せて報告する。

土師器小皿（12・13）　口径8.8～8.9cm，器高1.4～1.7cm。底部ヘラ切り。

土師器坏（14・15）　口径15.2～16.1cm，器高3.3～3.4cm。底部は丸底でヘラ切り。

白磁碗（16・17）　16は口縁端部を水平に折り曲げるＶ類。17は口縁部をやや「く」の字に屈曲させ，内面上位に浅い沈線とその下位に櫛目文が施されるVI-１・ｂ類。

青磁碗（18）　口縁端部を外反させる形状で，口径11.0cm。暗黄緑色の釉がかかる。釉調などから高麗青磁と判断される。

無釉陶器壺（19）　肩部付近の小片で，外面はヨコナデ，内面は凹凸の激しいヨコナデ調整が見られる。明灰色の胎土で，色調に疑問があるが，形状から高麗産と考えられる。

ＳＸ2213出土陶磁器（Fig.59，PL.38）

白磁碗（20）　口縁端部をやや外へ折るＶ類と思われる。

ＳＸ2214出土土器・陶磁器（Fig.59，PL.38）

土師器小皿（21）　口径10.4cm，底径7.8cm，器高1.0cm。底部はヘラ切り。

青磁碗（22）　越州窯系で，細めの輪状高台を削り出す全面施釉のI-２類。高台径5.6cm。

ＳＸ2218出土土器（Fig.59）

土師器椀（23）　高台部片で、高台径8.6cm。暗褐色を呈する。

ＳＸ2231出土土器・陶磁器（Fig.60，PL.39・40）

土師器小皿a（１～18）　口径8.9～11.0cm，器高0.9～2.0cm。底部は全てヘラ切り。

土師器小皿ｃ（19～23）　口径8.7～11.6cm。20～23は小皿というよりは，托の形状と言える。23は底部に穿孔が見られる。

土師器坏(24～35)　口径12.7～17.4cm,器高2.6～4.5cm。底部は全て丸底でヘラ切り。

土師器椀（36～42）　丸底の底部に高台が付く形態のもの。口径14.4～17.9cm。

土師器器台（43）　棒に粘土を巻き付けて脚部を作り出し，その上下に坏を貼り付けて作っ

ている。脚部側の最大径は17.0cm。

黒色土器坏 (44) 内面のみを黒色に燻すA類。口径15.5cm, 底径7.3cm, 器高3.8cm。

黒色土器椀 (45) 内外面共に黒色に燻すB類。口径13.8cm, 高台径7.5cm, 器高5.2cm。

白磁碗 (46・47) 46は低い高台を削り出すⅣ-1・b類。内面見込みを窪ませて段を作り出している。47は口縁端部をやや外反させるⅤ類。外面体部にヘラ押しの割花が見られる。

青磁碗 (48・49) 共に越州窯系の口縁端部で, 49は玉縁状の形状となる。

陶器鉢 (50) 口縁端部で片口付近。暗赤色を呈し, 強い被熱が見られるため, 須恵質の可能性も考えられる。

SX2262出土土器 (Fig.61, PL.40)

須恵器蓋 (1・2) 口縁端部をわずかに折り曲げる形態。口径14.2～15.2cm。

須恵器坏 (3・4) 共に低い高台を持ち, 体部を外形させる形態。口径は14.5～14.7cm。

SX2274出土土器 (Fig.61, PL.40)

土師器坏 (5) 口径13.1cm, 底径7.4cm, 器高4.2cm。底部はヘラ切りで板状圧痕あり。

土師器皿 (6・7) 口径13.5～14.8cm, 器高2.0～2.6cm。底部はヘラ切り。

土師器椀 (8) 口径16.2cm, 高台径7.1cm, 器高5.5cm。底部はヘラ切り。

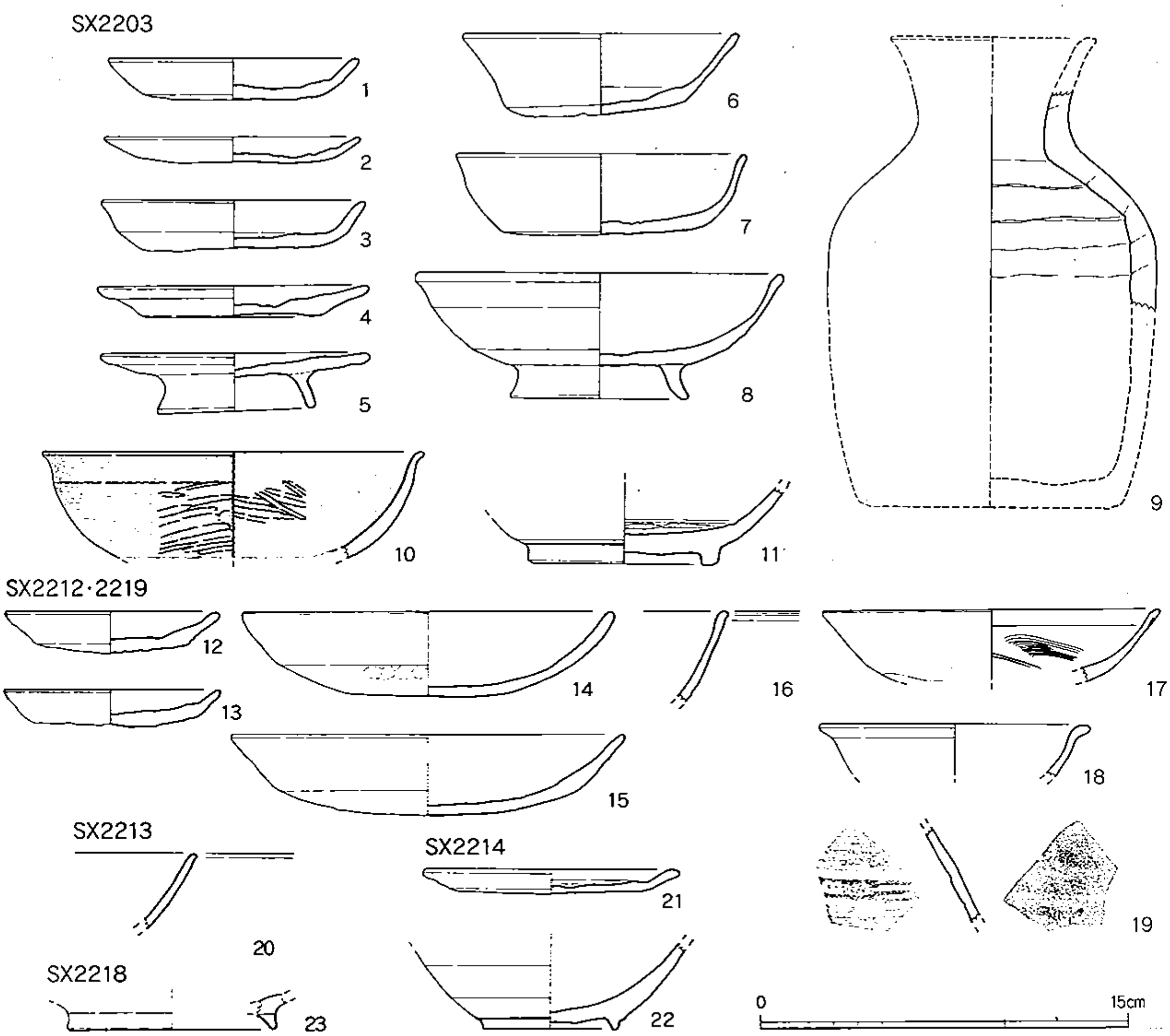


Fig.59 主要遺構出土土器・陶磁器実測図 (7) (1/3)

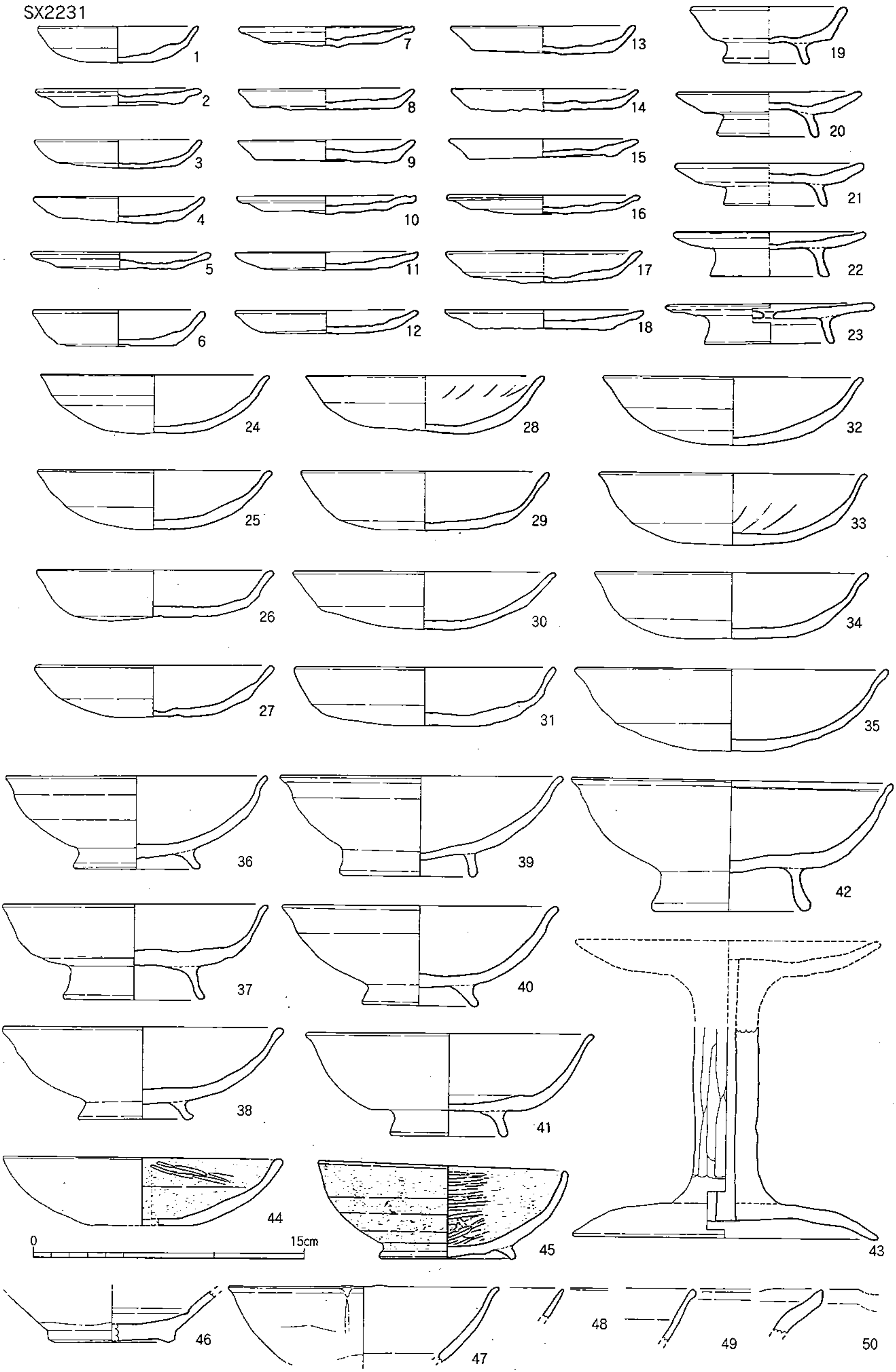


Fig.60　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（8）（1/3）

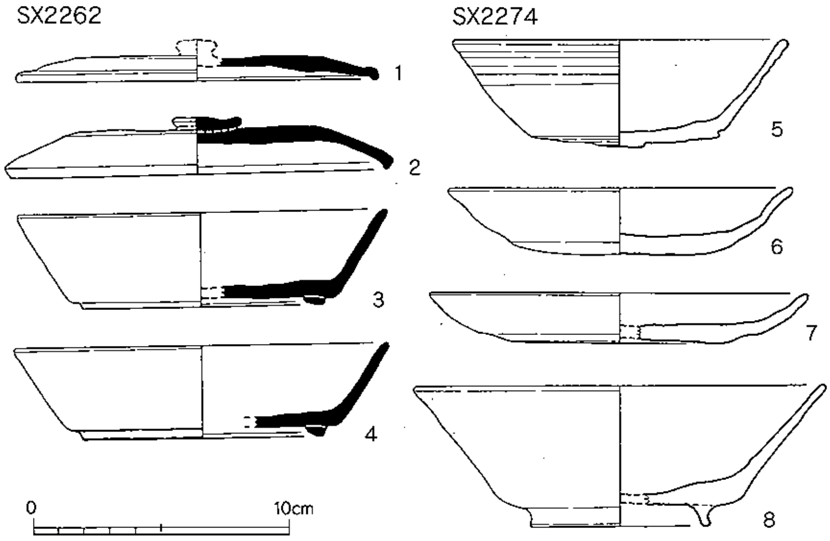


Fig.61　主要遺構出土土器実測図（9）（1/3）

ＳＸ2275出土土器・陶磁器（Fig.62, PL.40・41）

須恵器蓋（1～6）　いずれも口縁端部を折り曲げる形態のもので，口径13.0～20.2cm。

須恵器坏（7）　体部が直立的に外反する形態で，口径13.8cm，高台径8.1cm，器高3.7cm。

須恵器皿（8）　口径18.9cm，底径15.4cm，器高2.2cm。底部はヘラ切り。

土師器蓋（9～11）　いずれも口縁端部をわずかに折り曲げる形態で，口径16.1～19.2cm。10と11には回転ヘラミガキの調整が明瞭に残る。

土師器坏（12～23）　いずれも高台を持たない形態のもので，口径10.9～14.5cm，底径6.8～9.3cm，器高3.0～4.1cm。いずれも底部ヘラ切り。19は回転ヘラミガキを内面に残す。

土師器皿（24～31）　口径13.9～18.0cm，底径10.7～15.3cm，器高1.6～2.5cm。全て底部ヘラ切りで，25・29には板状圧痕も残す。

土師器甕（32）　口径26.8cmの口縁部～胴部上位までの破片で，口縁部は「く」の字に屈曲して外反する。胴部内面にはヘラケズリが見られる。

灰釉陶器甕（33）　頸部～肩部の破片で，外面に黄濁色の釉が施される。外面には平行タタキ，内面には青海波の当て具痕が残る。

青磁碗（34・35）　共に口縁～体部の破片で，越州窯系のもの。緑灰～濁緑灰色の釉。

青磁壺（36）　越州窯系の四耳壺で，粘土紐を逆Ｕ字形に貼り付けた把手が肩部に添付される。口縁端部は丸く収められており，口径8.7cm。全体に貫入を伴う黄緑色の釉がかかる。　**越州窯系の青磁壺**

ＳＸ2276出土土器（Fig.63）

土師器坏（1）　口径12.2cm，底径6.8cm，器高3.3cm。底部ヘラ切りで板状圧痕あり。

ＳＸ2278出土土器（Fig.63）

土師器椀（2）　高台部分の破片で，高台径7.6cmで端部はやや外反する。

ＳＸ2280出土陶磁器（Fig.63）

灰釉陶器甕（3）　体部の小片で，外面に緑灰色の釉がかかる。外面に格子タタキ，内面に青海波の当て具痕を残す。小片のため傾きは正確ではない。

ＳＸ2282出土土器（Fig.63）

土師器椀（4）　体部～高台部の破片で，高台径8.1cm。明褐色の胎土で焼成は良好。

ＳＸ2283出土土器（Fig.63, PL.41）

土師器坏（5）　口径12.4cm，底径8.1cm，器高3.5cm。底部はヘラ切りで板状圧痕あり。

黒色土器皿（6）　内面のみ黒色に燻すA類。高台を持つ形態で，口径13.6cm，高台径6.8cm，

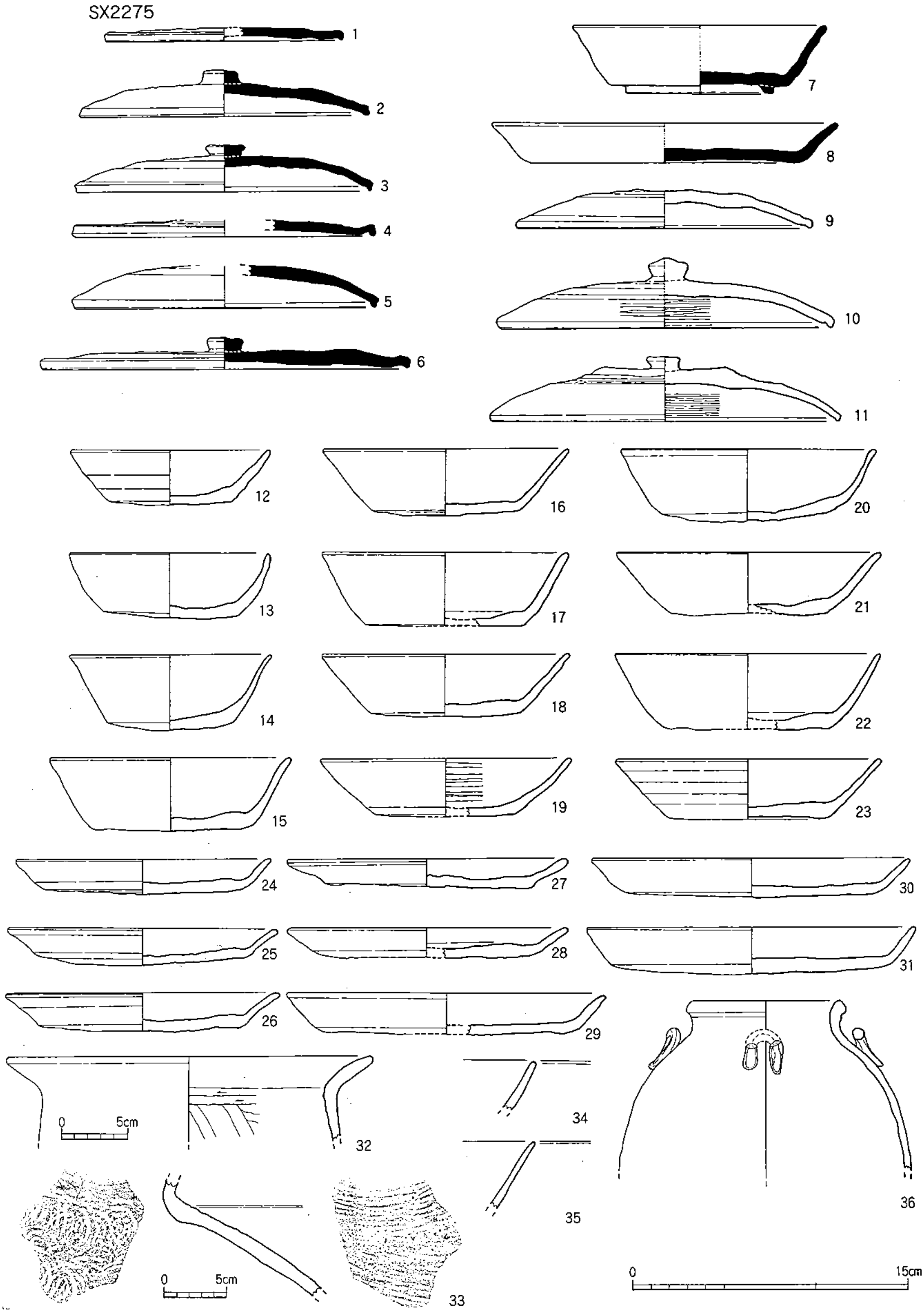


Fig.62　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（10）（1/3・1/4）

器高2.9cm。内外面に細かいヘラミガキ調整が見られる。

ＳＸ3328出土土器（Fig.63，PL.41）

須恵器皿（7） 口径13.0cm，底径9.5cm，器高2.3cm。底部はヘラ切りの後ナデ調整。

土師器坏（8・9） 口径9.2～10.1cm，底径5.8～6.3cm，器高3.9～4.2cm。底部はヘラ切り。小型の器種で，色調は赤褐色。

土師器小壺（10） 高台を持つ形態で，高台径6.8cm。外面体部下半にはヘラミガキ調整が見られると共に，焼成前に一部窪んでしまった痕跡が見られる。

ＳＸ3329出土土器（Fig.63，PL.41）

須恵器甕（11） 大型品の口縁端部片。外面端部に２本の沈線が巡る。

土師器皿（12） 口径17.0cm，底径14.1cm，器高2.0cm。底部はヘラ切り。

土師器高坏（13） 口縁部を欠く破片で，脚端部はラッパ状に外反する。脚部径15.0cm。赤褐色の色調で焼成は良好。ＳＸ3332出土資料とも併せ，土師器高坏の出土が目立つ。

ＳＸ3331出土土器（Fig.63）

土師器坏（14・15） 14は小型品で，底部は摩滅し明瞭ではない。当初糸切りの小皿ｂとも考えたが，小片であるため，ここでは15と同様，ヘラ切りの小型の坏と考えておきたい。15は口径12.8cm，底径7.4cm，器高4.2cm。底部はヘラ切り。色調は黄褐色。

土師器カマド（16） カマドの鍔部分の破片。明褐～赤褐色の胎土で吸炭している。

須恵質土器鉢（17） 口縁端部の小片だが，胎土・形状から東播系のものと考えられる。

ＳＸ3332出土土器（Fig.63）

須恵器甕（18） 口径13.6cmの口縁～肩部の破片で，肩部外面には格子目タタキ，内面には青海波の当て具痕が残る。灰色の胎土で自然釉が外面に付着する。

土師器坏（19） 高台径8.6cmの体部下半～高台部の破片で，色調は黄褐色を呈する。

土師器皿（20） 口径20.0cm，底径16.6cm，器高2.3cm。底部は回転ヘラケズリ，体部外面は回転ヘラミガキで調整する。色調は明赤褐色を呈する。

土師器高坏（21・22） 脚部の破片で，21は脚端部を残す。共に脚部にシボリの痕跡が見られる。色調は共に赤褐色を呈する。

ＳＸ4082出土土器（Fig.63，PL.41）

須恵器蓋（23） ツマミを持ち，口縁端部を下方へ折り曲げる形態。口径20.6cm，器高4.1cm。

須恵器坏（24） 口径12.2cm，高台径8.8cm，器高3.8cm。やや外反する高台を持つ。

須恵器甕（25） 口径18.2cmの口縁部から肩部にかけての破片で，肩部外面には格子目タタキ，内面には青海波の当て具痕を残す。

土師器甑（26） 甑の把手の部分。長さ６cm以上もある大きな把手で甑自体もかなりの大型と思われる。黄褐色を呈する胎土で，砂粒を多く含む。

ＳＸ4084出土土器（Fig.64，PL.41）

須恵器蓋（1） ツマミを残し，口縁端部をわずかに折り曲げる形態で，口径15.6cm，器高2.5cm。内面はやや平滑で，転用硯の可能性も考えられる。

須恵器甕（2） 口縁端部が湾曲して開き，端部を丸く収める。口径26.2cm。

ＳＸ4087出土土器・陶磁器（Fig.64，PL.41・42）

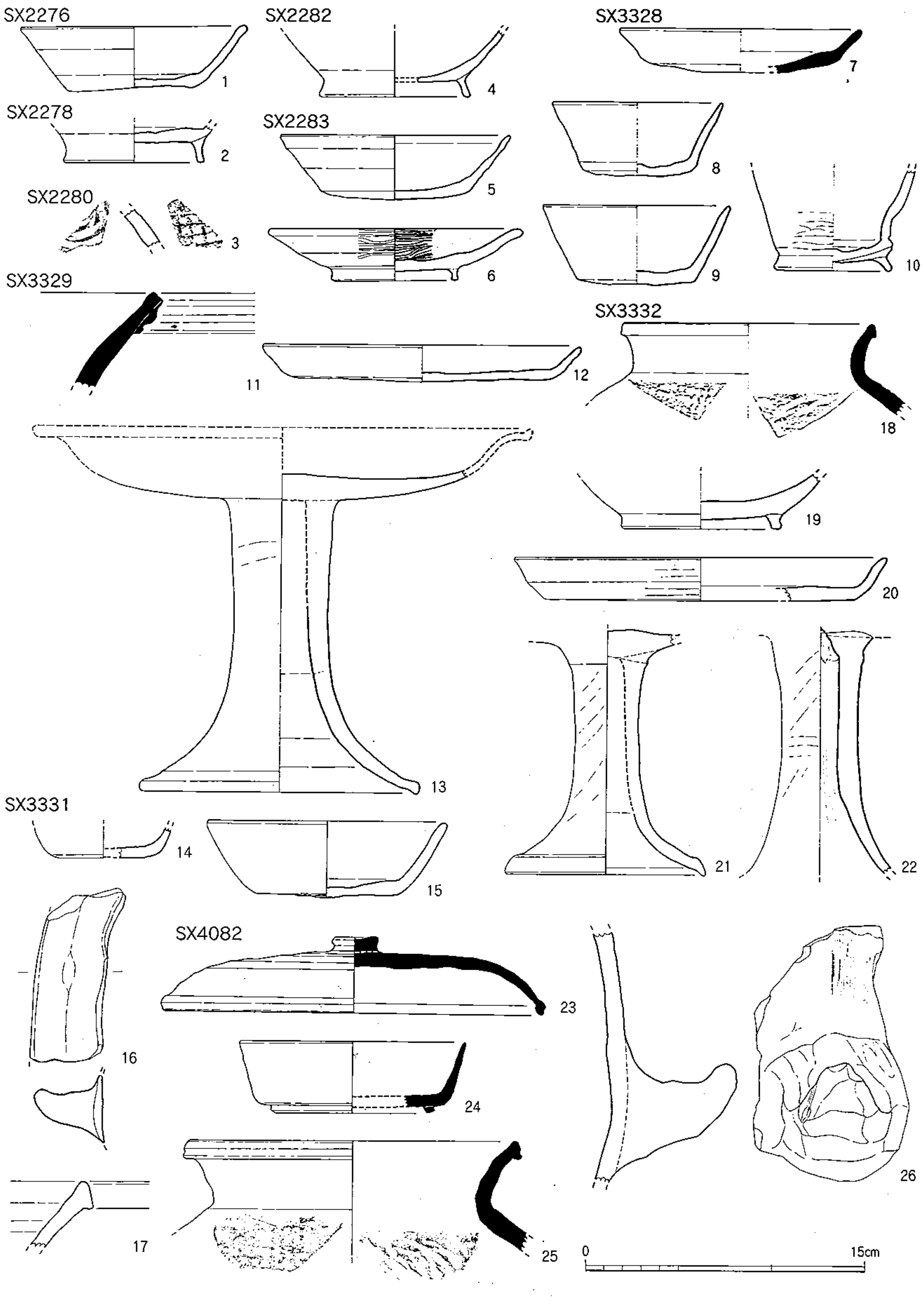


Fig.63　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（11）（1/3）

須恵器蓋（3～6） いずれも口縁端部を折り曲げる形態で，口径13.0～15.0cm。4の内面の一部には擦れて平滑になっている箇所があり，転用硯の可能性もある。

須恵器坏（7～9） いずれも高台を持つ形態で，7は大きく外反する古い形態の高台を持つ。8・9は完形に復元できるもので，口径11.2～14.8cm。

須恵器甕（10～12） いずれも口縁部～肩部にかけての破片で，肩部外面にわずかに平行タタキを残す。口径17.8～53.4cm。12はかなりの大型品。

土師器坏（13・14） 口径12.6～12.8cm，底径7.9～8.2cm，器高2.9cm。底部糸切り。

土師器椀（15） 体部～高台部分の破片で，高台径9.2cm。底部はヘラ切り未調整。

土師器高坏（16） 脚部片で，内外面共にシボリ痕跡が明瞭に残る。

土師器甕（17・18） 17は口径27.6cmの大型品。口縁部を水平近くまで外側へ屈曲させる。18は17よりも大型品の破片で，形状は17に類似するが，口縁部外面に刻目を入れている。

青磁小碗（19） 越州窯系で口縁端部が内湾する形態のもの。口径10.6cm。

灰釉陶器壺（20） 平底の底部片で，底径15.0cm。外面に緑灰色の釉がかかる。

2）主要層位出土土器・陶磁器

32次暗灰色土出土土器・陶磁器（Fig.65，PL.42）

須恵器蓋（1～3） いずれもツマミを残し，口縁端部を下方へ折り曲げる形態のもので，口径15.0～15.6cm。

土師器小皿（4～8） 口径9.4～11.3cm，底径7.2～9.4cm，器高0.8～2.1cmで，全て底部ヘラ切り。7は極端に口縁端部が内湾する。8は丸底に近い。

土師器皿（9～11） 全て高台を持ち，托の形状を呈するもの。口径11.8～12.6cm。

土師器坏（12～15） 口径12.0～15.1cm，底径6.4～11.8cm，器高2.4～3.4cm。全て底部はヘラ切りと見られる。

土師器小壺（16） 小型の短頸壺で，肩部で鋭く屈曲する。口径9.0cm，底径6.1cm，器高6.6cm，胴部径10.6cm。底部は回転ヘラケズリ調整と見られる。

灰釉陶器壺（17） 口縁端部の小片と見られ，暗緑灰色の釉がかかる。灰白色の胎土。

白磁碗（18） 口縁端部を水平に外反させ，体部外面に櫛描文が見られるV-3・b類。

青磁碗（19・20） 共に越州窯系で，19は褐灰色の胎に黄緑灰色の釉が全体にかかる。20は口縁端部を水平に外反させる形態で，口縁部に1箇所のみ輪花らしきオサエが見られる。

黄釉褐彩陶器水注（21） 把手の部分の破片で，把手には2本沈線が入る。オリーブ灰色の釉が外面にかかる。内面は褐色の露胎。長沙窯系のものである。 長沙窯系

褐釉陶器蓋（22） 落とし蓋の形態をしており，上面に黒褐色の釉がかかり，下面は暗灰褐色の露胎。Fig.68-64の水注瓶の蓋とも考えられるが，確実ではない。

高麗青磁碗（23・24） 端反状になる口縁端部の小片で，形状や濁緑灰色もしくは暗緑色の釉調などから高麗産と考えられる。24の口径は12.4cmで内面に目跡と鉄斑が見られる。

無釉陶器壺（25～28） いずれも外面にタタキの後にヨコナデが施され，内面には凹凸の激しいヨコナデ調整が見られる。表面は灰色もしくは暗灰色，胎土内部はチョコレート色か明褐色で，形状や色調から高麗産と思われる。25・26は体部の小片だが，27・28は底部が残る。

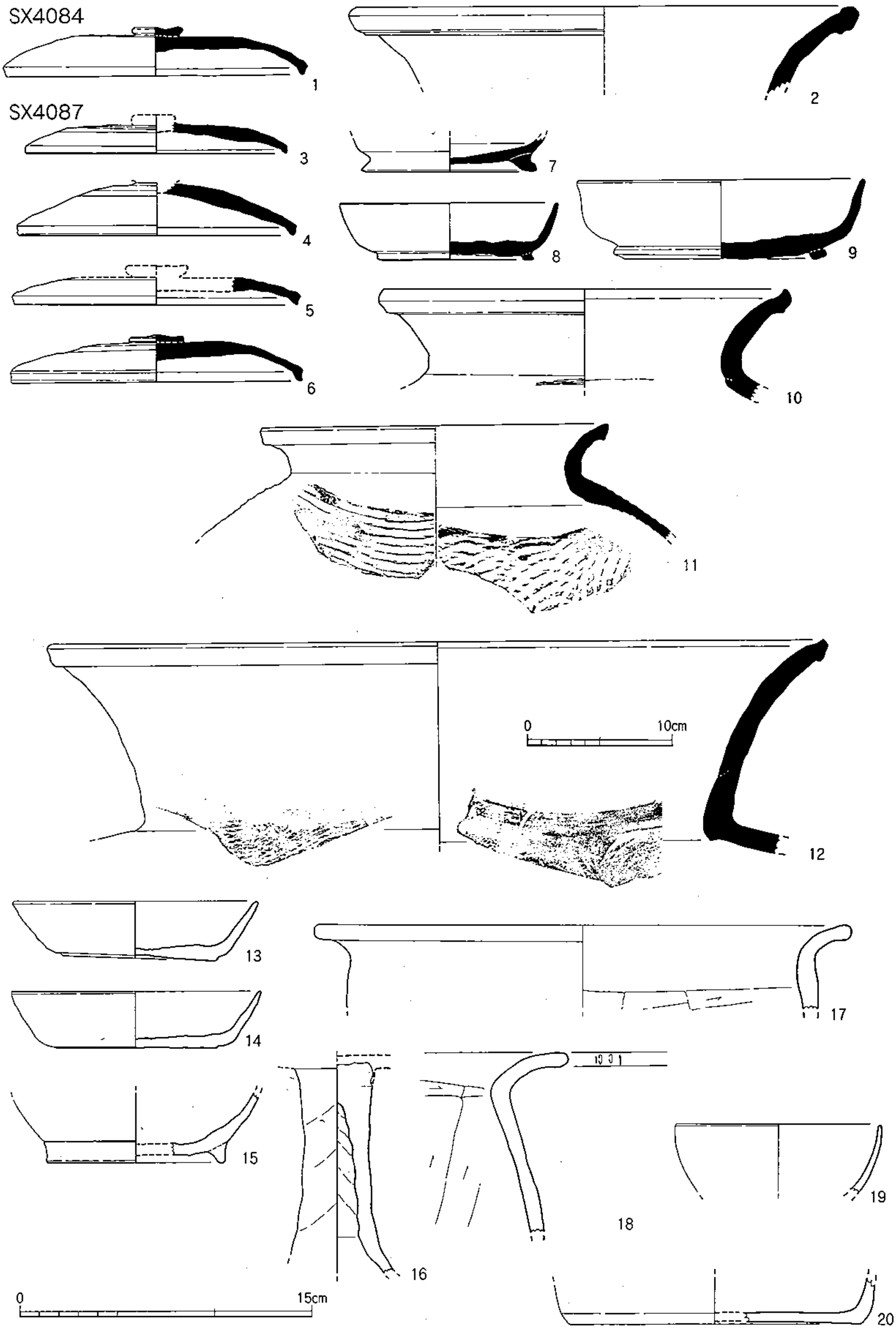


Fig.64　主要遺構出土土器・陶磁器実測図（12）（1/3・1/4）

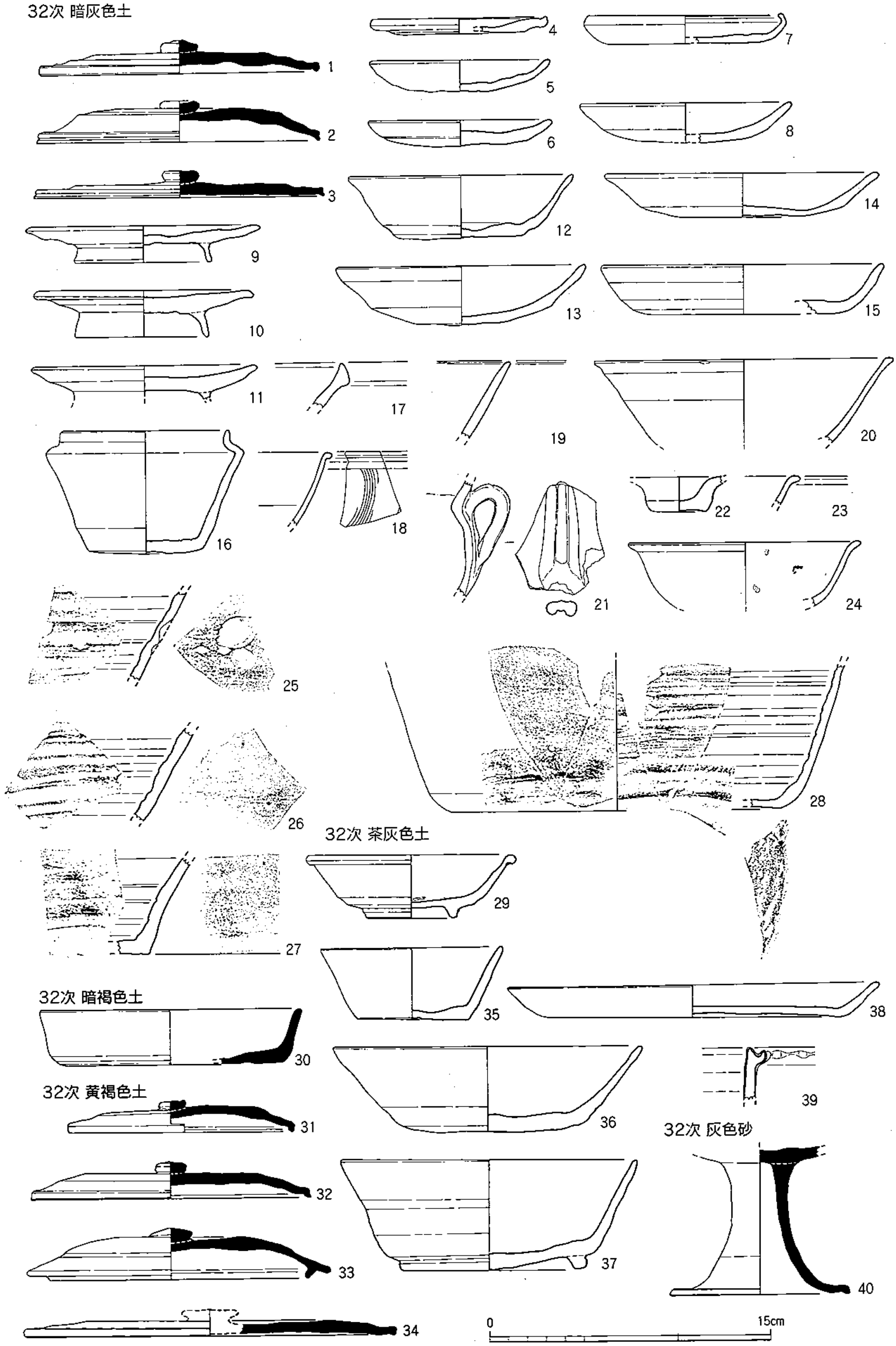


Fig.65　主要層位出土土器・陶磁器実測図（1）(1/3)

27は体部と底部との間に明瞭に屈曲があるのに対し，28はやや丸みを持って底部に移行する。

32次茶灰色土出土陶磁器（Fig.65，PL.42）

青磁碗（29）　口縁端部を端反状に外反させて丸く収める形状で，口径11.3cm，高台径4.9cm，器高3.4cm。見込みには胎土目が残る。形状や釉調から高麗青磁である。

32次暗褐色土出土土器（Fig.65）

須恵器坏（30）　高台を持たない平底の形状のもので，口径14.0cm，底径12.7cm，器高3.0cm。

32次黄褐色土出土土器・陶磁器（Fig.65，PL.42）

須恵器蓋（31～34）　いずれもつまみを残すが，31・32・34は口縁端部を折り曲げる形態であるのに対し，33は口縁部にかえりをもつ。口径12.1～19.9cm。

土師器坏（35～37）　35は口径9.7cm，底径5.9cm，器高3.9cmの小型品。36は口径16.5cm，底径10.1cm，器高4.6cm。底部はヘラ切り。37は高台を持つ形態で，口径15.9cm，高台径9.9cm，器高5.9cm。底部は回転ヘラケズリと見られる。

土師器皿（38）　口径19.9cm，底径15.6cm，器高1.8cm。底部は回転ヘラケズリで調整するもので，扁平な形状である。この皿は，同一層位の小ピットから出土した。

青磁壷（39）　口縁端部が波状に形成されるあまり見ない形状で，器種についても確実ではない。灰色の胎に濁青緑色の釉がかかり，釉調などから越州窯系としておきたい。

32次灰色砂出土土器（Fig.65，PL.42）

須恵器高坏（40）　坏部分を欠く破片で，脚端部は極端に外反して端部を下方へ折り曲げる。脚部径は9.6cm。色調は灰色を呈する。

80次暗褐色土出土陶磁器（Fig.66，PL.43）

青磁碗（1）　体部から底部にかけての破片で，高台径6.8cm，全面に緑灰色の釉がかかり，見込みに白色の大きな目跡が見られる。釉調や高台の形態から，高麗青磁と見られる。

80次暗茶色土出土土器（Fig.66，PL.42）

須恵器坏（2）　高台がつく形態で体部が外反する。口径14.2cm，高台径9.4cm，器高4.0cm。

土師器小皿（3）　口径9.7cm，底径7.4cm，器高1.5cm。底部はヘラ切り。

80次茶褐色土出土土器・陶磁器（Fig.66，PL.42・43）

須恵器蓋（4）　ツマミを持ち，口縁端部をわずかに折り曲げる。口径10.6cm，器高1.9cm。

灰釉陶器甕（5）　口径16.9cmの口縁～肩部にかけての破片で，緑褐色の釉がかかる。肩部外面には縦方向の平行タタキ，内面には青海波文の当て具痕が残る。

青磁碗（6）　緑灰色の釉がかかる越州窯系の口縁部の破片。口縁端部が端反状となる。

80次黒灰色土出土土器・陶磁器（Fig.66，PL.42・43）

土師器坏（7）　口径11.8cm，底径7.4cm，器高2.8cmで底部はヘラ切り。

土師器皿（8）　口径15.2cm，底径12.4cm，器高1.55cm。底部はヘラ切り。

土師器鉢（9）　三足の脚がつく形態で，赤褐色を呈する。内面にはヘラミガキが見られる。外面底部には回転ヘラケズリが見られ，火鉢のような用途が考えられる。

無釉陶器壺（10）　外反する口縁端部で表面は灰色，胎土内部は暗褐色。高麗産と思われる。

80次灰褐色土出土土器・陶磁器（Fig.67～69，PL.43・44）

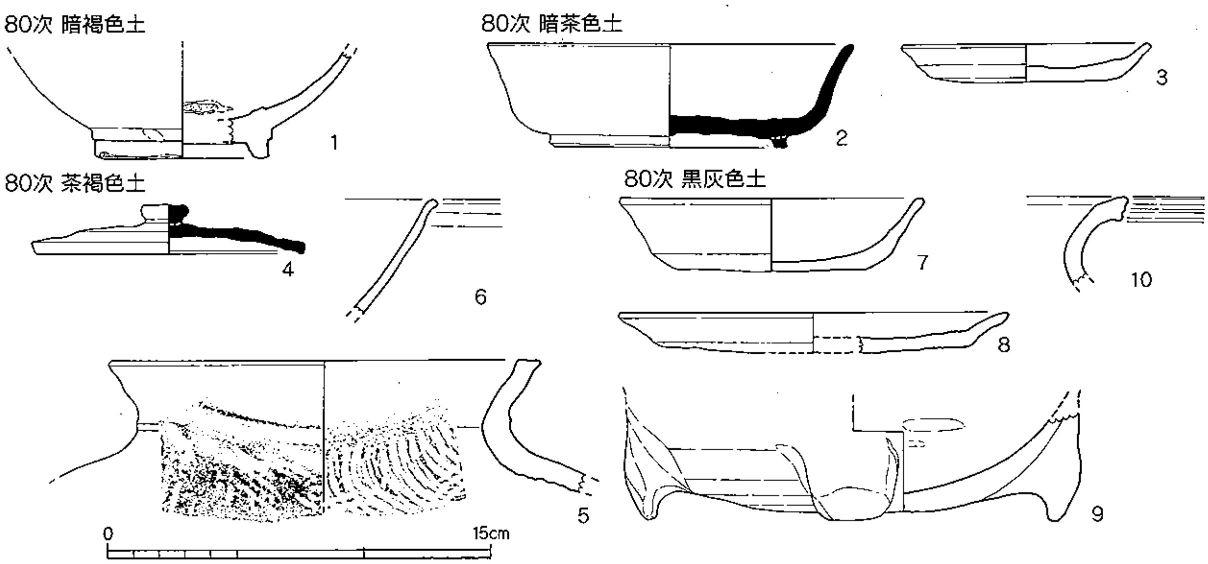


Fig.66　主要層位出土土器・陶磁器実測図（2）（1/3）

須恵器蓋（1～4）　いずれも口縁端部を下方へ折り曲げる形態のもので，口径11.0～19.1cm。3の内底部には×印のヘラ記号が確認できる。

須恵器皿（5・6）　口径14.2～17.6cm，底径10.1～12.0cm。底部は回転ヘラケズリで調整する。5はほぼ完形に近い資料で，灰色の色調で焼成は良好。

須恵器坏（7）　口径13.4cm，高台径9.9cm，器高4.4cm。高台は靴形に踏ん張る形態。

須恵器椀（8）　口径14.9cm，高台径9.7cm，器高8.5cm。高台は高く，強く外反する形態。

須恵器壺（9）　長頸壺の頸部の破片で，頸部下半に1条の沈線が巡る。

須恵器甕（10）　口径40.9cmに復元される大型品で，口縁部は上方へ屈曲し，端部でさらに内湾する形態となる。頸部以下は欠損する。

土師器皿（11～22）　11～19は寸法が似通っており，口径13.3～15.7cm，底径10.0～11.5cm。18の内面にはヘラケズリ調整が見られる。いずれも底部ヘラ切り。20～22は大型で，口径19.1～19.4cm。22の内外面には回転ヘラミガキが見られる。底部は回転ヘラケズリで調整する。

土師器小皿a（23・24）　口径9.1～10.4cm。底部ヘラ切り。

土師器小皿c（25～27）　高台を持つ形態で，口径10.0～10.9cm。27は托。底部ヘラ切り。

土師器坏（28～36）　口径が9.2～15.1cmとばらつきが大きい。29・34～36は丸底状を呈する。時期的な差も大きいが，全て底部ヘラ切り。

土師器椀（37）　口径15.0cm，高台径8.3cm，器高5.9cm。底部はヘラ切りで板状圧痕あり。高台の断面は逆台形状で，あまり大きくない。

土師器壺（38）　底径6.5cmの平底状で，体部は垂直に立ち上がる。器壁は厚く，胎土も粗い。類例に乏しく，全体的な形状については不明である。

土師器鉢（39）　平底の底部に高さ約3cmの脚が付く形状で，体部外面下位に横方向のケズリ，内面上位には横方向のヘラミガキ調整。これも類例に乏しく全体的な形状は不明。

黒色土器椀（40）　内外面共に黒色に燻すB類。口径16.3cm，高台径6.6cm，器高5.5cm。高台は断面逆三角形状で小さい。体部内外面には細かいヘラミガキ調整が見られる。

灰釉陶器椀（41）　体部から高台部にかけての破片で，釉は残存しないが，灰白色の精良な胎土で作られていることや形状から灰釉陶器と考えられる。高台径6.7cm。

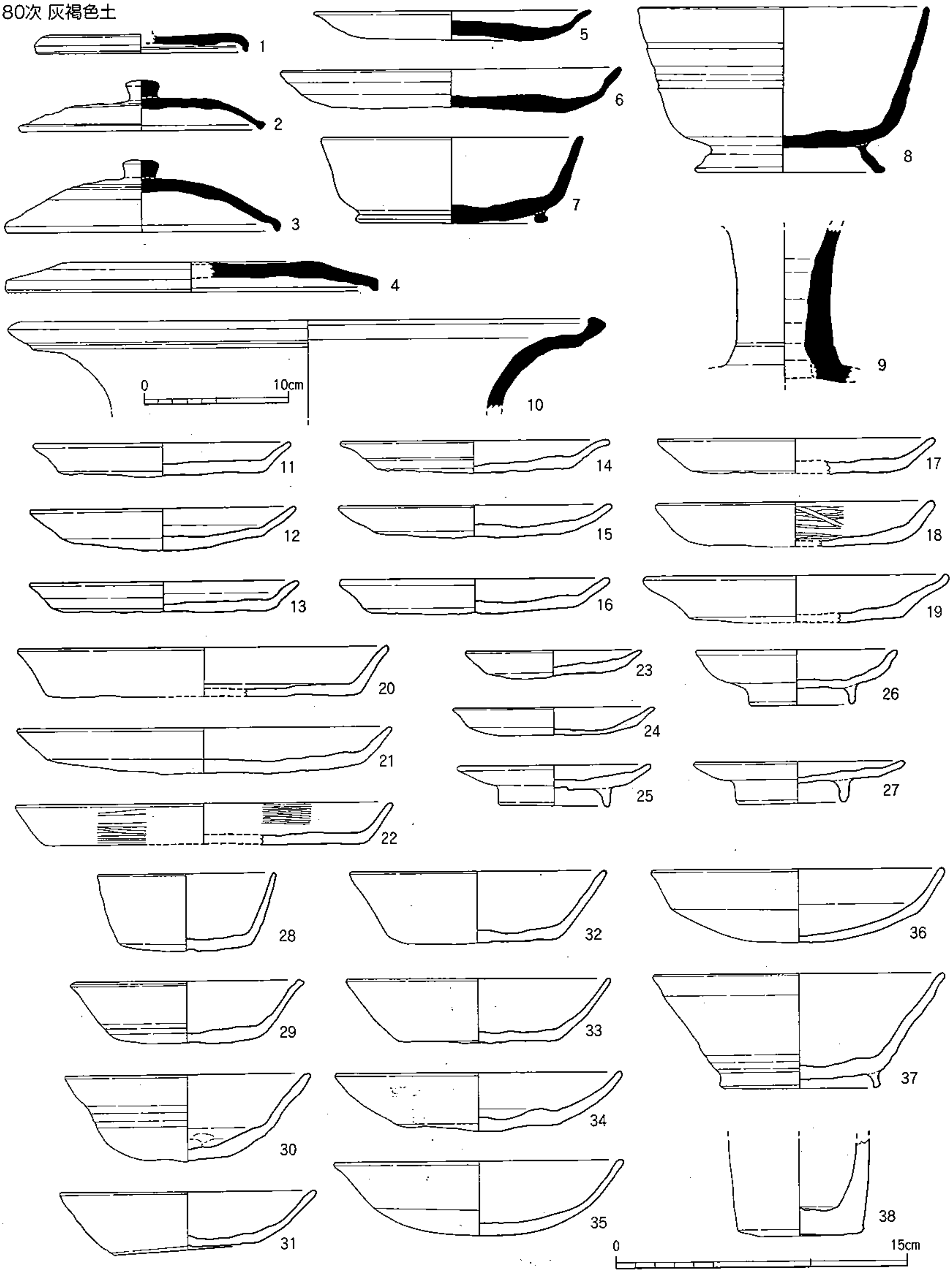


Fig.67　主要層位出土土器実測図（3）（1/3・1/4）

灰釉陶器壺（42・43） 42は底径8.6cmで平底状を呈する。底部には糸切り痕跡が残り，わずかに緑褐色の釉がかかる。43は体部片で，縦方向の把手と思われる貼り付けが見られる。灰白色の胎土に明緑灰色の釉が外面にかかる。

白磁碗（44～47） 44は蛇の目高台を持つⅠ類。今回報告する中では唯一の白磁Ⅰ類となる。45・46は底部片でⅣ類か。47は玉縁状の口縁端部を持つⅣ類。

青磁碗（48～61） 全て越州窯系のもので，48～56は底部を残す資料。48～50は全面施釉し，輪状高台をもつⅠ-２類。内面に白色の目跡を残すものが多い。50～56は外面下半部が露胎となるⅡ類で，51は輪状高台を持つⅡ-１類。52～55は上げ底風の形態のⅡ-2類，56は平底の形態のⅡ-３類。57～61は口縁部の破片で，57は口径15.0cmに復元できる。59は端反状に端部が外反する一方で，60は口縁端部が内湾するⅡ-２・ｄ類。これら図示可能な資料についてはなるべく掲載に努めた。

青磁皿（62・63） 越州窯系のものの内，碗にしては器高が低いものについては皿とした。62は通有の越州窯系に見られる暗緑色の釉がかかるが，63は明黄緑灰色の釉調で，越州窯系には余り見られない印象を受ける。

緑褐釉陶器水注（64） 把手部分と頸部～肩部にかけての破片で，淡灰色の胎に淡黄褐色の釉がかかる。内面は灰白色の露胎。頸部に１条の隆起帯が巡り，その釉だまり部分は灰青色の釉調となる。胴部はいわゆる瓜破形で，縦方向にヘラ押しが施される。

無釉陶器鉢（65） 中国製で口縁端部の内面に１条の隆起帯が巡る。灰色の胎土で無釉。

高麗青磁碗（66～68） 66・67は底部片で，見込みに白色の大きな目跡が残る。緑灰色の釉がかかる。68はやや内湾する口縁端部片で，口径11.0cm。緑灰色の釉がかかる。

高麗青磁壺（69） 小型の壺か瓶の胴部で，緑褐色の釉薬が内外面共にかかる。釉調から高麗青磁と考えられる。最大径10.6cm。

無釉陶器壺（70～81） 70～72は口縁部片。71・72は大型品の口縁端部で，外面には細かい格子目タタキ，内面には明瞭なヨコナデが見られる。胎土内部の色調が暗赤色。73は頸部付近の破片。表面は暗灰色，胎土内部は暗褐色を呈する。74・75は肩部付近の破片で，薄い器壁で外面はヨコナデ，内面には凹凸のはっきりしたヨコナデを施す。双方の外面には１条の沈線が巡る。胎土内部はチョコレート色。76～79は体部の小片。76は胎土・色調が74と同様であるのに対し，77～79は共に外面に細かい格子目タタキと内面にはタタキの後にヨコナデを施しており，様相が異なる。ただし，これらも胎土内部は暗赤色である。80・81は底部片で，80は底部のみの破片で，詳細は不明。81は底径14.0cmの平底状で，体部内面には凹凸の激しいヨコナデが施される。体部外面および内底部には黒色のガラス化した自然釉がべっとりと付着する。底部は未調整である。これらの無釉陶器については，形状・釉調・色調などから74～76，81は高麗産で間違いないと思われるが，それ以外については確証がないものの，いちおう高麗産として報告しておくこととする。

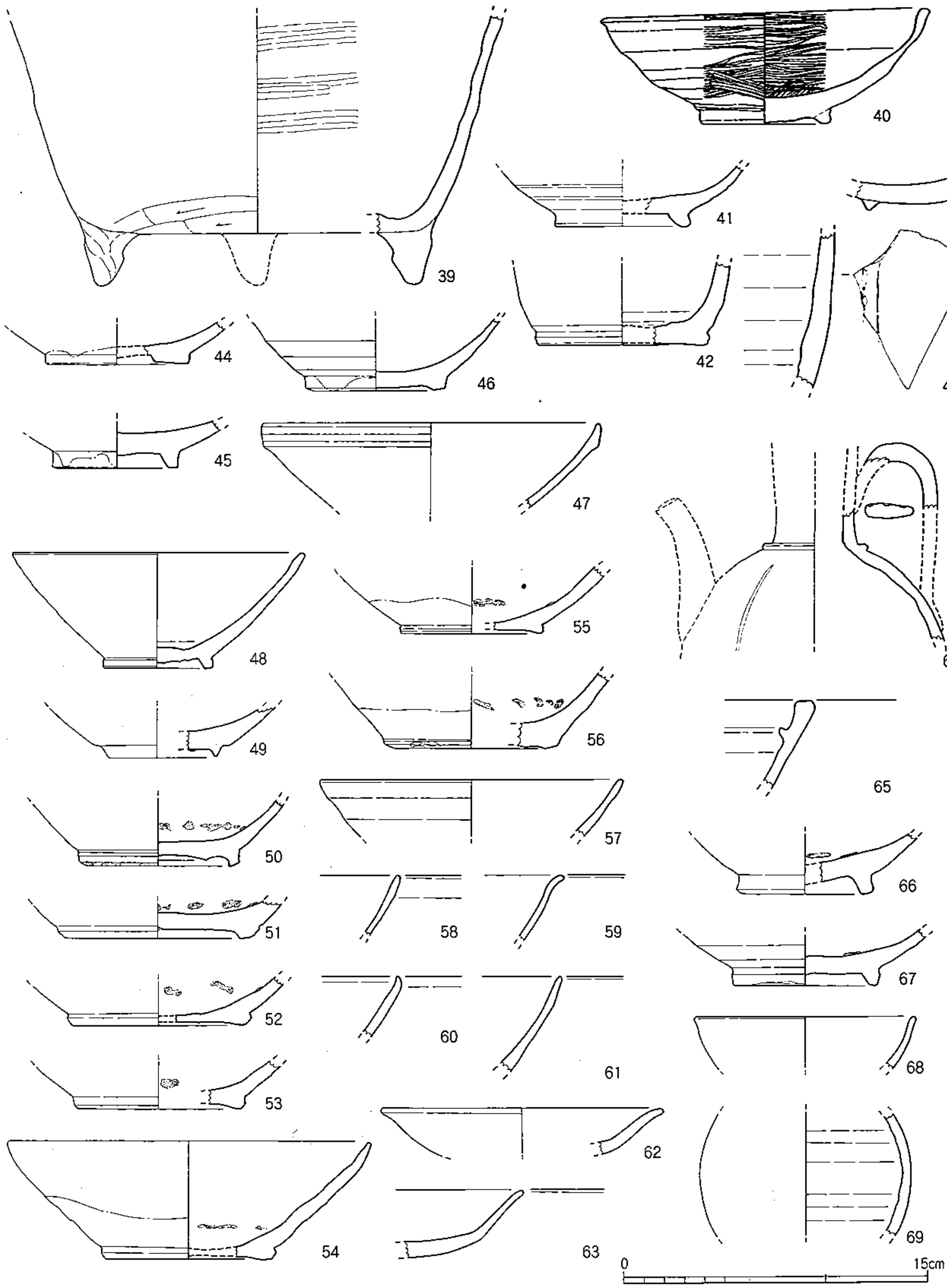


Fig.68　主要層位出土土器・陶磁器実測図（4）（1/3）

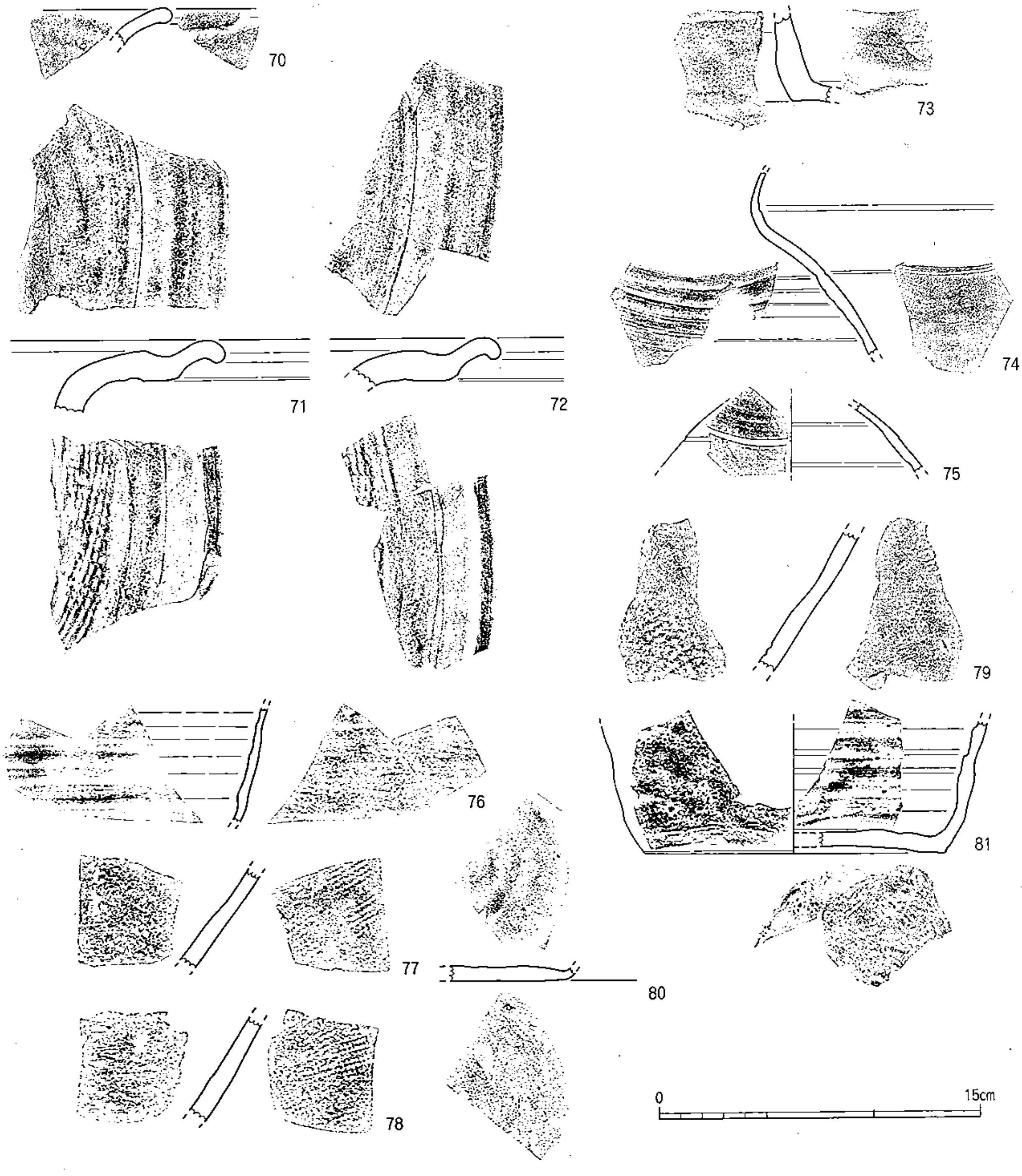


Fig.69　主要層位出土土器・陶磁器実測図（5）（1/3）

3）その他の遺構・層位出土土器・陶磁器

古代～中世の土器（Fig.70，PL.45）

須恵器蓋（1～16）　ほぼ完形に復元できるものを選択している。いずれもツマミを有し，口縁端部を折り曲げる形態。口径12.3～19.6cm。3のみがかえりを有する形態で，その他はすべて口縁端部を折り曲げる形態である。

須恵器坏（17～20）　全て断面逆台形状の高台を持つ形態で，口径11.5～14.4cm，高台径9.1～14.0cm。17・18は器高に比して径は小さく，小型の印象を受ける。

須恵器盤（21）　断面方形状の高台を持つ形態で，非常に大きな口径を有するが復元できる

ほどは残存していない。全体をヨコナデで仕上げる。

須恵器甕（22・23）　22は口縁端部を上方へ折り曲げる形態で，口径38.0cm。外面肩部には平行タタキ，内面には青海波の当具痕を残す。23は胴部片で，外面に格子目タタキ，内面には車輪状の当具痕を残す。珍しい当て具痕のため掲載した。

土師器皿（24）　口径13.1cm，底径8.8cm，器高2.2cm。底部はヘラ切り。内面は摩滅。

土師器坏（25・26）　25は口径15.2cm，器高3.6cmで，16は口径15.5cm，器高2.8cm。底部は共に丸底でヘラ切り。

土師器椀（27～29）　いずれも底部ヘラ切りで，外反する高台を持つ形態。口径12.4～15.0cm。27の体部内外面には回転ヘラミガキの調整痕跡が明瞭に残る。

古代の国産陶器（Fig.70，PL.45）

緑釉陶器椀（30・31）　30は低い高台を持つ形態で，底部に糸切り痕を明瞭に残す。褐色の土師質の胎土に濃緑色の釉がかかる。79次出土。31は断面逆三角形を呈する高台を持つ形態。高台径6.5cmで底部露胎。胎土は暗褐色の土師質で，緑色の釉がかかる。

灰釉陶器皿（32）　断面長方形を呈する高台を持つ形態で，高台径8.8cm。残存する外面は露胎で，内面には明緑灰色の透明釉がかかる。胎土は白っぽい明褐色を呈する。

灰釉陶器椀（33）　口縁部の破片で，端部を外反させる。灰色の須恵質の胎土に透明の釉がかかる。口径が復元できるほど残存していない。

灰釉陶器折縁深皿（34）　口縁部付近の小片で，端部が外側に屈曲する部分のみが残る。明緑色の釉がかかる。釉調や形態から見て，14世紀頃の瀬戸産の可能性がある。

灰釉陶器壺（35・36）　35は高台径7.7cmと小型だが，高台はしっかりしているとともに，内底部には凹凸の激しいロクロ痕跡があり，壺と考えられる。白色の胎土で，外面の一部に透明の釉薬が残存する。36は口縁部～肩部にかけての破片で，灰白色の胎土に濃緑色の釉がかかる。肩部にはタタキを残す。口径18.0cm。

中国製陶磁器（Fig.70・71，PL.45・46）

白磁皿（37・38）　37は底部をわずかに高台状に削り出し，体部を若干内湾気味にし，内面無文のⅦ-１・a類。体部は露胎。38は口禿で，青白色の釉が底部までかかるⅨ-１・a類。

白磁碗（39～46）　39・40は共にⅡ類で，39は平たい玉縁，40は小さい玉縁の口縁端部を呈する。41は底部露胎で，低い台形状の高台を削り出し，内面に沈線を巡らすⅣ-１・a類。42～46は口縁端部が外反し，高い高台を持つⅤ類。底部は露胎。46の外面には櫛描きの施文が見られるⅤ-３・b類。

白磁壺（47）　四耳壺の肩部と思われる。外面には青白色の釉がかかる。内面は露胎。

白磁蓋（48）　小片で全形が想定しづらいが，かえりを有する蓋と考えられる。上面以外は露胎。時期は不明だが，釉調から他の白磁とさほど変わらないものと考えられる。

青白磁碗（49）　口縁端部の小片で，端部に輪花が施される。薄い器壁で，全体に青白色の釉がかかる。

青白磁梅瓶（50）　体部下半の破片で，外面に渦巻文が施される。外面には水色の釉がかかり，内面は露胎で白色を呈する。

青白磁蓋（51）　合子の蓋で，草花文の浮文と線刻が見られる。内面は一部露胎。

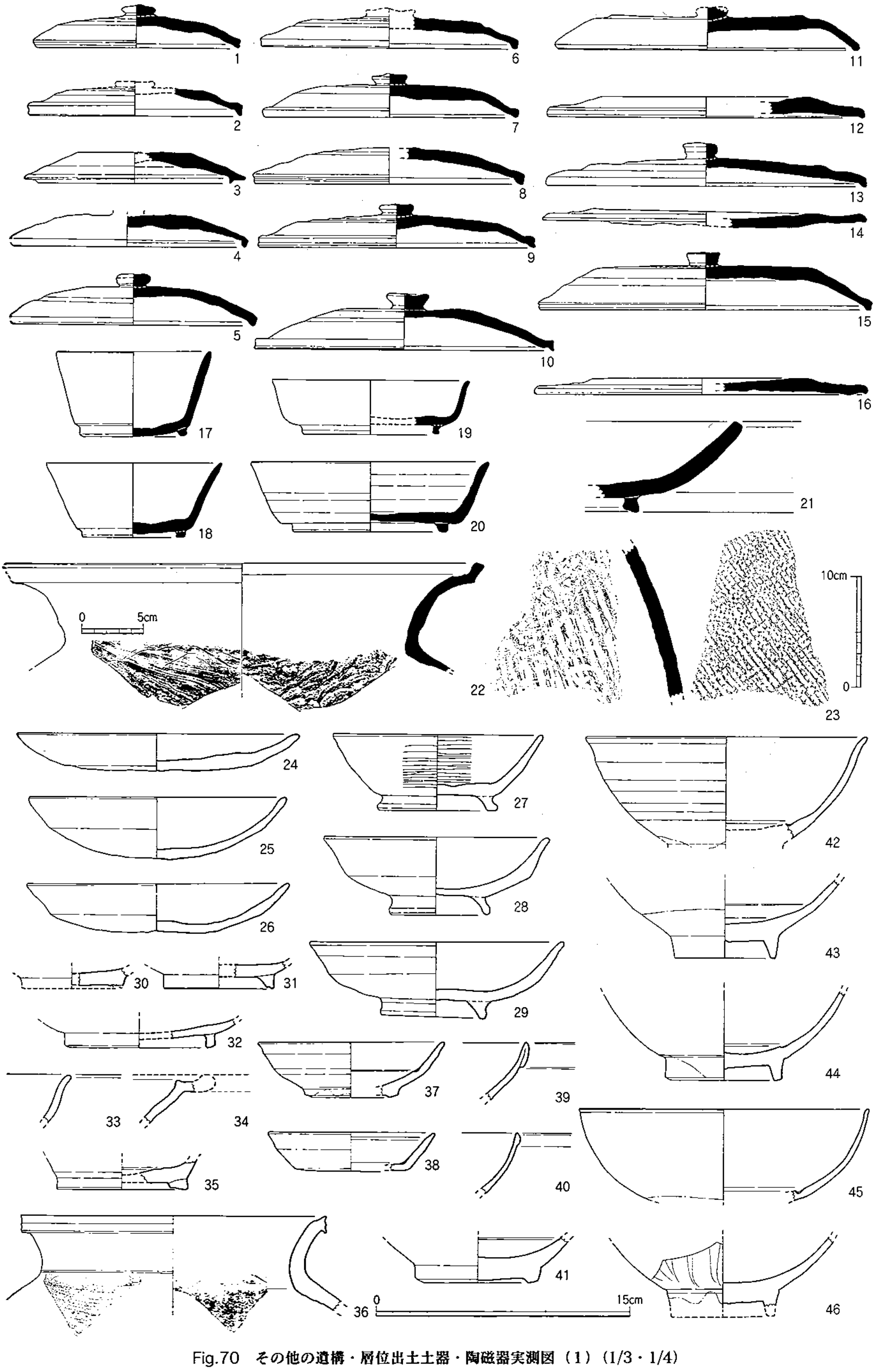


Fig.70 その他の遺構・層位出土土器・陶磁器実測図（1）（1/3・1/4）

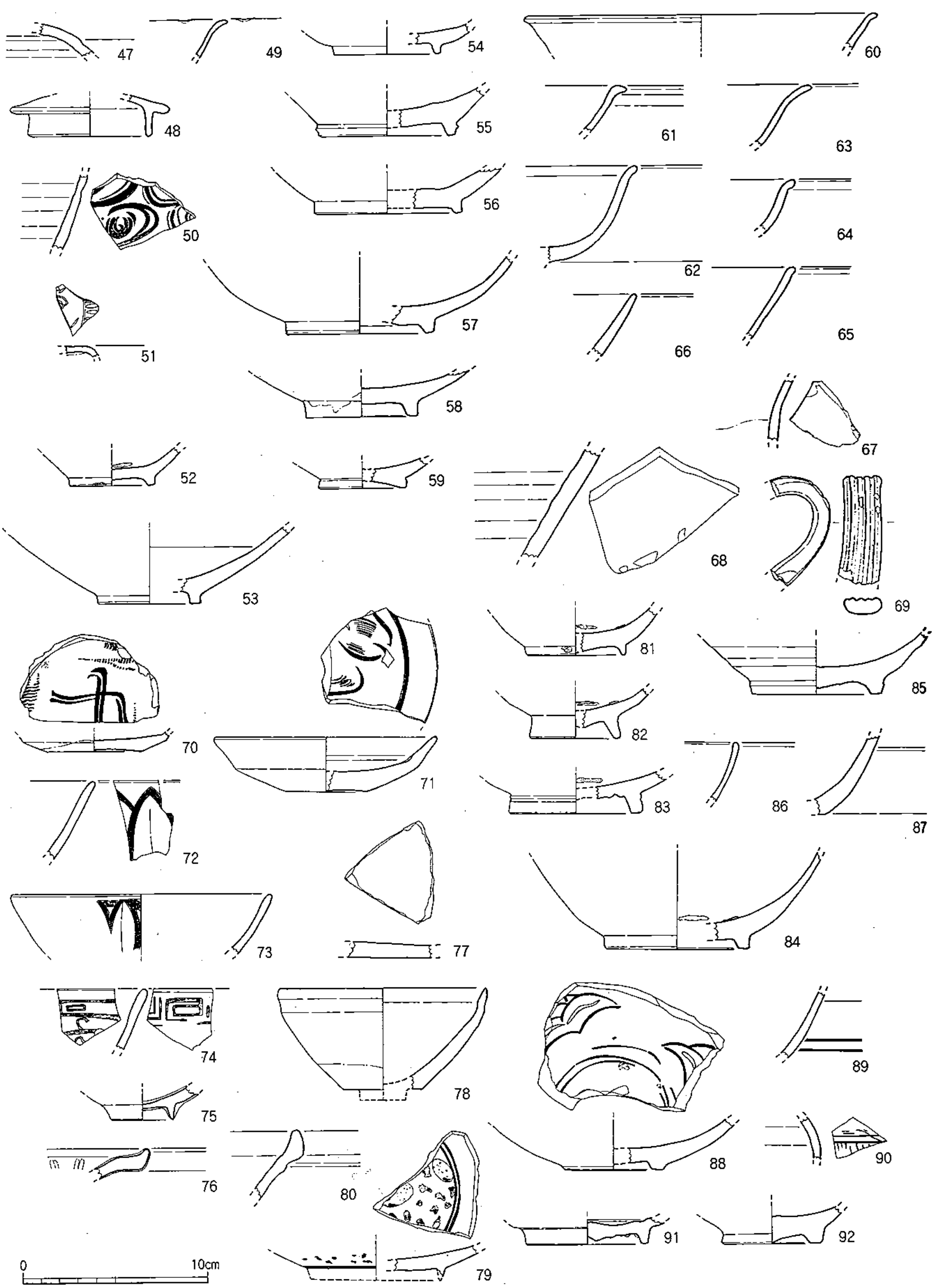


Fig.71　その他の遺構・層位出土陶磁器実測図（2）（1/3）

越州窯系青磁碗（52 ～ 66） 52 ～ 59は高台部を残し，高台径の復元が可能なものを掲載した。52･53は輪状高台でかつ全面施釉のⅠ - 2類である。共に透明で光沢のある釉がかかる。54 ～ 59は底部露胎となるⅡ類。大半が輪状高台のⅡ- 1類。内底部に目跡を残すものが多い。60 ～ 66は口縁端部の破片で，60は口径19.0cmに復元できる大型製品の小片。62は形状は16世紀代の端反の白磁碗にも見えるが，釉調から越州窯系と考えておきたい。端部を外反させる形態のものが多い。65は暗緑色の釉調から高麗青磁の可能性もある。

越州窯系青磁壺（67･68） 67は頸部の小片。外反する様子が分かる。68は体部下半の破片。厚みからかなりの大型品と考えられる。

越州窯系青磁水注（69） 把手部分。外面に３本の沈線が施される。濁った暗緑灰色の釉がかかる。胎土も内部に空隙があるなど，やや粗製の観も否めない。

青磁皿（70・71） 70は同安窯系。底部露胎で，見込みに文様を有するⅠ - 1・b類。71は龍泉窯系で，見込みに櫛描きの文様が入るⅠ - ２・c類。底部は釉を掻き取る。

龍泉窯系青磁碗（72 ～ 75） 72・73は外面に鎬蓮弁が施されるⅠ - ５・ｂ類。74は内外面に雷文が入る上田分類のC-Ⅱ類で14世紀末～ 15世紀初頭にあたる。75は非常に小さい径の高台に濃緑色の釉が厚くかかる。太宰府市分類のⅣ類にあたる。

青磁盤（76） 口縁端部の小片で，端部を外反させた後に垂直に引き上げる。白濁した緑色の釉だが，形状から龍泉窯系である。内面にはわずかにヘラ押しによる施文が見られる。

黄釉陶器盤（77） 底部の小片で，内面にあたる上面には黄白色の釉がかかる一方で，外面は露胎で暗灰色を呈する。磁竈窯系の大型盤である。鉄絵などの施文は現状では認められない。

黒釉陶器天目茶碗（78） 口径11.2cmに復元できる破片で，外面体部下半以下は露胎。黒色で気泡の入った釉がかかる。

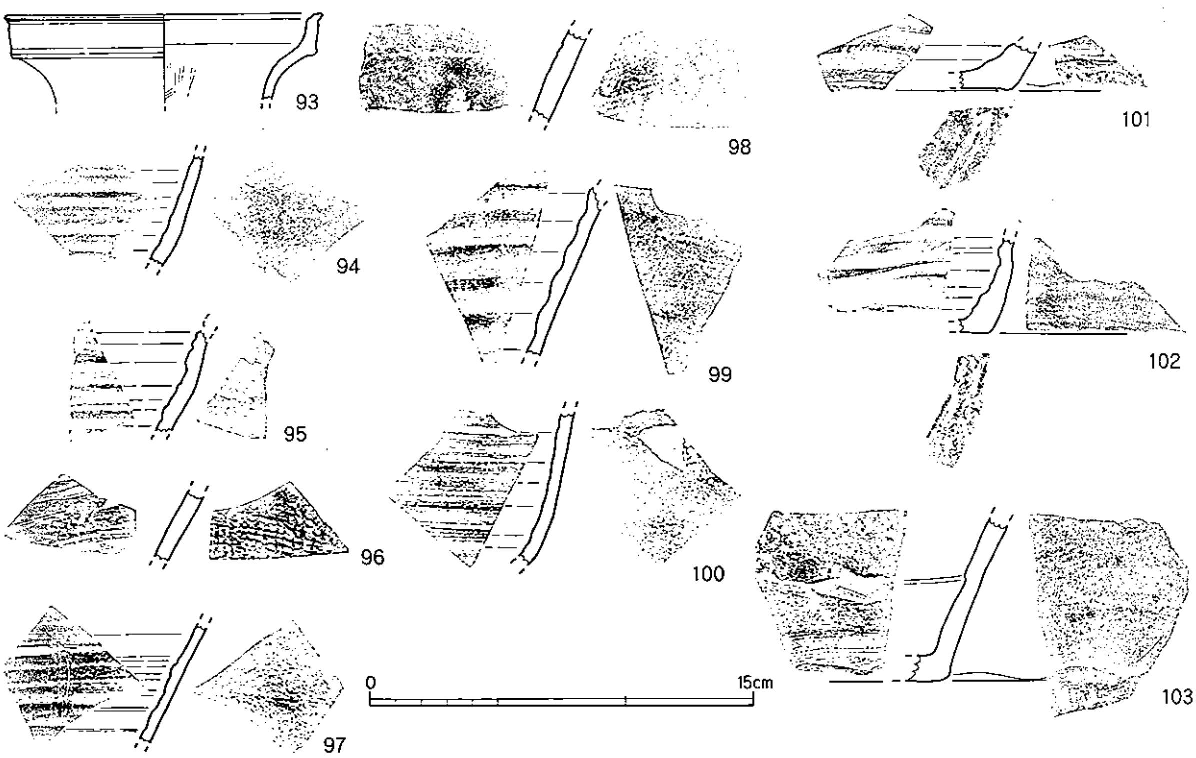


Fig.72 その他の遺構・層位出土陶磁器実測図（3）（1/3）

染付皿（79）　内外面に斑点状の施文がなされ，特に内面はイチジク状の施文となる。外面には１条，内面には２条の圏線が巡る。高台は先端が欠損しているが，細く仕上げられる。小野分類の皿B群にあたり、15世紀後半～ 16世紀に位置付けられる。

その他の国産陶器（Fig.71，PL.46）

須恵質土器鉢（80）　口縁端部を丸く仕上げるいわゆる東播系のこね鉢で，灰色の胎土。

朝鮮半島産の陶磁器（Fig.71・72，PL.46）

高麗青磁碗（81 ～ 87）　81 ～ 85はいずれも外反する高めの高台を持ち，底部中央が尖る高麗青磁の特徴を持つ。いずれも白色の目跡を残し，全面施釉で高台畳付部のみ釉を掻き取っている。86・87は口縁部・体部片で，暗緑色もしくは緑褐色の釉がかかる。

象嵌青磁碗（88・89）　88は低い高台を持ち，内面に黒色と白色で草花文の象嵌を施す。目を割り取った痕跡も見られる。89は体部片で，外面に３本の圏線が見られるのみである。

象嵌青磁壺（90）　小型の壺の肩部片で，白象嵌が見られるが，施文内容は不明。

象嵌青磁杯（91）　やや薄手の器壁で緑褐色の釉が全体にかかる。象嵌はないが，釉調と形態から，象嵌青磁の杯であると考えられる。

雑釉陶器碗（92）　全体に濁黄白色の釉がかかる。底部中央が隆起する。釉調や形状から李朝期の雑釉陶器であると考えられる。

無釉陶器壺・瓶（93 ～ 103）　推測も含め，高麗産と思われるものを掲載した。93は二重口縁の形態を呈する小型瓶の破片。口径12.4cm。94 ～ 100は体部片。101 ～ 103は底部片。94・95・97・99 ～ 102は内面が凹凸の激しいロクロ痕跡が見られ，外面はタタキをナデにより消している。明灰色あるい暗灰色や黒色の色調で，暗灰色・黒色のものは胎土内部が暗赤色を呈する。一方，96・98・102は，内外面に細かい格子目状のタタキをナデ消しており，暗灰色の胎土で，胎土内部が暗赤色を呈している。この一群は確実に高麗産とは呼べないが，前者に胎土や焼成が類似していることから，高麗産として参考までにあげておくこととする。

（3）石製品（Fig.73 ～ 76，PL. 47）

碁石（1～2）　１は直径約1.5cmの白色石材を研磨して製作する。２は直径約2.0㎝の河原石を用いており，端部を研磨して形を整えている。

石帯（3）　出土した石帯は帯の先端を飾る鉈尾に相当する。暗青色の地に白濁色がまだらに混じる蛇紋岩系の石材を素材とする。各面は丁寧な研磨により仕上げられ，光沢を放つ。裏面には帯への装着のための３対のかがり孔が，軸を揃えずに彫り込まれている。

石鍋（4～13）　4～8は口縁部付近の破片である。いずれも内面は平滑で，わずかにナナメ方向の工具痕跡が残る。４・５には方形状の取手が確認できる。５は外面をウロコ状

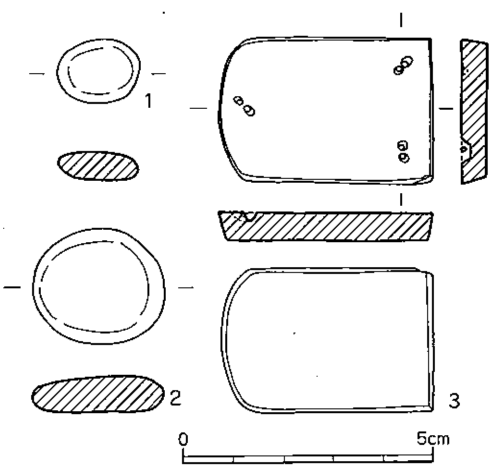


Fig.73　石製品実測図（1）（2/3）

に削り調整する。7は口縁端部に横方向の削りが部分的に施される。8の外面では調整単位が明瞭に識別できる。9～13は底部付近の破片である。9の外面には全面にススが付着しており，部分的に炭化物の付着が確認できる。また，10も外面にススの付着が見られる。9・10はともに内面の屈曲部に強い工具痕が残されている。11・12の外面にもススの付着が認められ，

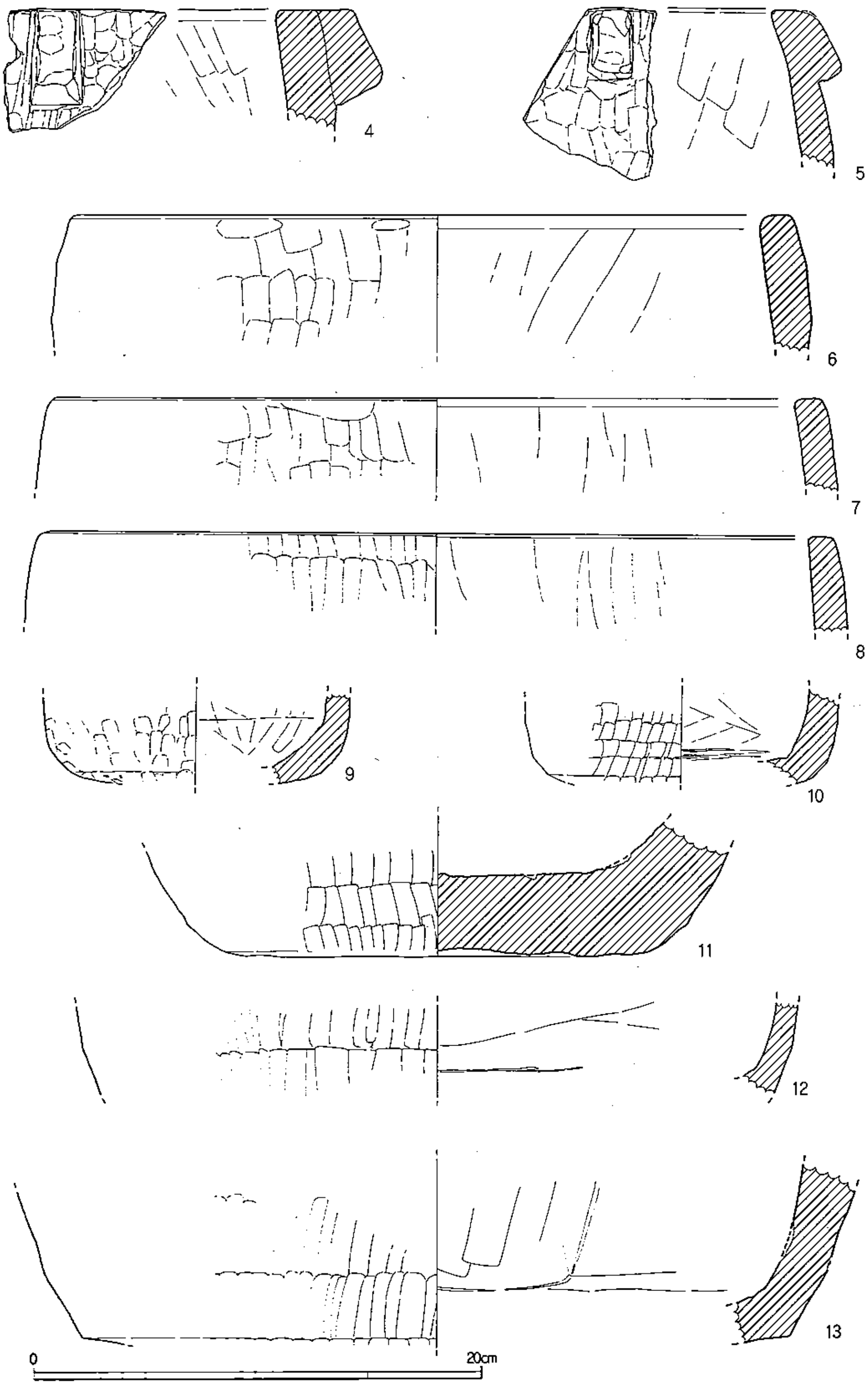


Fig.74　石製品実測図（2）（1/3）

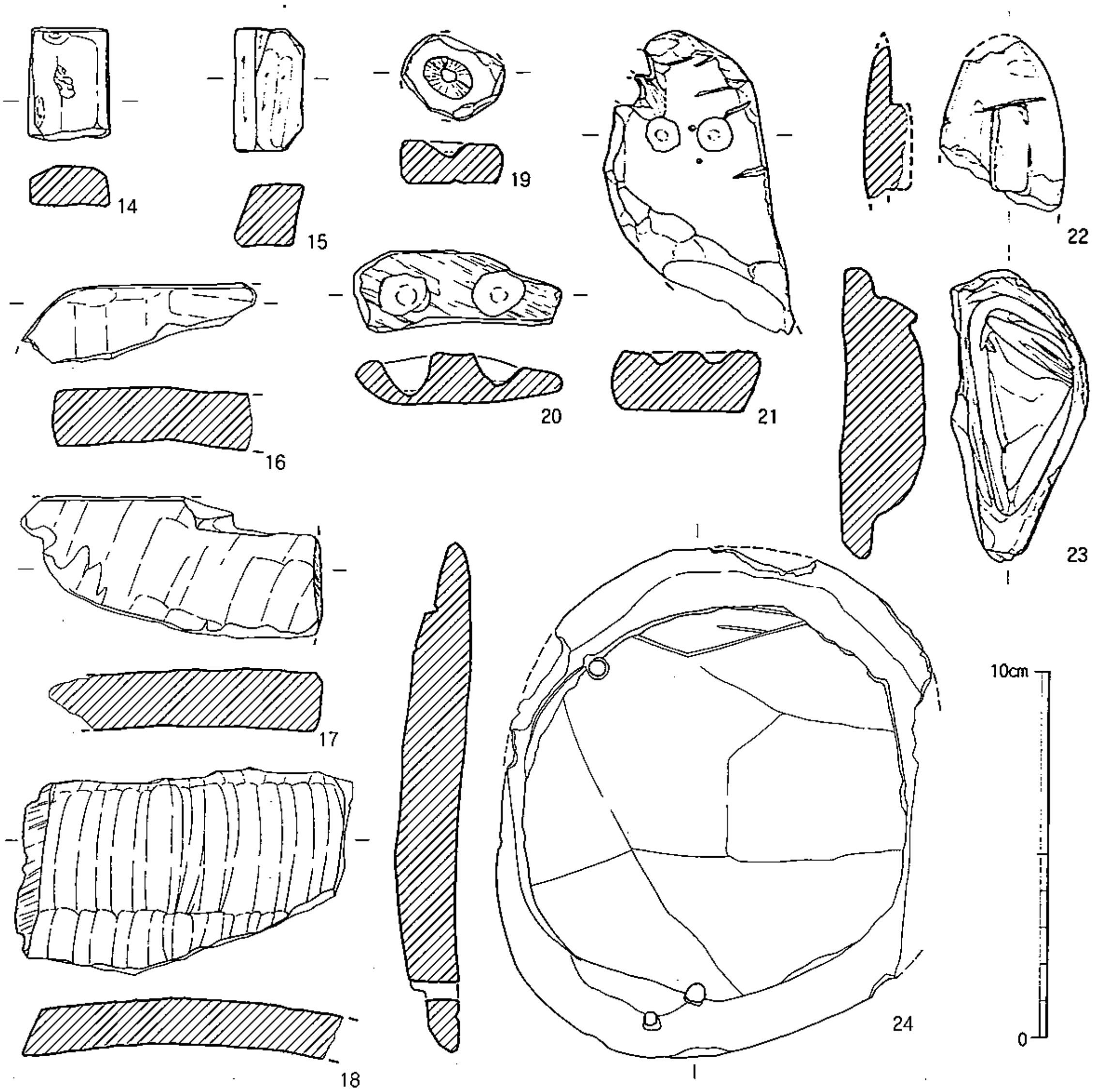


Fig.75　石製品実測図（3）（1/2）

12には炭化物も付着する。いずれも外面調整の調整単位が明瞭に確認できる。13も底部付近の破片で外面調整の調整単位の残りがとくに良い。ススの付着はとくに認められず，未使用の可能性がある。また，図示した以外にも胴部の断片が複数出土している。

石鍋転用品（14～24）　14・15は石鍋の取手部分を転用した方形状の破片で，用途は不明である。16～18は石鍋の胴部を板状に切り取ったもので，温石や小型転用品の素材として削られた可能性が高い。19・20は小型容器で，とくに20は二つ穿孔が並ぶため紅皿に利用した可能性がある。21も穿孔が二つ並んでおり，途中で製作を止めた未成品と思われる。22・23は把手や鍔部を取り込み，スタンプ状に加工したものである。22は体部裏面がゆるやかに湾曲するように平滑に砥ぎ出している。23は荒削りの段階で加工を中止した未成品と思われる。24は石鍋の底部を転用した石鍋補修用具で，外面にはススが厚く付着している。直径約15.0cmの略円形に削り出し，さらに外側端部のみ0.3cm前後削り落とすことで，中心部の直径11.0cmの範囲のみが隆起するような形状となる。直径0.5cmほどの穿孔が2つ対となった箇所が残存部に2箇所確認できる。その配置から本来は3箇所に対の穿孔がなされていたと考え

られる。この穿孔は容器との緊縛に利用されたと推測できる。

石器（25～29） 25は黒曜石製のスクレイパーである。両側縁端部に刃部加工をしている。26はサヌカイト製の石匙で主に片側のみを刃部加工する。27はサヌカイト製のスクレイパーで，二次的に刃部を加工した痕跡も見られる。28は珪質岩の二次加工剥片である。一側面のみに細かな微細剥離を複数確認できる。29は粘板岩を素材とした磨製の石槍で，下部に若干の茎部を有する。

砥石（30～36） 30と31は片岩系石材を略長方形状に加工し，主に中央部のみを研磨に利用

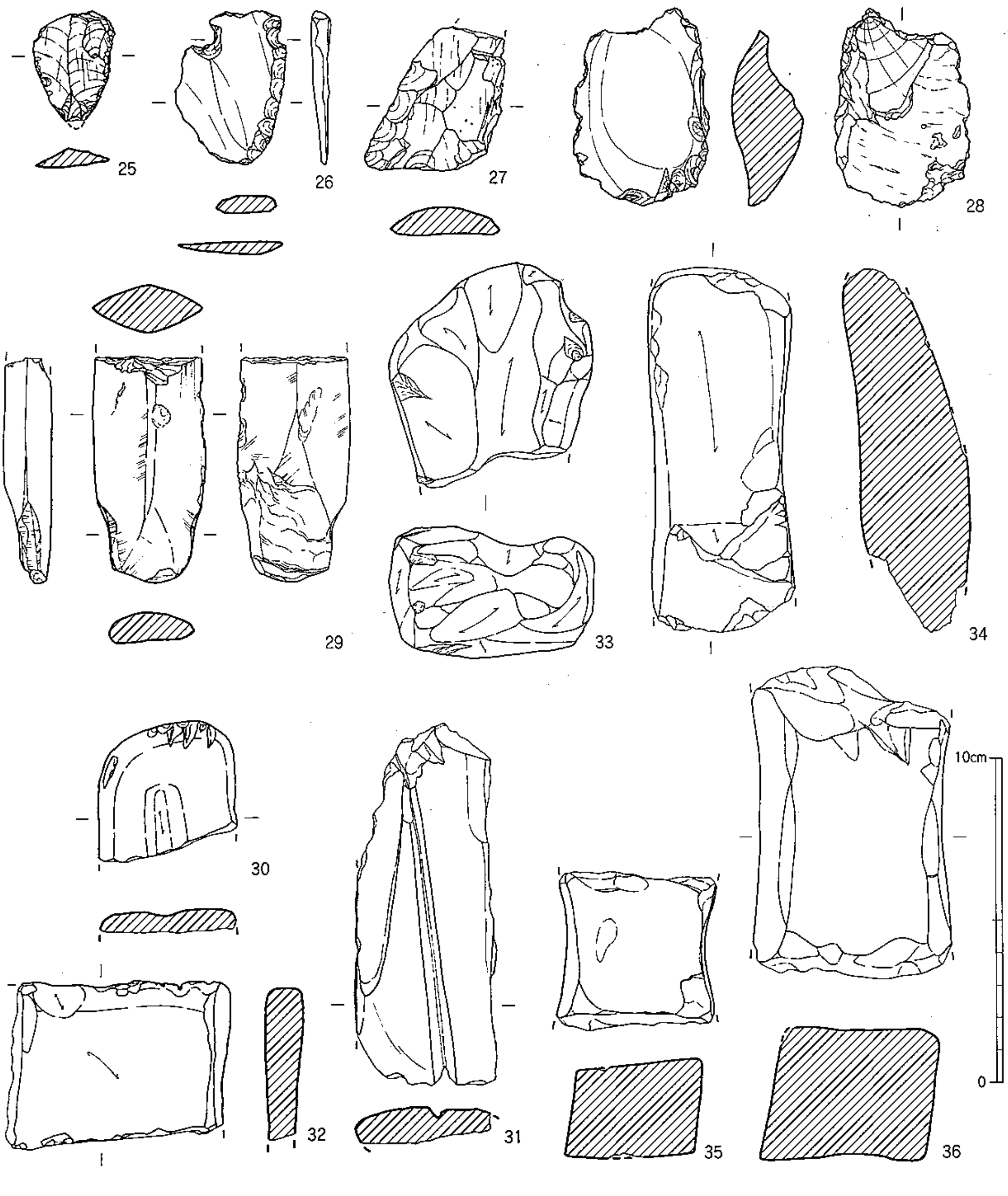


Fig.76 石器・石製品実測図（4）（1/2）

した有溝砥石である。30の研磨部分が浅いなだらかな凹みとなるのに対し，31は中央部の凹みが鋭利な三角形を呈している。32も片岩系石材である。広い面の両面を研磨に用いている。両面の端部で顕著だが，浅い凹み状の砥ぎ面が複数確認でき，状況に応じて研磨部分を変更している。33は砂岩を素材としたもので，本来は置き砥石だったものを転用した可能性が高い。ほぼすべての面に二次的な研磨でできた浅い凹みが確認できる。34は硬質の砂岩で，破損部を除くすべての面が研磨で平滑になっている。35は石英斑岩，36は砂岩を素材とする。ほぼすべての面を研磨しているが，面によっては湾曲が著しく使用頻度が高い。

（4）土製品 (Fig.77 ～ 79，PL. 48)

壺（1～8）　1～6は土師器で，7は須恵器，8は陶器である。1は口縁端部を一部欠損するものの，ほぼ完存する。外面は回転ナデで調整され，内面には明瞭にしぼりの痕跡が残る。底には板状圧痕が確認できる。2は口縁部を欠損するが，1と同様に底部に板状圧痕が残る。ただし，内面を棒状工具で調整する点で1との差異がある。3は口縁端部と底部を欠損する。基本的な調整は同じだが，内面を回転ナデで調整し容量も大きい。4は全体的に磨耗が進むが，とくに底部付近の磨耗が著しい。5は完存し，回転ナデで成形される。内面はしぼりの痕跡が残るなど，口縁付近を除き調整が粗い。1～5の小型の土師器壺はいずれも平底で，比較的底部の磨耗が進んでいる資料が多い。6は丸底壺の底部付近と思われるが，手づくねの杯身となる可能性もある。ケズリを多用し，調整が粗い。7は須恵器壺の口縁で歪みが著しい。8は陶器壺の胴部片で，釉薬は確認できない。

坏（9）　土師器坏の口縁部破片で，外面に沈線による施文がある。

皿(10)　土師器皿の破片で，中央部付近に計3つの焼成前穿孔がある。棒状工具による穿孔で，ほぼおなじ場所に2回穿孔しているものもある。

不明土製品(11)　片面のみに平行タタキを密に施す長方形状の土製品である。用途は不明だが，胎土の質は土師器に似る。

焼台の溶着　**溶着須恵器**（12 ～ 14）　12は須恵器杯身の底部破片で，高台の内側には窯壁が充填されたような状態で残り，正立状態で焼成されたものである。13は須恵器甕の底部に杯蓋2点が押しつぶされた状態で付着している。付着した須恵杯蓋は一度の被熱のみで，焼台などに繰り返し転用されてはいない。窯での操業時に偶発的に付着したものであり，窯内での製品の配置状況が伺える。14は小型石材を挟み込むように須恵器甕破片2点が付着している。両破片とも内面を外側に向けており，それぞれ平行当て具と同心円当て具の痕跡が確認できる。両破片はそれぞれ別個体の破片である。小型石材は，焼成時に須恵器甕を安定させるために用いられた焼台の一種と考えられる。

土錘（15 ～ 17）　15 ～ 17はいずれも土師質のもので，手づくねで成形される。15は両端部の一部を欠損し，重量は約25.4ｇ。16も両端部の一部を欠損し，重量は約58.8ｇ。17は大半を欠損する。芯棒を引き抜く際に，回転させた痕跡が内面に残る。

円盤状土製品（18 ～ 26）　18 ～ 21は瓦，22 ～ 25は須恵器，26は土師器をそれぞれ転用して製作されている。基本的には打ち欠きのみで円盤状に整形するが，18のみは瓦転用の他の円盤状土製品と異なり，全ての面を丁寧に研磨する。その形状から碁石に使用された可能性が高

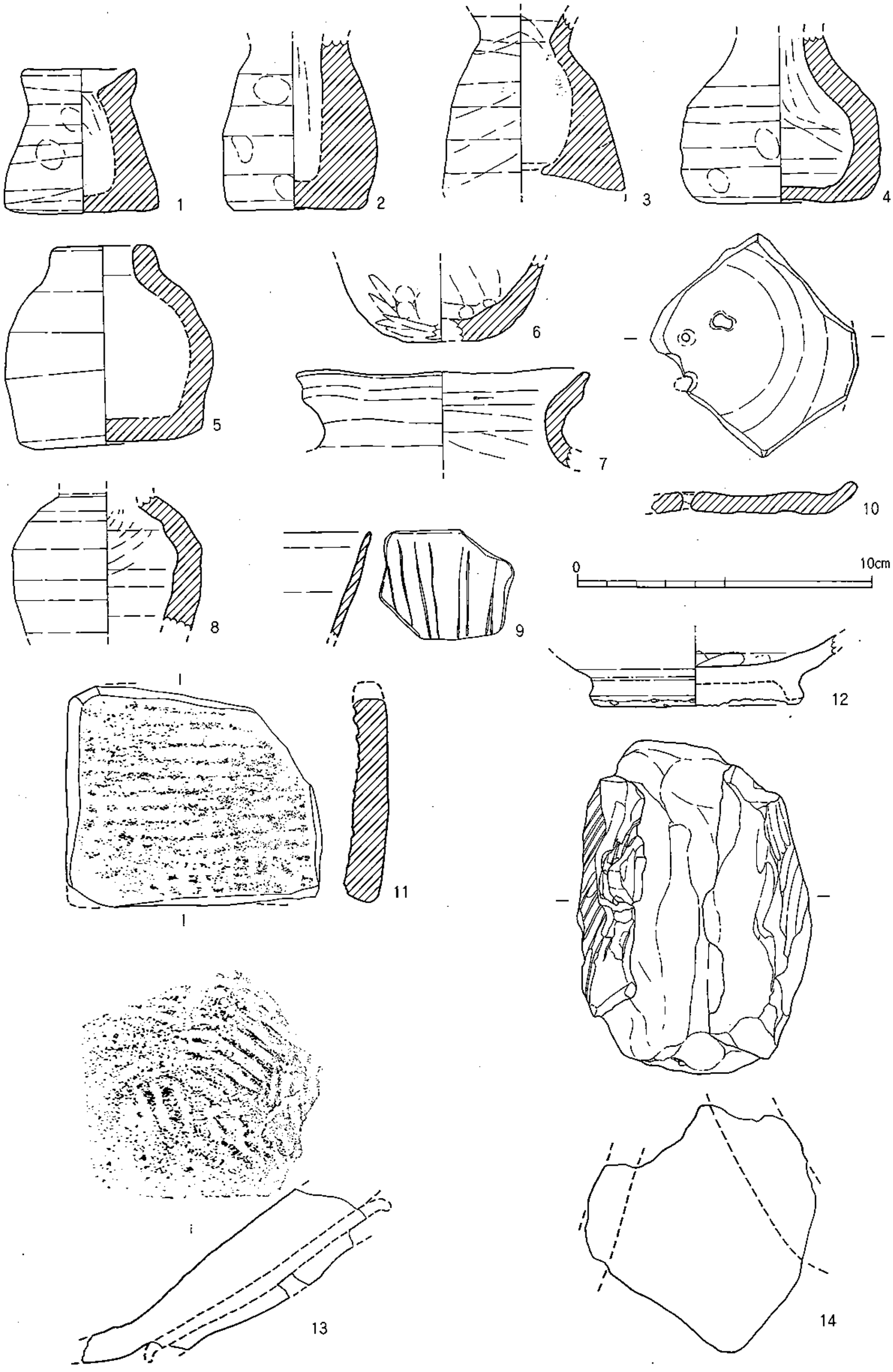


Fig.77　土製品実測図（1）(1/2)

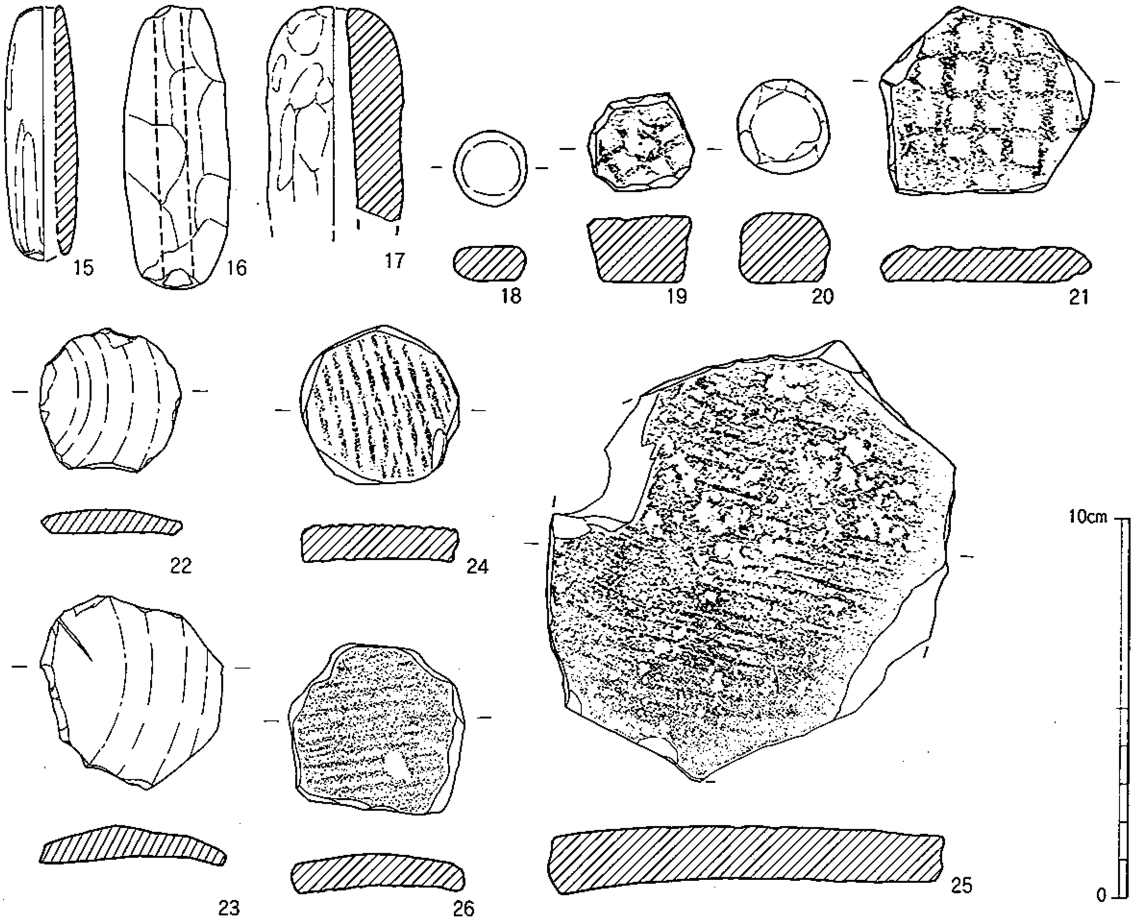


Fig.78　土製品実測図（2）（1/2）

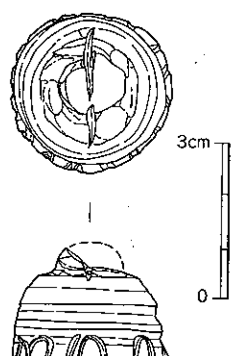


Fig.79　土製品実測図（3）（2/3）

い。色調は暗茶褐色である。19・20は瓦を転用した直径約３cm前後のもので，類似資料は他に13点出土している。21は直径約５cmのもので，類似資料が他に１点出土している。22・23は須恵器杯蓋を転用したもので，23にはヘラ記号の一部が残る。24・25は須恵器甕の胴部破片を転用する。26は土師器甕片を転用したもので，外面は粗いハケ，内面にはケズリ調整が確認できる。

金属製権を忠実に模倣

権（27）　金属製の権を忠実に模倣した須恵質の土製品で，紐の大部分と底部付近を一部欠損する。現状での重量は33.1ｇ。粘土を円柱状に成形した後，外面を回転ヘラ削りで調整する。そして，手持ちヘラ削りで頂部を微調整した後に，紐部分の粘土を後付けしている。紐の穿孔は直径0.1cmに満たない工具を用いて，両側からなされる。この部位を実用的に用いたと想定した場合，いわゆる「紐」でなく「糸」が結び付けられていたと考えられる。外面の施文は，まず中央部分に沈線を二条巡らした後に，棒状工具で乱雑に「～」状に文様を書き入れる。底部はナデ調整で，とくに調整を施した感はない。

（5）その他の遺物

1）文字資料（Fig.80，PL.48・49）

日吉地区官衙からは８点の墨書土器と３点の刻書土器が出土しているが，その大半が80次調査の出土で，他の調査地点としては153次調査で墨書土器が１点出土している。器種的には土師器坏が大半を占めるが，他に土師器皿・鉢，須恵器鉢がみられる。文字は土師器坏の場合が

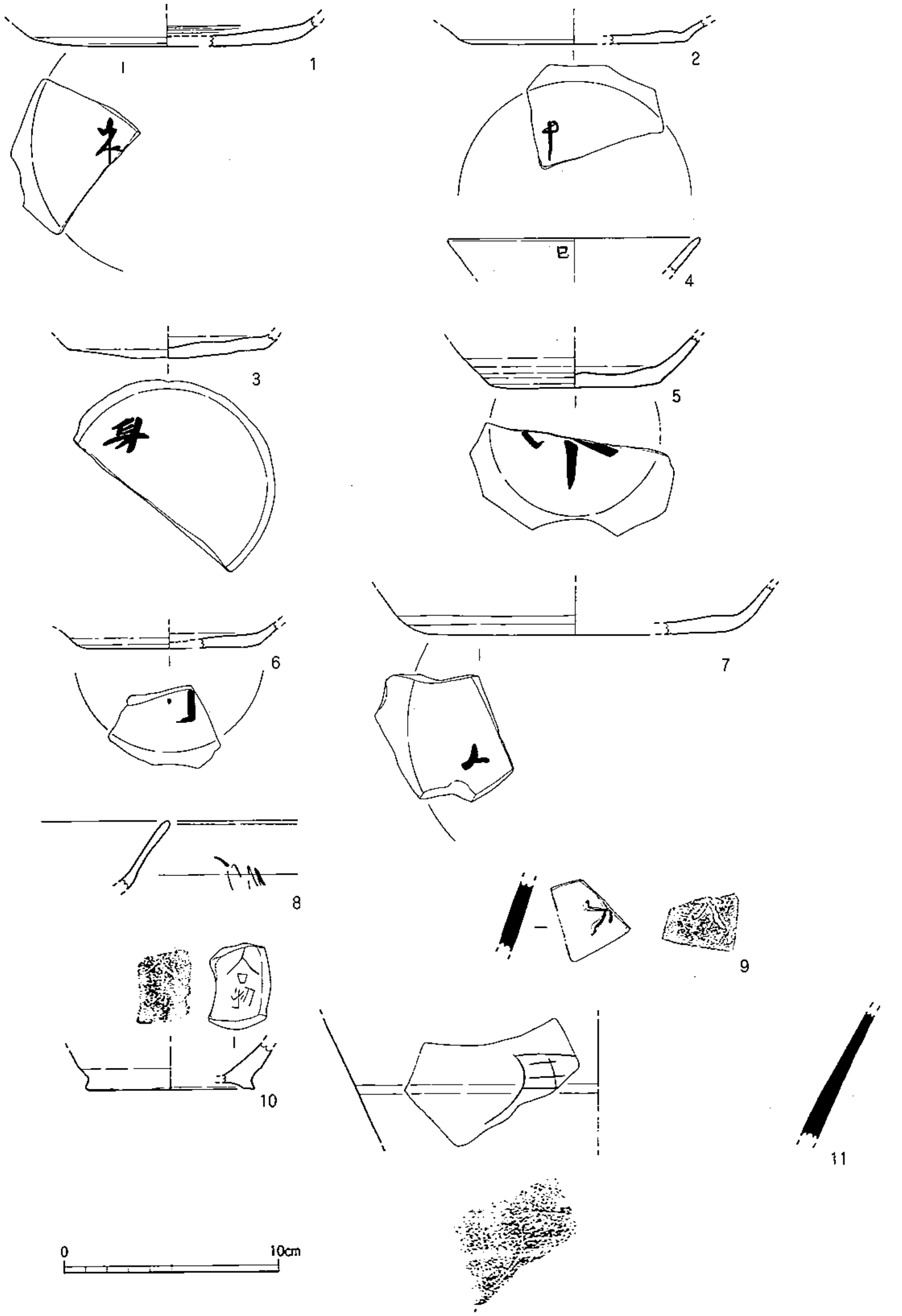


Fig.80　墨書土器・刻書土器実測図（1/3）

底部外面に墨書するのが殆どであるが，刻書土器は内面に文字を刻んでいるものもある。

墨書土器（1～8）　1は80次灰褐色土から出土した土師器坏の底部破片である。調整は外面ヘラケズリ，内面ヘラミガキによる。底径は12.6㎝に復原した。墨書文字は底部外面の中央に「本」とあるが，1/4弱の破片であるため一文字であったのか詳細は不明。

2も80次灰褐色土から出土した土師器坏の底部破片である。底部ヘラ切り後未調整，内面ナデによる。墨書文字は底部外面の上方にあり，「中」と読める。1同様，小破片であるため一文字であったかは不明。

3は80次礫敷ＳＸ2275から出土した土師器坏の底部破片で，1/2程遺存する。調整は底部ヘラ切り後未調整,内面ナデによる。砂粒を殆ど含まない精良な胎土で,色調は暗褐色を呈する。底部外面の上方に一文字あり，「身」と判読した。

4は80次掘立柱建物ＳＢ2240掘方から出土した土師器坏の口縁部小片である。内外面ともヨコナデ調整による。口縁部外面に墨書があり，「たてぼう」と「はね」との間がかすれているが，「巳」であろうか。

5は80次灰褐色土から出土した土師器坏の胴下半部から底部にかけての破片で，1/2弱遺存する。調整は底部ヘラ切り後未調整，内面ナデによる。墨書文字は底部外面の中央にあり，上半部が欠損しているため詳細は不明であるが「｜」がみられ，上から下に線を引いており，それと交差する形で墨痕が遺存するが判読不明。

6も80次灰褐色土から出土した土師器坏の底部小片である。底部はヘラ切り後未調整，内面はナデによる。墨書文字は底部外面の下方にあり,「亅」(はねぼう）部分のみなので詳細は不明。

7のみ153次調査で，茶褐色土から出土している。土師器の皿で，胴下半部から底部にかけての小片であるが，大型品になろう。外底部未調整，内外面ナデによる。墨書文字は底部外面の上方に一文字あり，「人」と墨書している。

8は80次灰褐色土から出土した土師器坏の口縁部小片である。内外面ともヨコナデ調整により，砂粒を殆ど含まない精良な胎土である。線状の墨書が数本外面にあり，文字ではなく戯画であろうか。

刻書土器（9～11）　9は80次溝ＳＤ2268から出土した須恵器片で，小破片であるため器種を特定できないが，鉢或いは壺になるか。刻書文字は外面に横位置で刻んでおり，「一」（よこぼう）「亅」（はねぼう）「乀」（はらい）がみられることから「不」或いは「木」になろう。

10は80次礫敷ＳＸ2275の攪乱から出土した。土師器椀の底部小片で，内外面ともナデによる。内面に横文字で二文字あり，上の文字が「人」「口」，その下左側に「扌」（てへん），右横に「勿」（つつみがまえ）を刻んでおり，略字であるが上の文字が「合」で，下の文字が「物」と判断し，「合物」とすると容器に刻まれていることから「おかず・あわせ」を意味するか。

11は80次落込ＳＸ2274から出土した須恵器鉢の胴部破片である。摩滅が著しく器面調整は不明。刻書文字は下部が欠損しているが，外面に縦位置で「厂」（がんだれ）の中に「丰」を刻んでおり，「厓」と判断したが確証はない。

2）硯 (Fig.81・82，PL.49～51)

定形硯（1～16）　1～16は圏足円面硯である。1は1/2弱の残存状況であるが，一応陸部か

ら脚裾まで遺存している。陸部は丸みを帯びた山形をなし，海部との境は不明瞭ながら外堤を付すことにより区別している。外堤と脚部との境には鍔状の突帯を貼付する。脚部は長脚で，ハ字形に開く。脚部の中程よりやや上位に双円形のスカシ孔を３ヶ所穿つ。また，スカシ孔間には線刻の綾杉文を施している。脚部はヨコナデにより，内天井部には指頭圧痕が明瞭である。陸部はあまり擦れていないが，50倍のルーペによる観察では僅かながらも墨痕を確認している。器高13.6cm，復原外堤径11.5cm，復原脚径16.2cmを測る。80次調査の出土。

綾杉文の施文

２・３は１と同様な形態を呈する円面硯である。２は陸部から脚部にかけての破片で，陸部は丸みを帯び，海部との境は1よりも不明瞭となっている。外堤と脚部との境の突帯は欠損するが，鍔状をなすと思われる。現状で双円形のスカシ孔が１ヶ所確認できるが，恐らく３ヶ所に穿っていたとみられる。また，スカシ孔間には線刻の綾杉文を施している。胎土に石英・赤褐色粒を多く含み，一見土師器のようであるが，須恵器の焼成不良品としておく。陸部は余り擦れていないが，50倍のルーペによる観察では墨痕を確認している。復原外堤径11.2cmを測る。80次ＳＸ2231の出土。３は脚裾部の破片で，脚径は17.0cmに復原した。外面には線刻の綾杉文を施している。内面には輪積みの痕跡が顕著である。80次ＳＸ2203の出土。２・３は胎土・色調から同一個体の可能性を有する。

４は海部から脚上部にかけての破片で，外堤径は11.4cmに復原した。陸部は遺存していないが丸みを帯びた山形をなすものとみられる。スカシ孔も一部分しか残っていないが，長方形スカシ孔になろう。焼成不良品で，内外とも黒紫色を呈する。80次灰褐色土から出土した。５は陸部から脚部突帯までの小破片で，陸部と海部との境が殆どない平坦なものであり，有高台坏を逆さにした形状をなす。低い外堤に対して突帯は太めで，断面三角形を呈する。スカシ孔は上部が僅かに遺存する程度であるが，丸みを帯びることから長円形を呈するか。32次調査暗褐色土の出土。

６～８は海部から脚上部にかけての小破片で，７は陸部の一部が残る。６・７の外堤は割にしっかりしており，１cm前後の高さを測る。何れも脚上部には断面三角形の突帯を貼付する。６のみ長円形のスカシ孔がみられるが，個数は不明。外堤径は６が13.3cm，７は13.8cm，８は14.4cmに復原した。３点とも80次調査出土品で，６が黒灰色土，７は灰褐色土，８は床土から出土している。９は陸部の小破片で，残存部位からして陸部径は8.2cm程になろう。陸部は擦れておらず，50倍のルーペによる観察でも墨痕を確認できなかった。153次溝ＳＤ4660の出土。

10～12は脚部の小破片で，10・11は突帯から脚裾まで遺存し，裾部がＬ字形を呈する同形態のものである。脚裾径は10が14.0cm，11は13.5cmに復原した。スカシ孔は10が長方形と三角形スカシ孔を２個ずつ穿ったもので，11・12は長方形スカシ孔を４ヶ所施したものか。何れも80次調査で，10は井戸ＳＥ2265，12は灰褐色土の出土で，11は出土地不明品である。

13～16は脚裾部の小破片で，13・14・16は裾広がり，15はＬ字形をなす。スカシ孔は何れも一部しか遺存しないが，13・14・15が長方形，16が長円形を呈する。13の裾径は18.5cmに復原した。また，13は胎土に石英を多く含み，焼成も硬質である。いずれも80次調査出土で，13が掘立柱建物ＳＢ2240掘方，14は床土，15・16は灰褐色土から出土している。

なお，不掲載ながらこの他にも円面硯の小破片が，32次調査床土から脚柱部１点と80次調

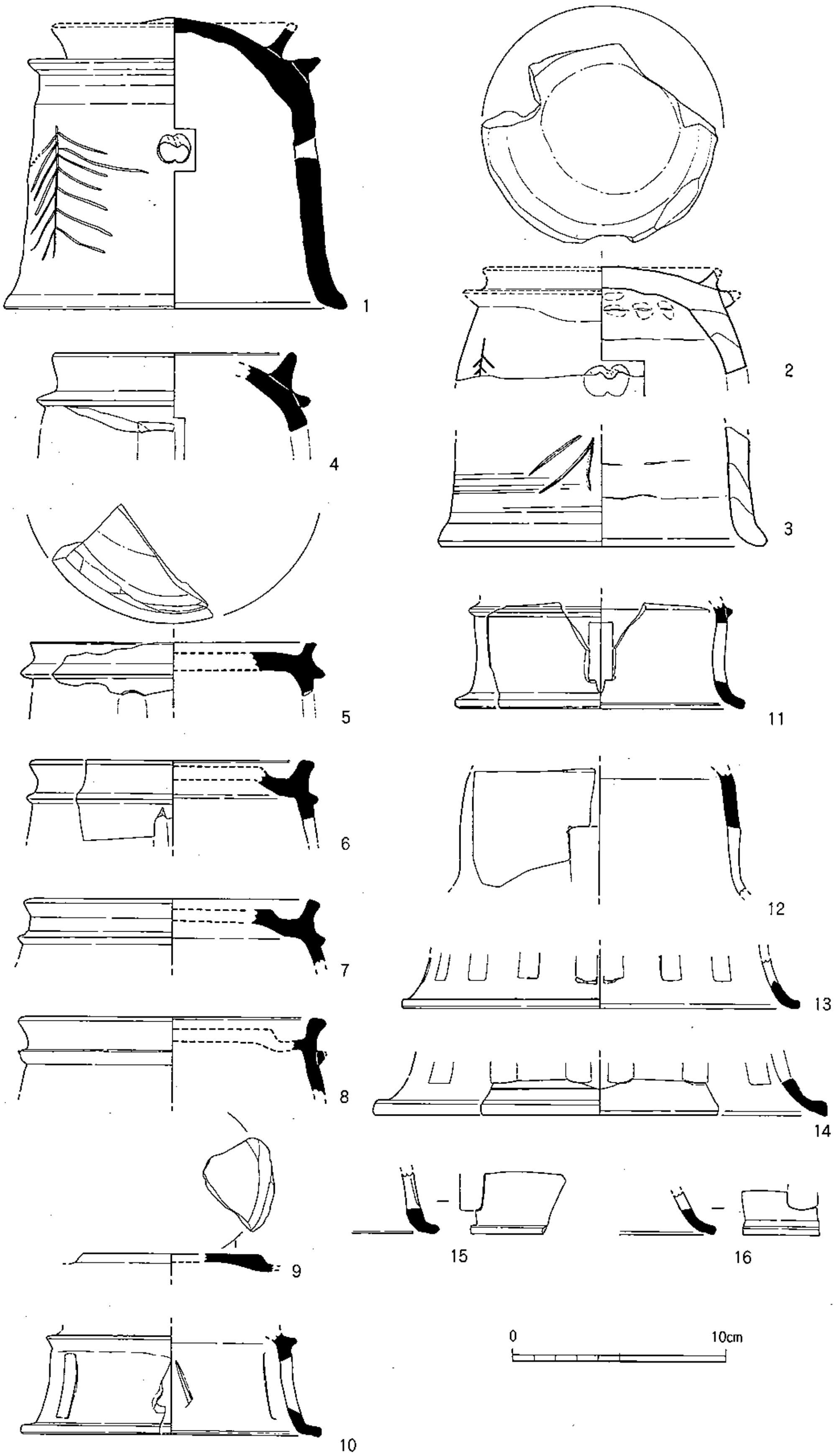


Fig.81　定形硯実測図（1/3）

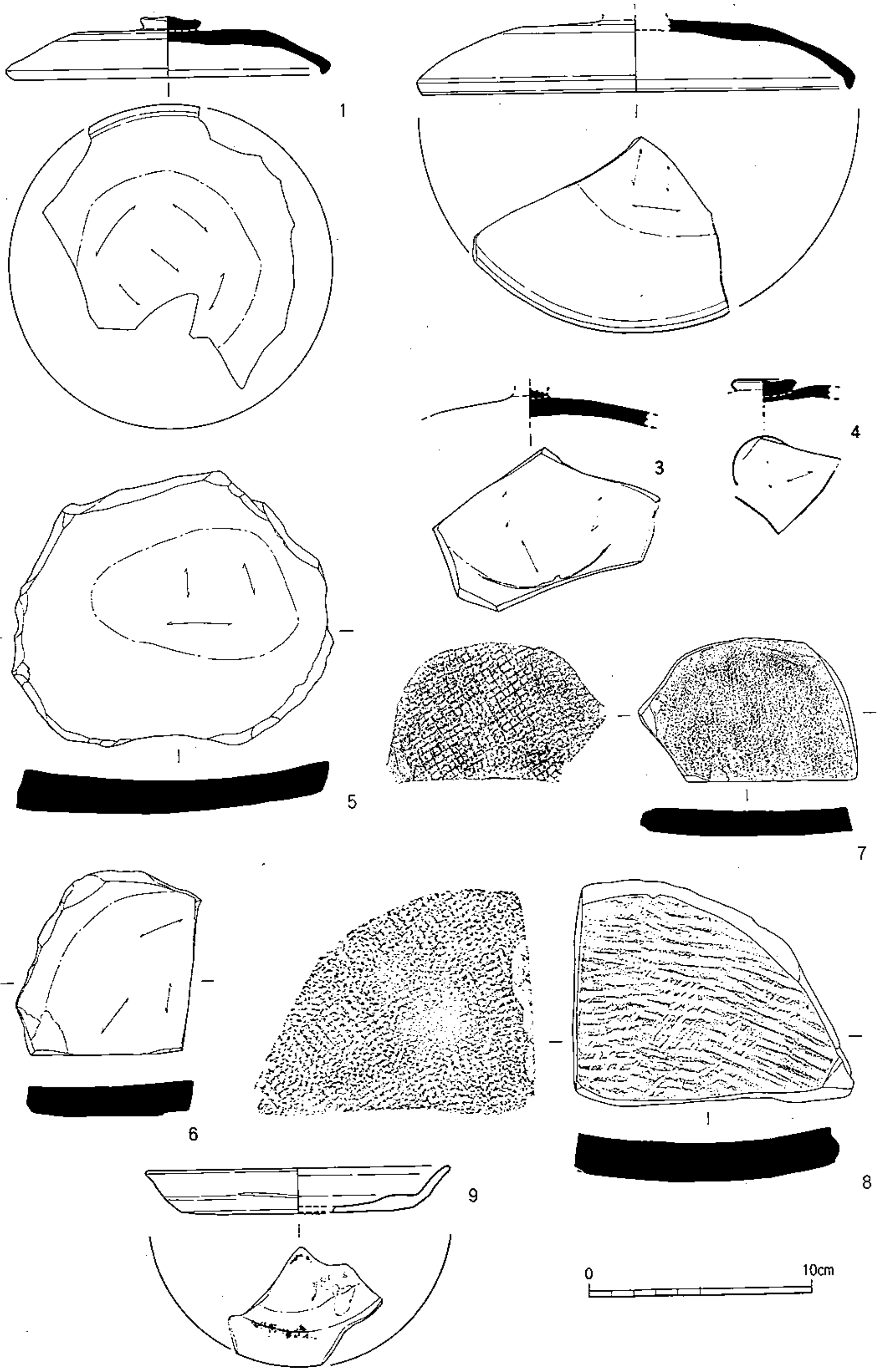


Fig.82 転用硯実測図 (1/3)

査ピット（S-103）から脚柱部１点，不整形土坑ＳＸ2274から外堤部１点，溝ＳＤ2268から脚柱部１点，灰褐色土から外堤部１点，脚柱部４点，黒灰色土から外堤部と脚裾部各１点，茶褐色土から脚柱部１点，床土から脚柱部３点，出土地不明の脚柱部１点が出土しており，日吉地区官衙からは合計32点の定形硯が出土したことになる。

転用硯（１～９）　須恵器の坏蓋及び甕の胴部片を硯として転用したもので，50倍のルーペによる観察で墨痕等を確認した14点のうち９点を掲載した。１～４は坏蓋を転用したもので，何れも内天井部はよく擦れている。１・２は口縁端部が鳥嘴状を呈するもので，口縁部ヨコナデ，外天井部回転ヘラケズリ，内面ナデによる。１は鈕状の撮みを付し，口径は１が14.0㎝，２は19.2㎝に復原した。３・４は天井部の破片で，３は撮みを欠くが，４は鈕状の撮みを貼付している。１・４が80次ＳＸ2262，３が掘立柱建物ＳＢ2235掘方，２は32次Ａ3区土坑の出土。

５～８は須恵器甕の胴部破片を利用した転用硯で，側縁を丸く打欠き猿面硯としている。５・６の内面はよく擦れているが，５を除き墨痕は認められず未使用品である。調整は外面が何れも格子目タタキで，内面は５・６が円弧あて具，７がハケ目，８が平行あて具による。何れも80次調査で，５がＳＸ2231，６は床土，７・８は灰褐色土の出土である。９は土師器皿を転用した珍しいもので，内底面はよく擦れており，墨痕も遺存している。80次落込ＳＸ2274から出土した。他にも８世紀中頃の須恵器坏蓋の転用硯が32次調査で１点，80次調査で４点出土している。なお，日吉地区官衙における硯の総数46点に対し，定形硯は32点で69.6%，転用硯は14点で30.4%と定形硯が転用硯の２倍以上を占めている。

定形硯の占める割合が高い

３）製塩土器（Fig.83，PL.51・52）

日吉地区官衙からは，鹹水煎熬用の甕形土器（玄界灘式製塩土器）17点と内面に布目痕がみられる型作りによる円筒形の土器（焼塩壺）98点が出土している。

１～５は80次出土の土師器甕で，１が口縁部破片，２～４は口縁部から肩部にかけての破片，５は胴部小片である。外面擬格子目タタキ，内面平行あて具を施した玄界灘式製塩土器で，胎土に石英・赤褐色粒などの粒子を多く含む。また，２・４は外面に炭化物が付着しており，５は内面に炭化物がみられる。何れもⅠｂ類に分類でき，１・２・４・５が灰褐色土出土で，３は出土地不明品。

６・７は椀形の製塩土器で，所謂焼塩壷である。６は内外面とも摩滅が著しいが，ナデによるか。内面に布目がみられないⅣｂ類で，割合緻密な胎土である。80次礫群ＳＸ2275から出土している。口径は8.6㎝に復原した。７は口縁部の湾曲具合からして大型のものになろう。石英・赤褐色粒を多く含み，器面がざらつく。当資料も内面に布目がみられないⅣｂ類である。80次黒灰色土から出土した。

８～18は円筒形の製塩土器で，16が底部破片で，それ以外は胴部小破片である。外面はユビオサエで，内面に布目痕を留める。何れも胎土に砂粒を多く含み，器面はざらつく。 11・13・15は赤褐色を呈し，焼成良好品である。８は32次Ｂ1区暗灰色土，９～11・14～16は80次茶褐色土，12は80次灰褐色土，13はピット（S-151），17は153次ＳＸ4087からの出土である。

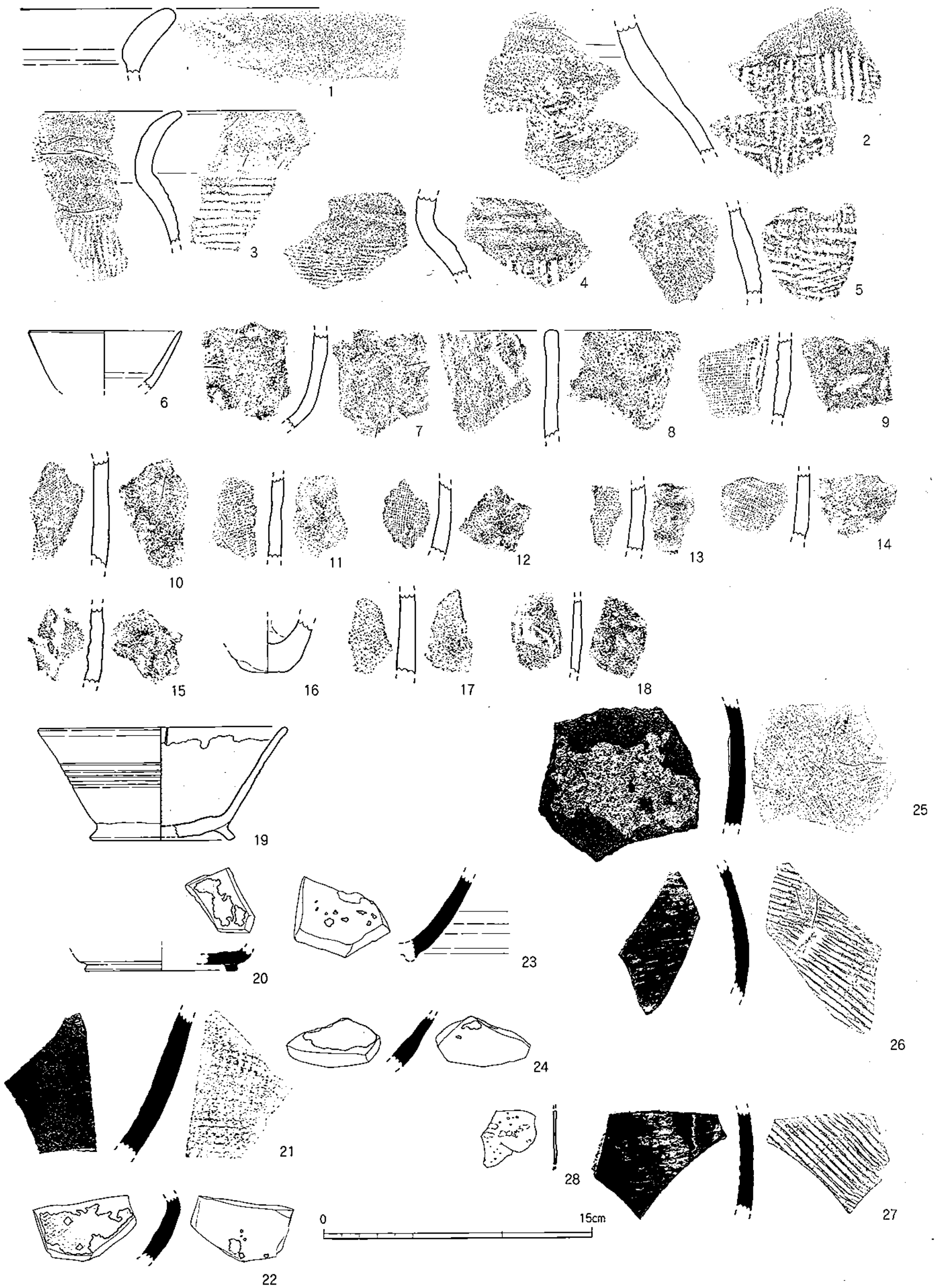


Fig.83　製塩土器・漆等付着土器実測図（1/3）

4）漆等付着土器（Fig.83，PL.52）

日吉地区官衙からは，漆付着土器が６点，白色物質付着土器が３点出土している。

漆付着土器（19～24）　19は80次調査出土品であるが，出土遺構は不明。土師器の椀で，口縁部は大きく開き，底部端に細身の高台を貼付している。調整は外面回転ヘラケズリ，内面はケズリの後ナデにより，外面のケズリは沈線状をなす。器高は6.3cmで，口径14.2cm，高台径8.2cmに復原した。内面には黒褐色の漆が付着しており，外面には煤の付着がみられる。

20は153次調査溝ＳＤ4660出土の須恵器有高台の坏で，高台付近の小片である。内面に茶褐色の漆が薄く付着している。21は80次調査溝ＳＤ2192から出土した。須恵器甕の胴部小片で，調整は外面格子目タタキ，内面円弧あて具による。内面には赤褐色の漆が付着している。

22・23は153次調査出土の須恵器壺小片で，22が粘土採掘遺構ＳＸ4087，23は粘土採掘遺構ＳＸ4082から出土した。22・23ともに内面に焦げ茶色の漆が薄く付着しているが，23の漆は辛うじて遺存しているといった具合である。24は153次溝ＳＤ4660出土である。生焼けであるが須恵器で，鉢になるか。内面に黒漆が遺存しており，外面にも一部黒漆がみられる。

なお，器形的に壺・甕が漆の運搬容器で，椀・坏が漆製品製作時の容器になろう。

白色物質付着土器（25～27）　25は80次灰褐色土出土の須恵器壺の胴部破片で，器面調整は外面細い平行タタキ，内面ナデによる。内面には白色物質が厚く付着している。26・27は153次出土の須恵器甕の胴部小片で，26・27ともに土坑状の落込から出土している。器面調整は外面平行タタキ，内面平行あて具により，同一個体の可能性がある。内面には白色物質の付着がみられる。この白色物質に関しては，建材に用いる白土あるいは小便に由来する物質と推定されている（加藤2010）。

その他（28）　28は80次黒灰色土出土の角質状品で，大きさは３cm×３cm大，厚さ１mmで，非常に軽い。表面はチョコレート色の光沢があるが，裏面はサメ肌の如くザラつく。本品がいかなるものか不明ながら、一応掲載しておく。

5）金属製品・鍛冶・鋳造関連遺物

a.金属製品（Fig.84，PL.53）

鉄釘（１～10）　鉄釘は頭部形態から３つに大別できる。１・２は頭部をとくに整形しない。２は完存し，全長約7.8cm。１と２では厚みが２倍近く異なる。３・４は頭部がわずかに片側・両側に広がる。使用時の変形によるものかは判別できなかった。４は完存し，全長約5.2cm。５～７は，頭部を片側に折り曲げたもので最も数量が多い。５・６はほぼ完存し，５は全長約6.1cm，６は全長約10.5cm。８～10は鉄釘の断片と考えられる。

鉄鎌（11）　全長約5.7cm，幅約1.5cmの小型の鉄鎌である。

刀子（12）　鉄製で，関の部分のみが残る。刃幅約1.9cm，茎幅約1.0cmを測る。

鉄鈴（13）　鋳造で製作された鉄鈴で，下部をやや欠損する。全長約4.3cmで，胴部の厚みは約0.1cm。紐の部分に近づくほど，厚みが増している。

鉄楔（14）　全長約5.3cm，幅約2.3cmで，厚さは約1.3cmを測る。ほぼ完存するが刃部があまり明瞭でないため，鑿ではなく楔に使用したと推測される。

不明鉄製品（15・16）　15は厚さ約0.7cmの鉄板で，略三角形のような形状をしている。図示

していないが，腐食の進んだ板状鉄製品が数点出土している。16は馬具の引手とも考えたが，縄を通す孔が無い。鉄脚の破片と思われる。

銅銭（17・18） 17・18ともに「寛永通寶」である。

不明銅製品（19） 直径約0.3cmの細い棒状を呈し，残存長約6.2cmを測る。メタルが非常に良好な状態で残り，古代の箸とも考えられるが，新しい遺物の可能性もある。

b. 鍛冶・鋳造関連遺物（Fig.85・86，PL.53）

羽口・鋳型の胎土に籾殻が混じる

羽口（1～5） 1は残存長14.5cmの羽口で先端部が被熱により消耗し，欠損する。胎土には籾殻を多量に混じる。2・3は先端部と基部の両端を欠損するが，先端付近が若干被熱しており，ともに使用の痕跡がある。胎土には砂粒を多く含むが，籾殻は確認できない。4は羽口先端部の破片で，鉄滓が垂れ下がるように付着している。羽口自体も鉄滓化が進行しており，高温での被熱が確認できる。5は羽口基部の破片で，1と同様に胎土に籾殻を多量に混じる。

銅滓（6・7） 流状を呈した銅滓で，表面は緑錆を吹いている。

鉄滓（8・9） 8は流状滓で接地面付近に木炭粒を咬む。9は椀形滓で表面に木炭粒を複数確認できる。接地面には砂粒が多く付着する。鉄滓は他にも複数出土している。

取瓶（10） 口縁部の破片で，端部を肥厚させている。内面を中心に高温での被熱が確認でき，一部に緑錆が確認できる。

鋳型（11～16） 11は鈴の外型で，胴部中央に2箇所の切り込みがあり，他方との合わせ目にしたと思われる。内面は摩滅し，剥落したためか真土はない。細砂粒を多く含み，赤褐色で堅緻に焼成されている。12は方形状の鋳型の断片だが残りが悪い。胎土は砂粒をあまり含まな

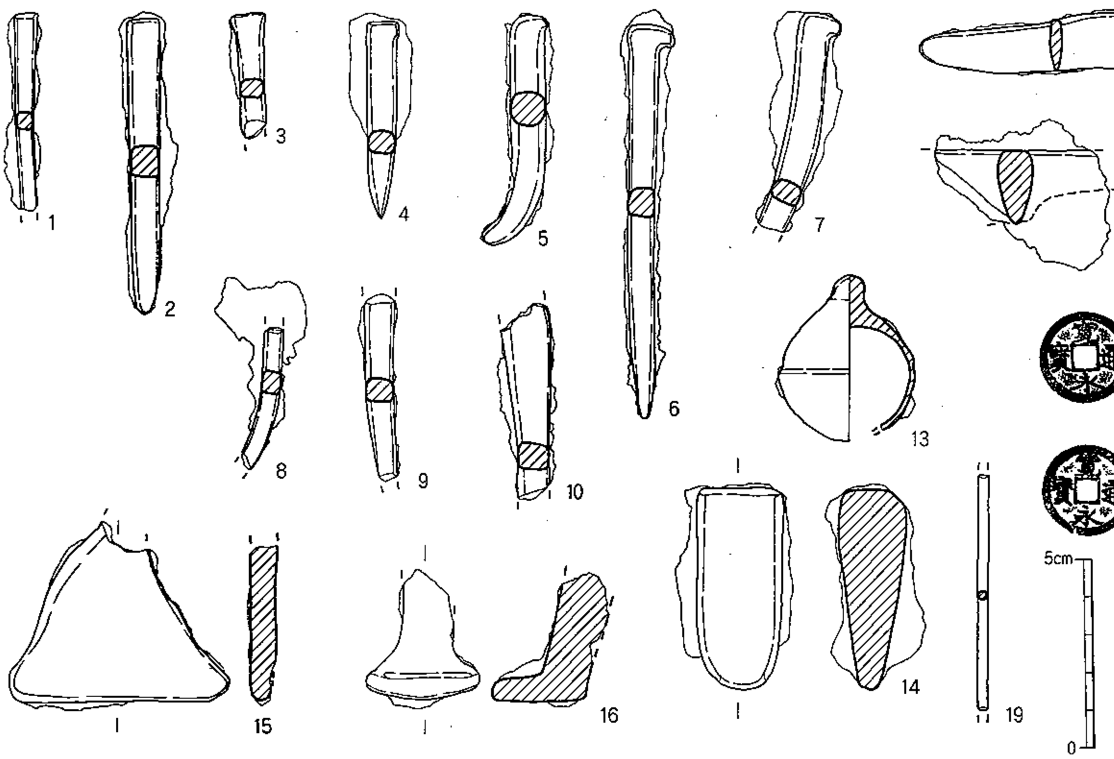


Fig.84 金属製品実測図（1/2）

いが，籾殻を多量に混入させている。13は中子の破片で，外面に一部真土が残存している。中子本体の胎土には籾殻が多量に混じる。また，真土にも籾殻が部分的に混入しており，燃えきらずに炭化した状態で残る。13と似た特徴を持つ鋳型の破片は複数出土しているが，破損が進行し接合できなかった。14は平底状を呈した外型の破片と推測した。15・16はそれぞれ別個体の外型の破片である。内面の一部に13に類似した真土を確認した。外型本体の胎土には籾殻

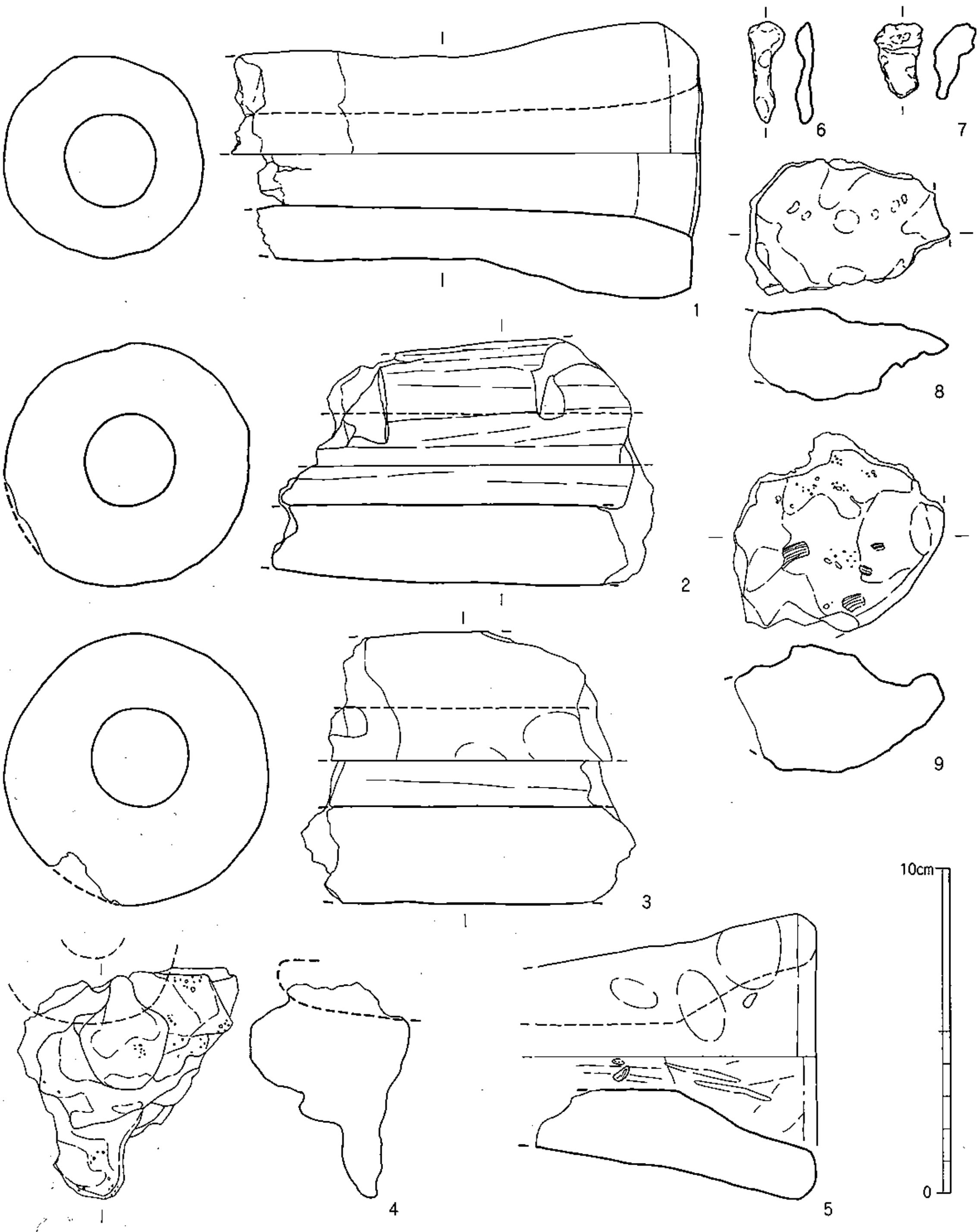


Fig.85　鍛冶・鋳造関連遺物実測図（1）(1/2)

が多量に混入している。13・15・16の形態から，鍋状の製品を鋳造した可能性が高い。また，同一層位から直径3cm前後の木炭が取り上げられている。

【参考文献】

加藤和歳　2010「土器に付着した白色物質の推定に関する予察」『九州歴史資料館研究論集』35　九州歴史資料館

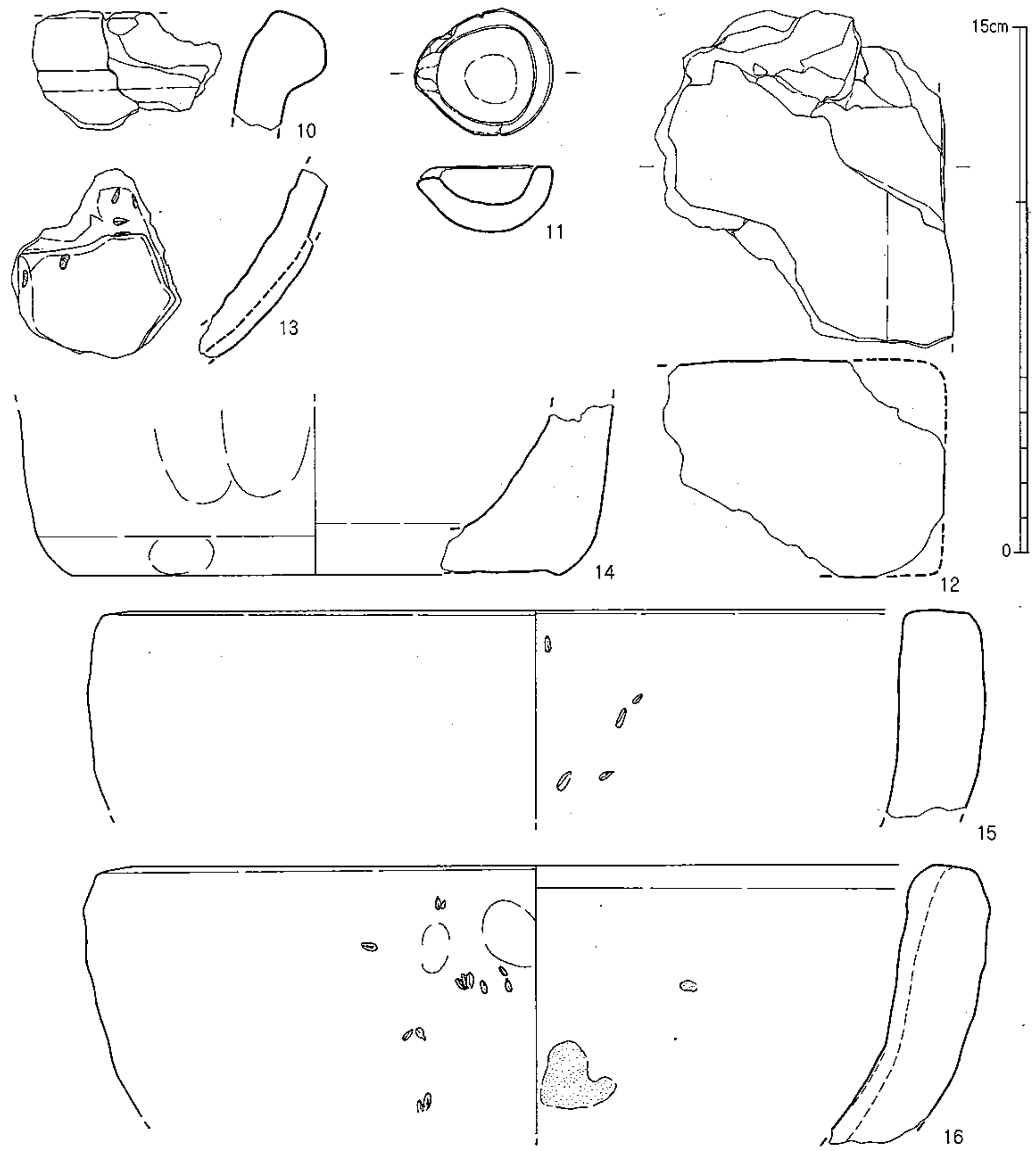


Fig.86　鍛冶・鋳造関連遺物実測図（2）（1/2）

第Ⅴ章　自然科学分析

（1）溝ＳＤ4660推定地点の物理探査

1）調査の経緯

大宰府史跡は福岡県太宰府市に所在する古代の官衙遺跡である。政庁部分を中心に特別史跡に指定され，保存と活用が進められている。また，継続的な発掘調査が1968年以降おこなわれている。

今回の調査は，主に政庁東側に所在する蔵司地区の遺構の配置の状況とその性格の把握を目的として実施することとなった。加えて，既に市街地化が進行し，調査が難しい条坊内の大溝（ＳＤ4660推定地）の調査をおこなうこととした。

今回は，これらの調査の内，本報告書に関連するＳＤ4660推定地の調査について報告を行うこととする。

なお，作業については，蔵司地区等とも併せて，平成22年７月20 ～ 23日の間に行い，当該地区については，23日に実施した。

2）調査手法の選択

地中に埋没している遺構の状況を非破壊的な手段で把握する方法のひとつとして，物理的手法を用いた遺跡探査があげられる。これらは埋蔵物の物理的な特性の違いを計測することを通じて地中の状況を知るものである。

これらの手法としていくつかの方法が開発され，改良がおこなわれてきた。

本調査では，これらの方法を活用し，遺跡の概要を把握することを非破壊的な手段で把握することを目的としている。

本遺跡においては，主となる遺跡の性格が都市・官衙遺跡であること，検討対象範囲が広範囲にわたること，遺構の性格を形状で判断することを目的とすることから，まず迅速に作業が可能である地中レーダ（GPR）による探査をおこない，必要に応じて他の手法を加えて判断をおこなうという方針で実施をおこなうこととした。

3）手法の概要

今回実施した探査手法について，その概要を述べる。

a.地中レーダ（GPR）探査

地中レーダ（GPR）探査は，電磁波を地中に対して発信し，その反射波を受信することによって，地中の異常部をとらえることにより，地中の埋没物や地層の境界を明らかにする物理的探査手法である。測線方向に対しての情報量が多く，また反射時間の際に応じた断面の状況を非破壊的に把握することが可能であり，幅広い分野で利用がおこなわれている。この断面を時間単位で切り出し，測線間を補間することで，深度毎の平面状況を把握する方法であるTime-Slice法が開発されており，考古学知見からみた解釈に活用されている。

使用するアンテナの周波数により，探査可能な深度と解像力に違いがあり，文化財探査においては中心周波数70 ～ 900MHz のアンテナが多く使用されている。当地区においては，対象

としている大溝の規模が大きく，土盛りの可能性や遺構の深さが深いことが想定されたため，解像力には劣るが深い深度を探査可能な200MHzのアンテナを採用した。

4）作業の概要

a.地区の設定

作業をおこなう上で，基準となる座標は他のデータとの整合性を持つ，後の検討に便利なものを参考することが良いが，当該箇所は，探査可能な範囲が長軸の長い長方形の範囲であり，国土方眼座標に合わせた場合，計測が煩雑になる問題があるため，調査区の任意の数点をVRS法によるRTK-GPSを用いて測量をおこなうこととした。

b.使用機器

本調査で使用した機器は以下の通りである。

レーダー探査機　米GSSI 社SIR-3000
レーダーアンテナ　米GSSI 社200MHz シールドアンテナ（中心周波数200MHz）
アンテナ付属品　各アンテナ用そり・マーカースイッチ
トータルステーション　Leica　TCRA1203
RTK-GPS　Leica　GPS1200＋
解析はGPR-SLICE7.0（Dean　Goodman 氏作成）によりおこなった。

5）ＳＤ4660推定地の調査成果

a.測量

基準点の測量は仮想基準点方式によるRTK-GPSにより観測をおこなった。基準線を南辺とし，その東西端を計測する予定であったが，東端の点は建物により計測が困難であり，float解しか得ることができなかった。このため，東側は北端の点をおさえることとした。このため計測地点と座標（世界測地系）は次の通りである。

北東端（0,4）X=56983.575　Y=-44986.257
南西端（45,0）X=56980.443　Y=-44941.145

b.GPR探査

大宰府条坊内に所在する。北側の発掘調査により，運河とも考えられる大溝SD4660が確認されており，今回の調査もこの溝の規模と範囲を知るために実施した。

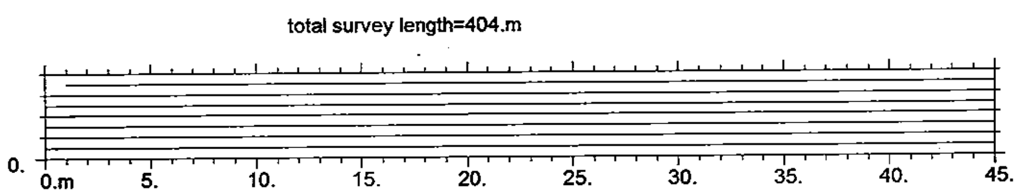


Fig.87　測線展開状況

GPRは200MHzのアンテナを用いた。測線間隔は0.5mである。探査総距離は404mであった。

探査区は道路路面上であり，車の駐車や人家の存在のため，条件は悪い。Time-Sliceによる平面の表示では，周辺の環境や路面上のマンホールと排水溝の影響が顕著である。このため，断面Profileでの検討も合わせておこなった。これによれば深さ20ns付近で，X=9mのところに東側へ落ち込んでいく反射が，38mのところで東側に上る反射が存在し，これが溝の両岸である可能性がある。但し，探査区東端付近には，建物による側方からの反射の影響が深い部分に表れているように，周囲の反射物に起因するものである可能性もあり，現状では遺構と断言できるものではない。この周囲にはマンホールの反射もあるため，その影響も勘案する必要があろう。

6）まとめ

今回の調査地点については，アスファルト路面上を計測せざるを得ない状況であり，溝ＳＤ4660と推測できる異常は見られたが，確証を得るまでには至らなかった。

九州地方は土壌条件などにより遺跡探査の好例に恵まれている地方ではあるが，今回の調査では市街地内の作業となることといった問題もあり，GPRによる探査成果のみでの判断は難し

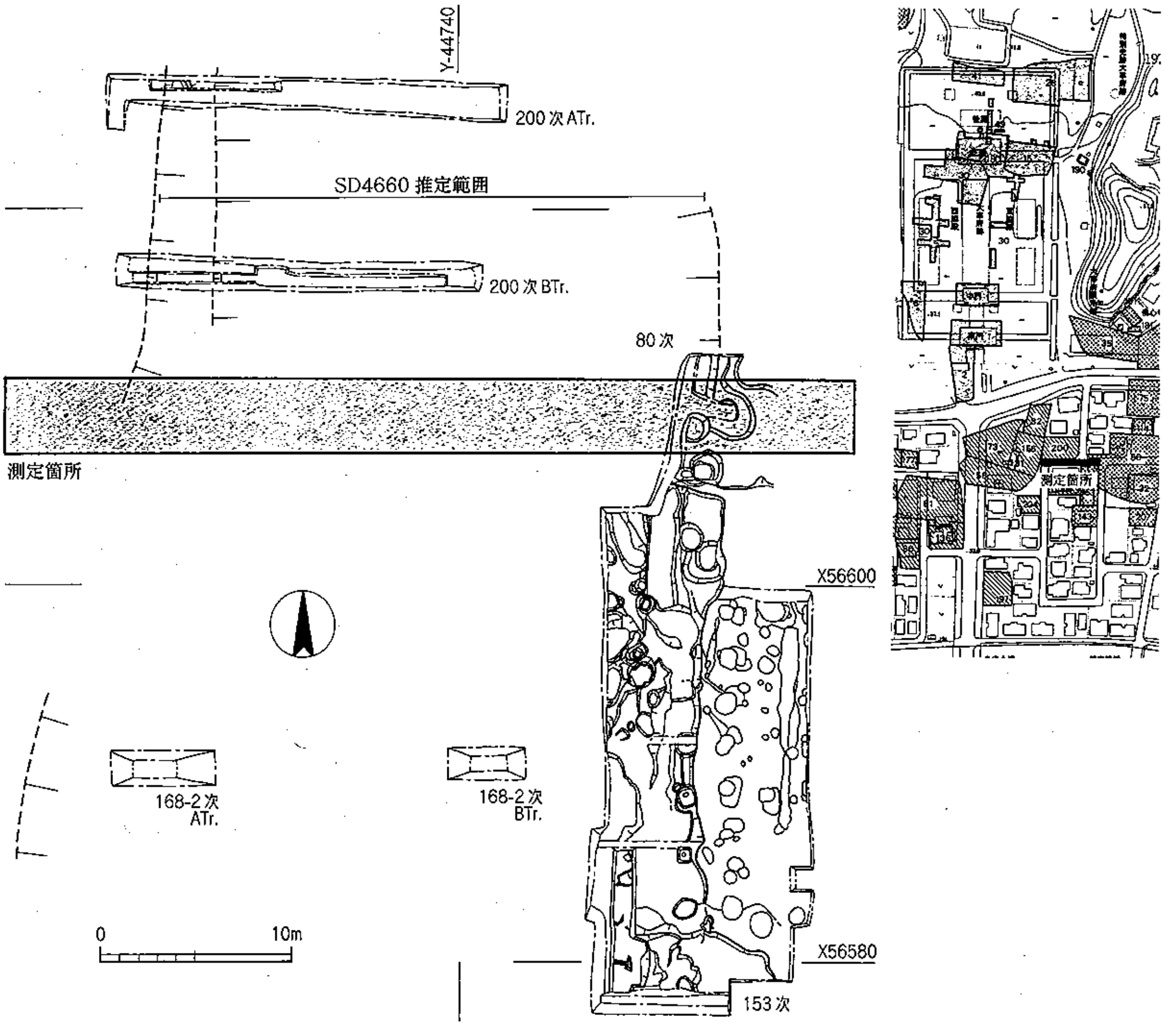


Fig.88　溝ＳＤ4660と調査箇所位置図（1/400）

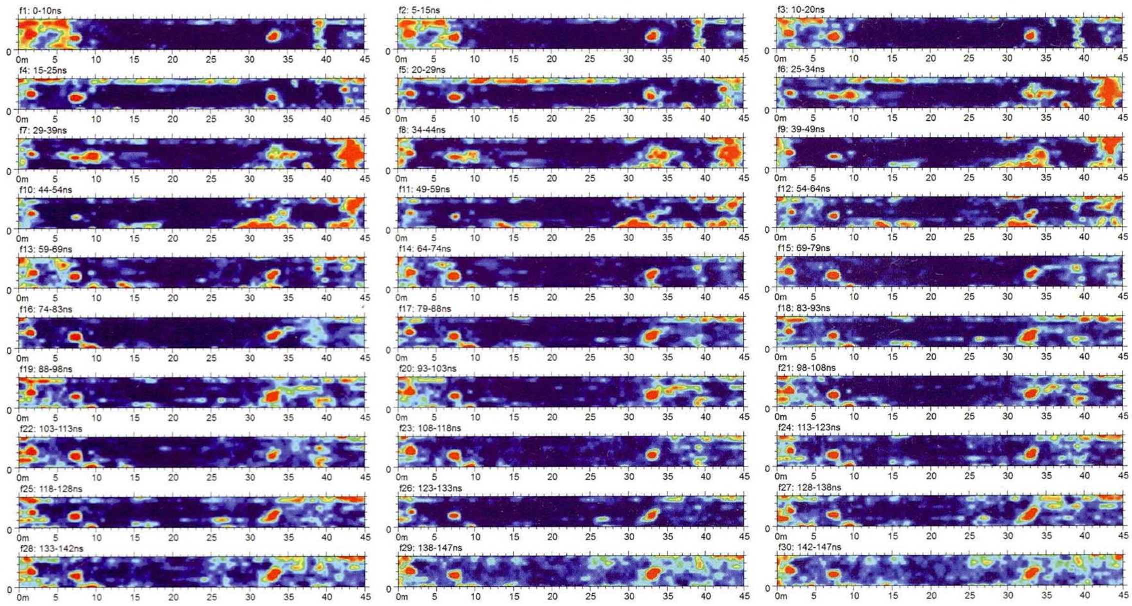


Fig.89　レーダー成果平面図

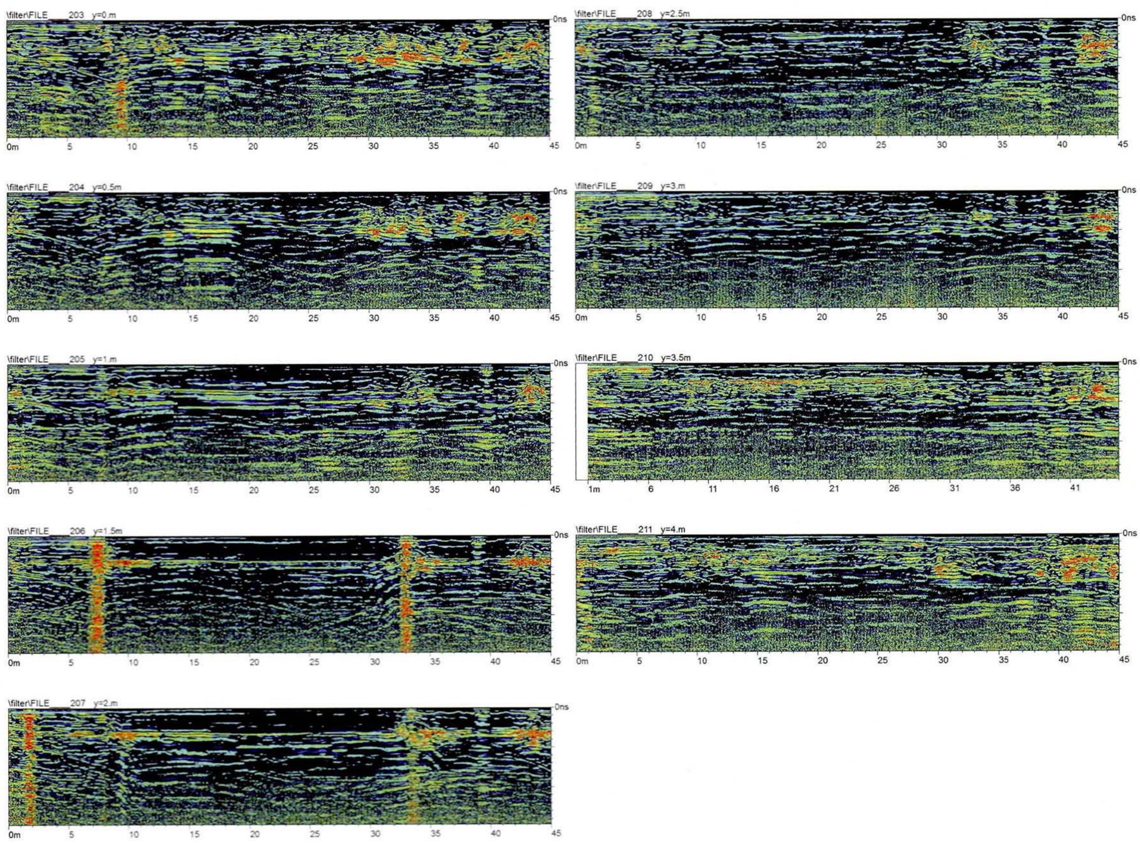


Fig.90　レーダー成果断面図（Profile）

い。発掘調査と併用した検討が必要であろう。また，溝については電気探査が有効である可能性があるが，アスファルト面にいかに電極を配置するか，という課題があり，今後方法の改良を含めて解決策を見出したい。

太宰府周辺において，有効に探査が使用できるか，という課題は，今回の調査では解決できなかった。政庁地区などの条件が良好な場所におけるデータ取得の必要と，発掘調査との併用による検討をこれからもおこなう必要があるだろう。

第Ⅵ章　総　括

（1）日吉地区の遺構変遷と大型建物群の配置について

本節では，本文において報告した遺構・遺物の調査成果をもとに日吉地区の遺構変遷を提示するとともに，官衙として機能したと考えられるⅠ～Ⅲ期における日吉地区官衙の範囲と大型建物群の配置についても言及したい。

1）日吉地区の遺構変遷

日吉地区においては，建物として四面廂建物１棟，総柱建物１棟，片廂建物１棟，側柱建物13棟，柵４条及び小型建物５棟・柵２条を確認したが，大略南北棟及び東西棟の大型建物と軸を東に振る小型の建物で構成されている。他の遺構として，井戸５基，溝20条，土坑15基，礫・瓦敷遺構，採土遺構，落込等を検出した。建物・柵の切り合い関係を以下に示すと，

大型建物　　　　　　小型建物

ＳＢ1995 → ＳＢ2000
ＳＢ1995 → ＳＢ2001
ＳＢ2279 → ＳＢ2285 → ＳＢ2195 → ＳＢ2292
ＳＢ2220 → ＳＢ2215 → ＳＢ2292
ＳＢ2220 → ＳＢ2215 → ＳＢ2290
ＳＢ2220 → ＳＢ2225 → ＳＢ2294
ＳＢ2200 → ＳＢ2288
ＳＢ2205 → ＳＢ2288
ＳＡ2206 → ＳＢ2288
ＳＢ2245 → ＳＢ2240
ＳＡ4085 → ＳＢ2240

（矢印は　古→新）

となる。また，直接建物掘方同士は切り合ってはいないものの，重複しているものとしてＳＡ1999－ＳＢ1990，ＳＡ2210－ＳＢ2205，ＳＢ2200－ＳＢ2225が重複関係にある。

次に建物の方位からみていくと，

①北から東に30分振る建物－ＳＢ1990・2000・2195・2001・2220・2225・2230・2240
②北から東に2度振る建物－ＳＢ1995・2235，ＳＡ4085
③北から西に30分振る建物－ＳＢ2200・2279・2285，ＳＡ1999・2206
④北から西に２度振る建物－ＳＢ2205・2215・2245
⑤北から東に11度振る建物－ＳＢ2290・2292・2295
⑥北から東に14度振る建物－ＳＢ2288・2294，ＳＡ2254・2272

以上の六つの方位がみられるが，大別するとＡ：①・③の東・西に30分振る建物，Ｂ：②の東に２度振る建物，Ｃ：④の西に２度振る建物，Ｄ：⑤・⑥の東に11～14度振る小型建物の４群に分けることができる。なお，建物掘方内からは，若干ではあるが，須恵器・土師器等の土器及び瓦片が出土しており，ＳＢ1990は8世紀代，ＳＢ1995・2001は８世紀前半，ＳＢ

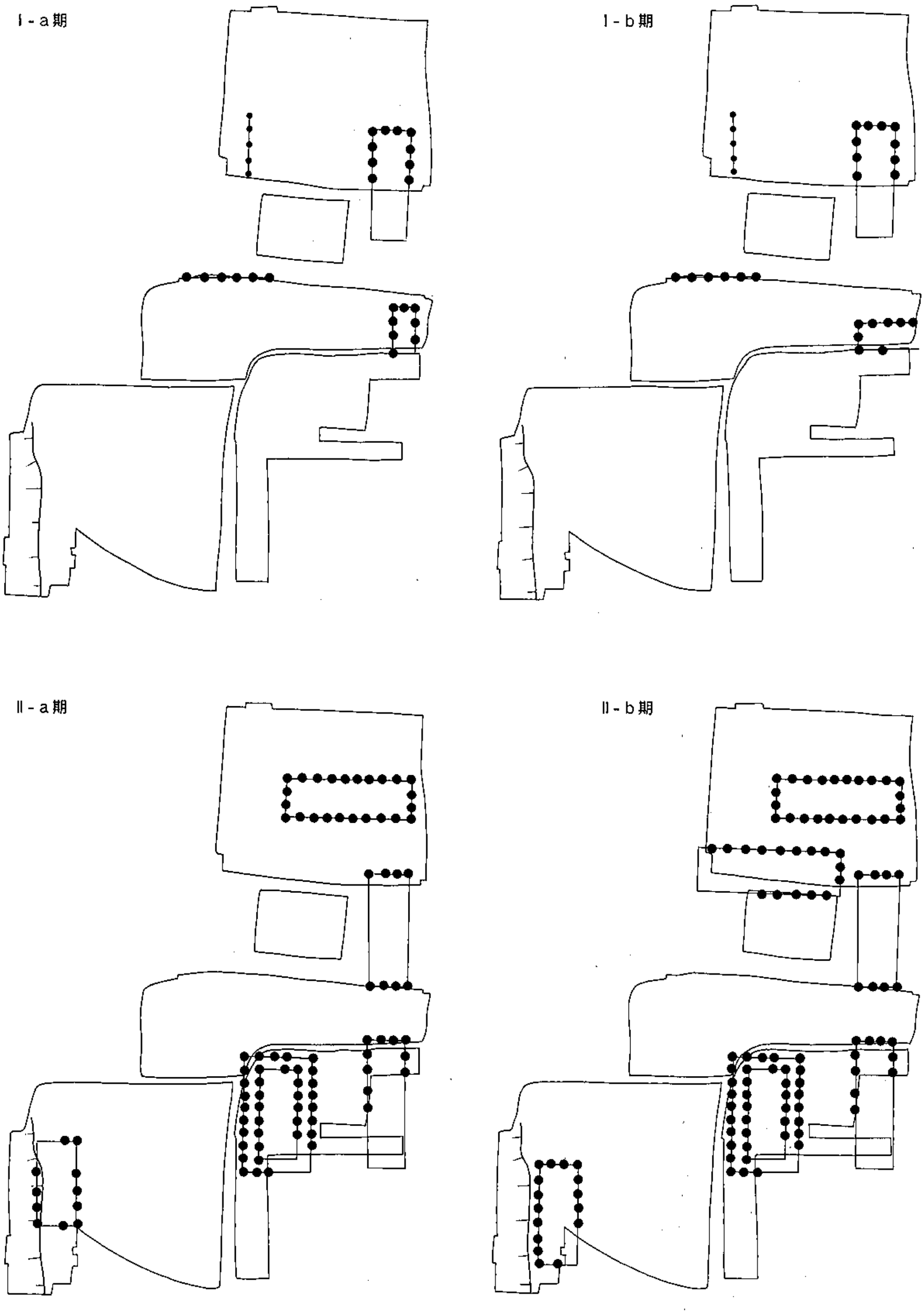


Fig.91　日吉地区建物変遷図①

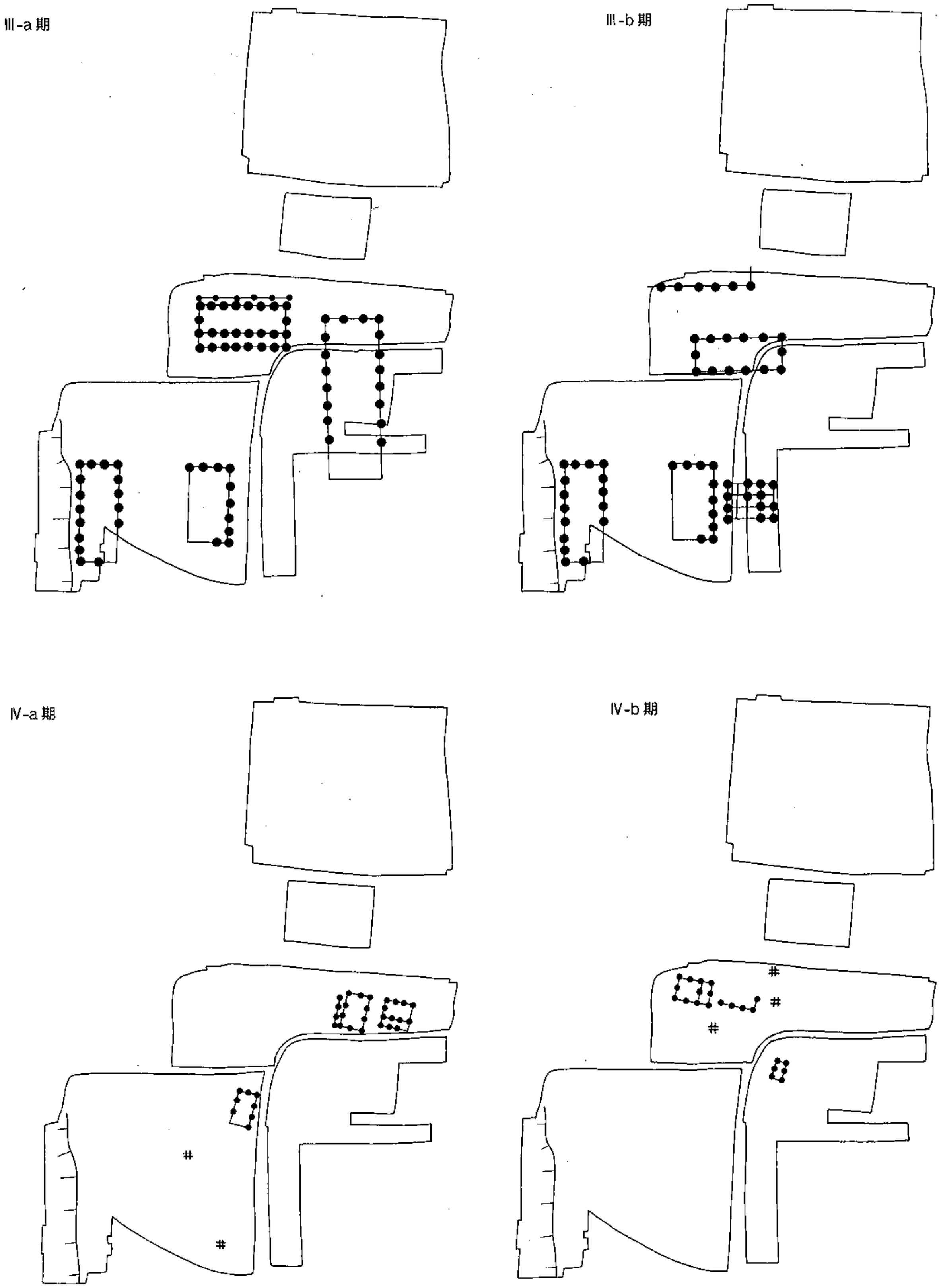


Fig.92　日吉地区建物変遷図②

2000は８世前半～中頃，ＳＢ2220は８世紀中頃，ＳＢ2240・2245は８世紀後半,ＳＢ2200・2215・2235は９世紀中～後半の築造と考えられる。

以上，日吉地区の遺構は出土遺物，切り合い関係，方位などからⅠ～Ⅴ期に大別でき，Ⅰ～Ⅳ期はａ・ｂの小期に細分した。以下，時期ごとの概要について説明する（Fig.93・94)。

＜Ⅰ期＞（8世紀前半頃）

Ⅰ-a期：ＳＢ1995・2279，ＳＡ1999・2210？

Ⅰ-b期：ＳＢ2285

日吉地区に遺構が現れる時期である。切り合い関係により75次調査で検出したＳＢ1995が官衙開始期の建物とみなされる。建物は日吉地区の北側に展開し，柵ＳＡ1999・2210？が当該期の遺構である。ＳＢ2279は切り合い関係から古くおけるが，方位がＳＢ1995とは異なっていることから後出するものとみられる。

＜Ⅱ期＞（8世紀前半～後半頃）

Ⅱ-a期：ＳＢ2000・2001・2195・2220・2245

Ⅱ-b期：ＳＢ1990・2240

建物が南側にも展開し，四面廂建物ＳＢ2220を中心としてＳＢ2000・2001・2195が逆Ｌ字形に配置され，官司としての体裁を整えた時期として設定した。ｂ小期はＳＢ1990・2240が付加されたものと捉えている。Ⅱ期の建物配置に関しては，後述する。

＜Ⅲ期＞（9世紀中～後半頃）

Ⅲ-a期：ＳＢ2200・2215・2235・(2240)，ＳＡ2206

Ⅲ-b期：ＳＢ2205・2225・2230

Ⅲ期は建物群が西～南側にかけて展開し，ａ小期は片廂建物ＳＢ2200を中心として東側にＳＢ2215，南側にＳＢ2235の配列を考えた。ＳＢ2230は総柱建物でもあり，官衙施設としての最終段階においたが，この時期をもって官衙としての性格が終焉する。なお，ＳＢ2230・2235・2240には切り合い関係がなく，2235と2240は北側梁行の柱筋を揃え，ＳＢ2235は本文では７間の建物と報告したが，５間（桁行11.7m）の可能性もあり，この11.7mという数字はＳＢ2235と2240間の距離（11.8m）に近似することから両者は同時併存と考えることも可能である。

＜Ⅳ期＞（11世紀後半～12世紀前半）

主要遺構：ＳＢ2288・2290・2292・2294・2295，ＳＡ2254・2272
　　　　　ＳＥ2250・2255・2260・2265・2270

Ⅳ-a期：東に11度振る建物-ＳＢ2290・2292・2295，ＳＥ2265・2270

Ⅳ-b期：東に14度振る建物-ＳＢ2288・2294，ＳＡ2254・2272，ＳＥ2250・2255・2260

Ⅳ期の建物は，方位からａｂ小期に細分したものの切り合い関係にはなく，出土遺物も乏しいことから前後関係は不明であるが,一応設定しておく。なお,Ⅲ期の終焉については不明確で,10世紀代まで下るかどうかについてはよく分からないが，確実に10世紀まで下る建物は確認されていない。それに引き替え，丸底状の土師器坏や玉縁の白磁などが多く見られ，11世紀後半から12世紀にかけて小型の建物群やそれらに伴う井戸が見られるようになる。これらの小型の建物群は規模の小ささや，正方位の軸線ではないことから官衙的な性格は到底考えられない

が，建物の軸線はいずれも一致しており，一連の建物群であると想定される。日吉地区官衙廃絶後に，この地が集落化していったことを示しているものと考えられる。底部糸切りの小皿や坏が全く伴わないことから，12世紀前半までの時期に収まるものと考えられる。

＜Ⅴ期＞（13世紀）

主要遺構：ＳＤ4660（埋没年代），ＳＸ4082・4083・4087

この時期になると，Ⅰ～Ⅲ期にかけて日吉地区官衙の西側を区画していた南北溝ＳＤ4660が完全に埋没し，埋没後に粘土採掘が行われるようになる。隣接する政庁前面広場地区や不丁地区でも同様の粘土採掘遺構が検出されており，政庁前面の一帯が土採り場となったことを示している。

以上のように，日吉地区は政治的空間から，庶民の居住空間へと変遷し，最終的に土採り場に変容していった過程を追うことができる。

2）日吉地区官衙の範囲

日吉地区官衙の範囲は，Ⅰ～Ⅲ期の遺構の範囲から推測すると，少なくとも東西約70ｍ，南北約80ｍの範囲が見込まれる。さらに，四至を区画溝で囲まれていたと想定するならば，南側は御笠川の氾濫原で消滅しているために確認する術はないが，西側は政庁前面広場との区画溝のＳＤ4660までである。さらに，北側も現在の県道部分は未調査のために不明であるが，県道北側の月山東地区31次調査で，政庁南門前面を東西に横切る条路（推定五条路）が存在すると考えられるため，その条路の南側溝ＳＤ553まで見込むとなると，南北100ｍを超える規模となるが，未調査部分も多いため詳細は不明である。

東側については，25・79次調査地の東側が氾濫原であり不明確であるが，75次と79次調査地の間は幅約10ｍの区間に県道が南北方向に走っているために未調査地が連続している。さらに，この場所の北側の31次調査地では，推定五条路の側溝が北側に折れている状況が見受けられ，ここが五条路と左郭二坊路との交差点になっていた可能性が高いため，南側の75次調査地と79次調査地の間に左郭二坊路が検出される可能性も高いものと考えられる。そうなると，現状で確認されている日吉地区官衙の東西の範囲については，現状の約65ｍの範囲と想定される。

以上のことから，日吉地区官衙の範囲は，東西は左郭二坊，南北は五～六条の範囲内が推定できる。そして，本来あるはずの六条路の痕跡が全く見られないことから，二条分の南北幅を持って日吉地区官衙が設定された可能性も考えられるが，現段階でははっきりとしないため，今回は予察程度に留め，周辺地区の検討も進めた上での今後の課題としたい。

3）大型建物群の配置

ここでは，Ⅱ期大型建物群の配置について検討したい。先ず，建物配置を検討する上で問題となるのが，ＳＢ1995とＳＢ2000との切り合い関係であるが，ＳＢ1995の北側梁行隅柱から2・3番目の掘方とＳＢ2000の南側桁行東隅柱から2・3番目の掘方が切り合っており，75次調査時点ではＳＢ1995がＳＢ2000を切っているとしていたが，隅柱から3

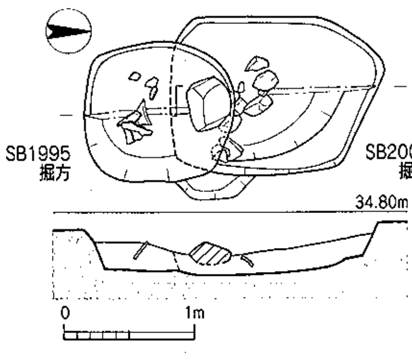


Fig.93　ＳＢ1995・2000掘方切り合い関係図（1/60）

番目の掘方・土層断面図（Fig. 93）を詳細に観察するとＳＢ1995掘方内に角礫があり，角礫と同一レベルないしは下位にＳＢ2000掘方内に含まれる礫・瓦が図示されており，ＳＢ1995掘方が切っているのであれば礫・瓦は存在し得ないはずであるが，礫・瓦が図示されている。これとは逆に，角礫から南30cm部分が空白となっており，この部分には遺物は存在しない。このことは，角礫は本来ＳＢ2000側に図示されるべきで，ＳＢ2000がＳＢ1995を切っていたことの証左となろう。また，隅柱から２番目の掘方であるが，切り合いを確認した土層の深さが10cm前後と浅く，前後関係を判断するのには微妙な状況である。従って，ＳＢ2000がＳＢ1995を切っていると訂正しておきたい。

次に日吉地区官衙の特徴は，梁行３間の大型建物が存在するということである。梁行３間の建物としては，ＳＢ1990・1995・2000・2001・2195・2215・2235・2240・2245があり，現段階で９棟確認している。この梁行３間の建物は，大宰府政庁周辺官衙においては，不丁地区でＳＢ2355（桁行７間）・2366（桁行不明）・2435（桁行８間）・2525（桁行９間以上）・2530（桁行８間以上）・2900（桁行４間以上）の６棟，来木地区でＳＢ4300（桁行５間）の１棟が検出されている。また，学校院東辺部でＳＢ700（桁行６間以上），観世音寺南辺域でＳＢ3660Ａ（桁行８間）・3660Ｂ（桁行７間）があるものの，周辺官衙域においては際立っている点が指摘できる。時期的には，ＳＢ1990を切る落込ＳＸ1989から８世紀後半の土器が出土している。また，ＳＢ700掘方埋土上層からは，８世紀後半とみられる長頸壺が出土していることからみて梁行３間の建物は８世紀代の所産と考えられる。

さて，Ⅱａ期の建物群の配置であるが，最北端に位置するＳＢ2000東梁行柱列とその南側に位置するＳＢ2001東桁行柱列，さらに南に位置するＳＢ2195東桁行柱列が一直線上に並ぶ。しかもＳＢ2000・2001の柱列間隔とＳＢ2001・2195の柱列間隔は同じ8.8ｍの距離を有し，３棟は逆Ｌ字形に整然と配置されている。建物規模は何れも梁行が３間で，桁行はＳＢ2000が９間で，ＳＢ2001も９間に復原でき，ＳＢ2195は現状で７間以上の建物であるが，９間となる可能性が高い。また，ＳＢ2195の西側に位置する四面廂の南北棟建物ＳＢ2220は，方位が前者と等しく，ＳＢ2195西桁行柱列からＳＢ2220東桁行側柱列までの距離が9.1ｍと先の建物間隔（8.8ｍ）より30cm長いものの近似する数値である。これらのことから，日吉地区Ⅱａ期建物群は中枢施設とみられるＳＢ2220を取り囲む形で３間×９間の建物群がコ字形に配置されているのが窺える。この建物群は，大宰府政庁Ⅱ期における所司の一つを構成するとみられるが，蔵司を初めとする19ある所司の何れに該当するかは役所名を記した文字資料が共伴していないので不明である。また，特殊遺物からも特定の所司を推定させるものは出土しておらず，官衙の性格等に関しては周辺官衙跡の最終報告段階で改めて検討することとしたい。

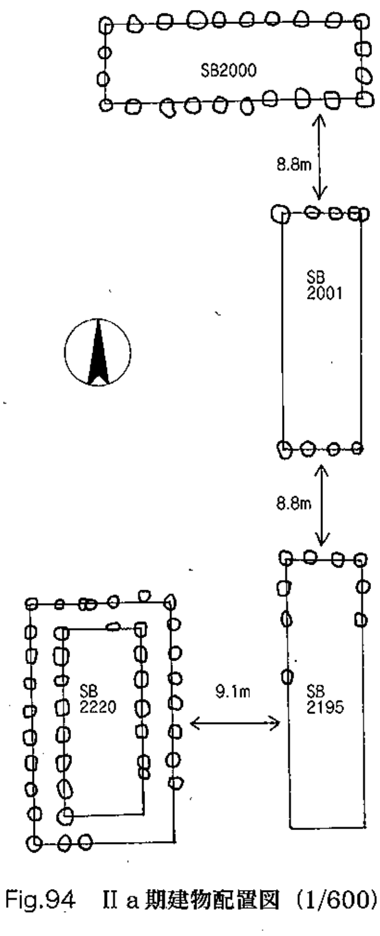


Fig.94　Ⅱａ期建物配置図（1/600）

（2）御笠川の官衙遺構残存への影響について

1）はじめに

現在，大宰府政庁前面の官衙地区は区画整理事業によって整然とした街区となり，御笠川はその南側を，東から西へほぼ正方位に流れている。その流れは非常に直線的だが，区画整理とともに進められた昭和57年（1982）の河川改修までは，御笠川は大きく蛇行しながら西流していた。そのため，改修までに多くの氾濫と，両岸の開析を繰り返してきたことは想像に難くない。区画整理・河川改修事業前の地形図や航空写真に窺える旧地形でも，蛇行する御笠川の両岸に，地形や区画線の乱れが窺われ，氾濫原の範囲を反映するものと考えられる。昨年『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ　—政庁前面広場地区—』の中で報告した，朱雀門遺構と推定されるＳＢ4650の礎石も，砂が厚く堆積する氾濫原中より発見された。このほか，これまで九州歴史資料館が行ってきた前面官衙地区の調査でも，氾濫原と判断される堆積状況や，実際に遺構の一部が氾濫原により破壊された状況を検出した地点も複数確認できる。

古代大宰府に属した官衙遺構がどのように残存し，また失われているのかを整理することは，今後，遺跡の評価をする上でも重要な点となってこよう。ここでは，これまでの調査成果の検討から，御笠川の氾濫原と前面官衙地区の遺構残存状況について考えたい。なお，旧御笠川以南については検討の対象外とする。

2）前面官衙各地区における調査成果の整理

日吉・五反田地区

本書で報告の対象とした日吉地区および東の五反田地区である。特に日吉地区は推定「府庁域」の内側に属し，元来は多くの官衙施設が展開していたと考えられる。実際に本書で報告したとおり，官衙施設と判断される多くの遺構が集中して検出されている。

しかし，県道太宰府・筑紫野線より南に100ｍ付近になると遺構そして遺構面の確認ができなくなる。153次調査では官衙遺構が高い密度で広がっていたが，南に隣接する143次調査地では既に遺構面が流出し，西へ下る谷地形が確認されている。また207次調査では，古代の遺構面が想定されるレベルよりも，かなり深い深度まで掘り下げながら，遺構面や地山の確認はできなかった。このあたりより南側の遺構・遺構面は，御笠川の氾濫により失われたと考えられる。旧地形でも，日吉地区を中心に氾濫原と思しき地形の乱れが，大きく北に食い込んでおり，143次や207次調査地はその内側（川側）にあたる。このことは，地形の乱れが氾濫原の範囲を反映することの証明ともなろう。五反田地区の145次・201次調査地も，推定氾濫原の内側にあたるが，調査ではやはり厚い砂層の堆積を確認している。

一方，推定氾濫原の外側にあたるが，東側の164次・173次調査地では，南北方向の谷筋を確認している。ここには現在も，月山丘陵と学校院が設けられた微高地の間から流路が下るが，その流れに伴う堆積である。日吉地区官衙跡の検出範囲はこの谷筋の西側までに収まるが，谷筋によって一部が流出した可能性も考えられよう。

さらに東の198次調査地では低湿地の状況を確認しているが，遺構が失われたものか，当初より開発されなかったのかは定かでない。

前面広場地区

続いて，昨年度に報告を行った政庁前面広場地区である。日吉地区に続いて，旧地形では推定氾濫原の地形の乱れが南東部分を大きく浸食している。実際に，推定氾濫原の内側に当たる197次調査地と，そのすぐ北側の大宰府条坊跡39次として実施された調査で氾濫原を確認している。

また204次調査地でも，古代の遺構面が想定されるレベルよりも，かなり深い深度まで掘り下げながら，遺構面や地山の確認はできなかったことから，やはり御笠川の氾濫により遺構・遺構面が失われたと考えられる。なお，204次調査地付近は，200次調査や168-2次調査で検出した長大な南北溝ＳＤ4660と氾濫原の合流部にあたる。日吉地区の207次調査地付近も南北流路と氾濫原の合流部であり，２本の南北流路が集中する日吉地区から前面広場地区東側にかけては，御笠川の氾濫による浸食を受けやすかったことが考えられる。

遺構を破壊する氾濫原

さらに136-2次調査では，調査区の南東部の遺構面が氾濫原により流失し，ＳＤ2296などの遺構が破壊されていた。その流出範囲は，やはり旧地形に窺える推定氾濫原と合致しており，ここでも，両者の関係性の高さが窺える。

不丁地区

不丁地区は，日吉地区から前面広場地区を挟んで西側に位置する。遺構は比較的しっかりとした沖積微高地上に展開しており，遺構面の流出範囲も少なく，官衙遺構を良好に検出した地区である。旧地形でも，日吉地区で北に食い込んだ推定氾濫原は，不丁地区の微高地を避けて大きく南に迂回している。遺構残存状況が良いということで，氾濫原を検出したのも最南端で実施した187次調査のみである。

遺構を破壊する氾濫原

187次調査では，調査区の南西部を氾濫原が占め，ＳＢ3815やＳＤ4570などの遺構を破壊する状況を検出した。ここでも，氾濫による遺構面の流出範囲と推定氾濫原の区画が合致することが確認できる。

また，区画整理より以前には，小字不丁と西隣の大楠の南側には，御笠川との間に小字油田が存在した。ここは全域が推定氾濫原の内側に属している。ここについては，国道３号線福岡南バイパスの建設に伴って昭和52年に試掘調査が行われ，11本のトレンチが掘削されているが，全て氾濫原であったことが報告されている。なおこの時，大字通古賀字東蓮寺と大字太宰府字鼓石の一部でも試掘調査が行われている（福岡県教育委員会1978『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第８集』「Ⅵ．都府楼前条坊遺跡の調査」参照）。

大楠・広丸・九郎田地区

不丁地区の西側に広がる大楠・広丸の官衙地区と前面官衙地区最西端の九郎田地区である。大楠・広丸地区は不丁地区と共に沖積微高地に展開し，全体的な遺構残存状況は比較的良好である。

大楠地区でも氾濫原を検出したのは南端の171次調査地で，砂層の堆積を確認している。その20ｍ東側に位置する88次調査地では，広い範囲で良好に残存する遺構を検出した。旧地形図で両調査地を照らし合わせてみると，88次調査地は推定氾濫原の外となる北側に，171次調

査地は推定氾濫原との境にまたがって位置している。

続く広丸地区では，御笠川本流とともに推定氾濫原も北西に向きを変え，遺構の残存が想定される範囲も，次第に狭まってくる。132次・148次調査地では，西に向けて地山が大きく傾斜しており，ここまで氾濫原が及んでいることを確認した。さらに県道太宰府・筑紫野線に近い辺りでも，地区の東側では遺構も良好に検出されるが，西側の157次や175次調査地になると，遺構は確認されるものの，御笠川に近い調査区の西側部分では，遺構は認められなくなる。175次調査地は丘陵端部から御笠川に向かって地形が下っていく場所に立地するが，調査区内に広く流砂が認められており，既に水の影響を受けやすい場所となっている。このため，これより西側には遺構は残存していない，または展開していなかった可能性が高いと言えよう。

その西側に当たる九郎田地区は，地区全域が推定氾濫原の内側に位置する。ここでは唯一，202次調査を行っているが，確認したのは，やはり砂層が厚く堆積する氾濫原であった。

3）小結

以上の検討の結果から，推定される氾濫原が及ぶ範囲について示したのがFig.95である。今回は詳しく検討を行わなかった南岸についても，国道3号線福岡南バイパス建設の試掘調査成果や，旧地形図を基に推定される範囲を示している。

しかし，前面官衙地区との関係で述べるならば，やはり日吉地区から前面広場地区にかけて，遺跡が大きく流出していること，遺跡の残存状況が良好な不丁地区でも，実際に遺構が氾濫によって失われていることは特筆すべきであろう。「遠の朝廷」大宰府が名実共に機能し，前面官衙地区に諸官司の官衙施設が展開していた当時も，御笠川の増水は度々発生していたことが考えられる。護岸設備も当然現在ほどの水準でない当時，すぐ側で荒れ狂う濁流に，極端に言えば，官衙施設自体がいつ流失してもおかしくない状況にあったと思われる。一方で，蔵司地区や月山地区，政庁後背地区など，高燥地に展開した官衙は洪水による流失の危険性が少なく，両者には役割・性格の違いがあったことも想定されよう。今後，大宰府の諸官司と政庁周辺官衙跡との関係を考える上で，注目すべき点といえる。

官司の性格と立地の関係

区画整理事業当時は，広い面積で調査を行うことが多かった政庁前面官衙地区も，近年は遺構の保全を第一に考え，確認調査的なトレンチ調査に止まることがほとんどである。その個々の調査は短期間に終了し，成果についても単体ではどのように評価すべきか難しいものも少なくない。氾濫原を検出した場合も，その時点ではそれが氾濫原である以上の評価は下せるものではない。しかし狭い範囲のトレンチ調査でも，その成果の積み重ねは，本節で検討したように，往時の状況や，その後現在に至る遺構・遺跡の変遷を復元できる大きな材料となる。今後も，前面官衙地区に限らず，大宰府政庁周辺官衙跡では，このような狭い範囲の調査が行われることが多いことが想定されるが，その重要性を認識しながら，古代大宰府像の復元に努力していきたい。

調査成果の積み重ね

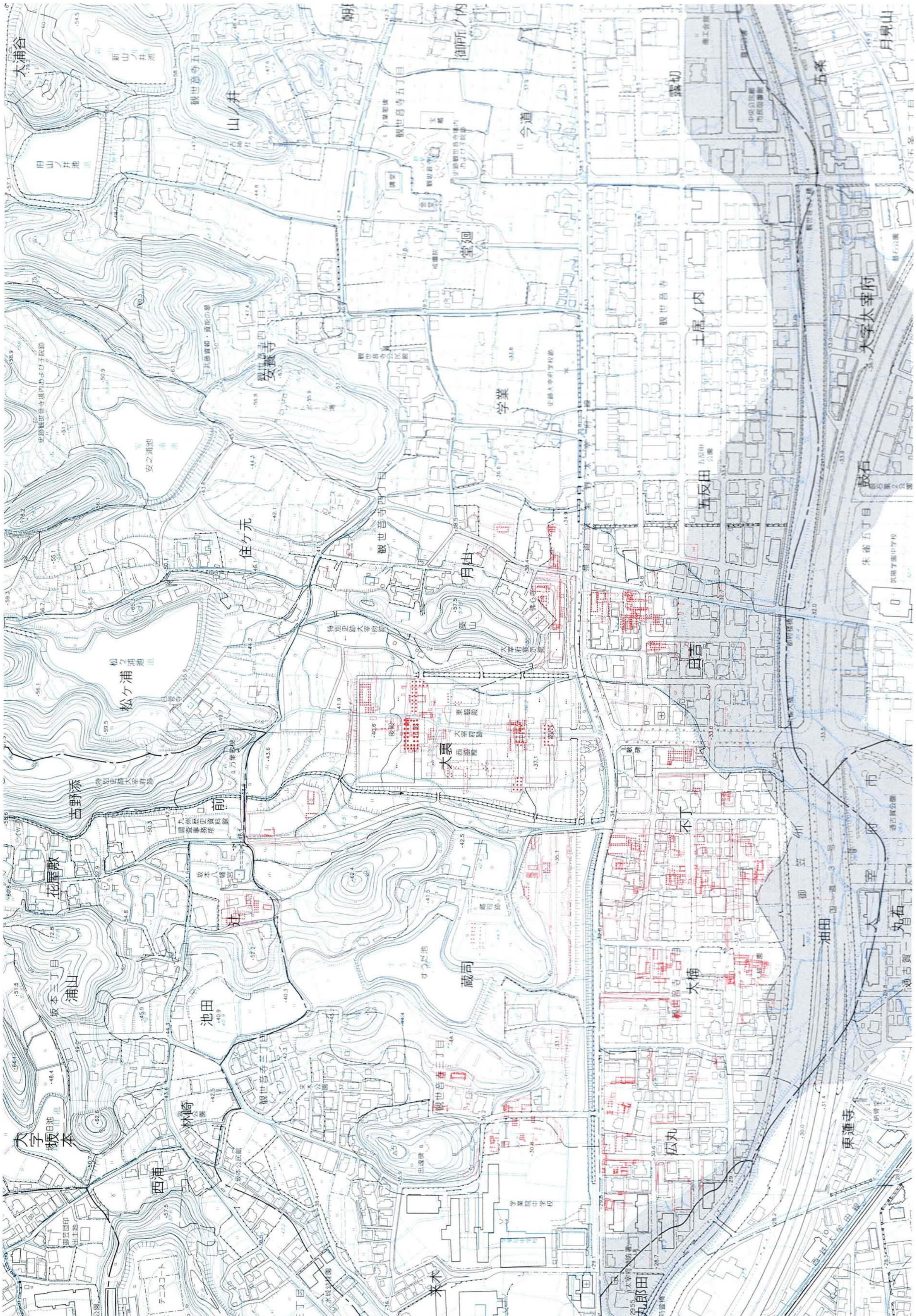


Fig.95　御笠川氾濫原の範囲推定図（1/4,000）

(3) 総　括

1) はじめに

昭和47年に九州歴史資料館が発足して以降は，当館が大宰府史跡の発掘調査を担当し，大宰府史跡を総合的・学術的に解明することを目標に掲げ，５ヶ年を一括りとした調査計画を立案し，発掘調査を実施している。大宰府史跡の発掘調査成果は，『大宰府史跡発掘調査概報』の刊行を中心として，『九州歴史資料館研究論集』での調査研究成果の公表，常設展・企画展・特別展での出土品の展示公開，「九歴講座」での発掘調査成果の発表，「九歴だより」での最新情報の発信等を行ってきた。 情報の発信

『大宰府史跡発掘調査概報』に関しては，平成11年度までは概要報告書という体裁で刊行してきたが，平成12年度以降は概要報告書ではなく，報告すべき遺構・遺物を網羅した年次ごとの報告書を作成し，従前のやり方を改善している。

また，大宰府史跡に関する正式報告書の刊行は，平成13年度に『大宰府政庁跡』を刊行したのを嚆矢として，平成16～18年度には『観世音寺』，平成20・21年度には『水城跡』を刊行した。平成21年度は『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ』として大宰府政庁跡前面広場地区で行った発掘調査の内容及び調査成果を掲載した政庁周辺官衙跡における最初の正式報告書を刊行した。本書はそれに継ぐもので，『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ』として大宰府政庁周辺官衙跡の日吉地区で行った発掘調査の内容及び調査成果を報告するものである。

現在，住宅地と化している大宰府政庁跡前面域には大宰府政庁関連の重要な官衙施設が拡がっていることが従前の発掘調査により明らかになっている。これまで，住宅改築の際には，地権者の協力のもと建築物の基礎が遺構面に到達しないよう保護盛土を施し，遺構の地下保存を図ってきた場所でもある。しかし，近年の耐震偽装問題，福岡西方沖地震及び建築基準法の一部改正等により，基礎杭の打設，免震工法の採用と言った耐震性の高い住宅を求める建て主が急増している。こうした最中，地下室建設により長らく地下保存されてきた遺構が完全に破壊されるという憂慮すべき事態が発生した。今後，この様な事例を繰り返さないためには，現在住宅街となっている大宰府政庁跡前面域の地下には大宰府政庁関連の重要な遺構が存在していることを地権者及び地域住民に周知徹底することが必要である。重要遺構の存在の周知に関しては，『九歴論集』・「九歴だより」での公表，九歴講座他種々の講座における発表等の九歴活動の一環として行っているが，本書がその中心的役割を担うものと考えている。

2) 調査成果

今回報告する日吉地区の範囲は，南北が県道筑紫野太宰府線から御笠川までの長さ約200m，西縁が大宰府史跡168-2次調査及び200次調査で検出された政庁前面広場と日吉地区官衙とを画する南北溝ＳＤ4660までで，東縁が月山東地区官衙の前面までの東西幅約200mを指す。日吉地区として発掘調査を行った次数は，大宰府史跡25・32・75・79・80・114・143・145・153・164・173・198・201・207次調査である。

32次調査では，掘立柱建物２棟を検出した。これにより，大宰府政庁前面域には建物群が存在することが確定的となり，府庁域の範囲が拡大した。75次調査では，梁行３間，桁行９間の東西棟建物ＳＢ2000・1990（桁行８間以上），梁行３間の南北棟建物1995・2001を検出した。

出土遺物から政庁Ⅱ期の開始時期とそれ程隔たらない時期の所産とみられ，建物の規模からしても「官衙」と考えられた。80-1・2・3次調査では，南北棟建物７棟，東西棟建物３棟，総柱建物１棟及び２間×３間の小規模な掘立柱建物５棟，東西方向の柵２列，井戸５基，土坑，溝，礫敷遺構，池状遺構等を検出した。掘立柱建物ＳＢ2220は梁行３間，桁行７間の身舎の四周に廂を設けた四面廂建物であることが判明した。この調査により，日吉地区の建物群は四面廂建物ＳＢ2220を中心にコ字形配列をなし，一官司を構成する重要な地区であることが明らかとなった。153次調査では，新たに掘立柱建物１棟，南北溝，採土遺構を検出した。採土遺構は周辺の状況から中世に下るものであるが，官衙の終焉に関連する遺構である。

次に主要遺構ごとに調査成果をまとめる。

範　囲　日吉地区官衙の範囲は，西が政庁前面広場と日吉官衙を画する区画溝ＳＤ4660までで，北側は五条路の南側溝ＳＤ553までで，東・南側は御笠川の氾濫原であるため不明瞭ではあるが，東西は左郭二坊，南北は五〜六条の範囲内に推定できる。

建　物　日吉地区においては，四面廂建物１棟，総柱建物１棟，片廂建物１棟，側柱建物13棟，柵３条及び小型建物５棟・柵２条を確認したが，大略南北棟及び東西棟の大型建物と小規模な小型建物で構成されている。建物の出現は，大宰府政庁Ⅱ期の開始に連動するとみられ，日吉地区官衙Ⅱａ期には四面廂建物を中心に梁行３間の建物がコ字形に配列し，大宰府の一官司を構成したとみられるが，具体的な所司の特定はできておらず，今後の検討課題である。また，建物の変遷は，Ⅰ〜Ⅲ期の大規模な官衙建物からⅣ期の小規模な集落建物へと変化する。

大宰府の一官司を構成

採土遺構　黒色粘土を採掘した土取り穴で，不丁地区を中心として58・73・83・84・86・87・131・134・153・156次調査で確認され，採掘時期は９世紀代を上限に14世紀代を下限とする。採土目的は瓦製作用粘土として黒色粘土を使用するための掘削等が考えられる。153次調査では，円形の採土遺構ＳＸ4082・4083と調査区南端で検出したＳＸ4087がある。ＳＸ4087においては，未掘削の黒色粘土が島状に残存しているのを確認しており，採土遺構は溝ＳＤ2284以西に拡がっているものと考えられる。採土遺構の時期であるが，134次調査では11世紀後半代の白磁片，153次調査では13世紀の土器や青磁碗，156次調査では12世紀前半の青磁碗片が出土しており，官衙としての機能が終焉した後の掘削とみられる。

その他の遺構　その他の遺構として，井戸・溝・土坑・落込・礫瓦敷遺構等がある。ＳＸ2280は長さ７ｍに渡って瓦片を敷き詰めたものであるが，北側に側溝とみられる小溝を伴っており，通路的な用途が考えられる。

3）残された課題

今回の報告書は，『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ』として大宰府政庁周辺官衙跡の日吉地区で行った発掘調査の内容及び調査成果を悉皆的に掲載するものであり，前回報告した大宰府政庁跡前面広場地区に続く政庁前面官衙の正式報告書である。

建物群の変遷を把握

日吉地区の調査成果としては，建物群の変遷を把握し，Ⅰ〜Ⅲ期の官衙施設からⅣ期の集落建物への推移及び土地利用の変化を把握したことがあげられる。また，Ⅰ〜Ⅲ期の大規模建物に関しては，大宰府の一官司を担ったとみられるが，出土資料不足により具体的な所司の特定ができておらず，今後の課題である。

次に日吉地区官衙の範囲であるが，前述した如く日吉地区官衙は，東西は左郭二坊，南北は五～六条の範囲内に想定できるが，本来存在すべき六条路の痕跡が全く検出できないことから二条分の南北長をもって官衙域が設定された可能性も考えられるが，現段階では判然とせず，周辺地区の検討も考慮した上での課題である。

また，建物群に関しては，日吉地区のみの検討では不十分であることは重々承知しており，大宰府政庁及び他の周辺官衙，条坊遺構等を含めたところでの総合的な検討が必要であることは言うまでもない。しかし，大宰府政庁周辺官衙跡の正式報告書の刊行は，やっと軌道に乗り出した状況であり，政庁周辺官衙跡全ての本報告書の刊行となると向こう10年程の年数を要するとみられるが，政庁周辺官衙跡の最終本報告時点で総括編を予定しており，そこで総合的に検討したい。

最後ではあるが，平成22年11月21日に九州歴史資料館は小郡市三沢に移転開館した。大宰府史跡の足下である太宰府の地を離れ，筑後小郡に移った訳であるが，当該地周辺には小郡官衙遺跡・下高橋官衙遺跡を初めとする大宰府関連の国指定史跡があり，寺院としては井上廃寺・上岩田遺跡，集落遺跡としては薬師堂遺跡・宮原遺跡等枚挙にいとまがない。これからの九州歴史資料館の調査研究方針としては，大宰府史跡に軸足を置きつつも西海道を視野に入れた調査研究，大宰府史跡の正式報告書の着実な刊行，常設展・企画展における大宰府・西海道関連資料の展示，九歴講座・専門講座の講演等において大宰府史跡の情報発信を総合的に行い，以前にも増して大宰府史跡の調査研究を推進してゆきたいと考えている。

Tab.10　報告書掲載遺物一覧（1）

Fig.	図番号	調査次数	注記（S番号・土層名）	遺構番号・層位名	種類	器種	掲載概報	掲載図番号	重量	登録番号
43	1	80次	暗茶土	暗茶色土	軒丸瓦	032型式	大宰府史跡昭和57年度概報	P68-1	－	－
43	2	80次	S-1	その他の遺構・層位	軒丸瓦	032型式	不掲載	不掲載	－	－
43	3	80次	暗茶土	暗茶色土	軒丸瓦	032型式	不掲載	不掲載	－	－
43	4	80次	S-167	SB2230	軒丸瓦	033型式	大宰府史跡昭和57年度概報	P68-2	－	－
43	5	32次・80次	床土・S-144	SD2259	軒丸瓦	209型式	不掲載	不掲載	－	－
43	6	75次	床土	その他の遺構・層位	軒丸瓦	275A型式	不掲載	不掲載	－	－
43	7	153次	砂	SD4660	軒丸瓦	275B型式	大宰府史跡平成６年度概報	P15-1	－	－
43	8	153次	S-1下層	その他の遺構・層位	軒丸瓦	290Aa型式	大宰府史跡平成６年度概報	P15-3	－	－
43	9	153次	暗褐土	SD4660	軒丸瓦	290B型式	大宰府史跡平成６年度概報	P15-2	－	－
43	10	75次	S-13	SB1995	軒丸瓦	290B型式	不掲載	不掲載	－	－
43	11	80次	暗茶土	暗茶色土	軒丸瓦	290B型式	不掲載	不掲載	－	－
43	12	80次	床土直下	その他の遺構・層位	軒丸瓦	巴紋	不掲載	不掲載	－	－
44	1	80次	灰褐土下	灰褐色土	軒平瓦	560Ba-b型式	不掲載	不掲載	－	－
44	2	153次	暗褐土	SD4660	軒平瓦	560B型式	大宰府史跡平成６年度概報	P15-4	－	－
44	3	80次	S-5下層	SE2255	軒平瓦	575A型式	大宰府史跡昭和57年度概報	P68-2	－	－
44	4	80次	灰褐土	灰褐色土	軒平瓦	582型式	大宰府史跡昭和57年度概報	P68-1	－	－
45	1	32次	暗灰土	暗灰色土	道具瓦	鬼瓦	不掲載	不掲載	－	－
46	2	80次	S-35	SX2203	道具瓦	塼	不掲載	不掲載	－	－
46	3	79次	ピット	その他の遺構・層位	道具瓦	塼	不掲載	不掲載	－	－
46	4	32次	暗灰土	暗灰色土	道具瓦	熨斗瓦	不掲載	不掲載	－	－
46	5	80次	黒灰土	SX2231	道具瓦	熨斗瓦	大宰府史跡昭和57年度概報	P69	－	－
49	1	114次	S-3	SB1990	丸瓦	縄目スリケシ	不掲載	不掲載	－	16
49	2	75次	S-59	SB1990	丸瓦	縄目スリケシ	大宰府史跡昭和56年度概報	P109	－	14
49	3	75次	S-52	SX1993	丸瓦	縄目スリケシ	不掲載	不掲載	－	13
49	4	80次	瓦群	SX2280か2281	丸瓦	縄目スリケシ	不掲載	不掲載	－	21
49	5	80次	S-5下層	SE2255	丸瓦	縄目スリケシ	不掲載	不掲載	－	15
49	6	153次	S-32	SD4660	丸瓦	斜格子紋	大宰府史跡平成６年度概報	P22-4	－	19
49	7	80次	瓦群	SX2280か2281	丸瓦	斜格子紋	不掲載	不掲載	－	20
49	8	153次	灰褐土	その他の遺構・層位	丸瓦	斜格子紋	不掲載	不掲載	－	24
49	9	80次	灰褐土	灰褐色土	丸瓦	斜格子紋	不掲載	不掲載	－	22
50	10	153次	S-40	SX4087	丸瓦	斜格子紋	大宰府史跡平成６年度概報	P21-3	－	17
50	11	153次	S-40	SX4087	丸瓦	斜格子紋	大宰府史跡平成６年度概報	P20-2	－	18
50	12	153次	S-40	SX4087	丸瓦	斜格子紋	大宰府史跡平成６年度概報	P18-1	－	25
51	1	75次	S-59	SB1990	平瓦	縄目紋	大宰府史跡昭和56年度概報	P110-1	－	6
51	2	80次	S-340	SB2220	平瓦	縄目紋	不掲載	不掲載	－	1
51	3	80次	S-340	SB2220	平瓦	縄目紋	不掲載	不掲載	－	2
51	4	80次	S-341	SB2220	平瓦	縄目紋	不掲載	不掲載	－	9
52	5	80次	灰褐土下層	灰褐色土	平瓦	縄目紋	不掲載	不掲載	－	3
52	6	80次	S-147	SD2266	平瓦	縄目紋	不掲載	不掲載	－	5
52	7	75次	S-32	SB2000	平瓦	縄目紋	大宰府史跡昭和56年度概報	P110-3	－	11
52	8	75次	出土地不明	-	平瓦	縄目紋	大宰府史跡昭和56年度概報	P110-2	－	10
52	9	80次	灰褐土下層	灰褐色土	平瓦	斜格子紋	不掲載	不掲載	－	4
52	10	80次	S-5下層	SE2255	平瓦	斜格子紋	不掲載	不掲載	－	7
52	11	80次	S-205	その他の遺構・層位	平瓦	正格子紋	不掲載	不掲載	－	12
53	1	75次	S-18	SB1990	須恵器	坏	不掲載	不掲載	－	35
53	2	75次	S-21	SB1995	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	－	30
53	3	75次	S-70	SB1995	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-1	－	1
53	4	75次	S-37	SB2000	須恵器	坏	不掲載	不掲載	－	21
53	5	75次	S-71	SB2001	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-2	－	2
53	6	75次	S-71	SB2001	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	－	31
53	7	80次	S-45	SB2215	土師器	椀	不掲載	不掲載	－	220
53	8	80次	S-304	SB2220	土師器	皿	不掲載	不掲載	－	285
53	9	80次	S-326	SB2220	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P55-4	－	4
53	10	80次	S-25	SB2220	土師器	椀	不掲載	不掲載	－	270
53	11	80次	S-20	SB2220	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	290
53	12	80次	S-61	SB2225	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	225
53	13	80次	S-187	SB2230	土師器	小皿	不掲載	不掲載	－	277
53	14	80次	S-170	SB2235	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	257
53	15	80次	S-207	SB2240	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P55-1	－	1
53	16	80次	S-106	SB2240	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P55-2	－	2
53	17	80次	S-207	SB2240	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P55-3	－	3
53	18	153次	S-2	SB2240	須恵器	蓋	大宰府史跡平成６年度概報	P11-1	－	1
53	19	80次	S-106	SB2240	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	－	238
53	20	80次	S-104	SB2240	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	219
53	21	80次	S-126	SB2240	黒色土器	坏	不掲載	不掲載	－	226
53	22	80次	S-204	SB2245	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-9	－	30
53	23	80次	S-204	SB2245	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	－	143
53	24	80次	S-204	SB2245	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-11	－	32
53	25	80次	S-204	SB2245	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-10	－	31
53	26	80次	S-204	SB2245	須恵器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-13	－	34
53	27	80次	S-204	SB2245	須恵器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-12	－	33
53	28	80次	S-204	SB2245	須恵器	甕	不掲載	不掲載	－	221
53	29	80次	S-125	SB2245	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	273
53	30	80次	S-124	SB2245	黒色土器	椀	不掲載	不掲載	－	224
53	31	80次	S-52	SB2292	土師器	小皿	不掲載	不掲載	－	274
53	32	80次	S-156	SB2295	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	240
54	1	80次	S-56	SD2192	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	248
54	2	80次	S-312	SD2192	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	287
54	3	80次	S-312	SD2192	土師器	皿	不掲載	不掲載	－	251
54	4	80次	S-56	SD2192	緑釉陶器	把手	不掲載	不掲載	－	307
54	5	80次	S-62	SD2222	土師器	小皿	不掲載	不掲載	－	139
54	6	80次	S-62	SD2222	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	289
54	7	80次	S-62	SD2222	白磁	碗	不掲載	不掲載	－	323
54	8	80次	S-62	SD2222	青磁	壺	不掲載	不掲載	－	294
54	9	80次	S-62	SD2222	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	295

Tab.10　報告書掲載遺物一覧（2）

Fig.	図番号	調査次数	注記（S番号・土層名）	遺構番号・層位名	種類	器種	掲載概報	掲載図番号	重量	登録番号
54	10	80次	S-193	SD2257	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	239
54	11	80次	S-175	SD2257	灰釉陶器	壺	不掲載	不掲載	−	320
54	12	80次	S-153	SD2258	土師器	小皿	不掲載	不掲載	−	145
54	13	80次	S-153	SD2258	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	242
54	14	80次	S-153	SD2258	白磁	碗	不掲載	不掲載	−	303
54	15	80次	S-153	SD2258	青磁	皿	不掲載	不掲載	−	302
54	16	80次	S-153	SD2258	須恵質土器	鉢	不掲載	不掲載	−	263
54	17	32次	A-8東西溝	SD2259	土師器	小皿	不掲載	不掲載	−	55
54	18	32次	A-8東西溝	SD2259	土師器	小皿	不掲載	不掲載	−	56
54	19	80次	S-144A	SD2259	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	146
54	20	80次	S-144	SD2259	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	153
54	21	80次	S-144A	SD2259	土師器	皿	不掲載	不掲載	−	159
54	22	32次	A-8東西溝	SD2259	白磁	碗	不掲載	不掲載	−	54
54	23	80次	S-144	SD2259	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	−	293
54	24	80次	S-144	SD2259	陶器	甕	不掲載	不掲載	−	292
54	25	80次	S-157	SD2261	須恵器	壺	不掲載	不掲載	−	231
54	26	80次	S-144・S-153	SD2263・SD2258	須恵器	壺	不掲載	不掲載	−	286
54	27	80次	S-143	SD2263	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	243
54	28	80次	S-147	SD2266	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	244
54	29	80次	S-147	SD2266	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	−	291
55	1	80次	S-152	SD2267	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	−	236
55	2	80次	S-159	SD2268	土師器	皿	不掲載	不掲載	−	144
55	3	80次	S-171	SD2269	土師器	小皿	不掲載	不掲載	−	160
55	4	80次	S-171	SD2269	青磁	碗	不掲載	不掲載	−	380
55	5	80次	S-142	SD2273	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	260
55	6	80次	S-108	SD2277	土師器	小皿	不掲載	不掲載	−	171
55	7	80次	S-8	SD2277	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	214
55	8	80次	S-108	SD2277	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	−	298
55	9	153次	S-1上層	SD2284	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P11-3	−	3
55	10	153次	S-1-b	SD2284	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P11-4	−	4
55	11	80次	S-201	SD2284	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	−	253
55	12	153次	S-1中層	SD2284	須恵器	坏	大宰府史跡平成6年度概報	P11-5	−	5
55	13	80次	S-201	SD2284	須恵器	壺	不掲載	不掲載	−	252
55	14	153次	S-1-b	SD2284	須恵器	鉢	大宰府史跡平成6年度概報	P11-6	−	6
55	15	153次	S-1上層	SD2284	須恵器	甕	大宰府史跡平成6年度概報	P11-7	−	7
55	16	153次	S-10	SD4081	土師器	小皿	大宰府史跡平成6年度概報	P11-8	−	8
55	17	153次	灰褐土下層	SD4660	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P14-2	−	30
55	18	153次	S-40上層	SD4660	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P14-5	−	33
55	19	153次	暗褐土	SD4660	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P14-1	−	29
55	20	153次	灰褐土下層	SD4660	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P14-3	−	31
55	21	153次	S-40上層	SD4660	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P14-6	−	34
55	22	153次	灰褐土上層	SD4660	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P14-4	−	32
55	23	153次	茶褐土	SD4660	須恵器	坏	大宰府史跡平成6年度概報	P14-7	−	35
55	24	153次	S-40上層	SD4660	須恵器	甕	大宰府史跡平成6年度概報	P14-8	−	36
55	25	153次	暗褐土	SD4660	須恵器	甕	不掲載	不掲載	−	43
55	26	153次	暗灰色粘砂	SD4660	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	49
55	27	153次	茶褐土	SD4660	白磁	坏	不掲載	不掲載	−	48
55	28	153次	茶褐土	SD4660	青磁	碗	不掲載	不掲載	−	37
55	29	153次	茶褐土	SD4660	青磁	碗	不掲載	不掲載	−	51
55	30	153次	暗褐土	SD4660	青磁	碗	不掲載	不掲載	−	42
55	31	153次	S-40・33・茶褐土	SD4660	青磁	杯	不掲載	不掲載	−	50
56	1	80次	S-30	SE2250	土師器	小皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-1	−	5
56	2	80次	S-30	SE2250	黒色土器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-2	−	6
56	3	80次	S-30	SE2250	白磁	碗	不掲載	不掲載	−	321
56	4	80次	S-5	SE2255	土師器	皿	不掲載	不掲載	−	155
56	5	80次	S-5	SE2255	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	312
56	6	80次	S-5	SE2255	白磁	碗	不掲載	不掲載	−	299
56	7	80次	S-5	SE2255	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	−	311
56	8	80次	S-5	SE2255	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	−	310
56	9	80次	S-5	SE2255	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	−	309
56	10	80次	S-3	SE2260	土師器	小皿	不掲載	不掲載	−	217
56	11	80次	S-3	SE2260	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	268
56	12	80次	S-3	SE2260	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	265
56	13	80次	S-3	SE2260	黒色土器	椀	不掲載	不掲載	−	266
56	14	80次	S-3	SE2260	黒色土器	椀	不掲載	不掲載	−	267
56	15	80次	S-3	SE2260	白磁	碗	不掲載	不掲載	−	322
56	16	80次	S-146	SE2265	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-6	−	10
56	17	80次	S-146	SE2265	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-3	−	7
56	18	80次	S-146	SE2265	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-4	−	8
56	19	80次	S-146	SE2265	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-5	−	9
56	20	80次	S-146	SE2265	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-7	−	11
56	21	80次	S-146	SE2265	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-8	−	12
56	22	80次	S-146	SE2265	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-9	−	13
56	23	80次	S-146	SE2265	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P56-10	−	14
56	24	80次	S-146	SE2265	白磁	碗	不掲載	不掲載	−	301
56	25	80次	S-158	SE2270	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	151
56	26	80次	S-158	SE2270	灰釉陶器	甕	不掲載	不掲載	−	296
56	27	80次	S-158	SE2270	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	−	297
57	1	75次	S-11	SK1994	青磁	碗	不掲載	不掲載	−	20
57	2	75次	S-55	SK2002	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-5	−	5
57	3	75次	S-55	SK2002	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	−	13
57	4	75次	S-55	SK2002	須恵器	坏	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-6	−	6
57	5	80次	S-79	SK2211	黒色土器	椀	不掲載	不掲載	−	232
57	6	80次	S-82	SK2233	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	281
57	7	80次	S-336	SK2234	土師器	小皿	不掲載	不掲載	−	245

Tab.10　報告書掲載遺物一覧（3）

Fig.	図番号	調査次数	注記（S番号・土層名）	遺構番号・層位名	種類	器種	掲載概報	掲載図番号	重量	登録番号
57	8	80次	S-40	SK2237	須恵器	壺	不掲載	不掲載	–	215
57	9	80次	S-102	SK2248	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	247
57	10	80次	S-102	SK2248	黒色土器	椀	不掲載	不掲載	–	246
57	11	80次	S-102	SK2248	青白磁	壺	不掲載	不掲載	–	300
57	12	80次	S-102	SK2248	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	328
57	13	80次	S-211	SK2249	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	272
57	14	80次	S-28	SK2251	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-1	–	22
57	15	80次	S-28	SK2251	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-2	–	23
57	16	80次	S-28・76	SK2251・2252	土師器	甕	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-4	–	25
57	17	80次	S-76	SK2252	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-3	–	24
57	18	80次	S-101	SK2253	土師器	小皿	不掲載	不掲載	–	157
57	19	80次	S-101	SK2253	白磁	碗	不掲載	不掲載	–	304
57	20	80次	S-101	SK2253	白磁	碗	不掲載	不掲載	–	305
57	21	80次	S-194	SK2256	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	282
58	1	75次	S-54	SX1989	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-7	–	7
58	2	75次	S-54	SX1989	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-8	–	8
58	3	75次	S-54	SX1989	須恵器	坏	不掲載	不掲載	–	18
58	4	75次	S-54	SX1989	土師器	蓋	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-11	–	11
58	5	75次	S-54	SX1989	土師器	坏	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-9	–	9
58	6	75次	S-54	SX1989	須恵器	甕	不掲載	不掲載	–	34
58	7	75次	S-10	SX1991	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	14
58	8	75次	S-10	SX1991	須恵器	鉢	不掲載	不掲載	–	16
58	9	75次	S-10	SX1991	白磁	碗	不掲載	不掲載	–	15
58	10	75次	S-73	SX1992	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	17
58	11	75次	S-52	SX1993	須恵器	坏	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-3	–	3
58	12	75次	S-52	SX1993	須恵器	甕	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-10	–	10
58	13	75次	S-52	SX1993	土師器	皿	大宰府史跡昭和56年度概報	P108-4	–	4
58	14	75次	S-52	SX1993	土師器	高坏	不掲載	不掲載	–	28
58	15	114次	S-1	SX1993	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	19
58	16	75次	S-52	SX1993	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	19
59	1	80次	S-305	SX2203	土師器	小皿a	不掲載	不掲載	–	169
59	2	80次	S-35	SX2203	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P57-1	–	15
59	3	80次	S-305	SX2203	土師器	小皿a	不掲載	不掲載	–	269
59	4	80次	S-35	SX2203	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P57-2	–	16
59	5	80次	S-35	SX2203	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P57-3	–	17
59	6	80次	S-35	SX2203	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P57-4	–	18
59	7	80次	S-305	SX2203	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	140
59	8	80次	S-35	SX2203	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P57-5	–	19
59	9	80次	S-35	SX2203	土師器	瓶	大宰府史跡昭和57年度概報	P57- 7	–	21
59	10	80次	S-35	SX2203	黒色土器	椀	不掲載	不掲載	–	275
59	11	80次	S-35	SX2203	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	161
59	12	80次	S-2	SX2212・2219	土師器	小皿	不掲載	不掲載	–	156
59	13	80次	S-2	SX2212・2219	土師器	小皿	不掲載	不掲載	–	158
59	14	80次	S-2	SX2212・2219	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	415
59	15	80次	S-2	SX2212・2219	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	152
59	16	80次	S-2	SX2212・2219	白磁	碗	不掲載	不掲載	–	325
59	17	80次	S-2	SX2212・2219	白磁	碗	不掲載	不掲載	–	324
59	18	80次	S-2	SX2212・2219	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	326
59	19	80次	S-2	SX2212・2219	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	327
59	20	80次	S-75	SX2213	白磁	碗	不掲載	不掲載	–	306
59	21	80次	S-50	SX2214	土師器	小皿	不掲載	不掲載	–	216
59	22	80次	S-50	SX2214	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	163
59	23	80次	S-154	SX2218	土師器	椀	不掲載	不掲載	–	230
60	1	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-14	–	90
60	2	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-4	–	80
60	3	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-5	–	81
60	4	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-6	–	82
60	5	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-12	–	88
60	6	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-15	–	91
60	7	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-1	–	77
60	8	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-8	–	84
60	9	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-7	–	83
60	10	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-2	–	78
60	11	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-3	–	79
60	12	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-9	–	85
60	13	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-10	–	86
60	14	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	不掲載	不掲載	–	179
60	15	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-11	–	87
60	16	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	不掲載	不掲載	–	148
60	17	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-13	–	89
60	18	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿a	不掲載	不掲載	–	170
60	19	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-16	–	92
60	20	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-17	–	93
60	21	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-18	–	94
60	22	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-19	–	95
60	23	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-20	–	96
60	24	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-23	–	99
60	25	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-24	–	100
60	26	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-21	–	97
60	27	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-26	–	102
60	28	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-25	–	101
60	29	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	185
60	30	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-27	–	103
60	31	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-22	–	98
60	32	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-28	–	104

Tab.10　報告書掲載遺物一覧（4）

Fig.	図番号	調査次数	注記（S番号・土層名）	遺構番号・層位名	種類	器種	掲載概報	掲載図番号	重量	登録番号
60	33	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-29	−	105
60	34	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-30	−	106
60	35	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P63-31	−	107
60	36	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-33	−	109
60	37	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-32	−	108
60	38	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-35	−	111
60	39	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-36	−	112
60	40	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-34	−	110
60	41	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	178
60	42	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-37	−	113
60	43	80次	黒灰色砂質土	SX2231	土師器	器台	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-39	−	115
60	44	80次	黒灰色砂質土	SX2231	黒色土器	坏	不掲載	不掲載	−	147
60	45	80次	黒灰色砂質土	SX2231	黒色土器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-38	−	114
60	46	80次	黒灰色砂質土	SX2231	白磁	碗	不掲載	不掲載	−	314
60	47	80次	黒灰色砂質土	SX2231	白磁	碗	不掲載	不掲載	−	315・316
60	48	80次	黒灰色砂質土	SX2231	青磁	碗	不掲載	不掲載	−	318
60	49	80次	黒灰色砂質土	SX2231	青磁	碗	不掲載	不掲載	−	317
60	50	80次	黒灰色砂質土	SX2231	陶器	鉢	不掲載	不掲載	−	319
61	1	80次	整地層	SX2262	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-1	−	62
61	2	80次	整地層	SX2262	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-2	−	63
61	3	80次	整地層	SX2262	須恵器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-3	−	64
61	4	80次	整地層	SX2262	須恵器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-4	−	65
61	5	80次	S-210	SX2274	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-7	−	28
61	6	80次	S-210	SX2274	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-5	−	26
61	7	80次	S-210	SX2274	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-6	−	27
61	8	80次	S-210	SX2274	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P58-8	−	29
62	1	80次	礫群	SX2275	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-3	−	37
62	2	80次	礫群	SX2275	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-1	−	35
62	3	80次	礫群	SX2275	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-2	−	36
62	4	80次	礫群	SX2275	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-4	−	38
62	5	80次	礫群	SX2275	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	−	165
62	6	80次	礫群	SX2275	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-5	−	39
62	7	80次	礫群	SX2275	須恵器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-6	−	40
62	8	80次	礫群	SX2275	須恵器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-7	−	41
62	9	80次	礫群	SX2275	土師器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-8	−	42
62	10	80次	礫群	SX2275	土師器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-10	−	44
62	11	80次	礫群	SX2275	土師器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-9	−	43
62	12	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-12	−	46
62	13	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	208
62	14	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-13	−	47
62	15	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-14	−	48
62	16	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-17	−	51
62	17	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	173
62	18	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-15	−	49
62	19	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-11	−	45
62	20	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	209
62	21	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-18	−	52
62	22	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	177
62	23	80次	礫群	SX2275	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-16	−	50
62	24	80次	礫群	SX2275	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-19	−	53
62	25	80次	礫群	SX2275	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-20	−	54
62	26	80次	礫群	SX2275	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-21	−	55
62	27	80次	礫群	SX2275	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-22	−	56
62	28	80次	礫群	SX2275	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-23	−	57
62	29	80次	礫群	SX2275	土師器	皿	不掲載	不掲載	−	207
62	30	80次	礫群	SX2275	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-24	−	58
62	31	80次	礫群	SX2275	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-25	−	59
62	32	80次	礫群	SX2275	土師器	甕	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-26	−	60
62	33	80次	礫群	SX2275	灰釉陶器	甕	不掲載	不掲載	−	330
62	34	80次	礫群	SX2275	青磁	碗	不掲載	不掲載	−	333
62	35	80次	礫群	SX2275	青磁	碗	不掲載	不掲載	−	332
62	36	80次	礫群	SX2275	青磁	壺	大宰府史跡昭和57年度概報	P61-27	−	61
63	1	80次	S-205	SX2276	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	264
63	2	80次	S-214	SX2278	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	227
63	3	80次	S-148	SX2280	灰釉陶器	甕	不掲載	不掲載	−	329
63	4	80次	S-215	SX2282	土師器	椀	不掲載	不掲載	−	235
63	5	80次	S-200	SX2283	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	141
63	6	80次	S-200	SX2283	黒色土器	皿	不掲載	不掲載	−	142
63	7	114次	S-8	SX3328	須恵器	皿	不掲載	不掲載	−	4
63	8	114次	S-8	SX3328	土師器	坏	大宰府史跡昭和63年度概報	P109-1	−	1
63	9	114次	S-8	SX3328	土師器	坏	大宰府史跡昭和63年度概報	P109-2	−	2
63	10	114次	S-8	SX3328	土師器	小壺	不掲載	不掲載	−	5
63	11	114次	S-10	SX3329	須恵器	甕	不掲載	不掲載	−	6
63	12	114次	S-10	SX3329	土師器	皿	大宰府史跡昭和63年度概報	P109-3	−	3
63	13	114次	S-10	SX3329	土師器	高坏	不掲載	不掲載	−	7
63	14	114次	S-6	SX3331	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	9
63	15	114次	粘土採取坑	SX3331	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	11
63	16	114次	S-6	SX3331	土師器	カマド	不掲載	不掲載	−	8
63	17	114次	粘土採取坑	SX3331	須恵質土器	鉢	不掲載	不掲載	−	12
63	18	114次	S-7	SX3332	須恵器	甕	不掲載	不掲載	−	13
63	19	114次	S-7	SX3332	土師器	坏	不掲載	不掲載	−	15
63	20	114次	S-7	SX3332	土師器	皿	不掲載	不掲載	−	17
63	21	114次	S-7	SX3332	土師器	高坏	不掲載	不掲載	−	14
63	22	114次	S-7	SX3332	土師器	高坏	不掲載	不掲載	−	18
63	23	153次	S-34	SX4082	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P11-9	−	9

Tab.10　報告書掲載遺物一覧（5）

Fig.	図番号	調査次数	注記（S番号・土層名）	遺構番号・層位名	種類	器種	掲載概報	掲載図番号	重量	登録番号
63	24	153次	S-34	SX4082	須恵器	坏	大宰府史跡平成6年度概報	P11-10	－	10
63	25	153次	S-34	SX4082	須恵器	甕	大宰府史跡平成6年度概報	P11-11	－	11
63	26	153次	S-34	SX4082	土師器	甑	大宰府史跡平成6年度概報	P11-12	－	12
64	1	153次	S-36	SX4084	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P11-13	－	13
64	2	153次	S-36	SX4084	須恵器	甕	大宰府史跡平成6年度概報	P11-14	－	14
64	3	153次	S-40	SX4087	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P13-1	－	15
64	4	153次	S-40	SX4087	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	－	40
64	5	153次	S-40	SX4087	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P13-2	－	16
64	6	153次	S-40	SX4087	須恵器	蓋	大宰府史跡平成6年度概報	P13-3	－	17
64	7	153次	S-40	SX4087	須恵器	坏	不掲載	不掲載	－	45
64	8	153次	S-40	SX4087	須恵器	坏	不掲載	不掲載	－	44
64	9	153次	S-40	SX4087	須恵器	坏	大宰府史跡平成6年度概報	P13-4	－	18
64	10	153次	S-40	SX4087	須恵器	甕	大宰府史跡平成6年度概報	P13-5	－	19
64	11	153次	S-40	SX4087	須恵器	甕	大宰府史跡平成6年度概報	P13-6	－	20
64	12	153次	S-40	SX4087	須恵器	甕	大宰府史跡平成6年度概報	P13-7	－	21
64	13	153次	S-40	SX4087	土師器	坏	大宰府史跡平成6年度概報	P13-8	－	22
64	14	153次	暗灰色粘砂	SX4087	土師器	坏	大宰府史跡平成6年度概報	P13-9	－	23
64	15	153次	粘土採穴	SX4087	土師器	椀	大宰府史跡平成6年度概報	P13-10	－	24
64	16	153次	S-40	SX4087	土師器	高坏	大宰府史跡平成6年度概報	P13-12	－	26
64	17	153次	S-40	SX4087	土師器	甕	大宰府史跡平成6年度概報	P13-11	－	25
64	18	153次	S-40	SX4087	土師器	甕	不掲載	不掲載	－	41
64	19	153次	S-40	SX4087	青磁	小碗	大宰府史跡平成6年度概報	P13-13	－	27
64	20	153次	S-40	SX4087	灰釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	46
65	1	32次	暗灰土	暗灰色土	須恵器	蓋	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-17	－	17
65	2	32次	暗灰土	暗灰色土	須恵器	蓋	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-19	－	19
65	3	32次	暗灰土	暗灰色土	須恵器	蓋	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-18	－	18
65	4	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	小皿	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-6	－	6
65	5	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	小皿	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-7	－	7
65	6	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	小皿	不掲載	不掲載	－	25
65	7	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	小皿	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-8	－	8
65	8	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	小皿	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-9	－	9
65	9	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	皿	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-12	－	12
65	10	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	皿	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-11	－	11
65	11	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	－	24
65	12	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	坏	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-2	－	2
65	13	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	坏	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-3	－	3
65	14	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	坏	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-4	－	4
65	15	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	29
65	16	32次	暗灰土	暗灰色土	土師器	小壺	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-13	－	13
65	17	32次	暗灰土	暗灰色土	灰釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	47
65	18	32次	暗灰土	暗灰色土	白磁	碗	不掲載	不掲載	－	43
65	19	32次	暗灰土	暗灰色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	－	41
65	20	32次	暗灰土	暗灰色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	－	37
65	21	32次	暗灰土	暗灰色土	黄釉褐彩陶器	水注	不掲載	不掲載	－	50
65	22	32次	暗灰土	暗灰色土	褐釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	57
65	23	32次	暗灰土	暗灰色土	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	－	53
65	24	32次	暗灰土	暗灰色土	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	－	51
65	25	32次	暗灰土	暗灰色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	33
65	26	32次	暗灰土	暗灰色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	32
65	27	32次	暗灰土	暗灰色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	34
65	28	32次	暗灰土	暗灰色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	30
65	29	32次	茶灰土	茶灰色土	青磁	碗	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-23	－	23
65	30	32次	暗褐土	暗褐色土	須恵器	坏	不掲載	不掲載	－	26
65	31	32次	黄褐土	黄褐色土	須恵器	蓋	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-16	－	16
65	32	32次	黄褐土	黄褐色土	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	－	28
65	33	32次	黄褐土	黄褐色土	須恵器	蓋	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-15	－	15
65	34	32次	黄褐土	黄褐色土	須恵器	蓋	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-20	－	20
65	35	32次	黄褐土	黄褐色土	土師器	坏	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-1	－	1
65	36	32次	黄褐土	黄褐色土	土師器	坏	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-5	－	5
65	37	32次	黄褐土	黄褐色土	土師器	坏	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-21	－	21
65	38	32次	黄褐土小ピット中	黄褐色土	土師器	皿	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-10	－	10
65	39	32次	黄褐土	黄褐色土	青磁	壺	不掲載	不掲載	－	44
65	40	32次	灰砂	灰色砂	須恵器	高坏	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-14	－	14
66	1	80次	暗褐土	暗褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	－	336
66	2	80次	暗茶土	暗茶色土	須恵器	坏	不掲載	不掲載	－	192
66	3	80次	暗茶土	暗茶色土	土師器	小皿	不掲載	不掲載	－	414
66	4	80次	茶褐土	茶褐色土	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	－	183
66	5	80次	茶褐土	茶褐色土	灰釉陶器	甕	不掲載	不掲載	－	368
66	6	80次	茶褐土	茶褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	－	392・403
66	7	80次	黒灰土	黒灰色土	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	413
66	8	80次	黒灰土	黒灰色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	－	412
66	9	80次	黒灰土	黒灰色土	土師器	鉢	不掲載	不掲載	－	228
66	10	80次	黒灰土	黒灰色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	378
67	1	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	－	195
67	2	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-1	－	116
67	3	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-2	－	117
67	4	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	－	193
67	5	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器	皿	不掲載	不掲載	－	411
67	6	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-5	－	120
67	7	80次	灰褐土下	灰褐色土	須恵器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-3	－	118
67	8	80次	灰褐土下	灰褐色土	須恵器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-4	－	119
67	9	80次	灰褐土下	灰褐色土	須恵器	壺	不掲載	不掲載	－	370
67	10	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器	甕	不掲載	不掲載	－	212
67	11	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-10	－	124
67	12	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	－	190

Tab.10　報告書掲載遺物一覧（6）

Fig.	図番号	調査次数	注記（S番号・土層名）	遺構番号・層位名	種類	器種	掲載概報	掲載図番号	重量	登録番号
67	13	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	–	203
67	14	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	–	199
67	15	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	–	204
67	16	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-11	–	125
67	17	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	–	202
67	18	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-12	–	126
67	19	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	–	200
67	20	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	–	210
67	21	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	–	197
67	22	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	–	205
67	23	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	小皿a	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-13	–	127
67	24	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	小皿a	不掲載	不掲載	–	418
67	25	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-14	–	128
67	26	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-16	–	130
67	27	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	小皿c	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-15	–	129
67	28	80次	灰褐土下	灰褐色土	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-7	–	121
67	29	80次	灰褐土下	灰褐色土	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	194
67	30	80次	灰褐土下	灰褐色土	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	191
67	31	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	206
67	32	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-8	–	122
67	33	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	189
67	34	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	188
67	35	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-17	–	131
67	36	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	坏	不掲載	不掲載	–	417
67	37	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-9	–	123
67	38	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	壺	不掲載	不掲載	–	419
68	39	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	鉢	不掲載	不掲載	–	229
68	40	80次	灰褐土	灰褐色土	黒色土器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-18	–	132
68	41	80次	灰褐土	灰褐色土	灰釉陶器	椀	不掲載	不掲載	–	365
68	42	80次	灰褐土	灰褐色土	灰釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	363
68	43	80次	灰褐土	灰褐色土	灰釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	364
68	44	80次	灰褐土下層	灰褐色土	白磁	碗	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-19	–	133
68	45	80次	灰褐土	灰褐色土	白磁	碗	不掲載	不掲載	–	198
68	46	80次	灰褐土	灰褐色土	白磁	碗	不掲載	不掲載	–	174
68	47	80次	灰褐土	灰褐色土	白磁	碗	不掲載	不掲載	–	175
68	48	80次	灰褐土・床土	灰褐色土	青磁	碗	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-20	–	134
68	49	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	383
68	50	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-21	–	135
68	51	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	384
68	52	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	382
68	53	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	389
68	54	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-22	–	136
68	55	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	381
68	56	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	385
68	57	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	366
68	58	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	405
68	59	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	401
68	60	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	390
68	61	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	碗	不掲載	不掲載	–	393
68	62	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	皿	不掲載	不掲載	–	391
68	63	80次	灰褐土	灰褐色土	青磁	皿	不掲載	不掲載	–	386
68	64	80次	灰褐土	灰褐色土	緑褐釉陶器	水注	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-24	–	138
68	65	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	鉢	不掲載	不掲載	–	361
68	66	80次	灰褐土	灰褐色土	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	–	362
68	67	80次	灰褐土	灰褐色土	高麗青磁	碗	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-23	–	137
68	68	80次	灰褐土	灰褐色土	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	–	388
68	69	80次	灰褐土	灰褐色土	高麗青磁	壺	不掲載	不掲載	–	387
69	70	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	331
69	71	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	342
69	72	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	341
69	73	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	355
69	74	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	354
69	75	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	371
69	76	32次・80次	暗灰土・灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	31
69	77	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	351
69	78	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	344
69	79	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	353
69	80	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	343
69	81	80次	灰褐土	灰褐色土	無釉陶器	壺	不掲載	不掲載	–	367
70	1	80次	床土直下	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-1	–	66
70	2	153次	S-44	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	39
70	3	75次	床土	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	25
70	4	75次	床土	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	12
70	5	153次	S-24（ピット）	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	大宰府史跡平成６年度概報	P13-14	–	28
70	6	153次	S-7	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	大宰府史跡平成６年度概報	P11-2	–	2
70	7	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-2	–	67
70	8	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	181
70	9	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-3	–	68
70	10	75次	床土	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	26
70	11	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-7	–	72
70	12	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-4	–	69
70	13	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-5	–	70
70	14	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-6	–	71
70	15	75次	床土	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	27
70	16	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	蓋	不掲載	不掲載	–	180

Tab.10 報告書掲載遺物一覧（7）

Fig.	図番号	調査次数	注記（S番号・土層名）	遺構番号・層位名	種類	器種	掲載概報	掲載図番号	重量	登録番号
70	17	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-9	－	74
70	18	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	須恵器	坏	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-8	－	73
70	19	80次	S-137	その他の遺構・層位	須恵器	坏	不掲載	不掲載	－	172
70	20	75次	床土	その他の遺構・層位	須恵器	坏	不掲載	不掲載	－	23
70	21	75次	床土	その他の遺構・層位	須恵器	盤	不掲載	不掲載	－	24
70	22	80次	床土	その他の遺構・層位	須恵器	甕	不掲載	不掲載	－	213
70	23	75次	床土	その他の遺構・層位	須恵器	甕	不掲載	不掲載	－	33
70	24	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	土師器	皿	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-11	－	76
70	25	80次	ピット	その他の遺構・層位	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	176
70	26	80次	S-67	その他の遺構・層位	土師器	坏	不掲載	不掲載	－	162
70	27	80次	床土直下一括	その他の遺構・層位	土師器	椀	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-10	－	75
70	28	80次	床土直下	その他の遺構・層位	土師器	椀	不掲載	不掲載	－	182
70	29	80次	S-88	その他の遺構・層位	土師器	椀	不掲載	不掲載	－	150
70	30	79次	灰褐砂	その他の遺構・層位	緑釉陶器	椀	不掲載	不掲載	－	1
70	31	32次	床土	その他の遺構・層位	緑釉陶器	椀	不掲載	不掲載	－	49
70	32	32次	床土	その他の遺構・層位	灰釉陶器	皿	不掲載	不掲載	－	38
70	33	32次	床土	その他の遺構・層位	灰釉陶器	椀	不掲載	不掲載	－	45
70	34	32次	床土	その他の遺構・層位	灰釉陶器	折縁深皿	不掲載	不掲載	－	42
70	35	75次	床土	その他の遺構・層位	灰釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	88
70	36	114次	床土	その他の遺構・層位	灰釉陶器	壺	不掲載	不掲載	－	20
70	37	80次	床土	その他の遺構・層位	白磁	皿	不掲載	不掲載	－	339
70	38	75次	床土	その他の遺構・層位	白磁	皿	不掲載	不掲載	－	39
70	39	80次	床土	その他の遺構・層位	白磁	碗	不掲載	不掲載	－	346
70	40	80次	床土	その他の遺構・層位	白磁	碗	不掲載	不掲載	－	347
70	41	201次	Bトレンチ灰白色砂	その他の遺構・層位	白磁	碗	大宰府史跡Ⅵ 平成20・21年度	Fig.4-2	－	1
70	42	80次	S-342	その他の遺構・層位	白磁	碗	不掲載	不掲載	－	149
70	43	80次	床土直下	その他の遺構・層位	白磁	碗	不掲載	不掲載	－	420
70	44	80次	床土	その他の遺構・層位	白磁	碗	不掲載	不掲載	－	421
70	45	80次	床土	その他の遺構・層位	白磁	碗	不掲載	不掲載	－	422
70	46	80次	S-190	その他の遺構・層位	白磁	碗	不掲載	不掲載	－	335
71	47	80次	床土	その他の遺構・層位	白磁	壺	不掲載	不掲載	－	348
71	48	75次	茶褐土	その他の遺構・層位	白磁	蓋	不掲載	不掲載	－	42
71	49	80次	床土	その他の遺構・層位	青白磁	碗	不掲載	不掲載	－	350
71	50	75次	床土	その他の遺構・層位	青白磁	梅瓶	不掲載	不掲載	－	43
71	51	75次	茶褐土	その他の遺構・層位	青白磁	蓋	不掲載	不掲載	－	47
71	52	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	406
71	53	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	398
71	54	75次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	49
71	55	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	399
71	56	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	400
71	57	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	397
71	58	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	396
71	59	75次	茶褐土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	22
71	60	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	404
71	61	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	409
71	62	32次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	46
71	63	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	416
71	64	75次	茶褐土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	46
71	65	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	379
71	66	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	402
71	67	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	壺	不掲載	不掲載	－	394
71	68	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	壺	不掲載	不掲載	－	407
71	69	80次	床土	その他の遺構・層位	越州窯系青磁	水注	不掲載	不掲載	－	376
71	70	80次	床土	その他の遺構・層位	青磁	皿	不掲載	不掲載	－	340
71	71	75次	床土	その他の遺構・層位	青磁	皿	不掲載	不掲載	－	41
71	72	80次	床土	その他の遺構・層位	龍泉窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	423
71	73	32次	床土	その他の遺構・層位	龍泉窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	58
71	74	75次	茶褐土	その他の遺構・層位	龍泉窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	44
71	75	75次	茶褐土	その他の遺構・層位	龍泉窯系青磁	碗	不掲載	不掲載	－	45
71	76	75次	床土	その他の遺構・層位	青磁	盤	不掲載	不掲載	－	51
71	77	80次	床土	その他の遺構・層位	黄釉陶器	盤	不掲載	不掲載	－	377
71	78	80次	床土	その他の遺構・層位	黒釉陶器	天目茶碗	不掲載	不掲載	－	358
71	79	80次	床土直下	その他の遺構・層位	染付	皿	不掲載	不掲載	－	359
71	80	80次	床土直下	その他の遺構・層位	須恵質土器	鉢	不掲載	不掲載	－	360
71	81	32次	出土地不明	その他の遺構・層位	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	－	39
71	82	32次	床土	その他の遺構・層位	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	－	52
71	83	80次	床土	その他の遺構・層位	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	－	357
71	84	80次	床土	その他の遺構・層位	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	－	337
71	85	80次	床土	その他の遺構・層位	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	－	184
71	86	80次	S-161	その他の遺構・層位	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	－	395
71	87	25次	床土	その他の遺構・層位	高麗青磁	碗	不掲載	不掲載	－	2
71	88	75次	茶褐土	その他の遺構・層位	象嵌青磁	碗	不掲載	不掲載	－	40
71	89	75次	床土	その他の遺構・層位	象嵌青磁	碗	不掲載	不掲載	－	50
71	90	80次	床土	その他の遺構・層位	象嵌青磁	壺	不掲載	不掲載	－	349
71	91	80次	床土	その他の遺構・層位	象嵌青磁	杯	不掲載	不掲載	－	338
71	92	80次	床土	その他の遺構・層位	雑釉陶器	碗	不掲載	不掲載	－	356
72	93	32次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	48
72	94	80次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	345
72	95	32次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	46
72	96	25次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	1
72	97	32次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	36
72	98	80次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	375
72	99	80次	ピット	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	374
72	100	80次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	373
72	101	80次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	372

Tab.10　報告書掲載遺物一覧（8）

Fig.	図番号	調査次数	注記（S番号・土層名）	遺構番号・層位名	種類	器種	掲載概報	掲載図番号	重量	登録番号
72	102	32次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	35
72	103	75次	床土	その他の遺構・層位	無釉陶器	壺・瓶	不掲載	不掲載	－	36
73	1	153次	灰褐土	灰褐色土	石製品	碁石(白)	不掲載	不掲載	1.7g	－
73	2	153次	暗灰粘質土	SD4460	石製品	碁石(黒)	不掲載	不掲載	6.8g	－
73	3	80次	黒灰砂質土	SX2231	石製品	石帯鉈尾	大宰府史跡昭和57年度概報	P70	18.8g	－
74	4	32次	暗灰土	暗灰色土	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	175.0g	－
74	5	80次	床土	その他の遺構・層位	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	115.5g	－
74	6	32次	灰砂	灰色砂	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	252.3g	－
74	7	80次	灰褐土	灰褐色土	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	148.4g	－
74	8	80次	灰褐土	灰褐色土	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	71.2g	－
74	9	80次	灰褐土	灰褐色土	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	90.1g	－
74	10	80次	床土	その他の遺構・層位	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	99.8g	－
74	11	80次	ピット	その他の遺構・層位	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	2458.5g	－
74	12	32次	床土	その他の遺構・層位	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	109.4g	－
74	13	80次	灰褐土	灰褐色土	滑石製品	石鍋	不掲載	不掲載	544.8g	－
75	14	80次	床土	その他の遺構・層位	滑石製石鍋転用品	不明	不掲載	不掲載	16.0g	－
75	15	80次	灰褐土	灰褐色土	滑石製石鍋転用品	不明	不掲載	不掲載	22.5g	－
75	16	80次	灰褐土	灰褐色土	滑石製石鍋転用品	不明	不掲載	不掲載	30.3g	－
75	17	80次	灰褐土	灰褐色土	滑石製石鍋転用品	不明	不掲載	不掲載	79.8g	－
75	18	80次	S-2	SX2212・2219	滑石製石鍋転用品	不明	不掲載	不掲載	125.8g	－
75	19	32次	黄褐土	黄褐色土	滑石製石鍋転用品	小型容器	不掲載	不掲載	11.3g	－
75	20	80次	床土	その他の遺構・層位	滑石製石鍋転用品	小型容器	不掲載	不掲載	18.0g	－
75	21	80次	S-50	SX2214	滑石製石鍋転用品	小型容器未成品	不掲載	不掲載	93.6g	－
75	22	80次	黒灰砂質土	SX2231	滑石製石鍋転用品	不明	不掲載	不掲載	17.2g	－
75	23	80次	床土	その他の遺構・層位	滑石製石鍋転用品	不明	不掲載	不掲載	78.6g	－
75	24	80次	S-146	SE2265	滑石製石鍋転用品	蓋	不掲載	不掲載	433.1g	－
76	25	80次	S-305	SX2203	黒曜石製石器	スクレイパー	不掲載	不掲載	4.6g	－
76	26	80次	S-175	SD2257	サヌカイト製石器	石匙	不掲載	不掲載	8.0g	－
76	27	80次	灰褐土	灰褐色土	サヌカイト製石器	スクレイパー	不掲載	不掲載	17.1g	－
76	28	80次	黒灰砂質土	SX2231	珪質岩製石器	二次加工剥片	不掲載	不掲載	52.4g	－
76	29	32次	暗灰土	暗灰色土	粘板岩製石器	磨製石槍	不掲載	不掲載	48.3g	－
76	30	80次	S-342	その他の遺構・層位	片岩系石材製石製品	砥石	不掲載	不掲載	19.8g	－
76	31	80次	S-147	SD2266	片岩系石材製石製品	砥石	不掲載	不掲載	96.7g	－
76	32	80次	S-108	SD2277	片岩系石材製石製品	砥石	不掲載	不掲載	86.4g	－
76	33	80次	灰褐土	灰褐色土	砂岩製石製品	砥石	不掲載	不掲載	198.3g	－
76	34	80次	灰褐土	灰褐色土	砂岩製石製品	砥石	不掲載	不掲載	253.8g	－
76	35	80次	灰褐土	灰褐色土	石英斑岩製石製品	砥石	不掲載	不掲載	129.2g	－
76	36	80次	S-35下層	SX2203	砂岩製石製品	砥石	不掲載	不掲載	430.8g	－
77	1	80次	床土	その他の遺構・層位	土製品	土師器小壺	不掲載	不掲載	106.8g	－
77	2	80次	床土	その他の遺構・層位	土製品	土師器小壺	不掲載	不掲載	131.1g	－
77	3	32次	暗灰土	暗灰色土	土製品	土師器小壺	不掲載	不掲載	122.6g	－
77	4	32次	暗褐土	暗褐色土	土製品	土師器小壺	不掲載	不掲載	110.4g	－
77	5	80次	S-35	SX2203	土製品	土師器小壺	大宰府史跡昭和57年度概報	P57-6	148.1g	－
77	6	80次	S-201	SD2284	土製品	土師器小壺	不掲載	不掲載	27.8g	－
77	7	80次	黒灰土	黒灰色土	土製品	須恵器小壺	不掲載	不掲載	18.3g	－
77	8	80次	床土	その他の遺構・層位	土製品	陶器小壺	不掲載	不掲載	56.8g	－
77	9	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	杯身	不掲載	不掲載	7.2g	－
77	10	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器	皿	不掲載	不掲載	32.4g	－
77	11	80次	茶色土	茶色土	土製品	不明	不掲載	不掲載	93.7g	－
77	12	80次	灰褐土	灰褐色土	土製品	須恵器坏	不掲載	不掲載	49.3g	－
77	13	80次	灰褐土	灰褐色土	土製品	須恵器甕・坏	不掲載	不掲載	226.3g	－
77	14	75次	床土	その他の遺構・層位	土製品	須恵器甕・焼台	不掲載	不掲載	737.4g	－
78	15	80次	床土	その他の遺構・層位	土製品	土錘	不掲載	不掲載	25.4g	－
78	16	153次	S-37	SD4660	土製品	土錘	大宰府史跡平成6年度概報	P13-15	58.8g	－
78	17	80次	S-35	SX2203	土製品	土錘	不掲載	不掲載	27.8g	－
78	18	80次	灰褐土	灰褐色土	瓦転用品	土錘	不掲載	不掲載	3.2g	－
78	19	80次	灰褐土下層	灰褐土下層	瓦転用品	円盤状土製品	不掲載	不掲載	14.3g	－
78	20	80次	灰褐土	灰褐色土	瓦転用品	円盤状土製品	不掲載	不掲載	12.3g	－
78	21	80次	灰褐土	灰褐色土	瓦転用品	円盤状土製品	不掲載	不掲載	32.1g	－
78	22	80次	礫群	SX2275	須恵器杯蓋転用品	円盤状土製品	不掲載	不掲載	11.8g	－
78	23	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器杯蓋転用品	円盤状土製品	不掲載	不掲載	25.9g	－
78	24	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器甕転用品	円盤状土製品	不掲載	不掲載	22.6g	－
78	25	80次	灰褐土	灰褐色土	須恵器甕転用品	円盤状土製品	不掲載	不掲載	213.2g	－
78	26	80次	灰褐土	灰褐色土	土師器甕転用品	円盤状土製品	不掲載	不掲載	23.1g	－
79	27	32次	床土	その他の遺構・層位	土製品	権	不掲載	不掲載	33.1g	－
80	1	80次	灰褐土	灰褐色土	墨書土器	本	不掲載	不掲載	－	6
80	2	80次	灰褐土	灰褐色土	墨書土器	中	不掲載	不掲載	－	5
80	3	80次	礫群	SX2275	墨書土器	身	不掲載	不掲載	－	7
80	4	80次	S-106	SB2240	墨書土器	巳？	不掲載	不掲載	－	4
80	5	80次	灰褐土	灰褐色土	墨書土器	中？	不掲載	不掲載	－	8
80	6	80次	灰褐土	灰褐色土	墨書土器	亅	不掲載	不掲載	－	9
80	7	153次	茶褐土	SD4460	墨書土器	人	不掲載	不掲載	－	10
80	8	80次	灰褐土	灰褐色土	墨書土器	戯画	不掲載	不掲載	－	3
80	9	80次	S-159	SD2268	刻書土器	不か木	不掲載	不掲載	－	1
80	10	80次	礫群カクラン	その他の遺構・層位	刻書土器	合物	不掲載	不掲載	－	11
80	11	80次	S-196	SX2274	刻書土器	厍	不掲載	不掲載	－	2
81	1	80次	S-1	その他の遺構・層位	定形硯	圏足円面硯	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-40	－	1
81	2	80次	黒色砂質土	SX2231	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	－	2
81	3	80次	S-35	SX2203	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	－	3
81	4	80次	灰褐土	灰褐色土	定形硯	圏足円面硯	大宰府史跡昭和57年度概報	P66-6	－	4
81	5	32次	暗褐土	暗褐色土	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	－	5
81	6	80次	黒灰土	黒灰色土	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	－	6
81	7	80次	灰褐土	灰褐色土	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	－	7
81	8	80次	床土	その他の遺構・層位	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	－	8
81	9	153次	S-37	SD4660	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	－	9

Tab.10　報告書掲載遺物一覧（9）

Fig.	図番号	調査次数	注記（S番号・土層名）	遺構番号・層位名	種類	器種	掲載概報	掲載図番号	重量	登録番号
81	10	80次	S-146	SE2265	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	–	10
81	11	80次	出土地不明	-	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	–	11
81	12	80次	灰褐土	灰褐色土	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	–	12
81	13	80次	S-125	SB2240	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	–	13
81	14	80次	床土	その他の遺構・層位	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	–	14
81	15	80次	灰褐土	灰褐色土	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	–	15
81	16	80次	灰褐土	灰褐色土	定形硯	圏足円面硯	不掲載	不掲載	–	16
82	1	80次	整地層	SX2262	転用硯	須恵器蓋	大宰府史跡昭和57年度概報	P62-2	–	1
82	2	32次	A-3土坑内	その他の遺構・層位	転用硯	須恵器蓋	大宰府史跡第30・31・32次概報	P35-20	–	2
82	3	80次	S-169	SB2235	転用硯	須恵器蓋	不掲載	不掲載	–	3
82	4	80次	整地層	SX2262	転用硯	須恵器蓋	不掲載	不掲載	–	4
82	5	80次	黒灰砂質土	SX2231	転用硯	須恵器甕	大宰府史跡昭和57年度概報	P64-41	–	5
82	6	80次	床土	その他の遺構・層位	転用硯	須恵器甕	不掲載	不掲載	–	6
82	7	80次	灰褐土	灰褐色土	転用硯	須恵器甕	不掲載	不掲載	–	7
82	8	80次	灰褐土	灰褐色土	転用硯	須恵器甕	不掲載	不掲載	–	8
82	9	80次	S-210	SX2274	転用硯	須恵器甕	不掲載	不掲載	–	9
83	1	80次	灰褐土	灰褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	1
83	2	80次	灰褐土	灰褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	2
83	3	80次	出土地不明	-	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	3
83	4	80次	灰褐土	灰褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	4
83	5	80次	灰褐土	灰褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	5
83	6	80次	礫群	SX2275	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	6
83	7	80次	茶灰土	茶灰色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	7
83	8	32次	暗灰土II	暗灰色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	8
83	9	80次	茶褐土	茶褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	9
83	10	80次	茶褐土	茶褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	10
83	11	80次	茶褐土	茶褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	11
83	12	80次	灰褐土	灰褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	12
83	13	80次	S-151	その他の遺構・層位	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	13
83	14	80次	茶褐土	茶褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	14
83	15	80次	茶褐土	茶褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	15
83	16	80次	茶褐土	茶褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	16
83	17	153次	S-40	SX4087	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	17
83	18	153次	茶褐土下層	茶褐色土	製塩土器	製塩土器	不掲載	不掲載	–	18
83	19	80次	出土地不明	-	漆付着土器	土師器坏	不掲載	不掲載	–	1
83	20	153次	S-32	SD4660	漆付着土器	須恵器坏	不掲載	不掲載	–	2
83	21	80次	S-56	SD2192	漆付着土器	須恵器甕	不掲載	不掲載	–	3
83	22	153次	S-40	SX4087	漆付着土器	須恵器壺	不掲載	不掲載	–	4
83	23	153次	S-34	SX4082	漆付着土器	須恵器壺	不掲載	不掲載	–	5
83	24	153次	S-32	SD4660	漆付着土器	須恵器坏	不掲載	不掲載	–	6
83	25	80次	灰褐土	灰褐色土	白色物付着土器	須恵器甕	不掲載	不掲載	–	1
83	26	153次	S-44	その他の遺構・層位	白色物付着土器	須恵器甕	不掲載	不掲載	–	2
83	27	153次	S-41	SD4660	白色物付着土器	須恵器甕	不掲載	不掲載	–	3
83	28	80次	黒灰土	黒灰色土	鼈甲製品	不明	不掲載	不掲載	–	-
84	1	80次	床土	その他の遺構・層位	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	3.9g	–
84	2	32次	暗灰土	暗灰色土	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	13.2g	–
84	3	80次	S-5	SE2255	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	1.9g	–
84	4	80次	S-78	SB2225	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	12.5g	–
84	5	80次	灰褐土	灰褐色土	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	9.6g	–
84	6	80次	S-153	SD2258	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	19.6g	–
84	7	32次	暗灰土	暗灰色土	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	10.7g	–
84	8	80次	S-109	その他の遺構・層位	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	7.8g	–
84	9	80次	床土	その他の遺構・層位	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	5.2g	–
84	10	32次	暗灰土	暗灰色土	鉄製品	鉄釘	不掲載	不掲載	8.8g	–
84	11	80次	床土直下	その他の遺構・層位	鉄製品	鉄鎌	不掲載	不掲載	6.8g	–
84	12	80次	S-213	SB2240	鉄製品	刀子	不掲載	不掲載	32.5g	–
84	13	80次	灰褐土	灰褐色土	鉄製品	鉄鈴	不掲載	不掲載	21.2g	–
84	14	32次	暗灰土	暗灰色土	鉄製品	楔	不掲載	不掲載	48.0g	–
84	15	80次	灰褐土	灰褐色土	鉄製品	不明鉄製品	不掲載	不掲載	33.2g	–
84	16	80次	S-193	その他の遺構・層位	鉄製品	不明鉄製品	不掲載	不掲載	18.2g	–
84	17	75次	茶褐土	茶褐色土	銅製品	寛永通寳	不掲載	不掲載	–	–
84	18	75次	表土	その他の遺構・層位	銅製品	寛永通寳	不掲載	不掲載	–	–
84	19	80次	灰褐土(下層)	灰褐色土	銅製品	不明銅製品	不掲載	不掲載	3.1g	–
85	1	80次	S-35	SX2203	土製品	羽口	大宰府史跡昭和57年度概報	P57-10	619.8g	–
85	2	80次	灰褐土下	灰褐色土	土製品	羽口	不掲載	不掲載	486.8g	–
85	3	80次	灰褐土	灰褐色土	土製品	羽口	不掲載	不掲載	582.3g	–
85	4	80次	床土	その他の遺構・層位	土製品	羽口	不掲載	不掲載	122.5g	–
85	5	80次	S-35	SX2203	土製品	羽口	不掲載	不掲載	156.2g	–
85	6	80次	灰褐土	灰褐色土	銅滓	銅滓	不掲載	不掲載	2.8g	–
85	7	80次	床土	その他の遺構・層位	銅滓	銅滓	不掲載	不掲載	4.7g	–
85	8	80次	灰褐土下	灰褐色土	鉄滓	鉄滓	不掲載	不掲載	62.0g	–
85	9	80次	S-49	その他の遺構・層位	鉄滓	鉄滓	不掲載	不掲載	157.6g	–
86	10	32次	床土	その他の遺構・層位	土製品	取瓶	不掲載	不掲載	28.2g	–
86	11	80次	S-35	SX2203	土製品	鋳型	大宰府史跡昭和57年度概報	P57-7	–	–
86	12	80次	黒褐土	黒褐色土	土製品	鋳型	不掲載	不掲載	303.6g	–
86	13	80次	黒灰砂質土	SX2231	土製品	鋳型	不掲載	不掲載	26.3g	–
86	14	80次	S-35下層	SX2203	土製品	鋳型	不掲載	不掲載	138.5g	–
86	15	80次	黒灰砂質土	SX2231	土製品	鋳型	不掲載	不掲載	107.2g	–
86	16	80次	黒灰砂質土	SX2231	土製品	鋳型	不掲載	不掲載	121.7g	–

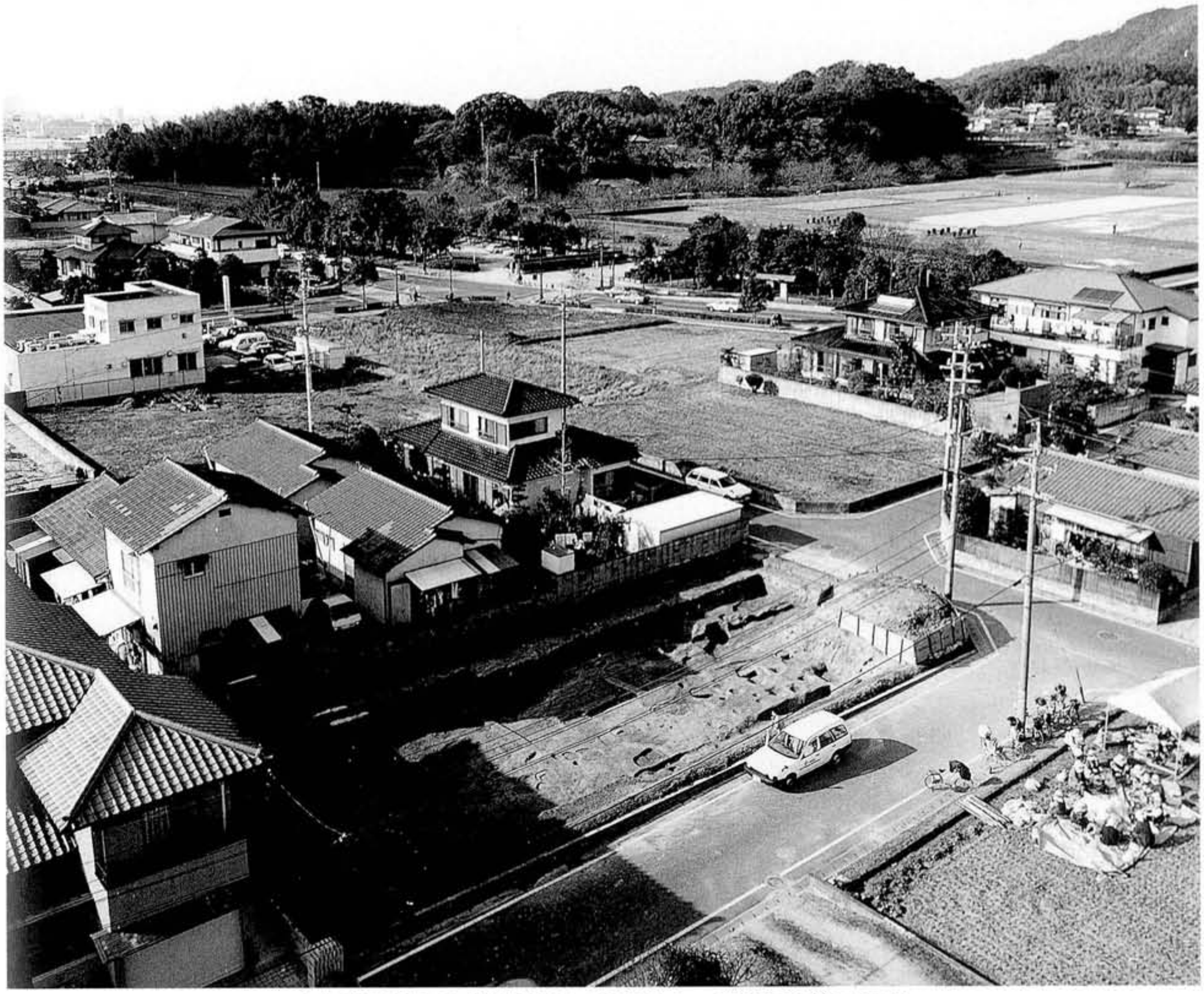
Tab.11　日吉地区主要遺構一覧（1）

No.	遺構番号	遺構種別	次数	S番号・土層註記	備考
1	SB 591	掘立柱建物	32		概報時の遺構番号。本報告ではSB2230として報告
2	SB 596	掘立柱建物	32		概報時の遺構番号。本報告ではSB2220として報告
3	SX 1989	不整形土坑	75	S-54	
4	SB 1990	掘立柱建物	75	S-17～19,45,47,56,58,59,62,65,66	
			114	S-2～5,11	
5	SX 1991	不整形土坑	75	S-10	
6	SX 1992	落ち込み	75	S-73	
7	SX 1993	落ち込み	75	S-52	
			114	S-1	
8	SK 1994	土坑	75	S-11	新規
9	SB 1995	掘立柱建物	75	S-8,9,13,21～23,69,70,72	
10	SX 1997	不整形落ち込み	75	S-53	新規
11	SX 1998	落ち込み	75	S-41	新規
12	SA 1999	柵	75	S-42～44	
13	SB 2000	掘立柱建物	75	S-1～7,12,14,27～29,31～39,67,68	
14	SB 2001	掘立柱建物	75	S-21,71,72	
			80	S番なし	
15	SK 2002	土坑	75	S-55	新規
16	SD 2188	溝	79	S番なし	新規
17	SD 2189	溝	79	S番なし	新規
18	SD 2192	溝	80	S-56,312	新規
19	SD 2193	溝	80	S-311	新規
20	SB 2195	掘立柱建物	80	S-69～72,317,327,328,347	
21	SB 2200	掘立柱建物	80	S-11～27,41	
22	SX 2203	落ち込み	80	S-35,305	
23	SB 2205	掘立柱建物	80	S-6～10	
24	SA 2206	柵	80	S-39か	
25	SA 2210	柵	80	S番なし	
26	SK 2211	土坑	80	S-79	新規
27	SX 2212	土坑	80	S-2	新規
28	SX 2213	土坑	80	S-75	新規
29	SX 2214	落ち込み	80	S-50	新規
30	SB 2215	掘立柱建物	80	S-42～47,310,331,332,337～339	
31	SD 2216	溝	80	UP～US灰褐土	新規
32	SX 2217	不整形土坑	80	S番なし	新規
33	SX 2218	落ち込み	80	S-154	新規
34	SX 2219	不整形土坑	80	S-2	新規
35	SB 2220	掘立柱建物	32	旧SB596	
			80	S-36,73,300,302,304,306,307,309,313,323,324,326,340,341,343,344～346	
36	SD 2222	溝	80	S-62	新規
37	SB 2225	掘立柱建物	80	S-32～34,61,77,78,80,85,301,320,321	
38	SB 2230	掘立柱建物	32	旧SB591	
			80	S-167,186,189	
39	SX 2231	落ち込み	80	50～52黒灰砂質土,S-51	新規
40	SK 2233	土坑	80	S-82	新規
41	SK 2234	土坑	80	S-336	新規
42	SB 2235	掘立柱建物	80	S-170,179～182,184,218～220	旧SA2235・2236
43	SK 2237	土坑	80	S-40	新規
44	SX 2238	落ち込み	80	S番なし	新規
45	SX 2239	落ち込み	80	S-329	新規
46	SB 2240	掘立柱建物	80	S-104～106,125,126,129,197,206,207,213	
			153	S-2～6,9,12～16,22,26,29	
47	SB 2245	掘立柱建物	80	S-107,124,127,128,133,204	
			153	S-18,19,30	
48	SK 2248	土坑	80	S-102	新規
49	SK 2249	土坑	80	S-211	新規
50	SE 2250	井戸	80	S-30	
51	SK 2251	土坑	80	S-28	
52	SK 2252	土坑	80	S-76	
53	SK 2253	土坑	80	S-101	新規
54	SA 2254	柵	80	S番なし	
55	SE 2255	井戸	80	S-5	
56	SK 2256	土坑	80	S-194	

Tab.11　日吉地区主要遺構一覧（2）

No.	遺構番号	遺構種別	次数	S番号・土層註記	備考
57	SD 2257	溝	80	S-175,193	
58	SD 2258	溝	80	S-153,202	新規
59	SD 2259	溝	32	A-8・9東西溝	
			80	S-144,144A	
60	SE 2260	井戸	80	S-3	新規
61	SD 2261	溝	32	C-2溝	新規
			80	S番なし	
62	SX 2262	落ち込み	80	S番なし	
63	SD 2263	溝	80	S-143,144B	新規
64	SK 2264	土坑	80	S-145	新規
65	SE 2265	井戸	80	S-146	
66	SD 2266	溝	80	S-147	新規
67	SD 2267	溝	80	S-152	新規
68	SD 2268	溝	80	S-159	新規
69	SD 2269	溝	80	S-171	新規
70	SE 2270	井戸	80	S-158	
71	SK 2271	土坑	80	S-123	新規
72	SA 2272	柵	80	S番なし	
73	SD 2273	溝	80	S-142	新規
74	SX 2274	落ち込み	80	S-210	
75	SX 2275	礫敷遺構	80	礫群	
76	SX 2276	不整形土坑	80	S-205	新規
77	SD 2277	溝	80	S-8礫群・S-108	
78	SX 2278	不整形土坑	80	S-214	新規
79	SB 2279	掘立柱建物	80	S-57・58・63・64・315	新規
80	SX 2280	瓦敷遺構	80	S-148（付属する溝），瓦群	
81	SX 2281	瓦敷遺構	80	瓦群	新規
82	SX 2282	不整形土坑	80	S-215	新規
83	SX 2283	落ち込み	80	S-200	新規
84	SD 2284	溝	80	S-201・209	
			153	S-1	
85	SB 2285	掘立柱建物	80	S-46～48,55	
86	SB 2288	掘立柱建物	80	S番なし	
87	SB 2290	掘立柱建物	80	S番なし	
88	SB 2292	掘立柱建物	80	S-44・52・60	
89	SB 2294	掘立柱建物	80	S番なし	
90	SB 2295	掘立柱建物	80	S-156,174	
91	SX 3328	落ち込み	114	S-8	新規
92	SX 3329	落ち込み	114	S-10	新規
93	SX 3331	落ち込み	114	S-6	
94	SX 3332	粘土採掘坑	114	S-7	
95	SD 4081	溝	80	S-139～141	
			153	S-10	
96	SX 4082	粘土採掘坑	153	S-34	
97	SX 4083	粘土採掘坑	153	S-35	
98	SX 4084	落ち込み	153	S-36	
99	SA 4085	柵	80	S番なし	
			153	S-12～16,29,30	
100	SX 4086	粘土採掘坑	153	S番なし	
101	SX 4087	粘土採掘坑	153	S-40	
102	SD 4660	溝	80	71・72暗褐土・TE72段落ち	SX4087と重複
			153	S-32,36,37,39,41	
			168-2	灰色砂	政庁周辺官衙跡Ⅰ報告済
			200	S-1～3	政庁周辺官衙跡Ⅰ報告済

PLATES



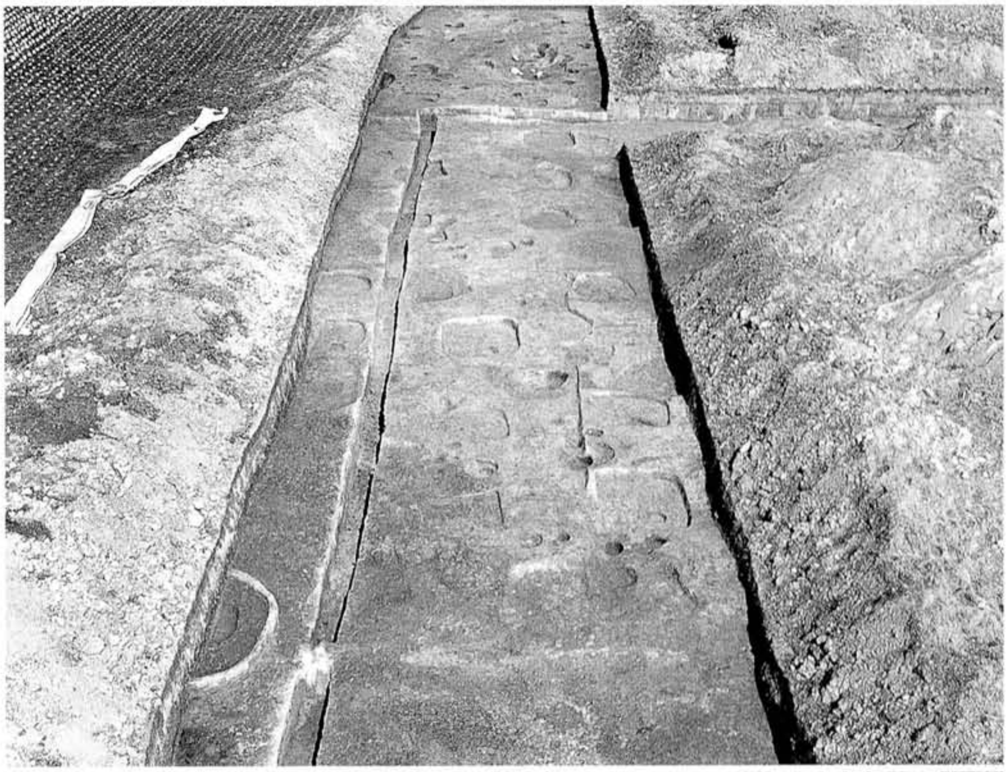
大宰府政庁と日吉地区遠景（南東から　調査区は第153次）

第25次調査

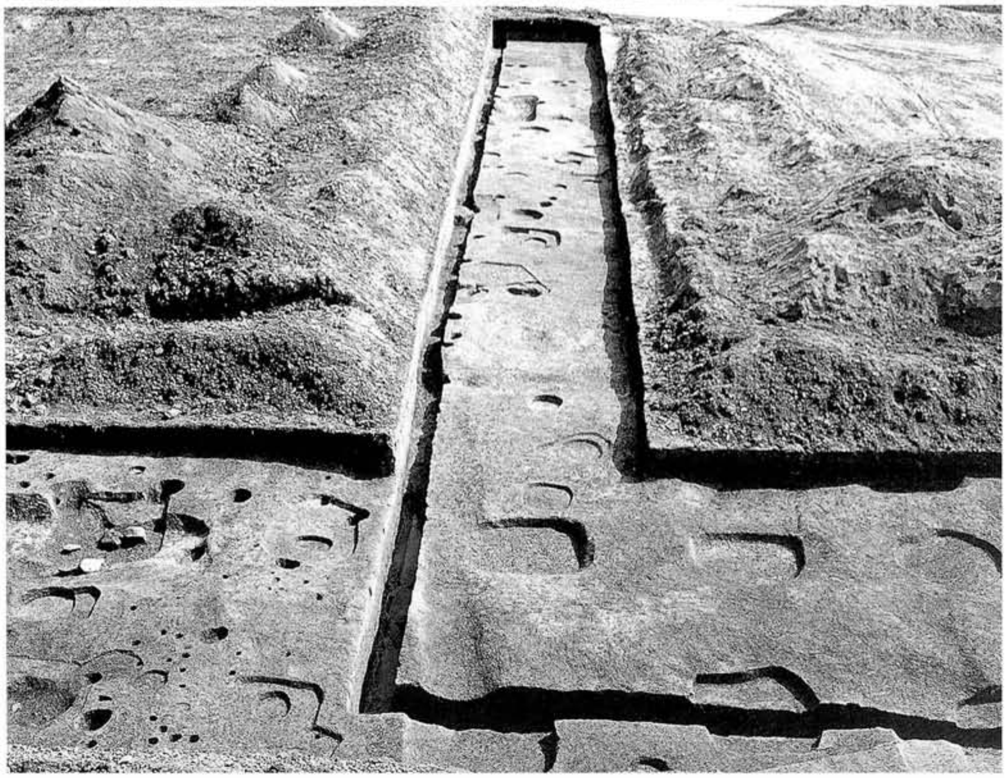
(1) 調査区全景（東から）

(2) トレンチ全景（西から）

(1)第32次調査南北トレンチ（北から）



(2)第32次調査南北トレンチ（南から）



(3)第32次調査東西トレンチ全景
（西から）

(1) 第75次調査区全景（東から）

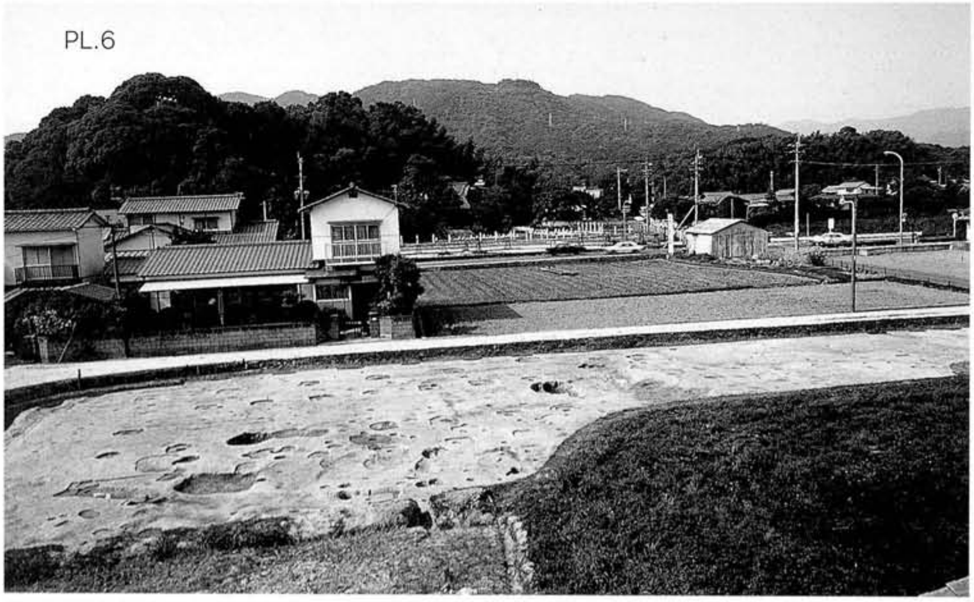
(2) 第75次調査区全景（南から）

(1) 調査区全景（西から）

(2) Aトレンチ全景（東から）

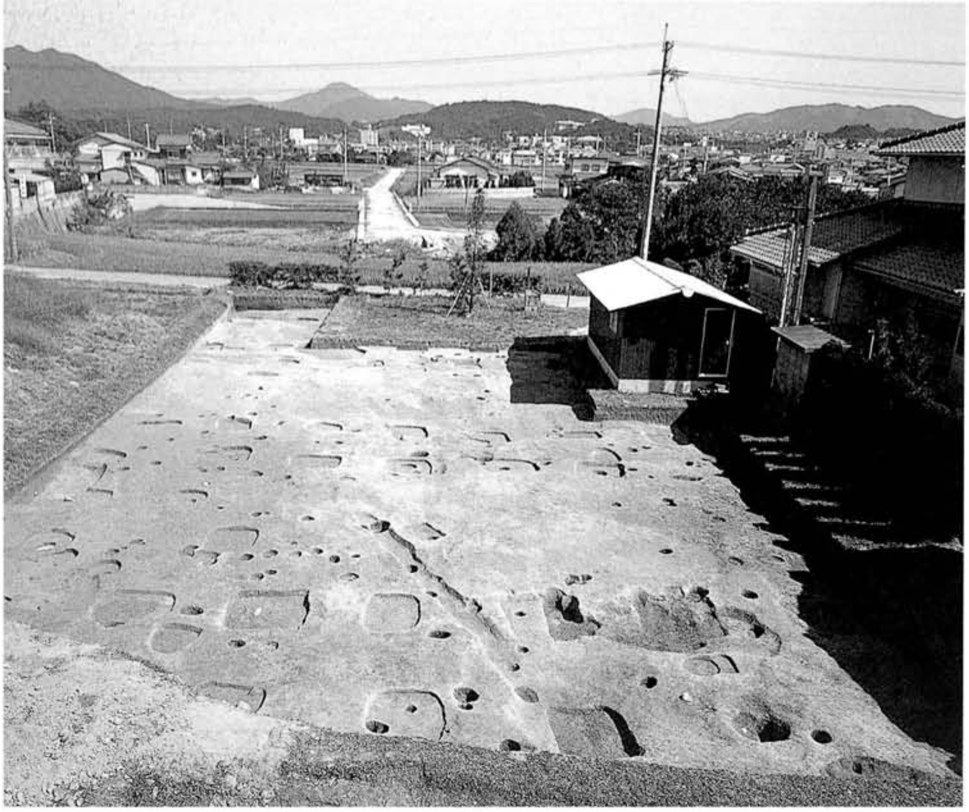
(3) Bトレンチ（北から）

(4) Cトレンチ（西から）

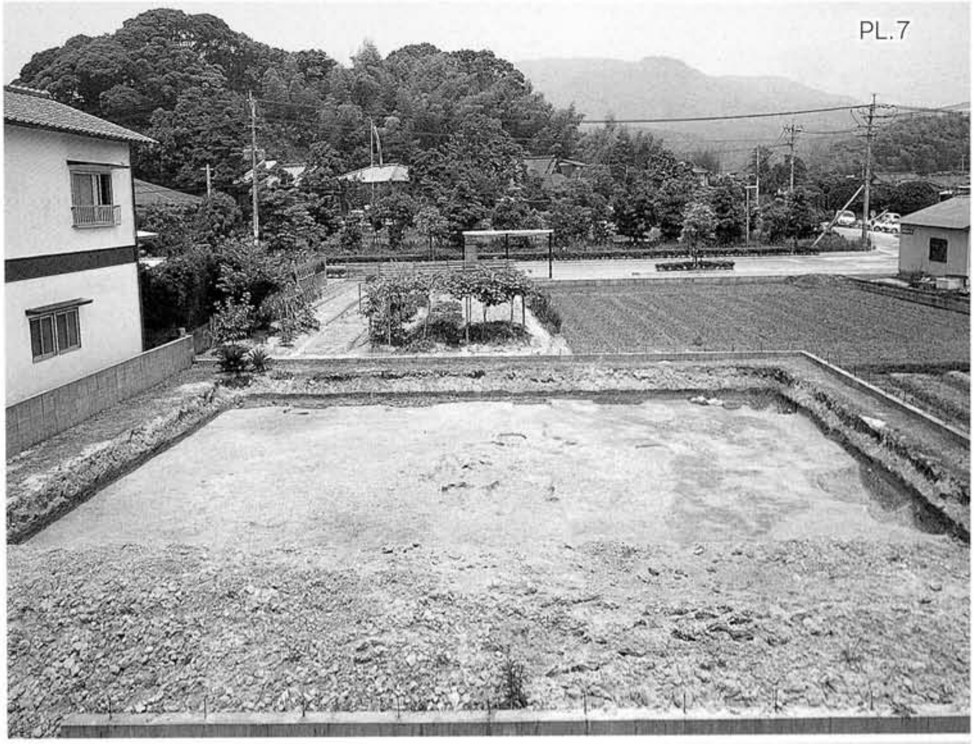


(1) 第80-1次調査区（南から）

(2) 第80-2次調査区全景（北から）



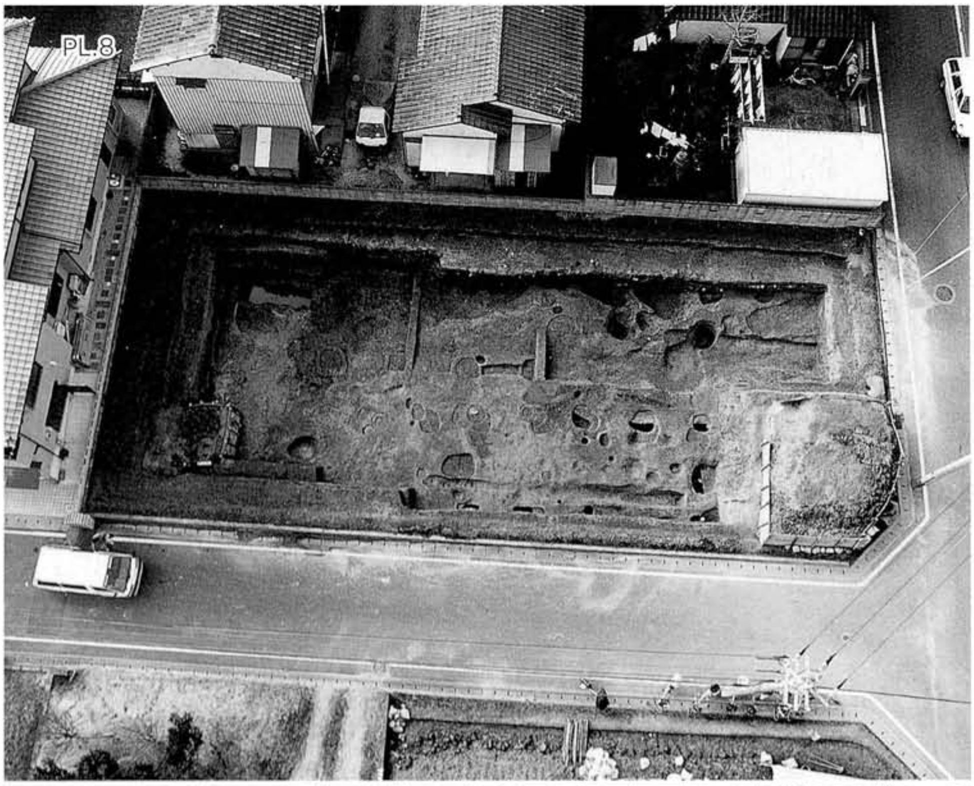
(3) 第80-3次調査区全景（西から）



(1) 第114次調査区全景（南から）

(2) 第114次調査区全景（東から）

(3) 第143次調査状況



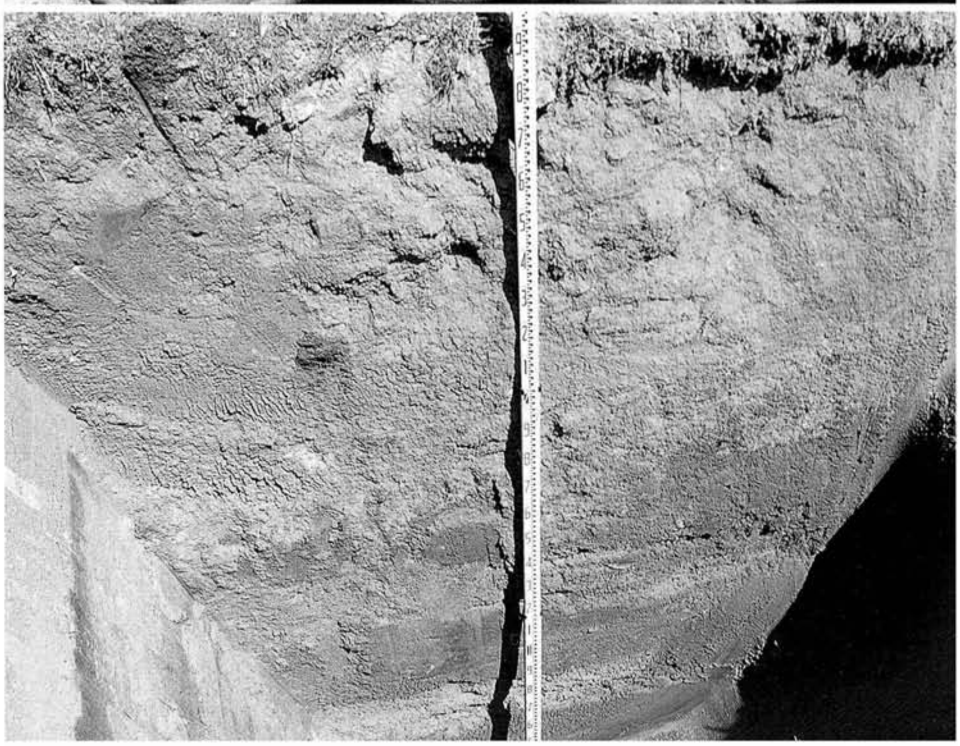
(1) 第153次調査区全景空中写真（上が西）

(2) 第153次調査区全景（北から）

(3) 第153次調査区全景（南から）

(1) 第164次調査トレンチ

(2) 第173次調査トレンチ



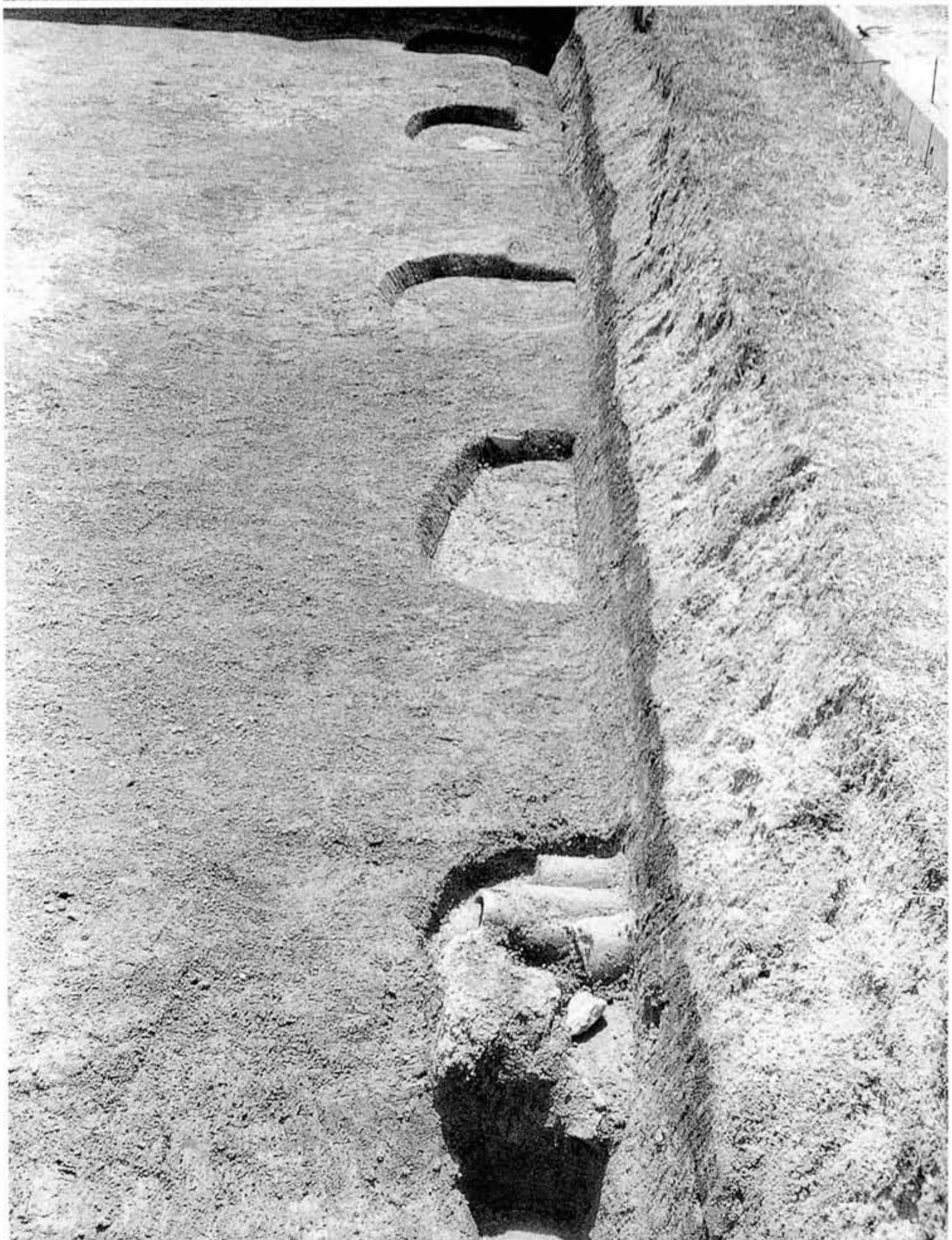
(3) 第198次調査Ｂトレンチ（南から）

(1) 第201次調査Aトレンチ（北西から）

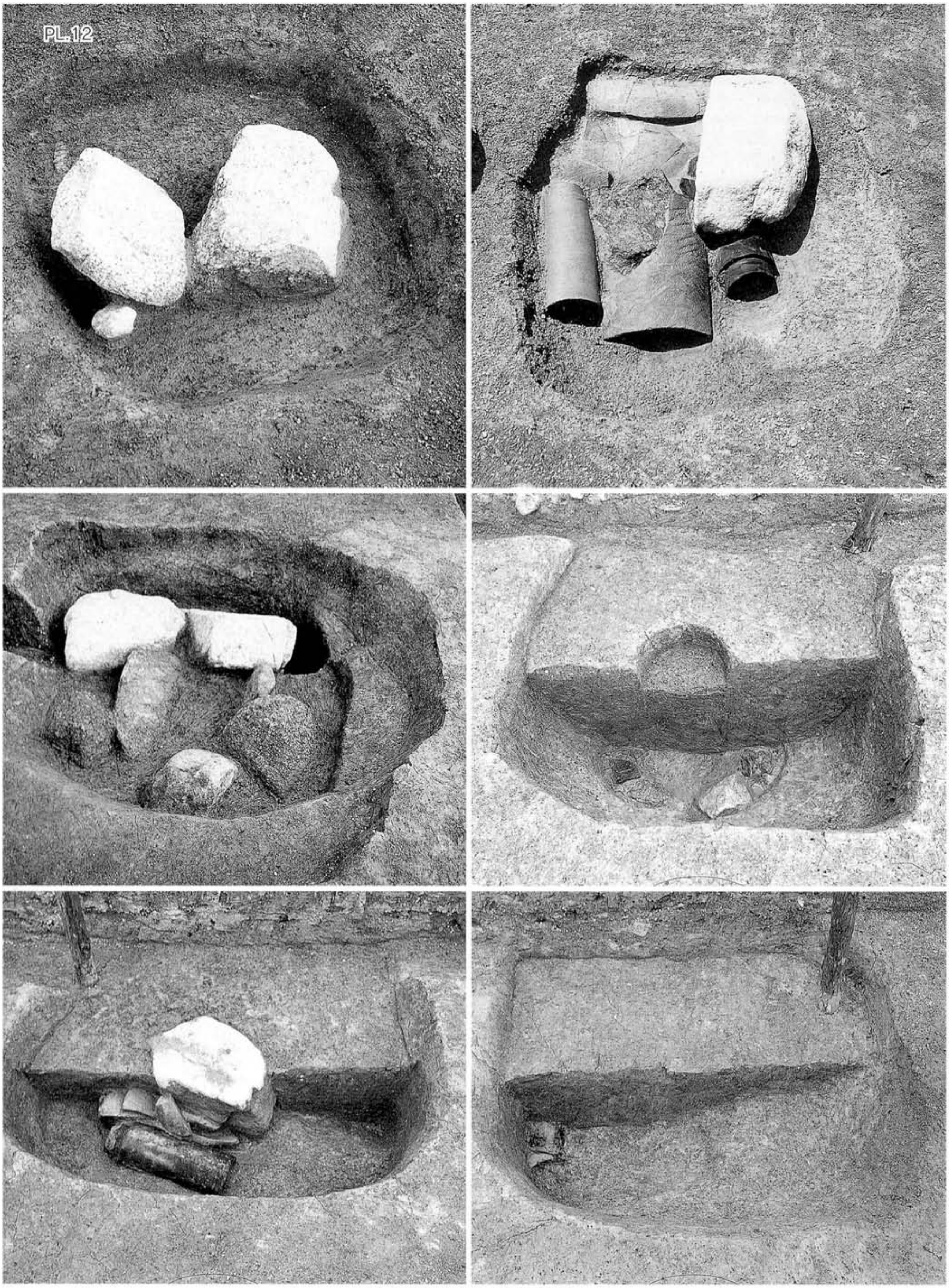
(2) 第207次調査
Aトレンチ（北から）

(3) 第207次調査
Bトレンチ（北から）

(1) 掘立柱建物ＳＢ1990・落ち込み
ＳＸ1989･1993（75次　東から）

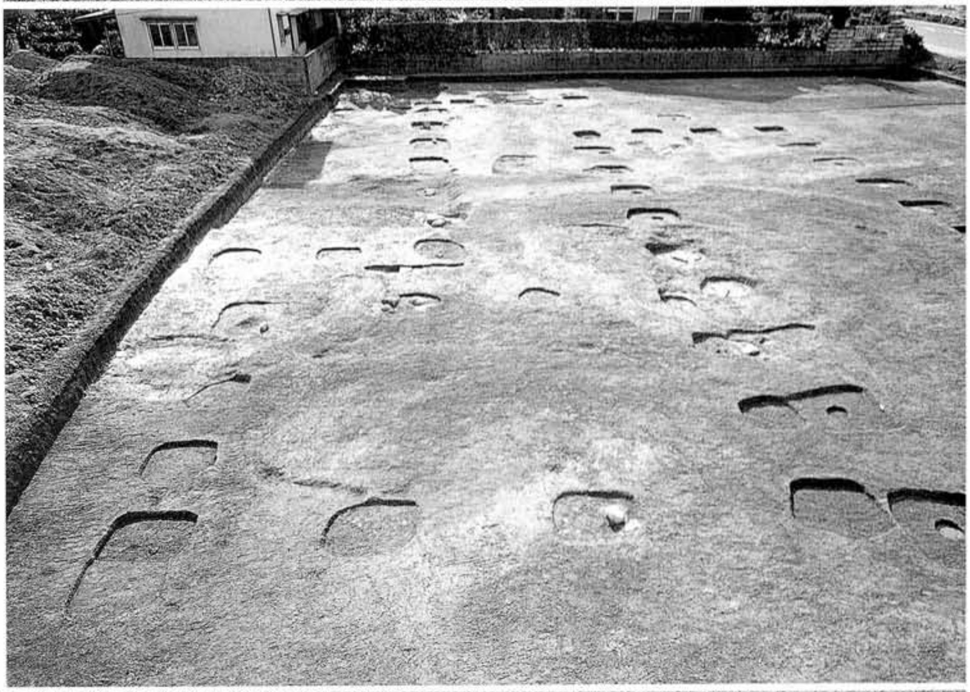


(2) 掘立柱建物ＳＢ1990
（114次　東から）

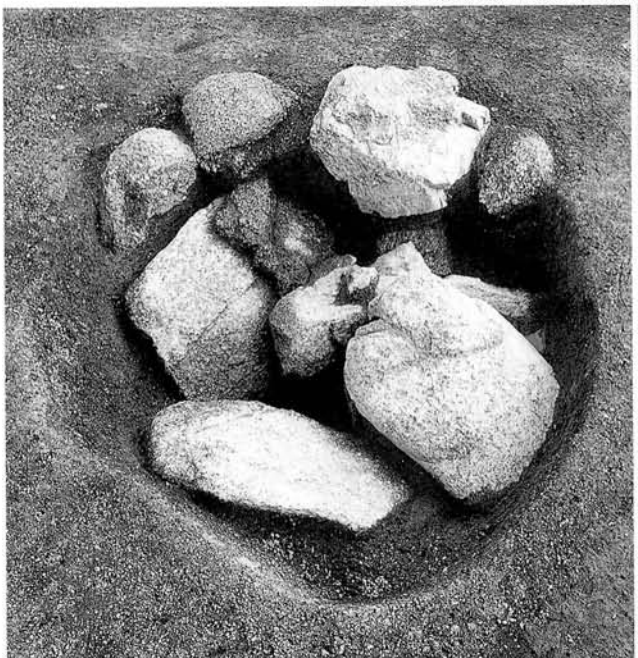


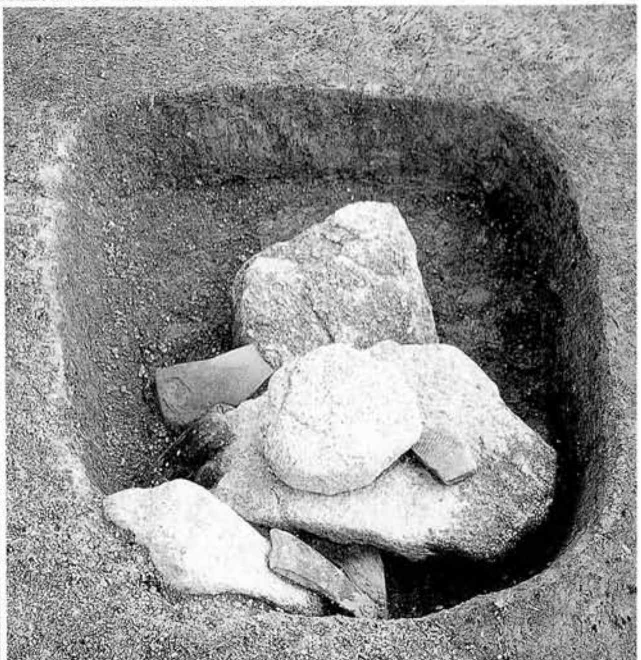
掘立柱建物ＳＢ1990柱穴

(1) 掘立柱建物ＳＢ1995・2001
（南から　奥にＳＢ2000）



(2) 掘立柱建物ＳＢ1995・2001
（東から　奥にＳＢ1990・2000）



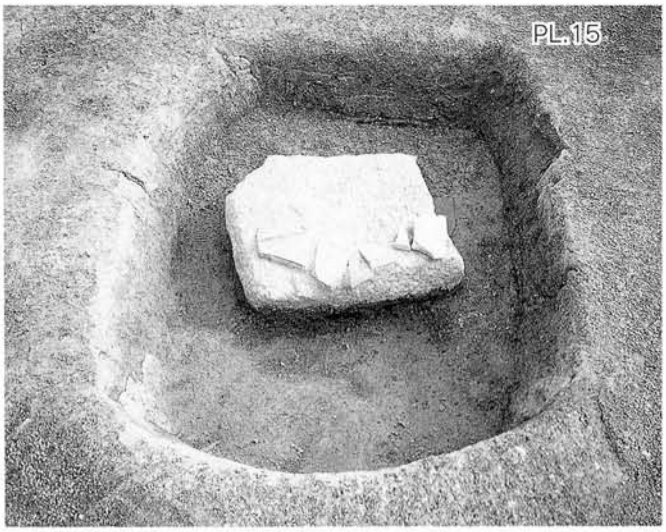


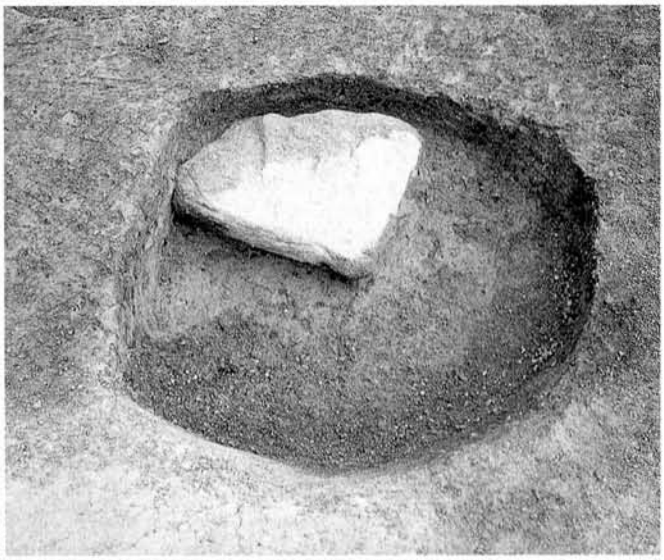
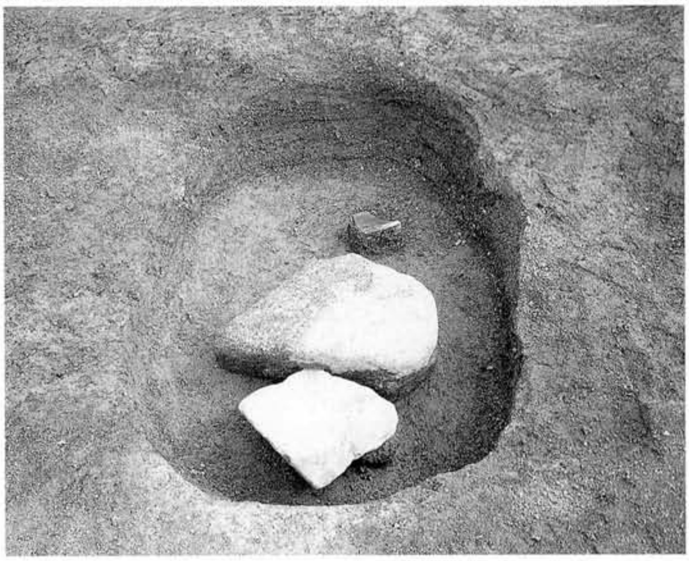
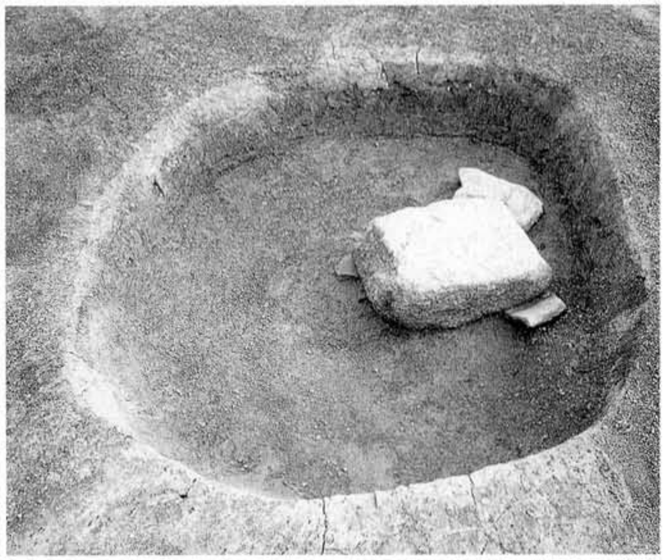
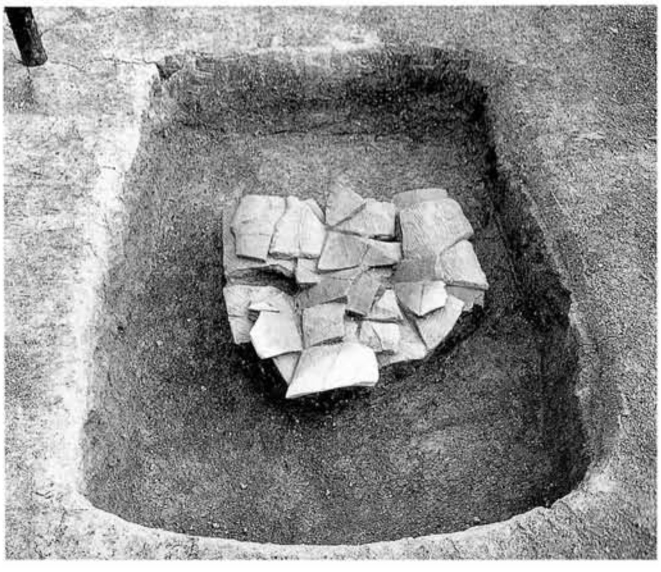
(3) 掘立柱建物ＳＢ1995柱穴

(1) 掘立柱建物ＳＢ2000全景（西から）

(2) 掘立柱建物ＳＢ2000全景（東から）

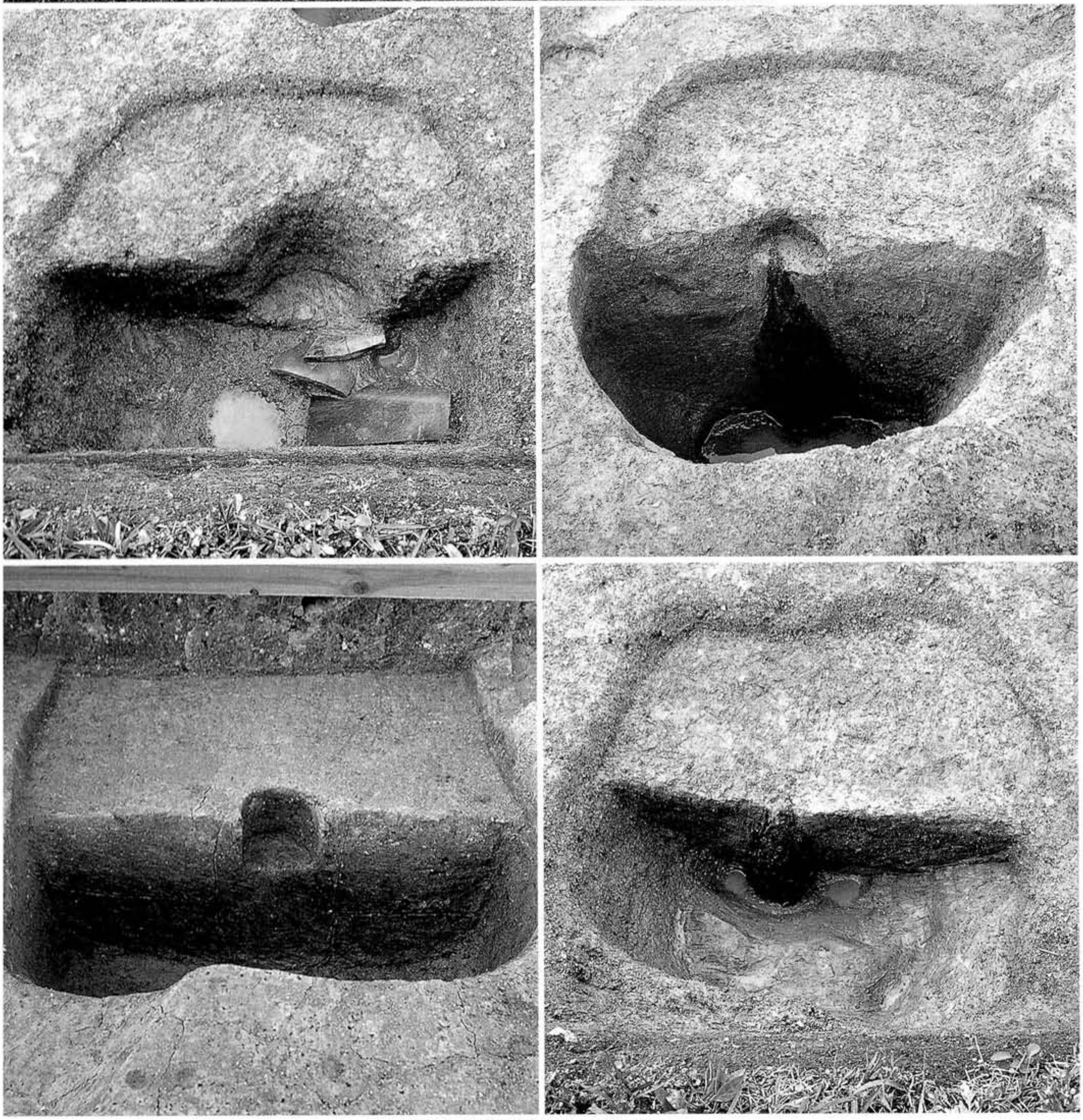
(3) 掘立柱建物ＳＢ2000西側
（北から　奥にSB1990）

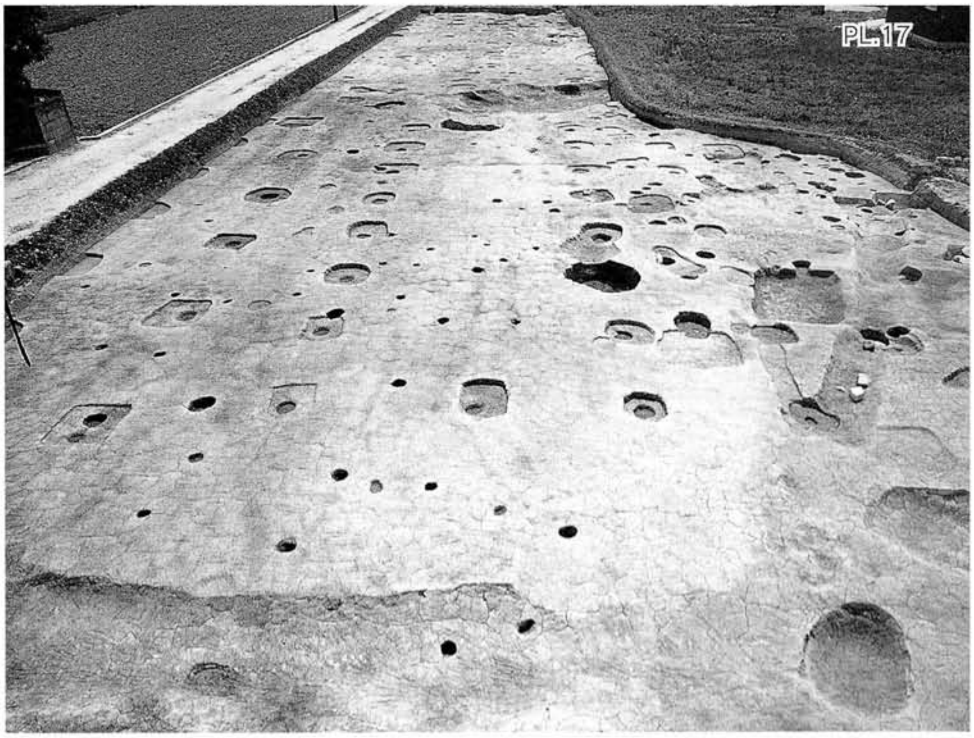





掘立柱建物ＳＢ2000柱穴

(1) 掘立柱建物ＳＢ2001・2195・2279・2285・2292,溝ＳＤ2192（南から）

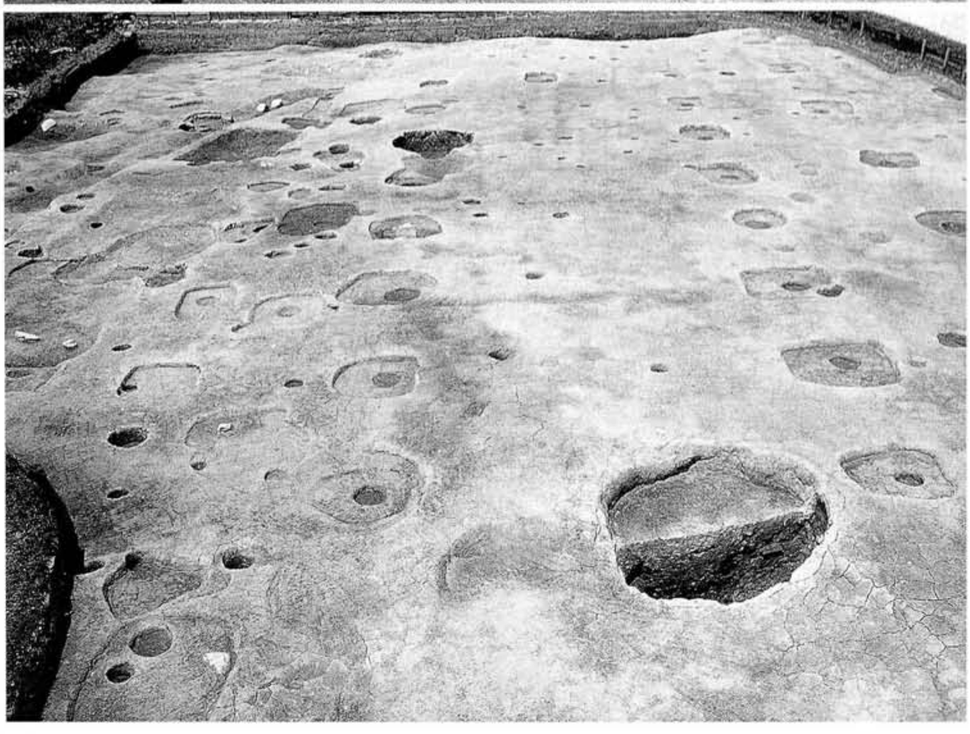


(2) 掘立柱建物ＳＢ2195柱穴

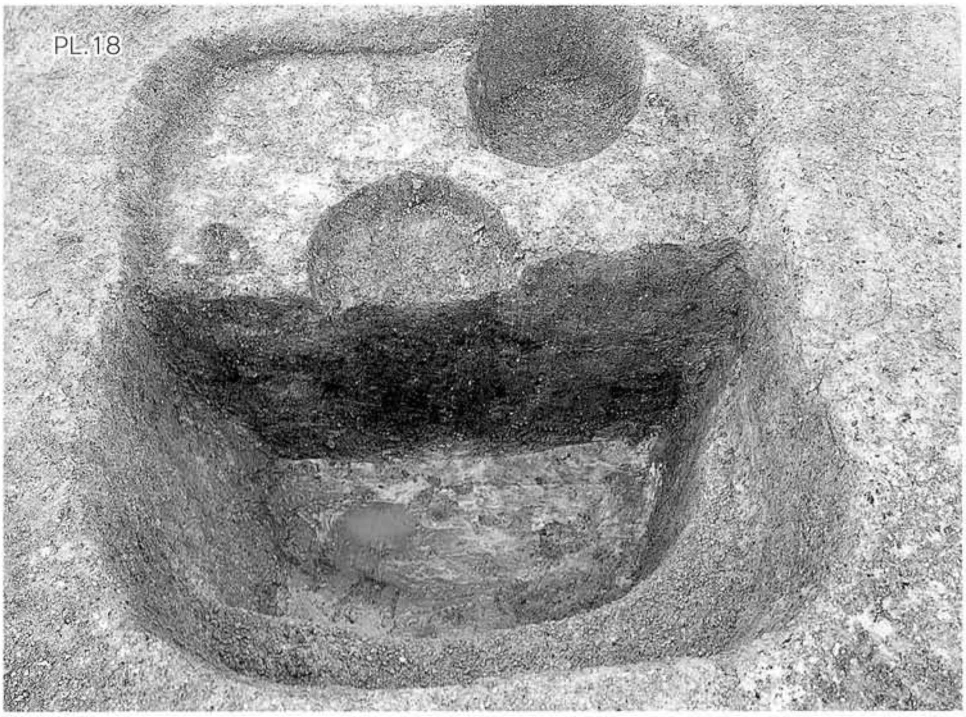


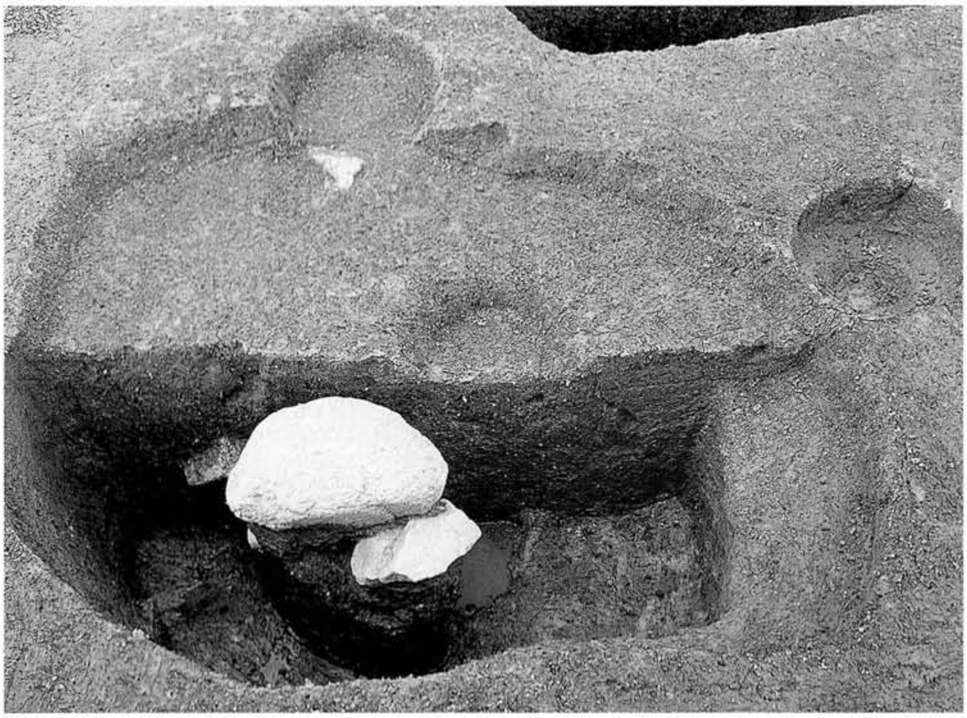
(1)掘立柱建物ＳＢ2200・2205・2288
全景（南から）

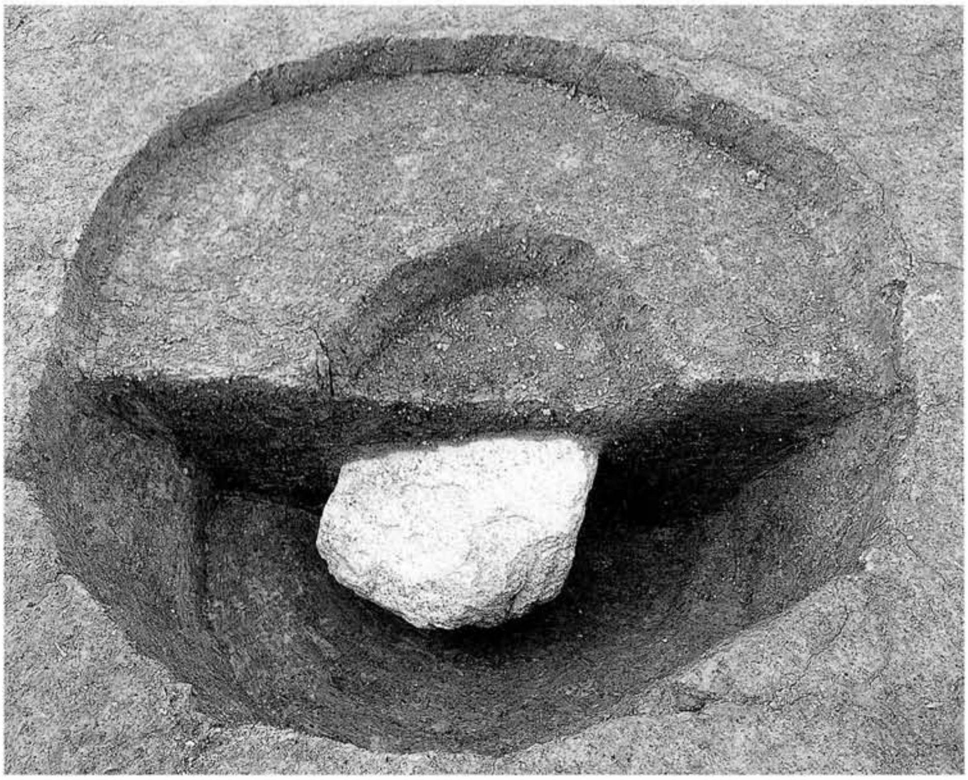
(2)掘立柱建物ＳＢ2200,柵ＳＡ2254
全景（西から）



(3)掘立柱建物ＳＢ2200全景（東から）







掘立柱建物ＳＢ2200柱穴

(1) 掘立柱建物ＳＢ2205,柵ＳＡ2206・2210
（西から）

(2) 掘立柱建物ＳＢ2215・2290,
柵ＳＡ2272（80-1次　北から）

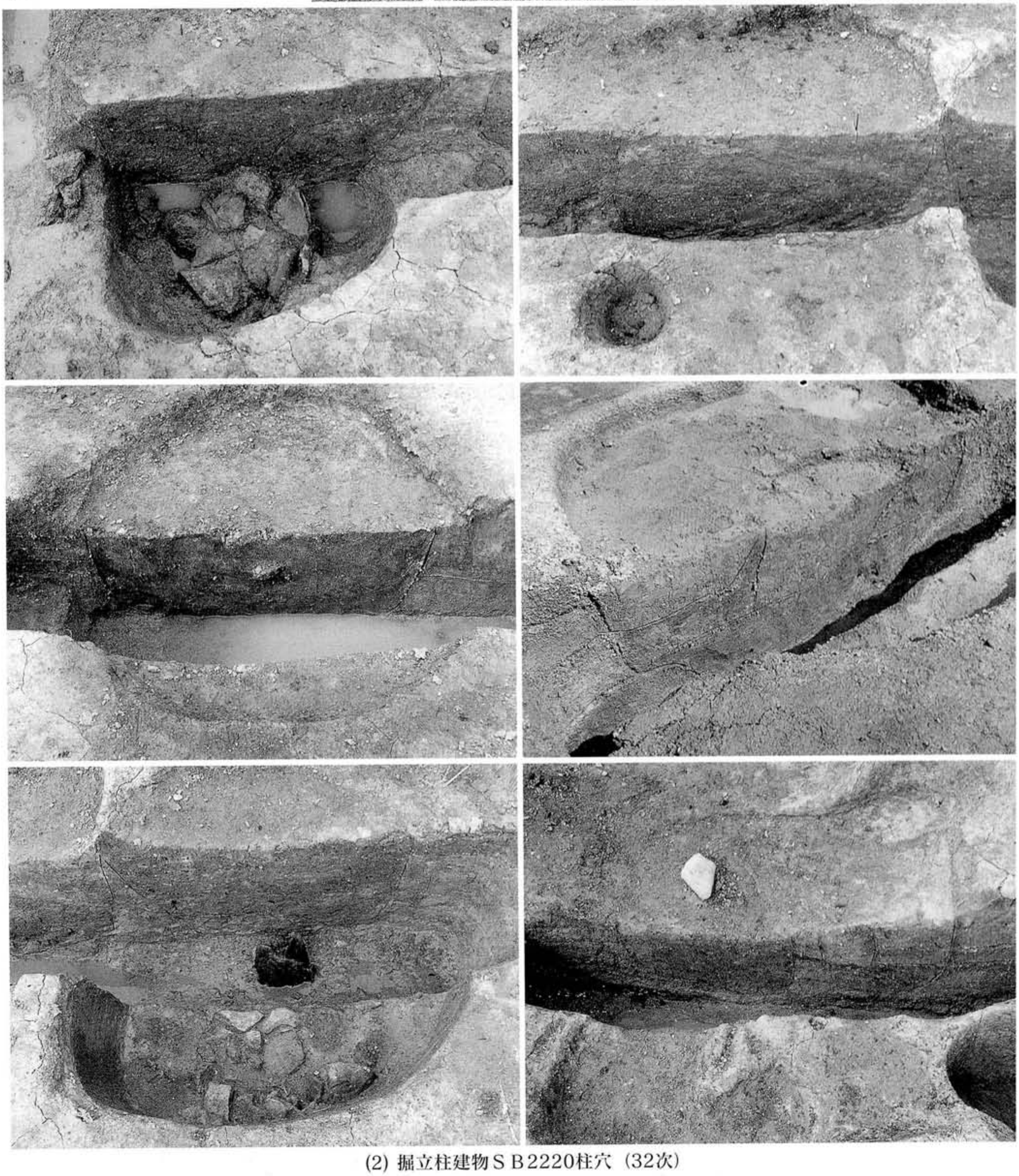
(3) 掘立柱建物ＳＢ2215
（80-3次　北から）

(1) 掘立柱建物ＳＢ2215・2220
（東から）

(2) 掘立柱建物ＳＢ2220全景（北から）

(3) 掘立柱建物ＳＢ2220柱穴

(1) 掘立柱建物ＳＢ2220（北から）

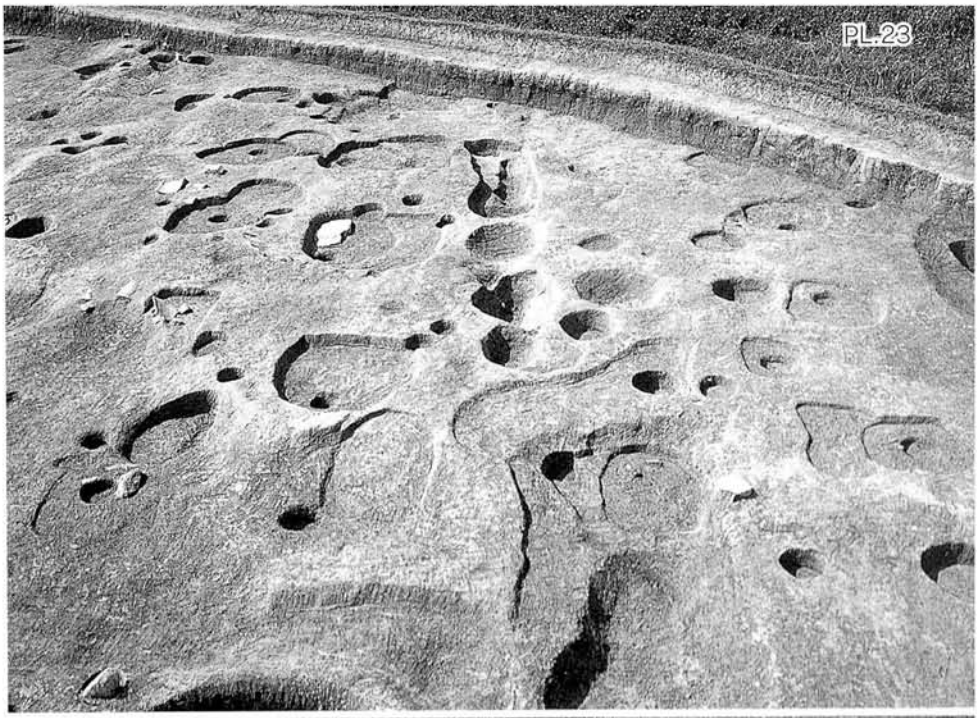


(2) 掘立柱建物ＳＢ2220柱穴（32次）

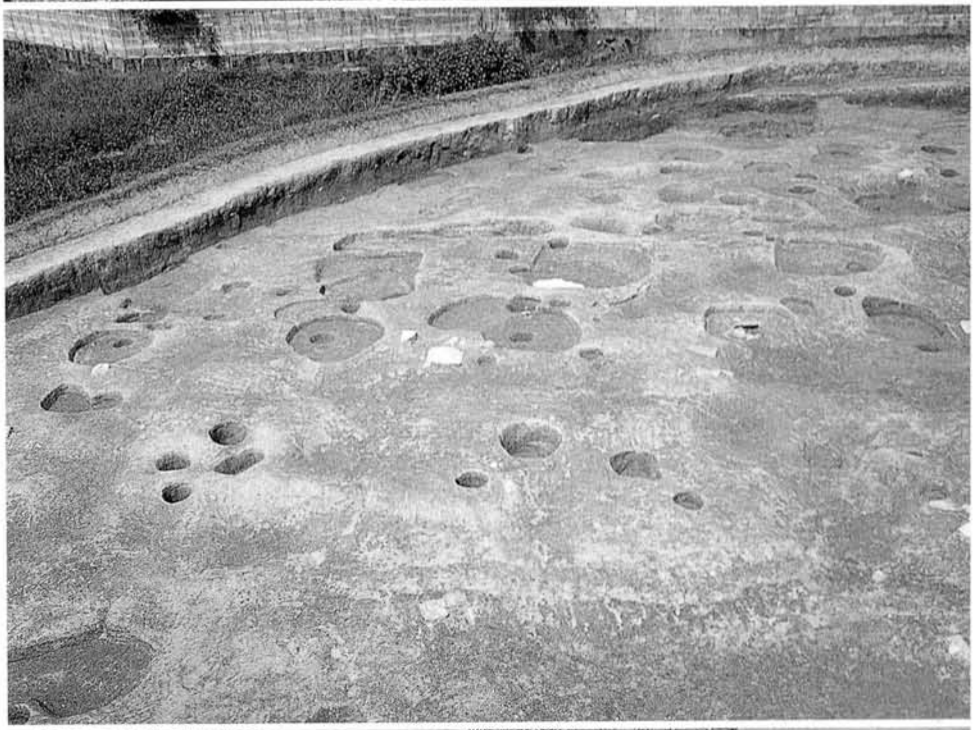
(1) 掘立柱建物ＳＢ2225全景
（南から　奥にＳＢ2200・2205）

(2) 掘立柱建物ＳＢ2225（北から）

(3) 掘立柱建物ＳＢ2230
（80次　西から（手前にＳＸ2280））



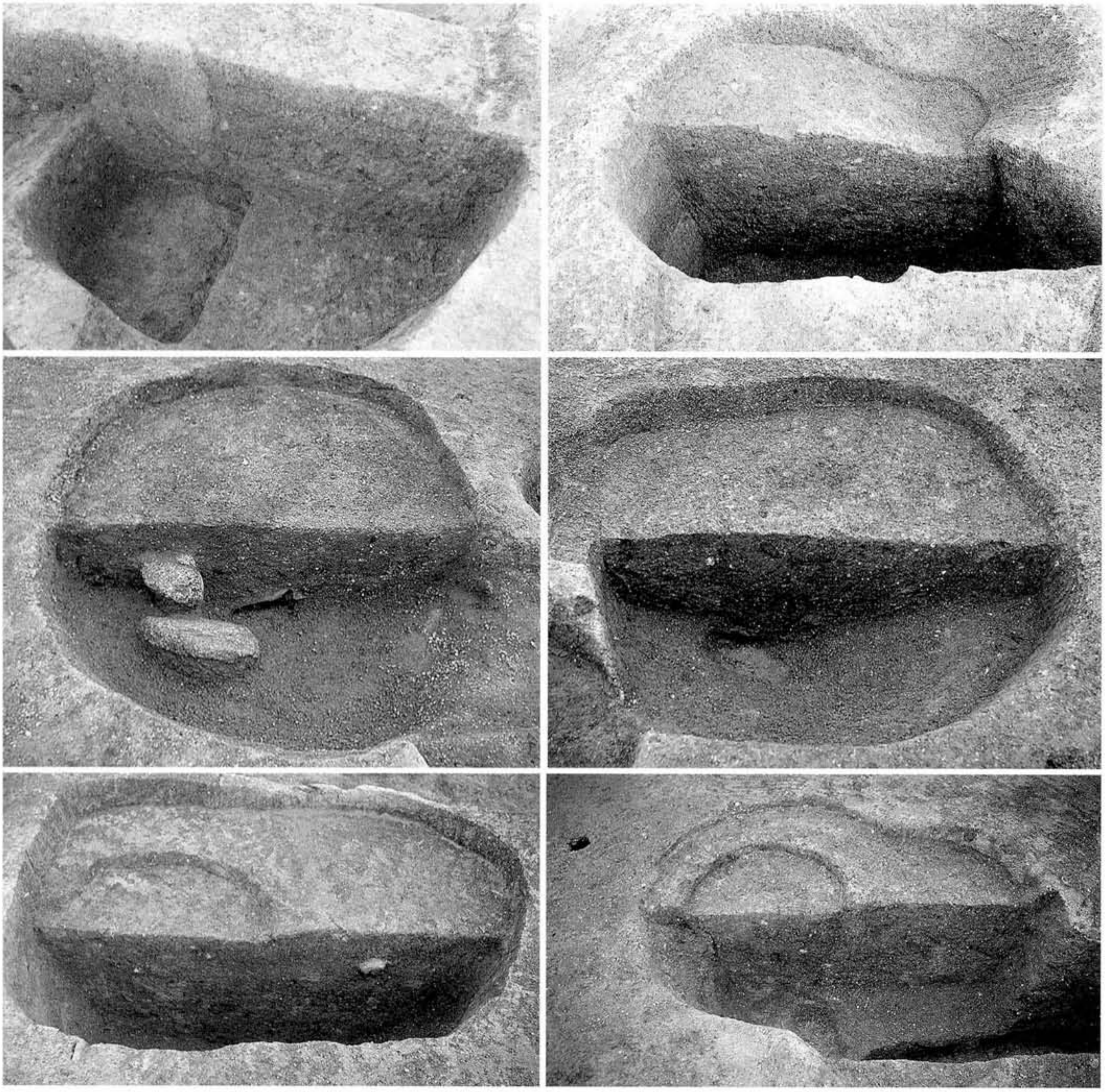
(1) 掘立柱建物ＳＢ2240・2245,
柵SA4085（80次　北から）



(2) 掘立柱建物ＳＢ2240・2245,
柵SA4085（80次　東から）

(3) 掘立柱建物ＳＢ2240・2245,
柵SA4085（153次　南から）

(1) 掘立柱建物ＳＢ2240柱穴



(2) 掘立柱建物ＳＢ2245柱穴

(1) 掘立柱建物ＳＢ2001・2195・2279・2285・2292（西から）

(2) 掘立柱建物ＳＢ2295・溝ＳＤ2257～2259（南西から）

(3) 柵ＳＡ1999（北から）

(1) 溝ＳＤ2257～2259・2266（北から）

(2) 溝ＳＤ2263・2277・2284・不整形
土坑ＳＸ2274･2276･2278（西から）

(3) 溝ＳＤ2284（北から）

(4) 溝2284土層（北から）

(1) 溝ＳＤ4081（右）・ＳＤ2284・4660（左）（上が北）

(2) 溝ＳＤ4081（左）・ＳＤ4660（右）（北から）

(3) 溝ＳＤ4081（北から）

(1) 井戸ＳＥ2250全景（東から）

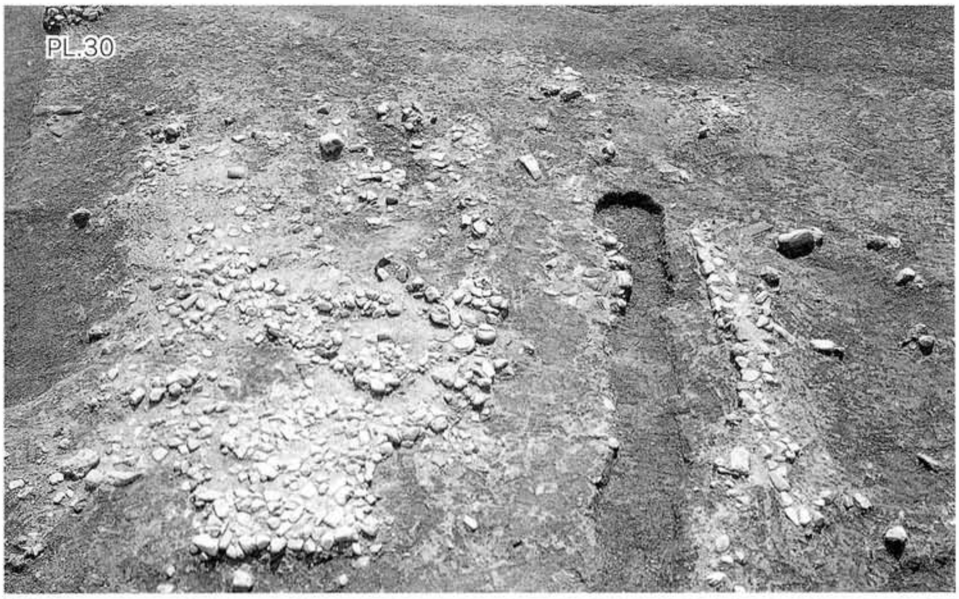
(2) 井戸ＳＥ2255土層（東から）

(3) 井戸ＳＥ2255全景（西から）

(1) 井戸ＳＥ2260全景（西から）

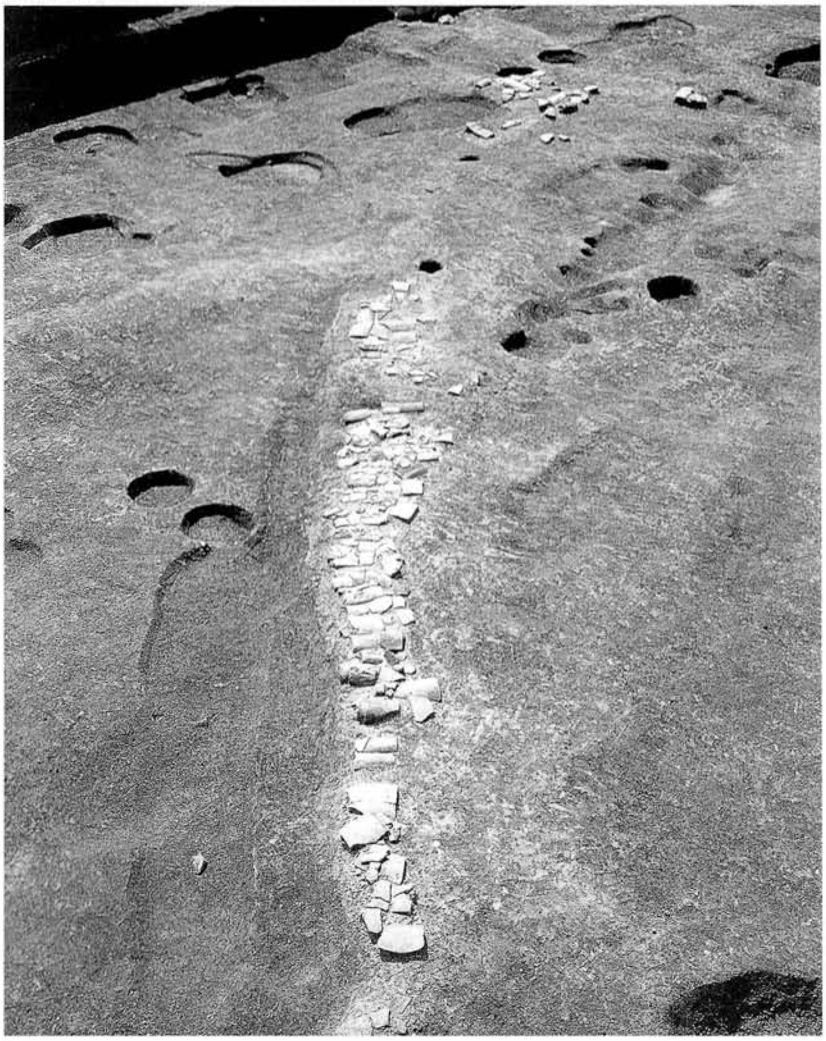
(2) 井戸ＳＥ2265全景（西から）

(3) 井戸ＳＥ2270全景（西から）



(1) 礫敷遺構ＳＸ2275全景（西から）

(2) 礫敷遺構ＳＸ2275 断ち割り土層
（北西から）



(3) 瓦敷遺構ＳＸ2280全景（北西から）

(1) 粘土採掘坑ＳＸ4082全景（南から）

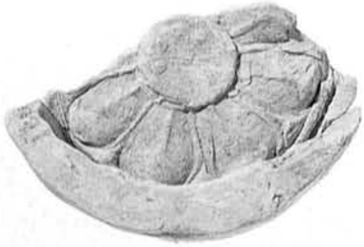
(2) 粘土採掘坑ＳＸ4083全景（南から）

(3) 粘土採掘遺構ＳＸ4087（南から）

1
(032)

2
(032)

3
(032)



4
(033)

6
(275A)

7
(275B)

9
(290B)

10
(290B)

11
(290B)

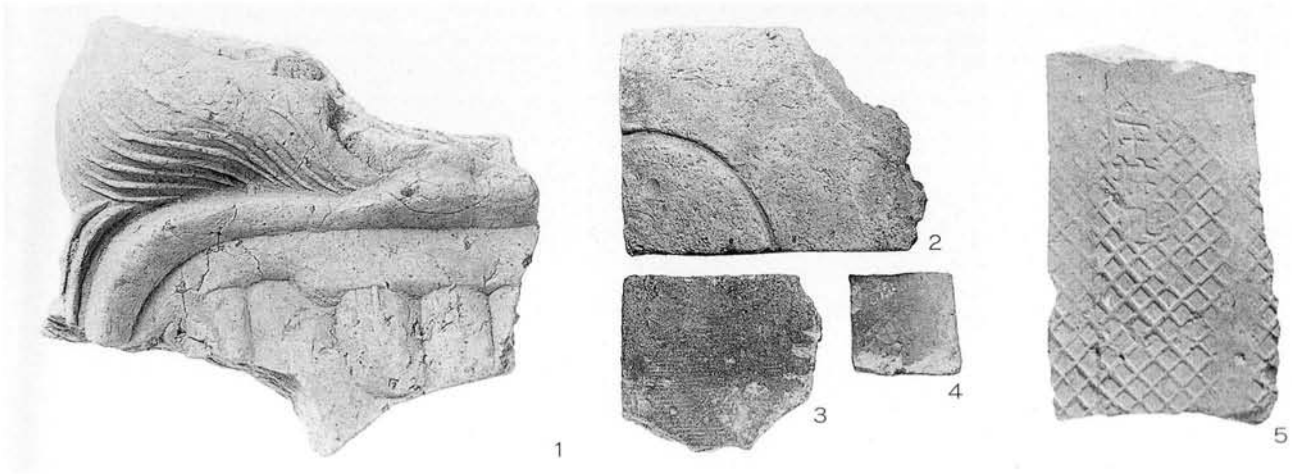
12
(巴紋)

3
(575A)

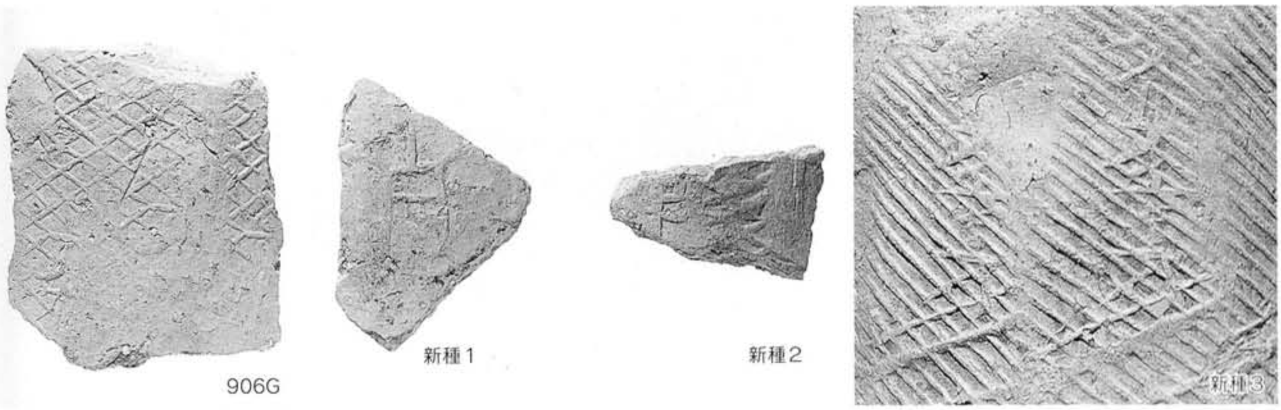
1
(560B)

4
(582A)

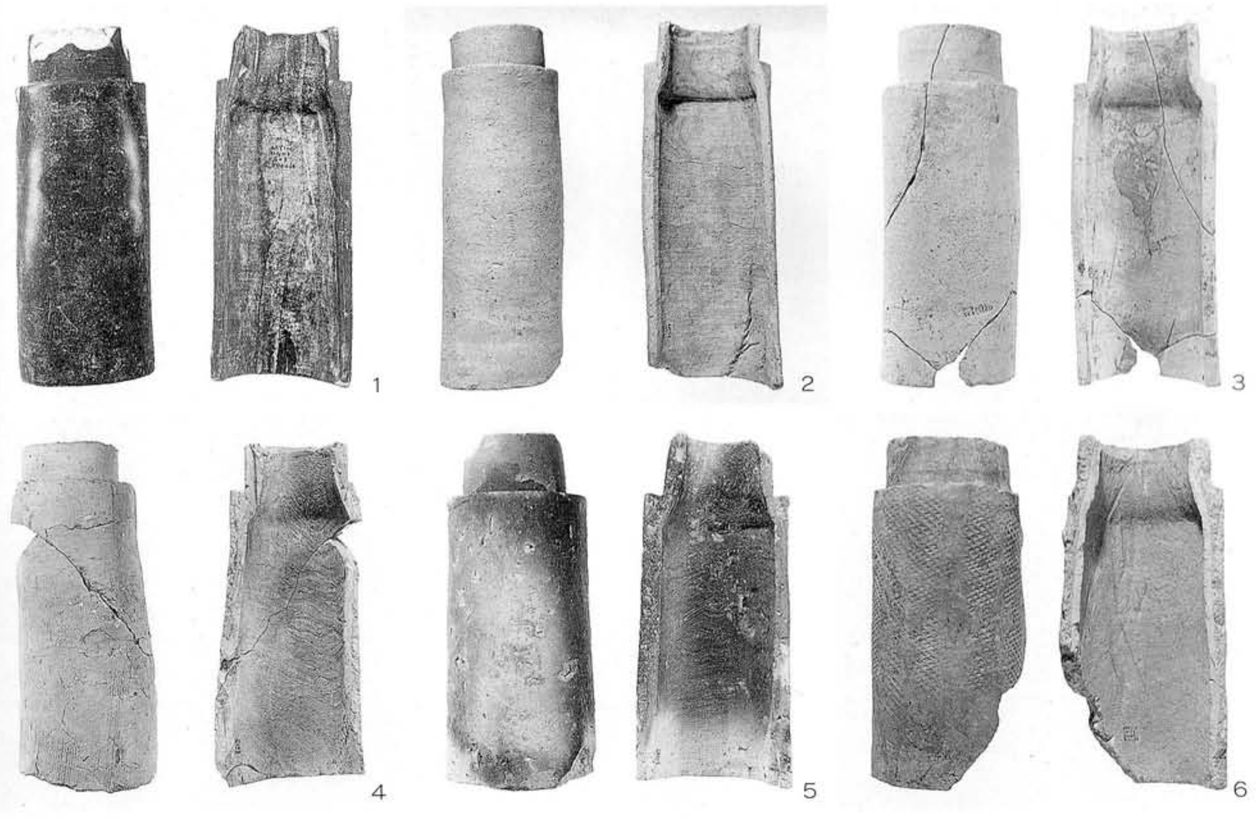
軒丸瓦・軒平瓦



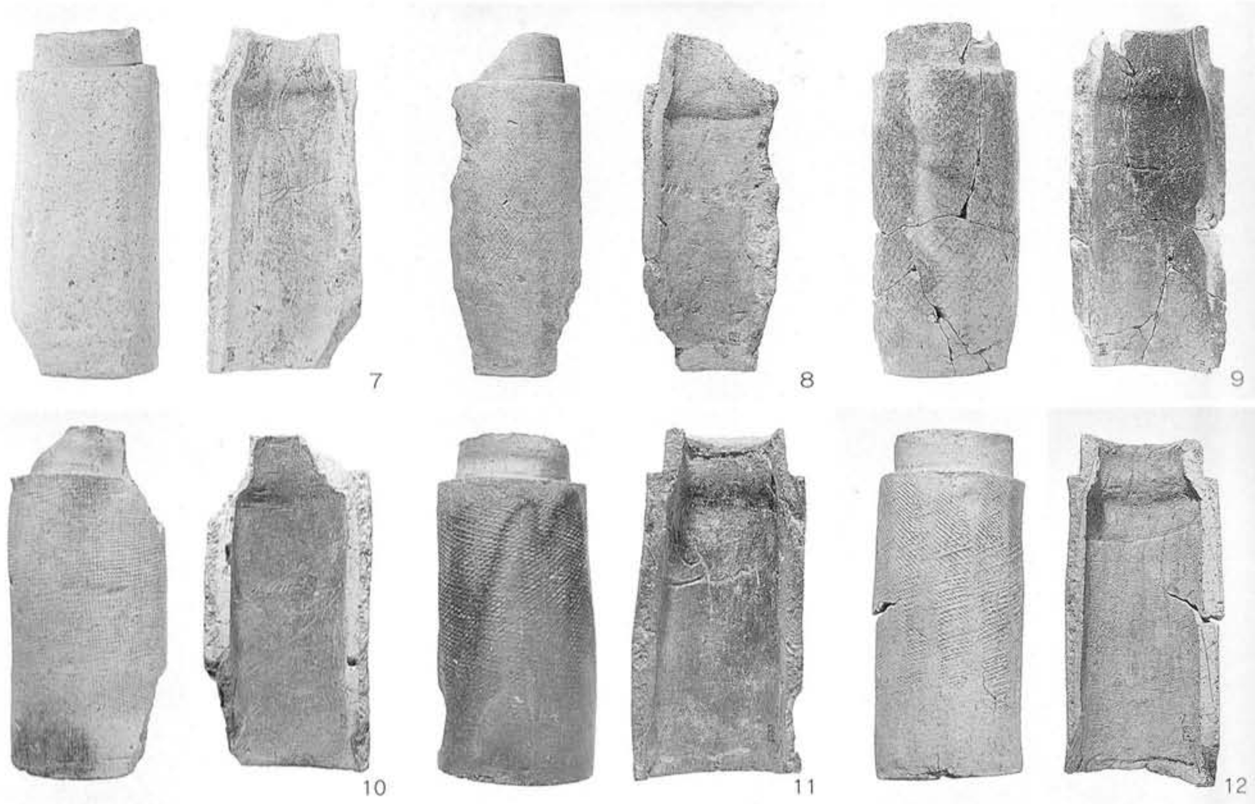
(1) 道具瓦



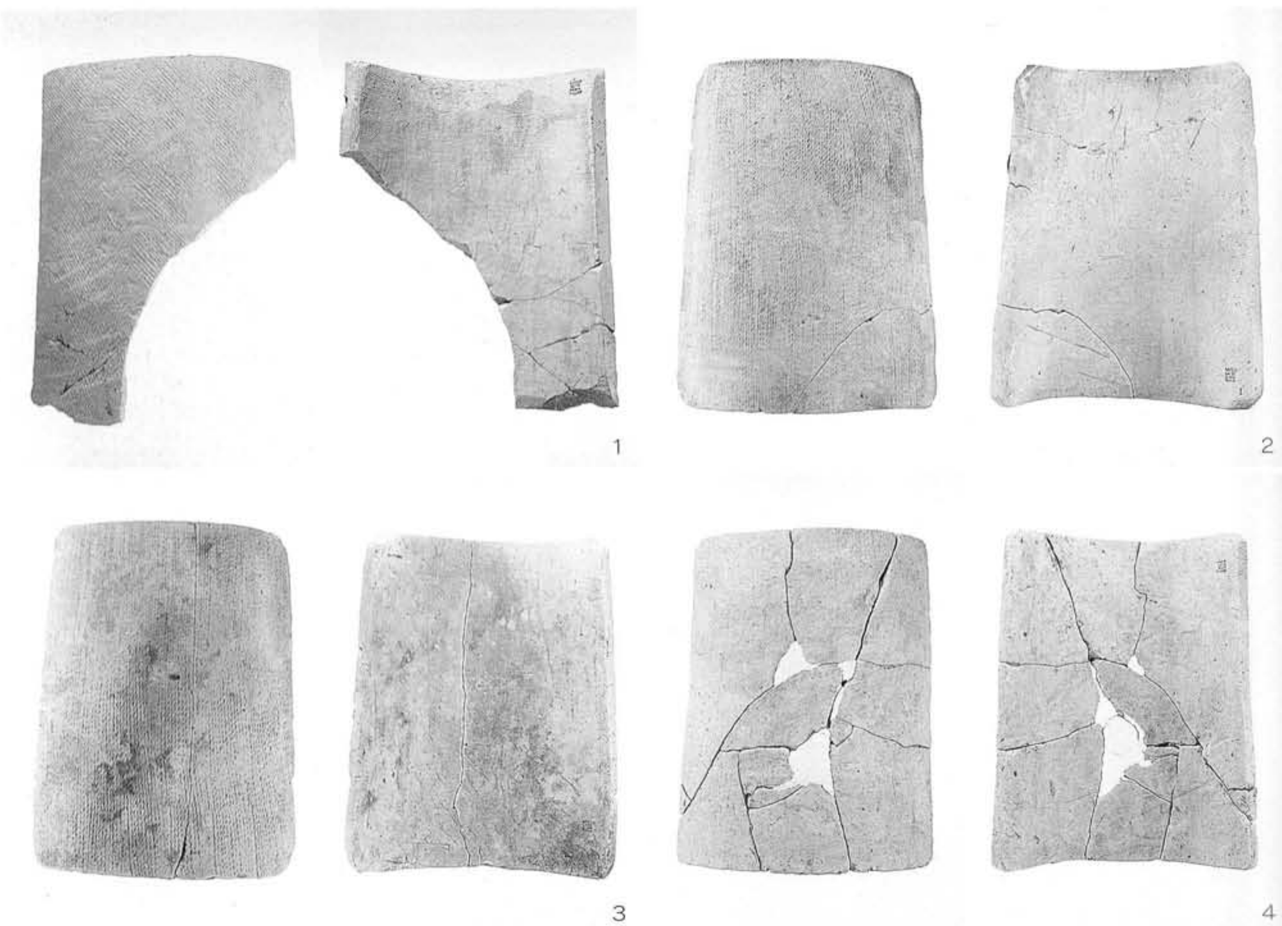
(2) 文字瓦



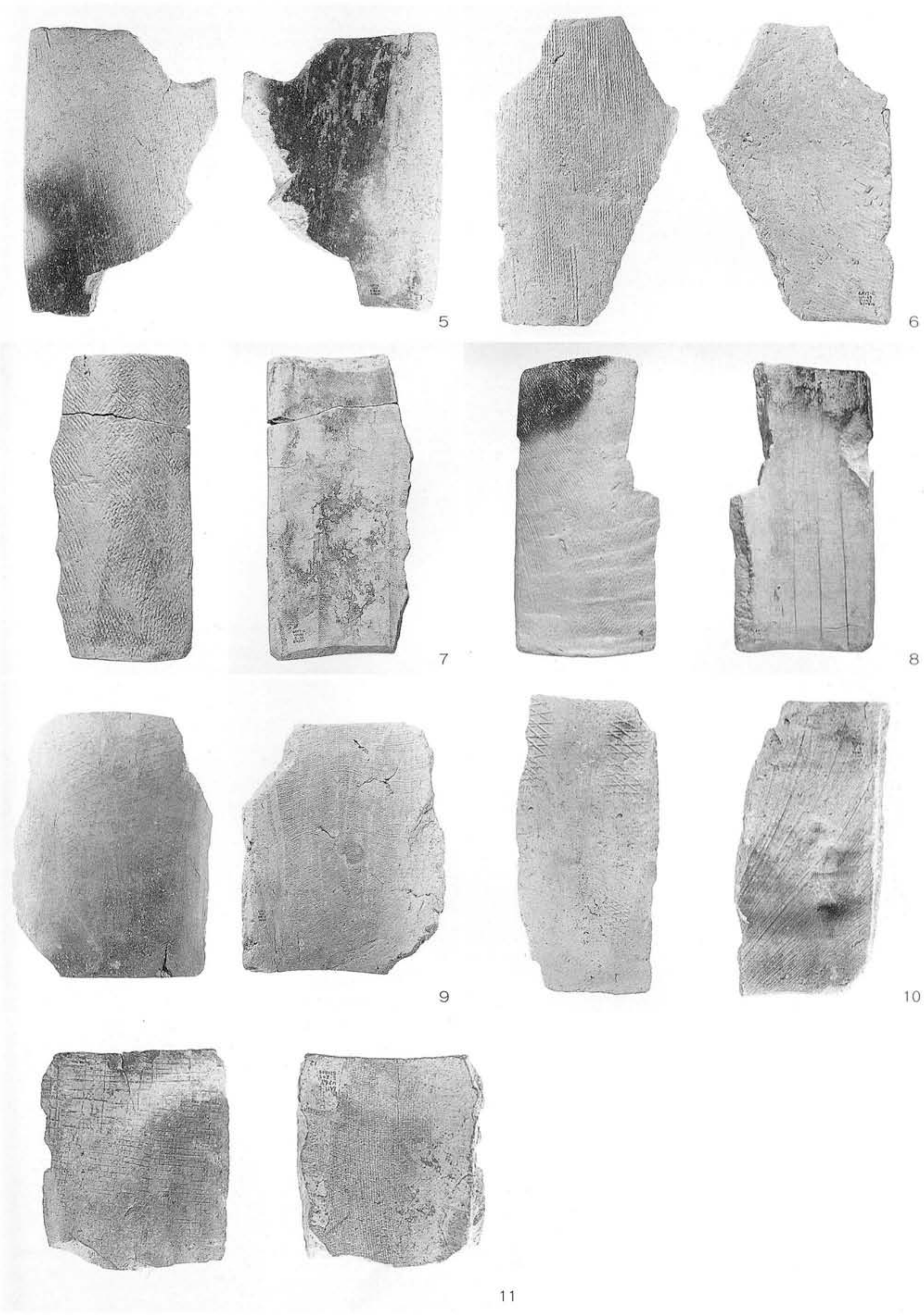
(3) 丸瓦（1）



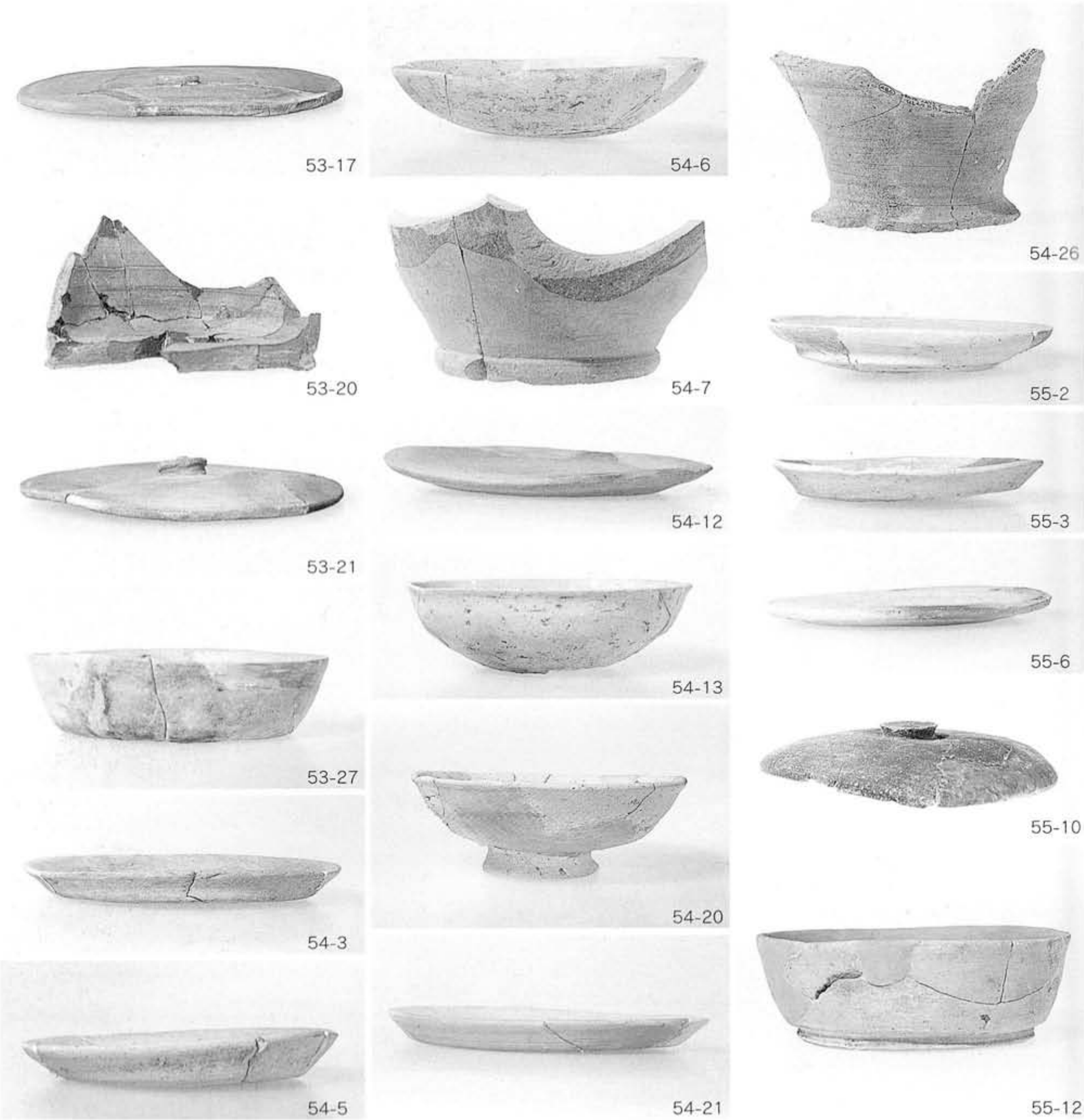
(1) 丸瓦 (2)



(2) 平瓦 (1)



平瓦（2）



53-17 54-6 54-26

53-20 54-7 55-2

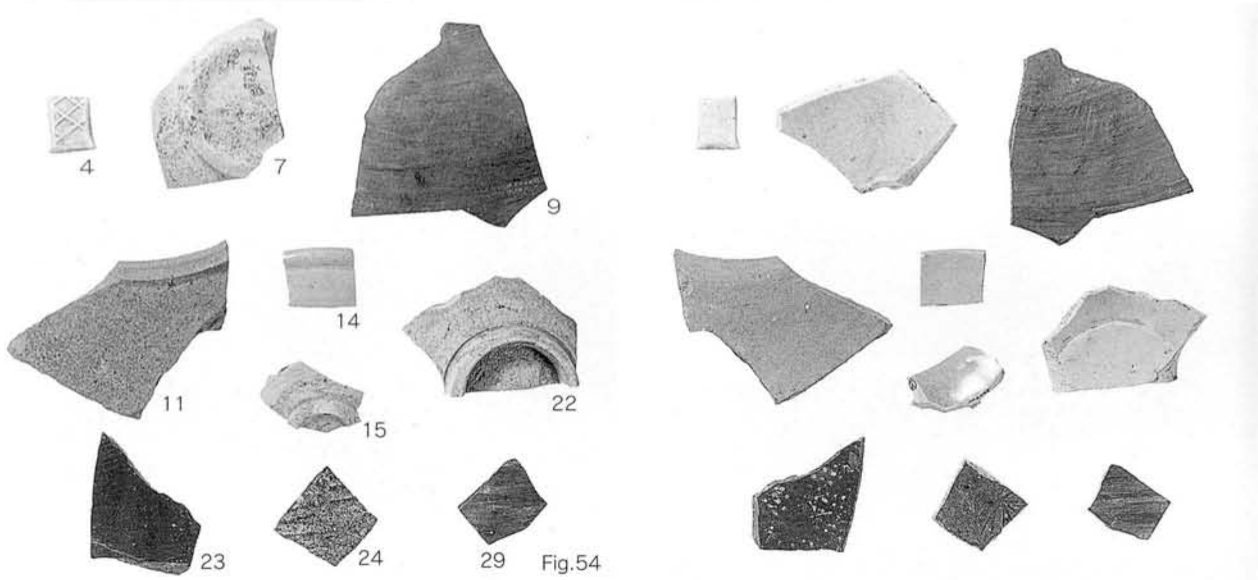
53-21 54-12 55-3

54-13 55-6

53-27 55-10

54-3 54-20

54-5 54-21 55-12

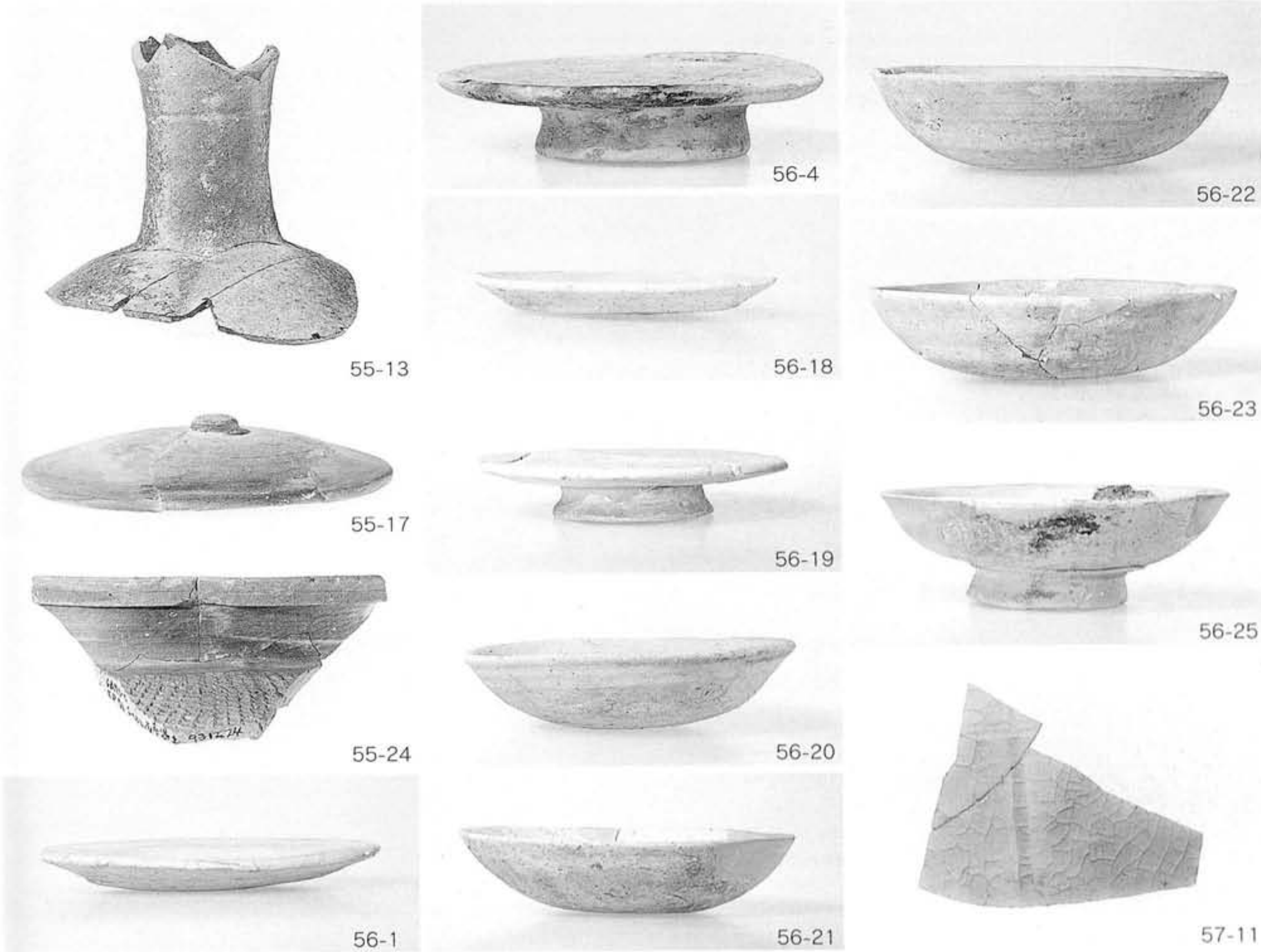


4 7 9

14 11 15 22

23 24 29 Fig.54

土器・陶磁器（1）



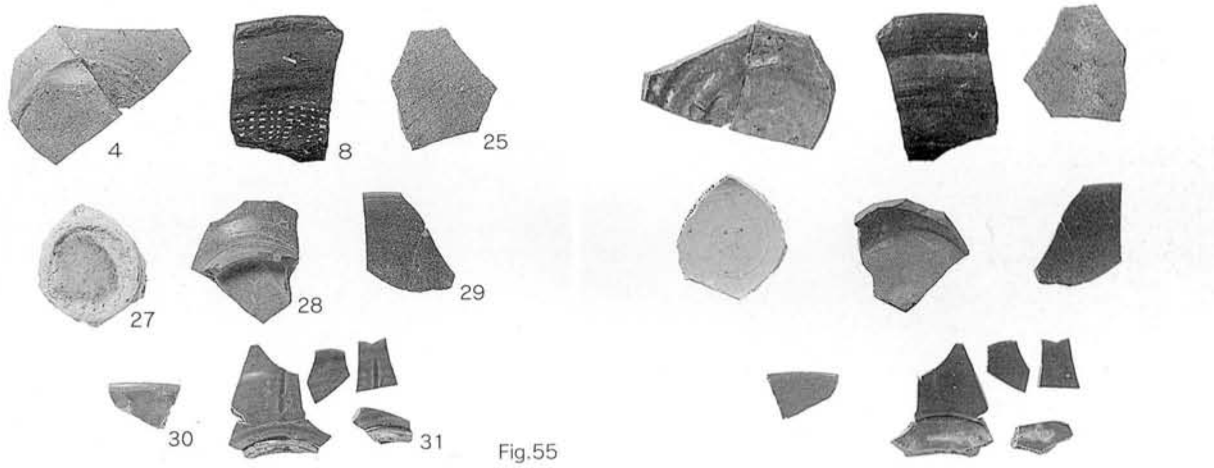


Fig.55

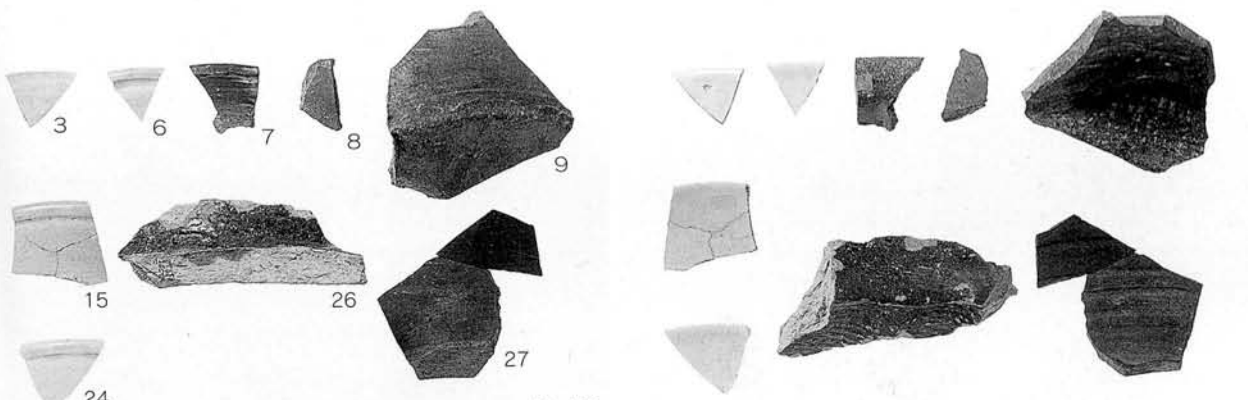
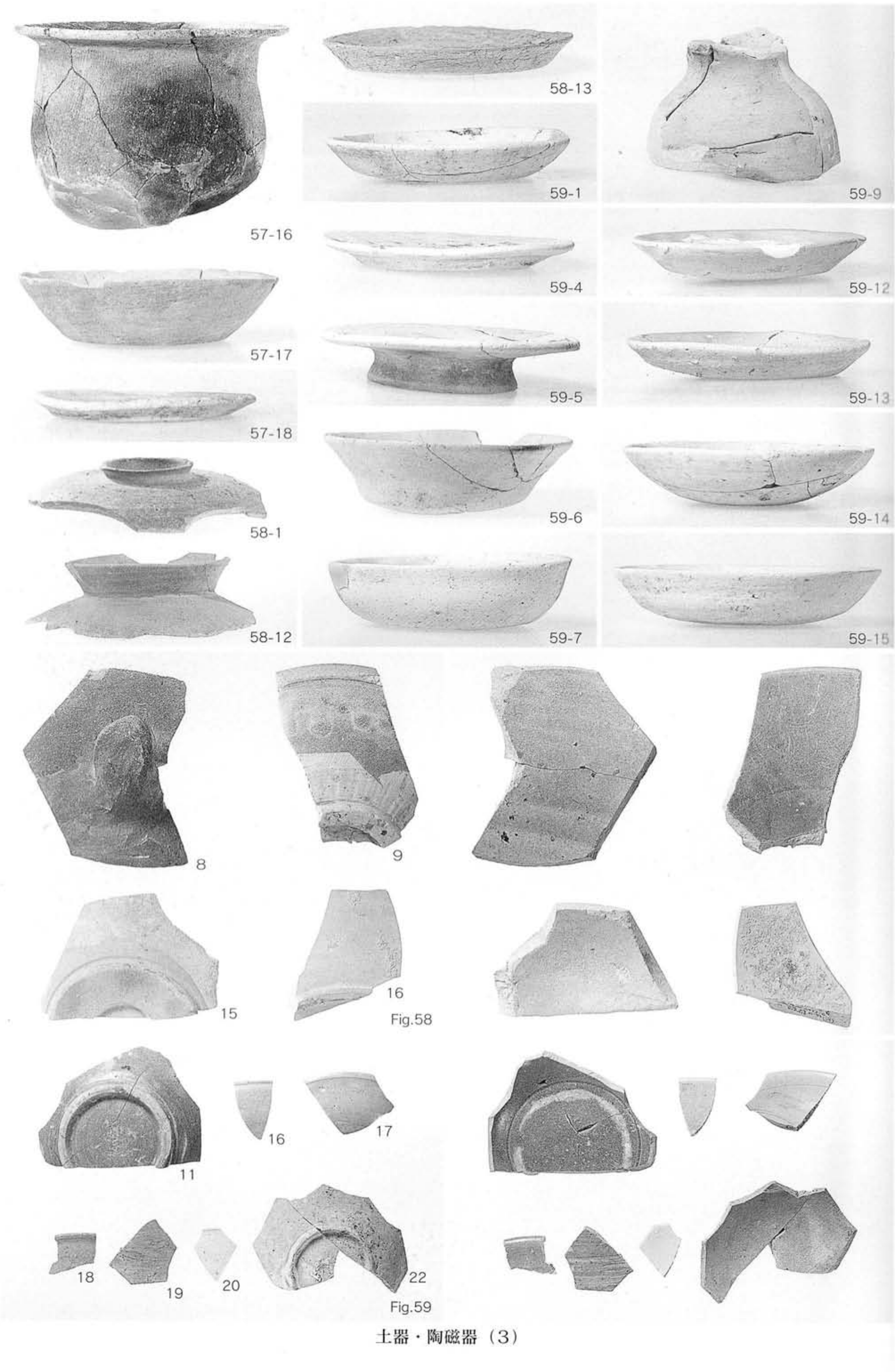
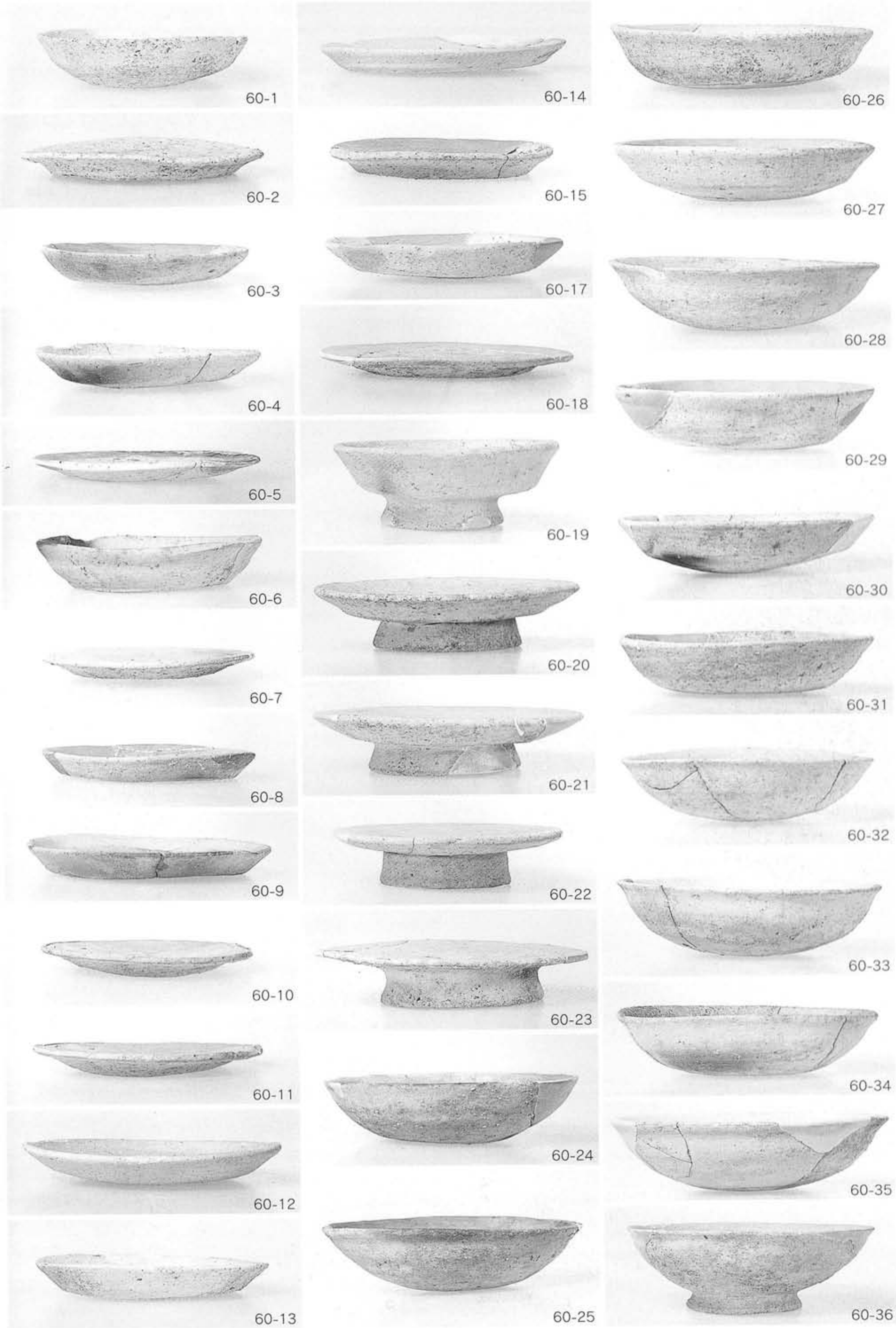


Fig.56

土器・陶磁器（2）


57-16
58-13
59-1
59-9
57-17
59-4
59-12
57-18
59-5
59-13
58-1
59-6
59-14
58-12
59-7
59-15
8
9
15
16
Fig.58
11
16
17
18
19
20
22
Fig.59

土器・陶磁器（3）


60-1
60-2
60-3
60-4
60-5
60-6
60-7
60-8
60-9
60-10
60-11
60-12
60-13
60-14
60-15
60-17
60-18
60-19
60-20
60-21
60-22
60-23
60-24
60-25
60-26
60-27
60-28
60-29
60-30
60-31
60-32
60-33
60-34
60-35
60-36

土器（4）

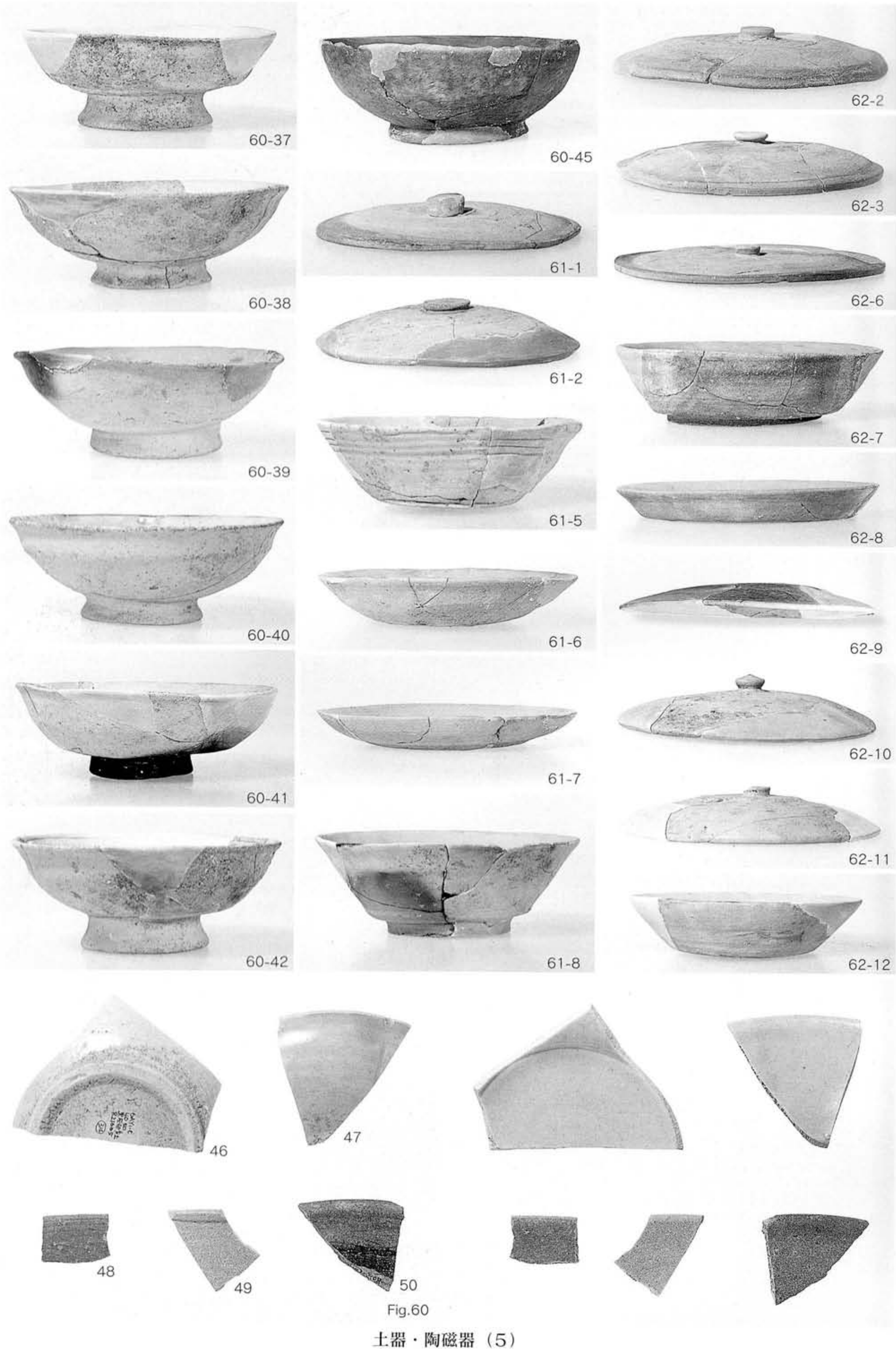
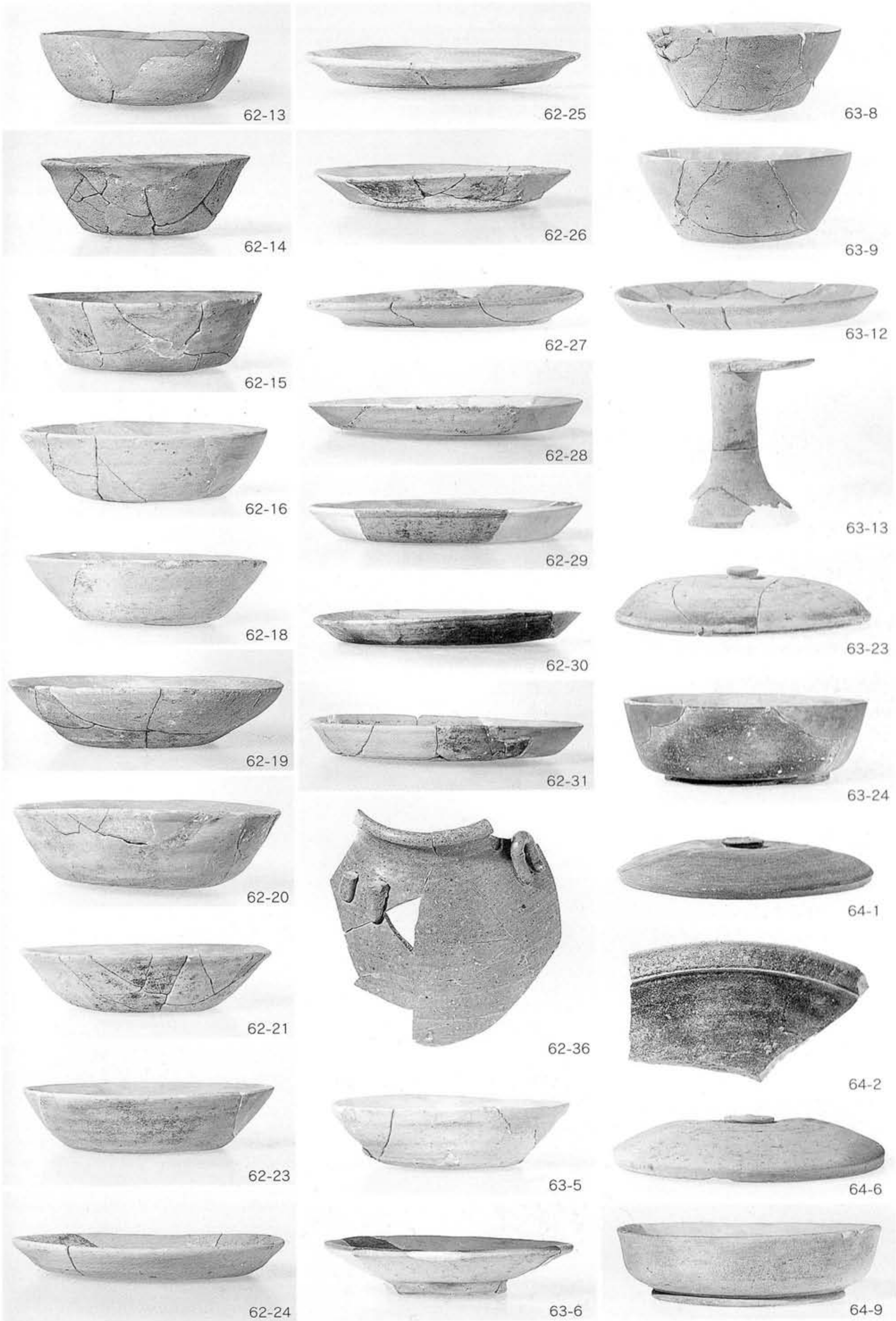


Fig.60

土器・陶磁器（5）


62-13
62-25
63-8
62-14
62-26
63-9
62-15
62-27
63-12
62-16
62-28
63-13
62-18
62-29
63-23
62-19
62-30
63-24
62-20
62-31
64-1
62-21
62-36
64-2
62-23
63-5
64-6
62-24
63-6
64-9

土器（6）

Fig.65

土器・陶磁器（7）

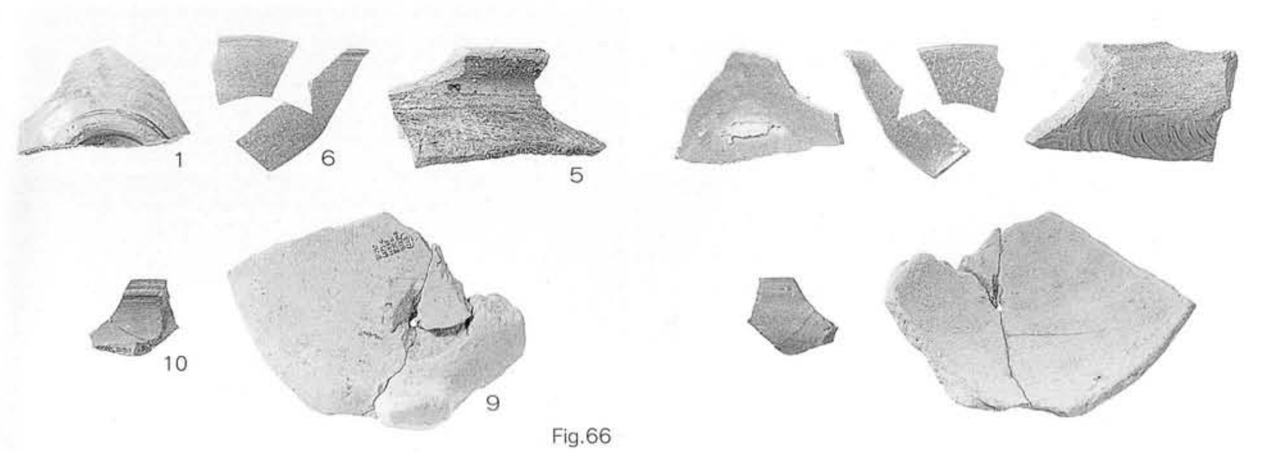
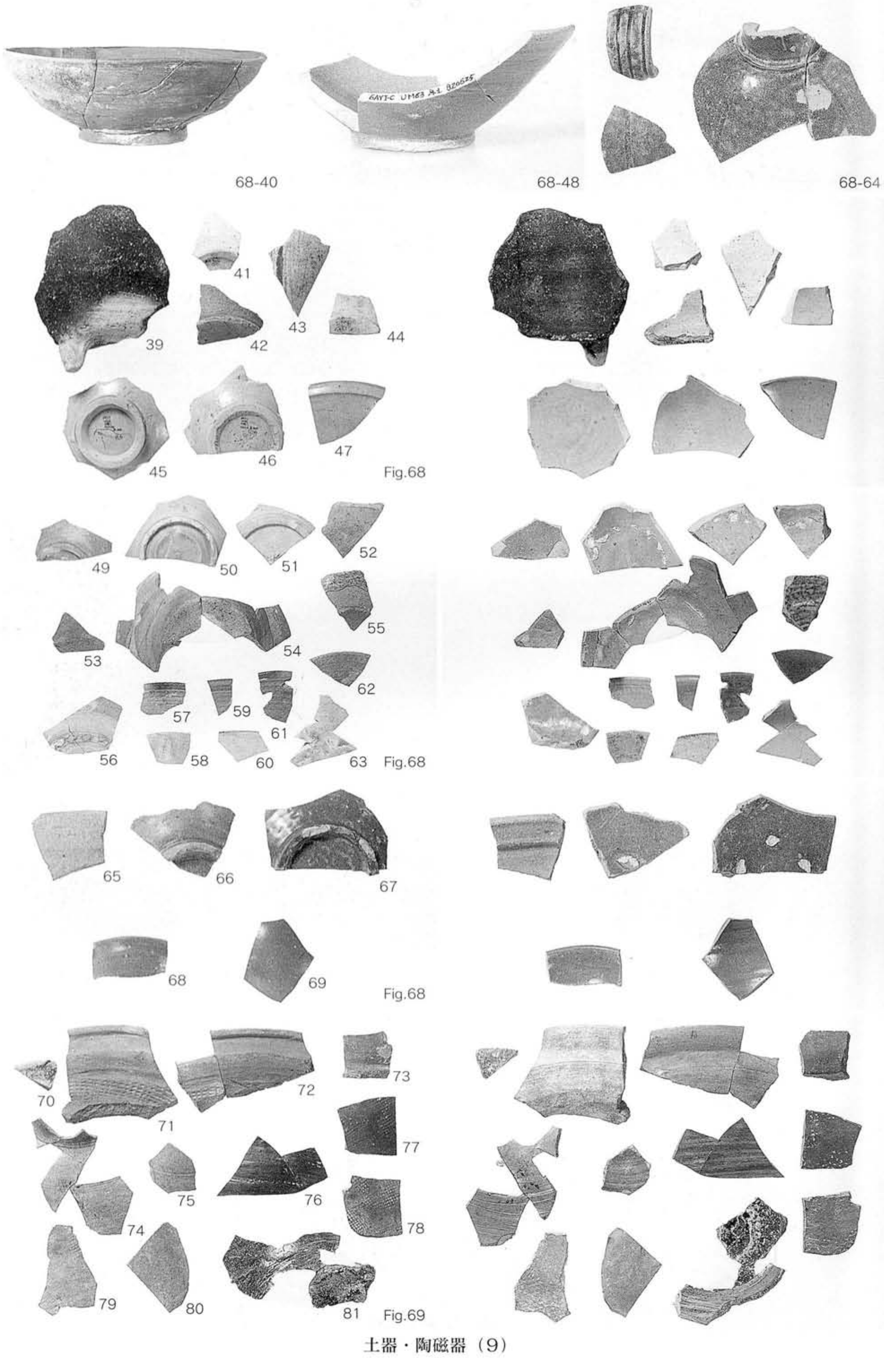


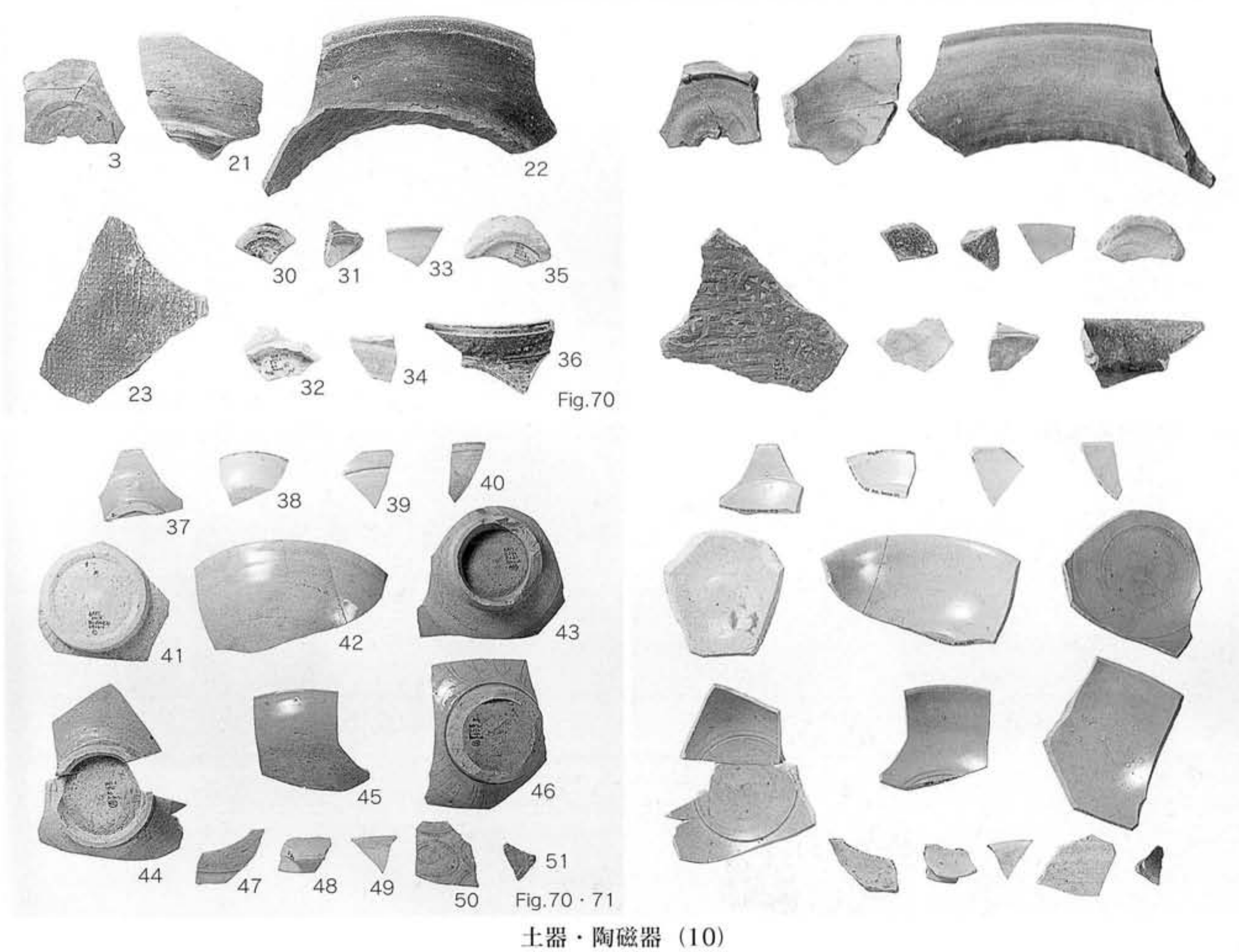
Fig.66

土器・陶磁器（8）


68-40
68-48
68-64
41
43
39
42
44
45
46
47
Fig.68
49
50
51
52
53
54
55
62
57
59
61
56
58
60
63
Fig.68
65
66
67
68
69
Fig.68
70
71
72
73
77
75
76
74
78
79
80
81
Fig.69

土器・陶磁器（9）


70-1
70-14
70-26
70-5
70-17
70-27
70-6
70-18
70-7
70-28
70-24
70-11
70-25
70-29


3
21
22
30
31
33
35
23
32
34
36
Fig.70
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
Fig.70・71

土器・陶磁器（10）

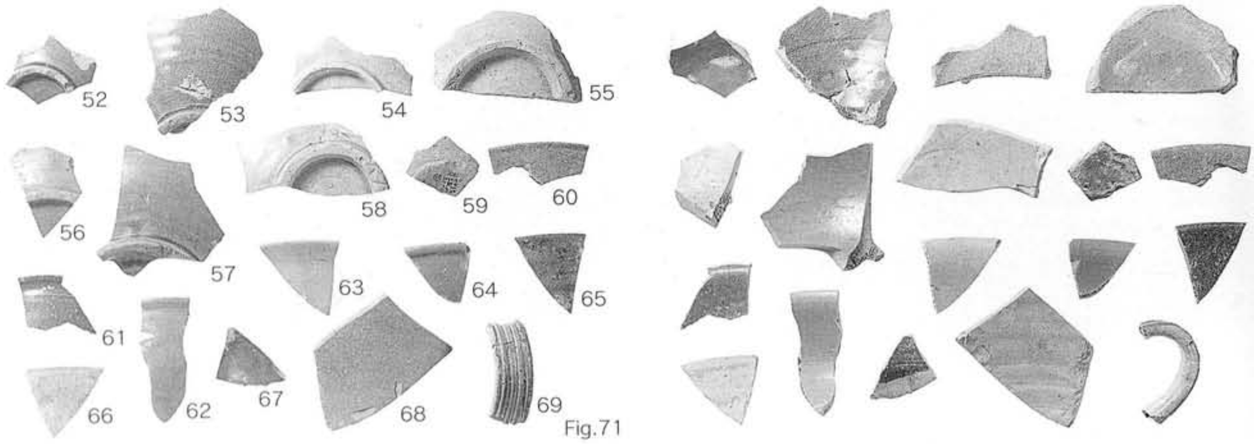


Fig.71

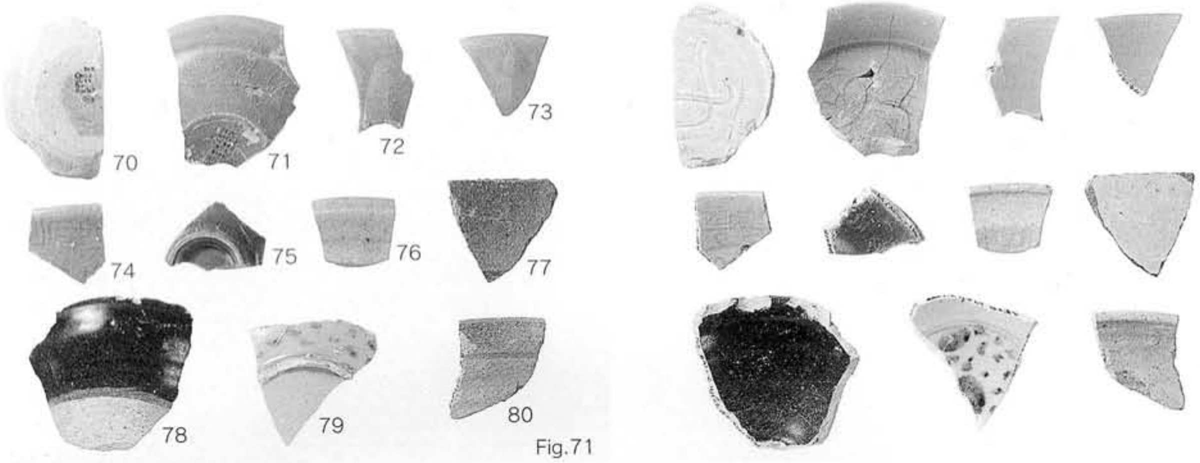


Fig.71

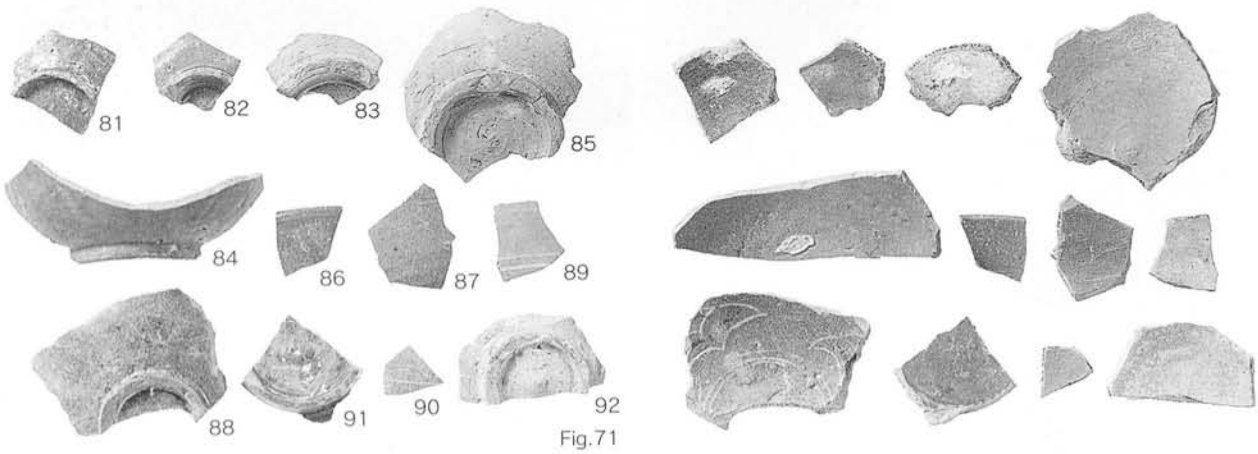


Fig.71

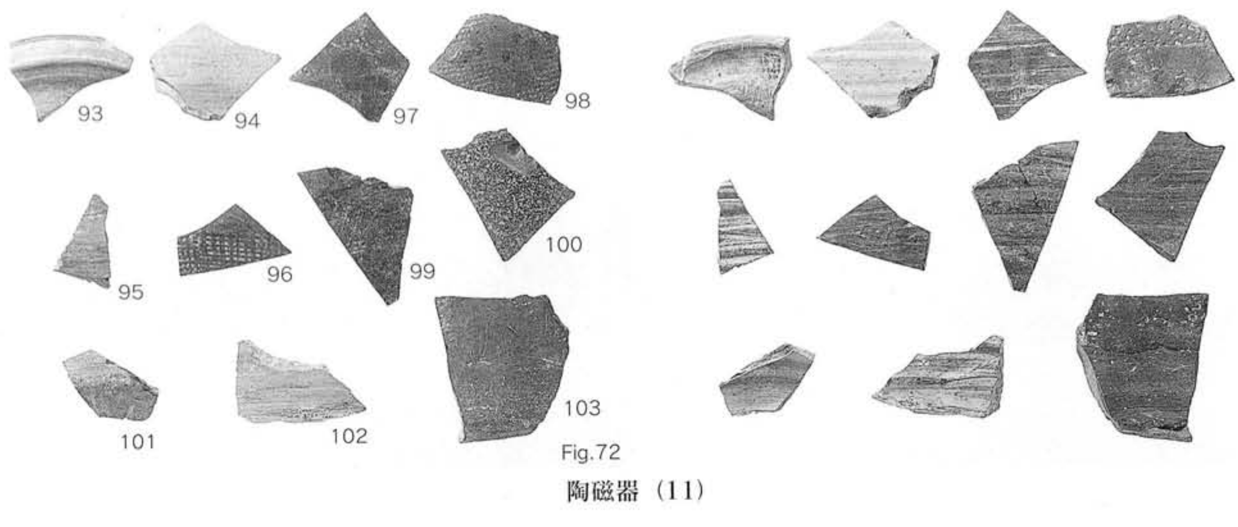
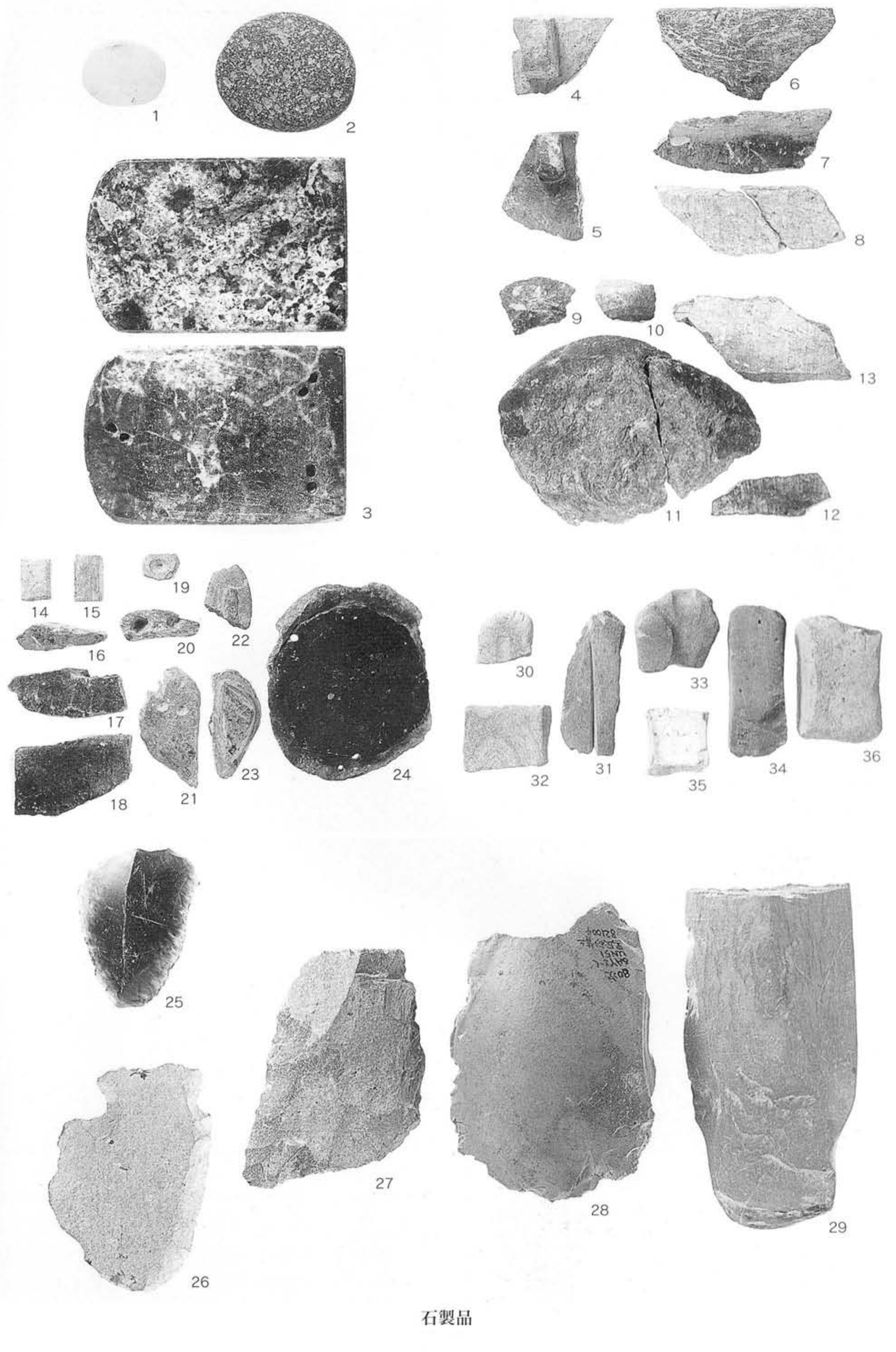
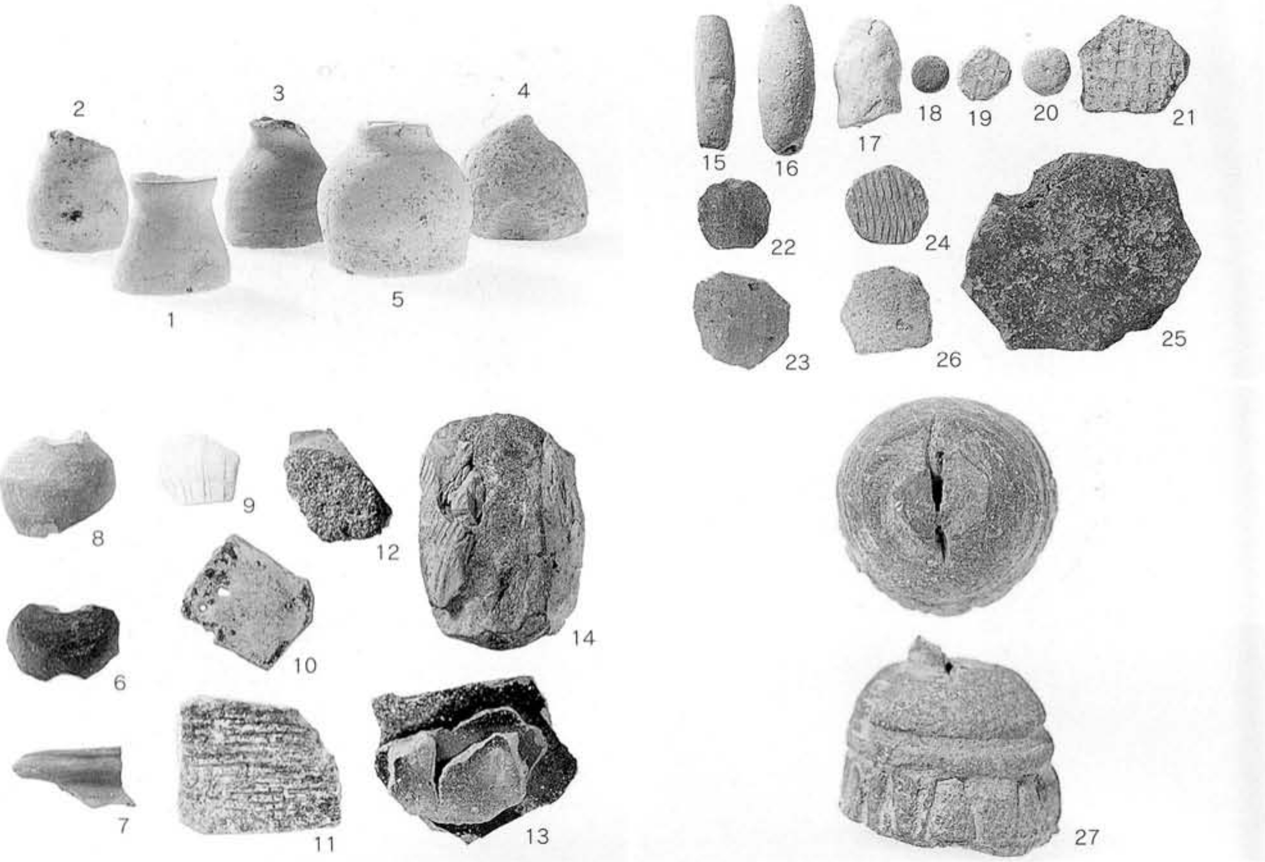


Fig.72

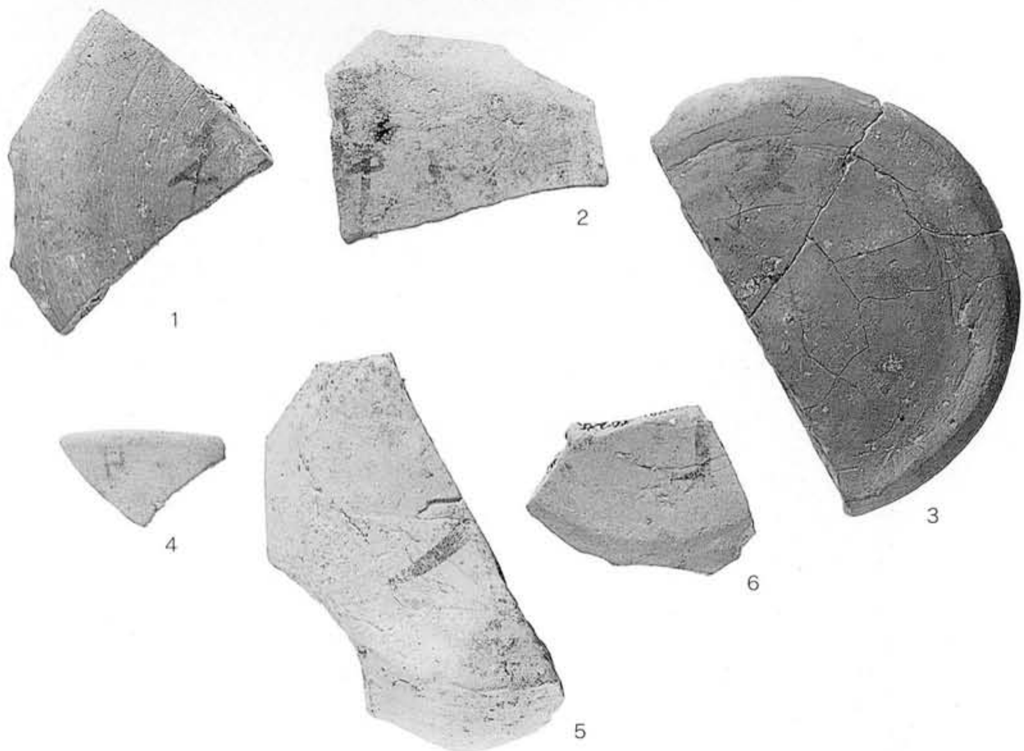
陶磁器（11）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

石製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

土製品


1
2
3
4
5
6

(2) 墨書土器 (1)


7


8


9


10

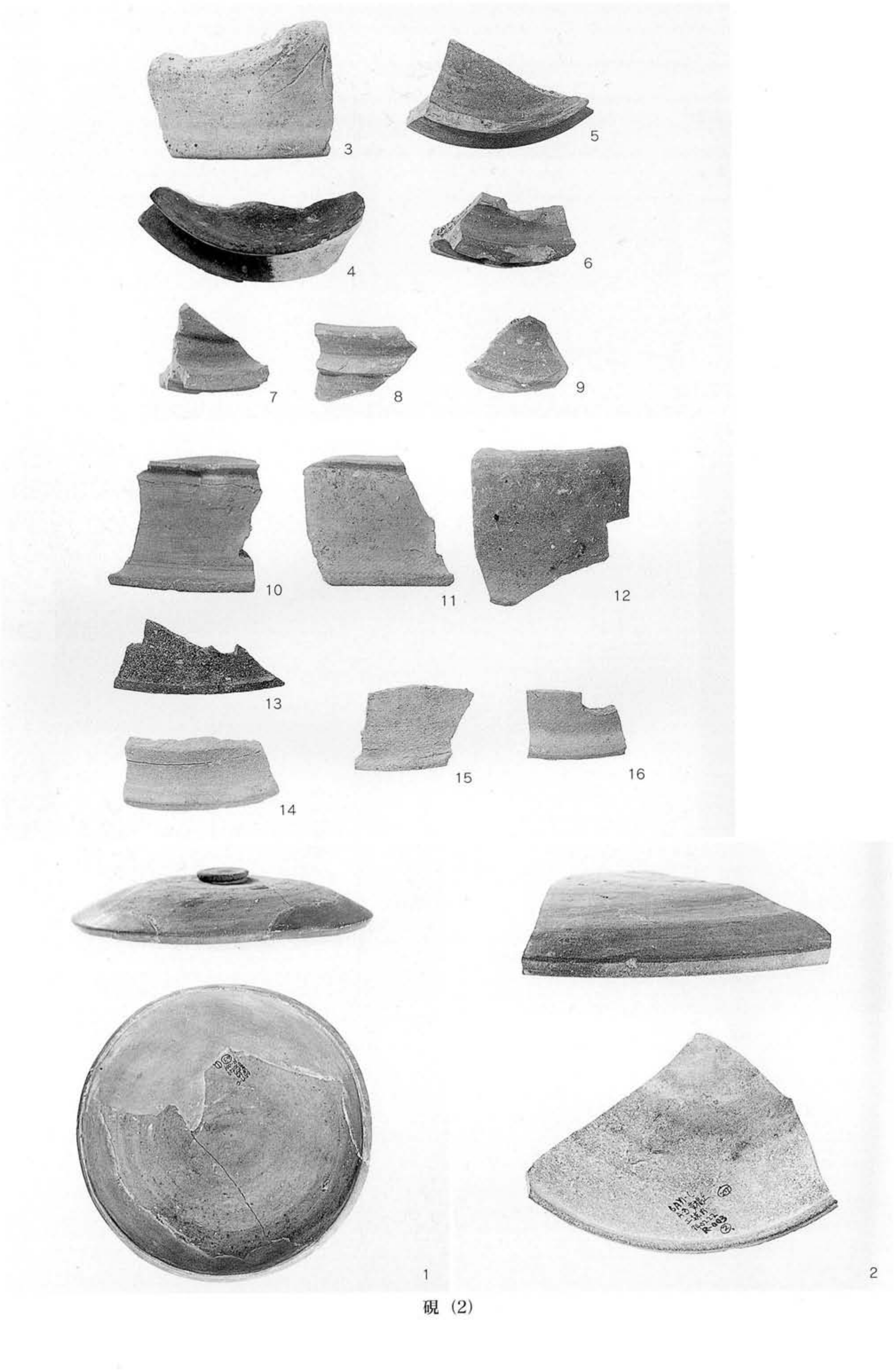

11

(1) 墨書土器 (2)・刻書土器

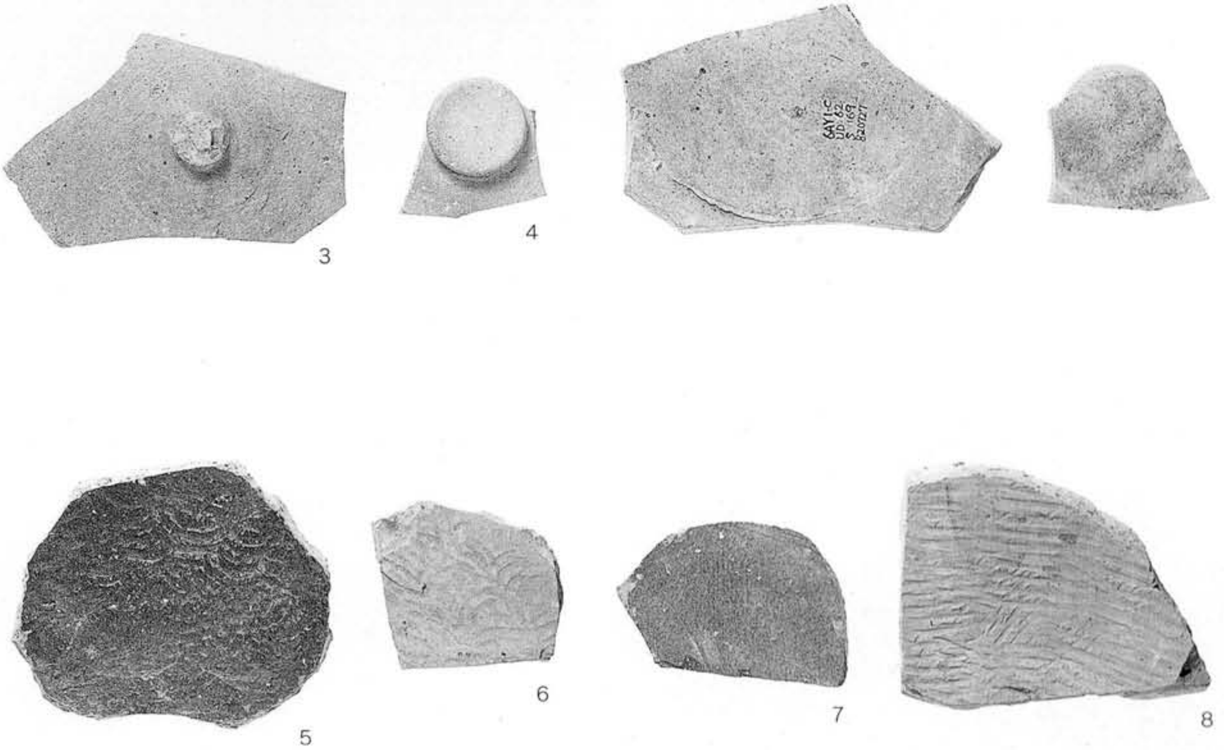

1


2

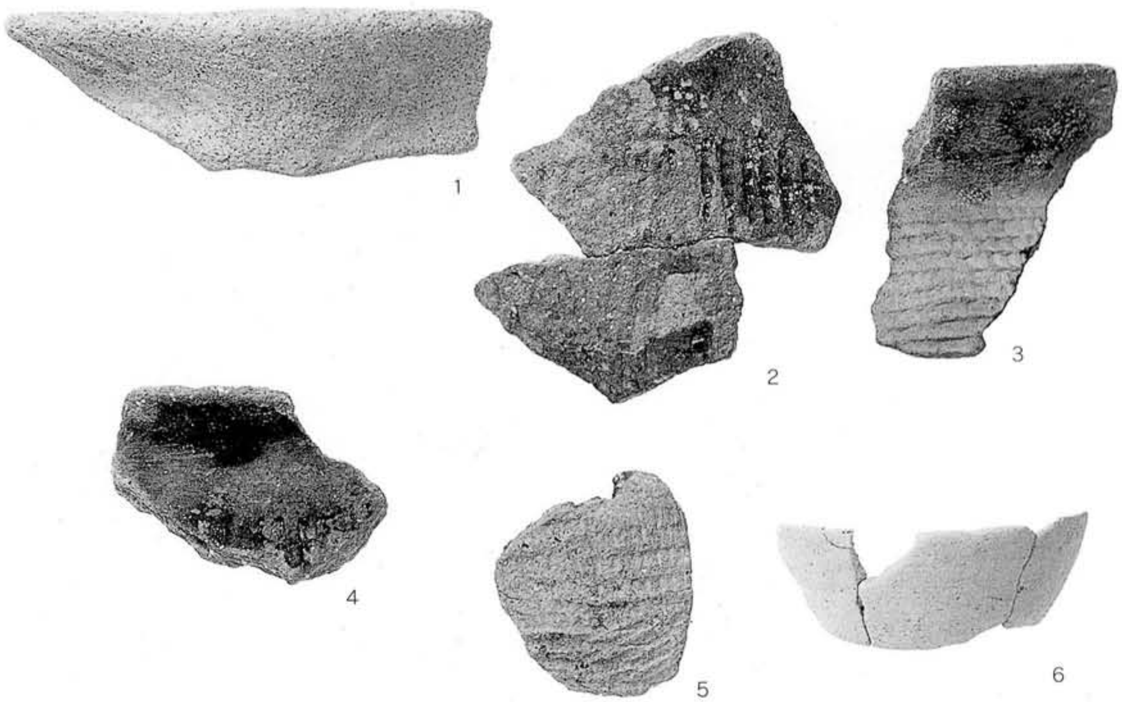
(2) 硯 (1)



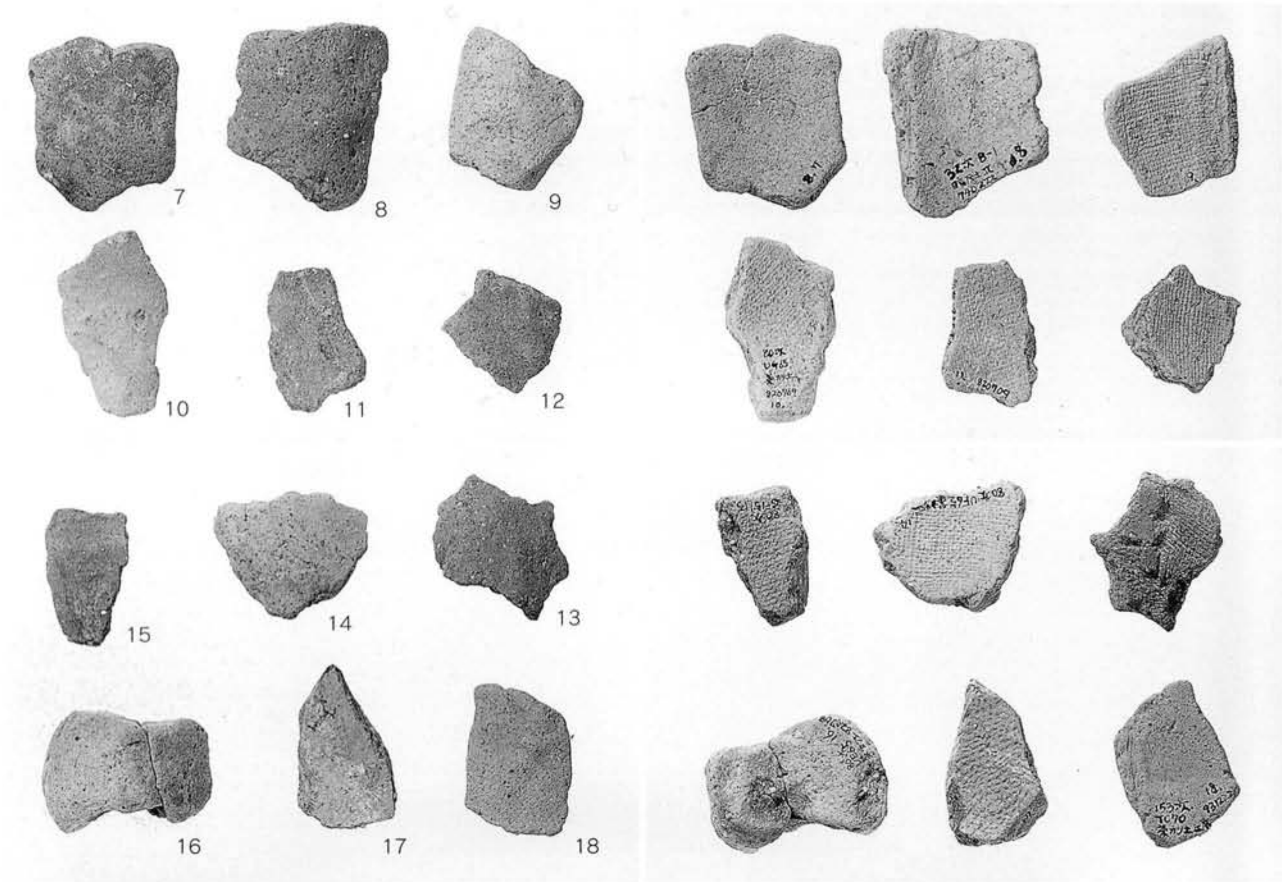
硯 (2)



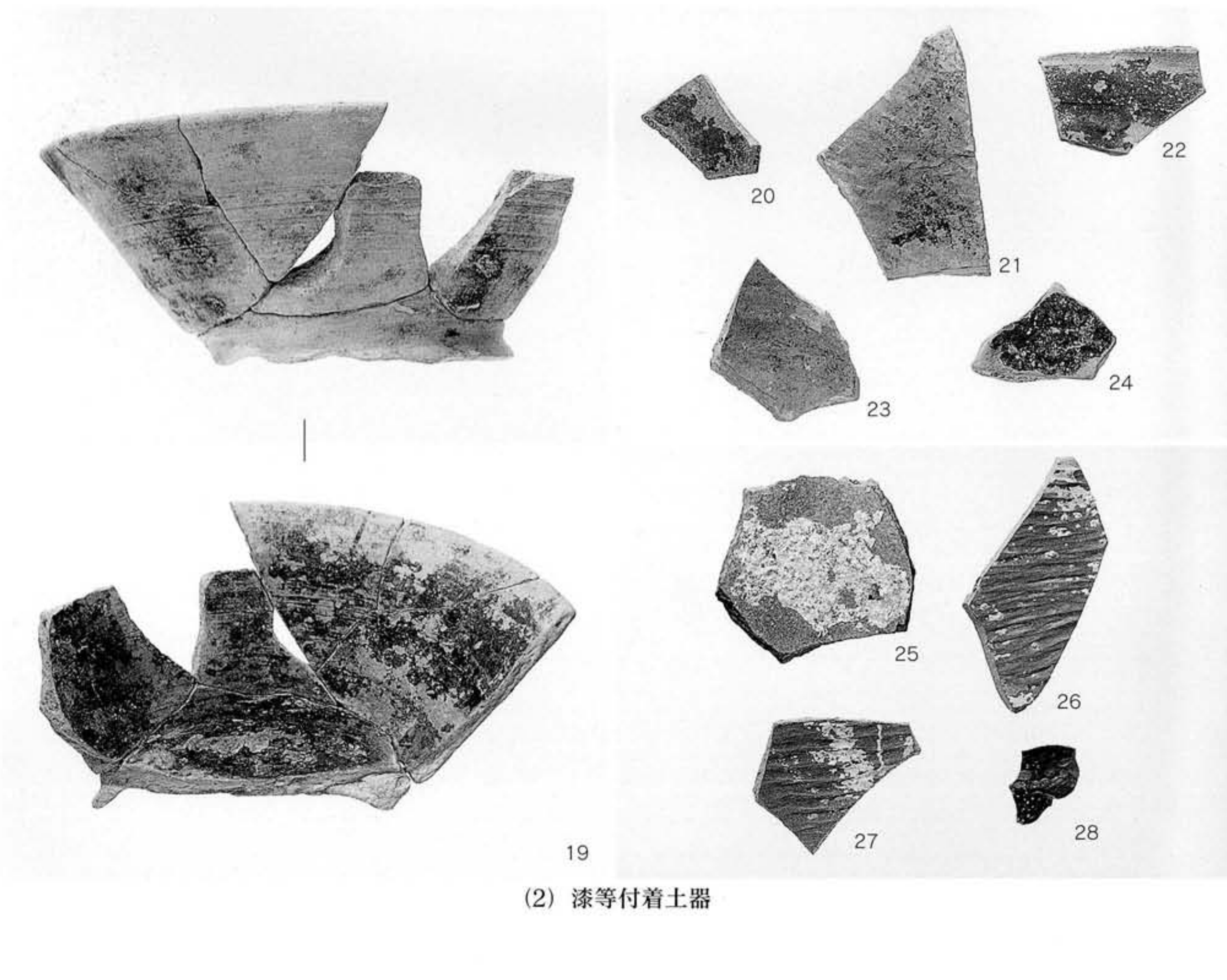
(1) 硯 (3)



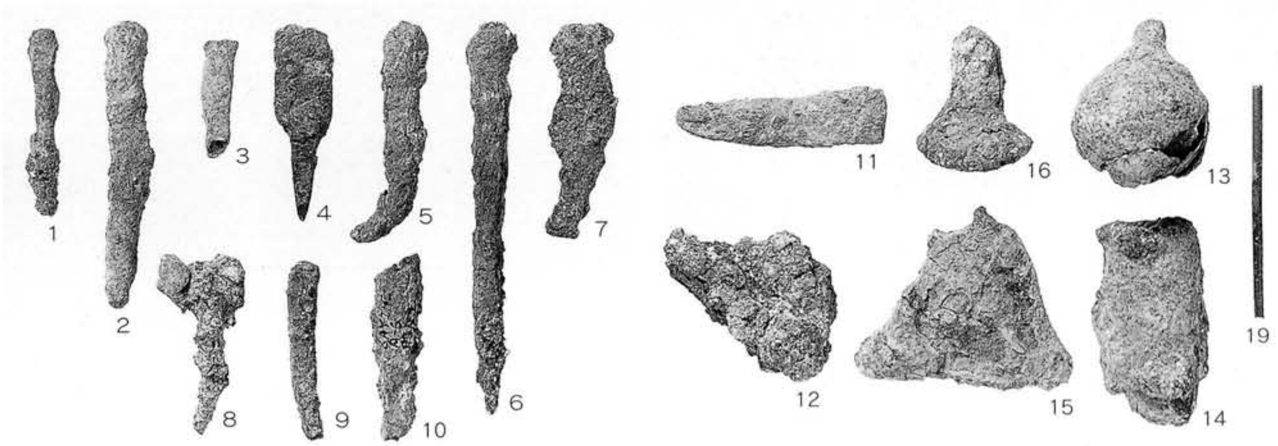
(2) 製塩土器 (1)



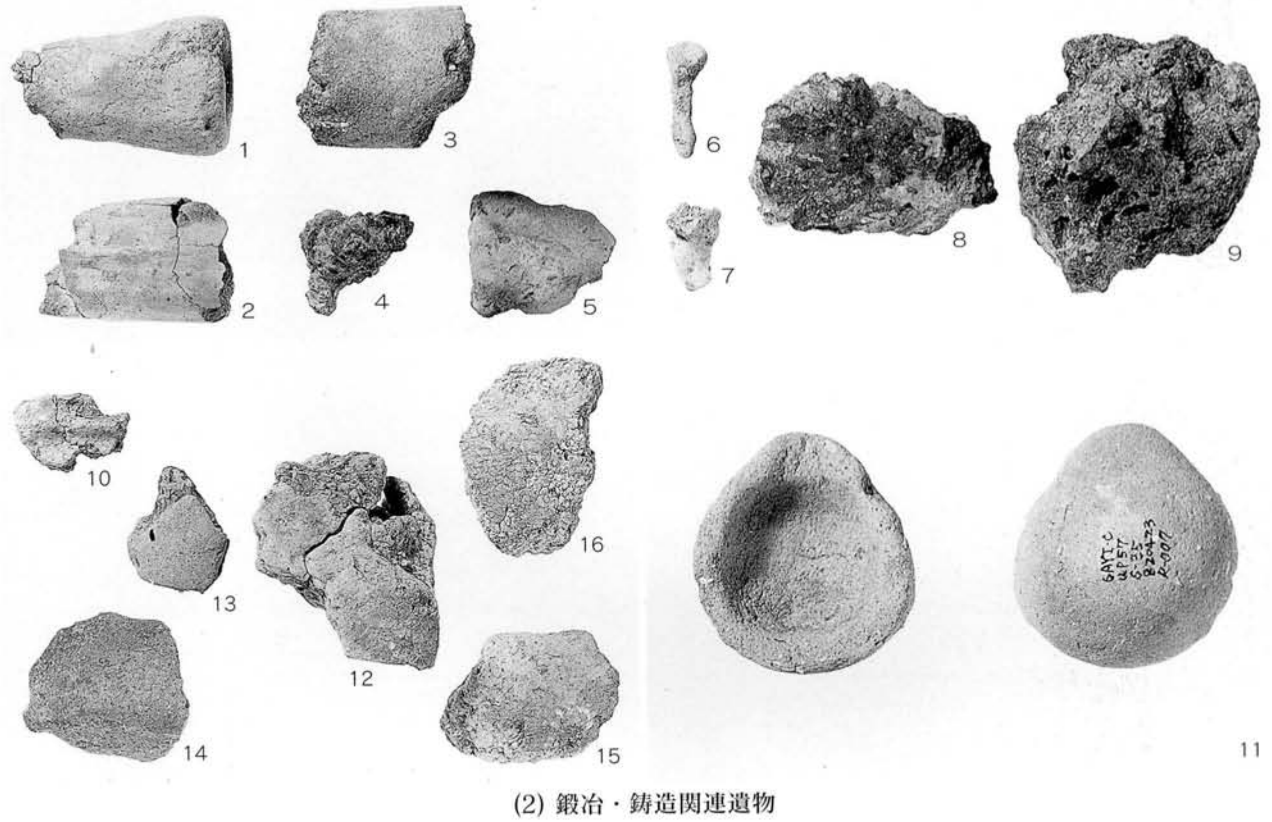
(1) 製塩土器 (2)



(2) 漆等付着土器



(1) 金属製品



(2) 鍛冶・鋳造関連遺物

報告書抄録

ふりがな	だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと
書名	大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ
副書名	日吉地区
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小田和利・岡寺　良（編集）・一瀬　智・小嶋　篤・金田明大
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838-0106　福岡県小郡市三沢5208-3　TEL 0942-75-9575
発行年月日	2011年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大宰府政庁周辺官衙跡（日吉地区）	福岡県太宰府市観世音寺１丁目252番外	40221	210316	33 30 47	130 30 59	730109～091104	3,631㎡	学術調査 住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府政庁周辺官衙跡（日吉地区）	官衙	飛鳥～平安時代	掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑・瓦敷遺構・礫敷遺構・整地層	土器・陶磁器・瓦塼類・硯・製塩土器・土製品・石製品・鋳造関連遺物・石帯・土製権	
		中世	粘土採掘坑	土器・陶磁器	

要約

　本報告書は、昭和43年度から九州歴史資料館が進めてきた大宰府史跡の発掘調査の中で、大宰府政庁跡の前面東側の小字日吉（日吉地区）にあたる箇所（調査箇所13地点）の正式報告書である。

　調査では、８～９世紀の大型掘立柱建物群16棟を検出し、当地区が政庁周辺における大宰府の主要官司にあたる可能性が考えられる。

　また、11～12世紀の小型掘立柱建物群とそれらに付随する井戸等も検出し、政庁周辺地区における官衙廃絶後の利用状況についても確認した。

Administrative structures surrounding *Kyushu*'s government headquarters in the *Dazaifu* (大宰府) complex II

- *the Hiyoshi*（日吉）area -

Contents

Summary

This volume is the official excavation report of the *Hiyoshi* (日吉) area in the east front of the main government office of *Dazaifu* (大宰府). This includes 13 trenches excavated by the *Kyushu* Historical Museum, which has undertaken work since 1968.

The excavations unveiled 16 large-sized, post-built structures from the 8th to the 9th centuries A.D. These structures could have been the important government offices surrounding the main government office.

Additionally, the excavations identified small-sized, post-built structures with wells from the 11th to the 12th centuries A.D. This resulted in new interpretations of the excavated area after the disappearance of the government offices.

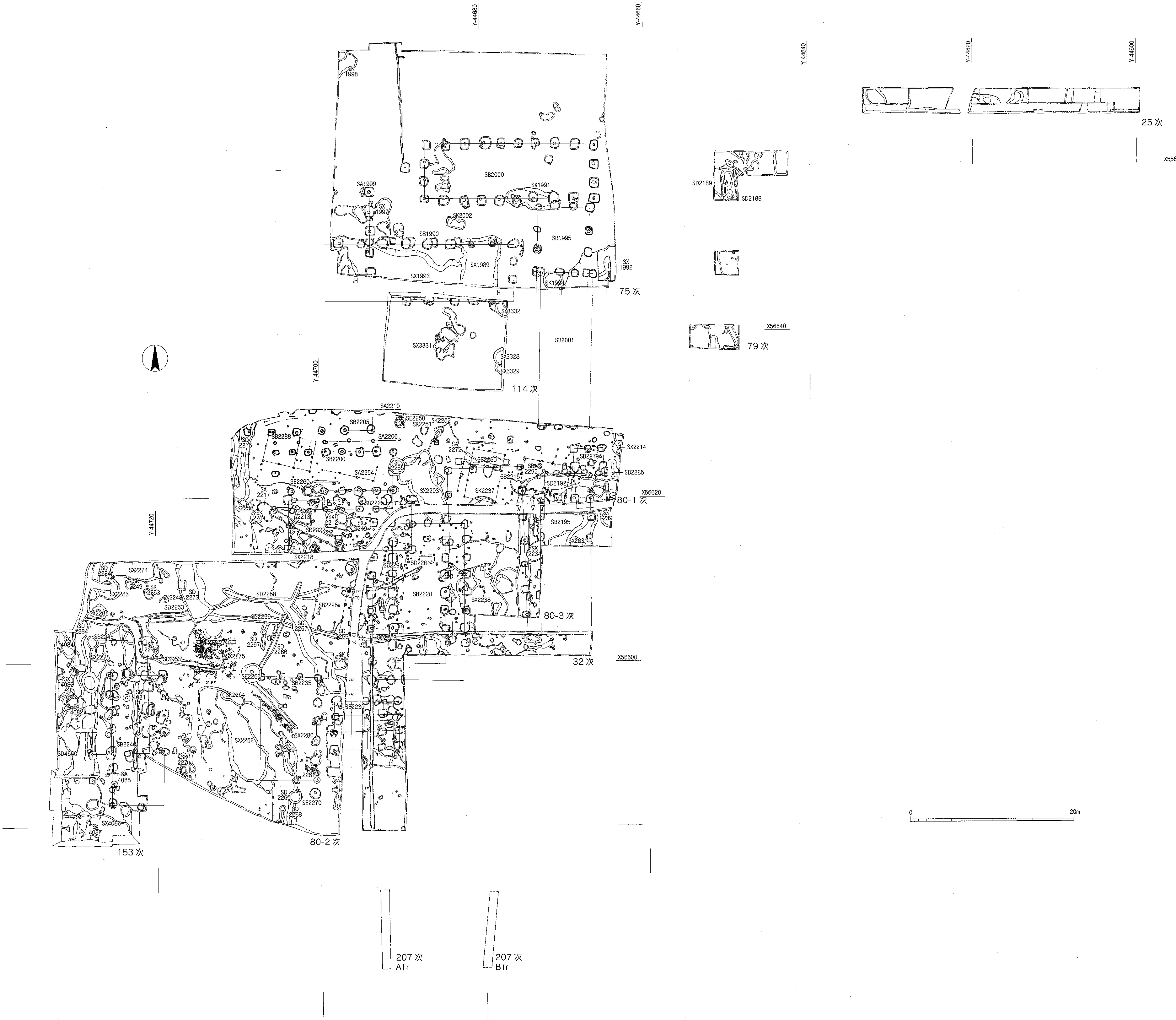
福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 22	登録番号 02

大宰府政庁周辺官衙跡II
－日吉地区－

平成23年３月31日

発　行　九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208番3号

印　刷　株式会社　三　光
福岡市博多区山王1丁目14-4



付図　日吉地区遺構配置図（1/300）